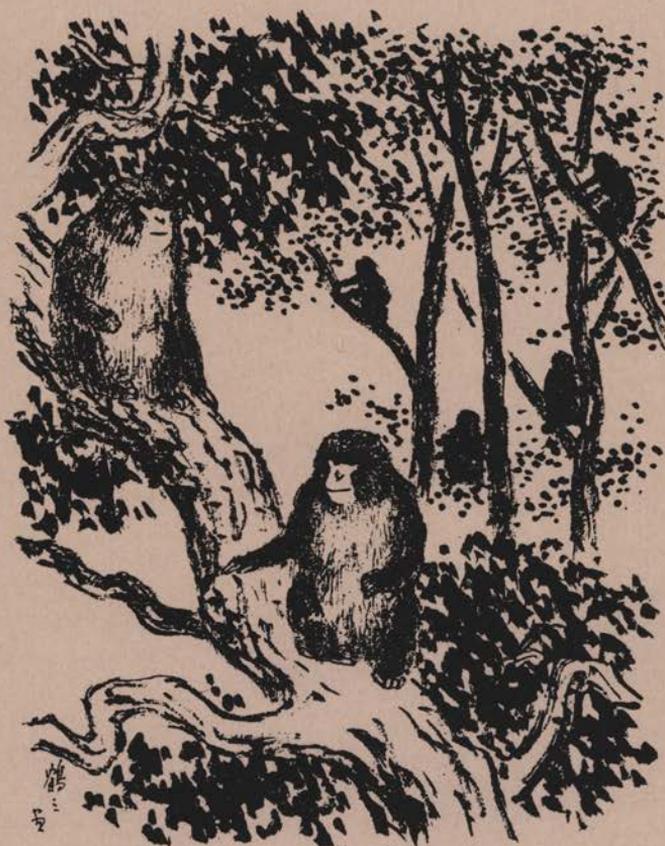


岳 山

號 三 第 年 五 十 二 第



號 念 記 年 週 五 十 二

美津濃⁹ スキー用品

断然優秀を誇る美津濃製を始め外国品等常に豊富に取揃へてご
います。特にヒツコリースキーは自慢の逸品でございます。



美津濃

大阪 ・ 東京 ・ 神戸 ・ 名古屋 ・ 京都

岳 山

號念記年週五十二



號 三 第 年 五 十 二 第

目次

卷頭言……………評議員 小島 鳥 水… 一頁

本欄

チャチャヌブリへの旅……………會員 岡田 喜 一… 三

國後島の採集品目録について……………會員 岡田 喜 一… 六七

中央尖山の登攀……………會員 鹿野 忠 雄… 八〇

乾燥雪崩……………會員 藤田 信 道… 一二五

二十五周年回想録

山岳會と山嶽志……………評議員 高頭 仁 兵衛… 一四七

山岳會創生記……………評議員 高野 鷹 藏… 一五二

今昔の感……………評議員 武田 久 吉… 一五八

日本山岳會の成立まで……………評議員 小島 鳥 水… 一六二

山岳禮拜	評議員	中村清太郎	一六七
登山の思出	名譽會員	大平晟	一六九
本會創立當時の回顧	會員	片平重次	一七一
二十三年前	會員	北澤基幸	一七二
ルックザツク	會員	石川光春	一七三
回顧漫談	會員	今村巳之助	一七四
黒部川の過去と現在	會員	冠松次郎	一七五

雜 錄

上越境の山と其の地名	會員	松本善二	一八九
積雪期の仙ノ倉山及びその附近	會員	角田吉夫	一九七
谷川岳	會員	小林太刀夫	二一〇
北九州の山とところどころ	會員	竹内亮	二一九
大石川西股より杵差岳へ	會員	藤島玄	二三五
トーテンキルヒル行	會員	高橋健治	二四一
長藏翁の思ひ出	評議員	武田久吉	二五二

雜報

自二五八
至二九二

○白馬岳と最初の登山者○山岳に關する私の立場○高きに登る心○文部省主催登山講習會

○福岡縣主催第一回登山講習會

○山岳圖書紹介

會報

自二九三
至三一

○會務報告○幹事選舉○第四十七回小集會○第四十八回小集會○圖書室の擴張○新入會員

紹介○會員章再交付○會員の訃報○會員改姓並に代表者名儀變更○退會者○本會圖書室維

持會員○交換圖書及寄贈書

○慈惠大學山岳部員岡一男氏遭難の真相(雜報追加)

圖版

○チャチャヌブリ第一火口壁南方よりの頂上、火口原及び火口壁の一部……………對頁
卷頭

○チャチャヌブリ絶頂より第二噴火口を下瞰す(第一圖)(コロタイプ)……………三二

○チャチャヌブリ絶頂より南方を下瞰す(第二圖)……………四〇

○西側より熔岩地帯をへだてゝのチャチャヌブリ頂上(第三圖)(コロタイプ)……………四八

○南湖大山西斜面六合目より東方に中央尖山を望む……………	八八
○中央尖山頂上附近階段地より頂上の方面を望む(コロタイブ)……………	一〇四
○南湖大山西斜面八合目より東南方に中央尖山を望む(コロタイブ)……………	一一二
○茂倉岳と一ノ倉岳との鞍部より北に笹平、檜又尾根を望む……………	一九二
○タイラピヤウの南面より見たるコーチ澤の頭と三國山……………	二〇四
○三月の仙ノ倉山(萬太郎山より)……………	二〇八
○仙ノ倉山シツケイ澤……………	二二二

本文中挿入圖

○チャチャヌブリ山頂附近概念圖……………	六頁
附 主要ナル植物集圖分布區域ヲ示ス……………	
○國後島チャチャ岳エトロフ島内保ヨリ海岸ヲ隔テ、望ム……………	一〇
○爺岳……………	一一
○茶々嶽……………	一一
○臺灣北部概念圖……………	八二
○中央尖山附近略圖……………	九一

○南肩より見たる中央尖山	一〇九
○蕃族分布圖	一一二
○本郷西片町の山岳會最初の事務所	一四八
○その頃の人々	一六一
○Wilder Kaiser	二四二
○トーテンキルヒル	二四八
○平野長藏	二五四
	×	
	×	
	×	
	×	
	×	
○上越國境地名圖	一九六

卷末附録として英文欄を添へたり

卷 頭 言

天下の文章布衣に落ちて、自然も亦民衆の手に落ちた。「叩けよ然らば開かれん」の合言葉を以て、登山者が山頂に、潜水夫が海底に、鳥人が虚空へと駆ける。そして先づ、山の探検者が、齋らし歸つたものは、岩石と氷雪の言葉であつた。それは今まで、人類に秘められた封書の中の不可解の言葉であつたが、新らしい自然の姿が、次ぎ次ぎに、そこから展開される。その姿を美と見やうとも、眞と見やうとも、將た又、岩石氷雪と相搏つところの、筋肉味の味ひと見やうとも、それは相互無縁又孤立するものでなくて、根柢に於て相關統一される表象であると信ずる。

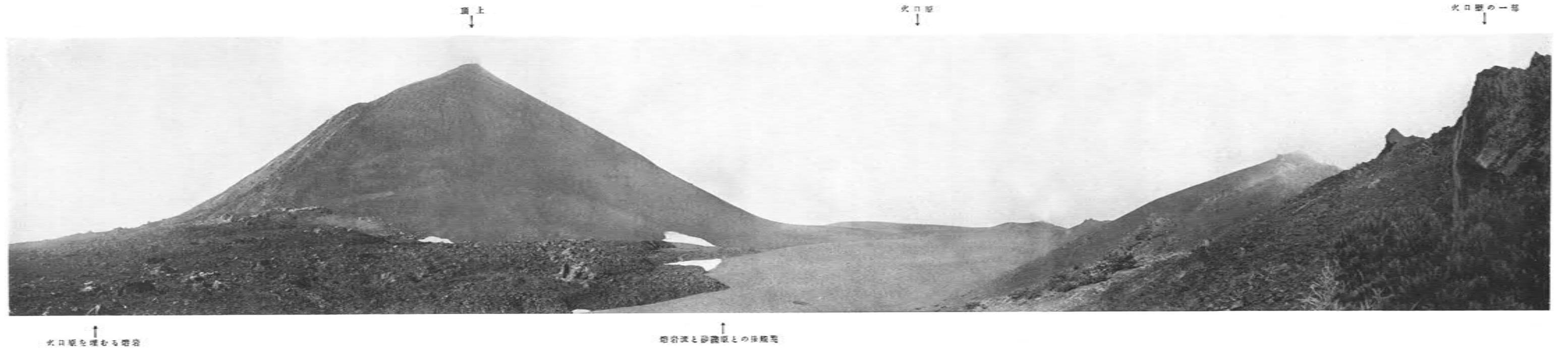
誰が、何を、の問題は、其人々の好み、素質、天分にも依らうが、只だ是等表象

の結合體なる山と、それに向つて驀進する人間の交感が、純淨なる悦びであつて欲しいのである、少なくとも私は斯く祈願する。

日本山岳會二十五週年の記念號發刊に當つて、この小さな祈願を記録する。

昭和五年十一月

小 島 水



チヤチヤヌブリ第一火口壁南側よりの頂上、火口原及び火口壁の一部

チャチャヌプリへの旅

附 採集品目録と略註

岡 田 喜 一

一 はしがき

一 國後島の概略とチャチャヌプリの概郭

一 山名に就て

一 文献に就て

附、地圖及登山略史

一 行程摘要記録

一 旅行記

附 頂上附近に於ける二三の觀察に就て

A 地形的觀察の二三

B 植物分布状態の觀察二三

一 摘要

一 寫眞解説

○チャチャヌブリへの旅 岡田

一 準備其他二三に就て

一 採集品目録とノート

- A 頂上附近の植物目録 B 頂上附近苔類目録 C 頂上附近地衣類目録
 D 鳥類目録 E 兩棲類目録 F 頂上附近の昆虫目録(鱗翅目、鞘翅目、二目のみ)
 G 腹足類目録

はしがき

素敵な山々が千島の孤島にいくつとなく點在することを知って、登高の憧れに湧き、未だ見ぬ山を想ひながら島から島へと夢を追つて夢中に地圖に見入つて暮したことも、幾年來かの楽しみであり、又焦慮であつた。

アザランの遊泳や巨躍の群や淋しく咲き亂れた野草の花から果ては滅び行くアイヌの民と、憧れの波紋は限りなく擴がつて、遊心しきりに動くまゝにゾクゾクとする想ひにとらはれることも一再ならずあつた。

然し事々に妨げられて來る年もく機會を狙つたまゝにあはたゞしく過ぎて行つた。幸ひ昨夏のこと、一ヶ月に近い暇と二人の親友とそして充分の準備を得て、先づ皮切りに千島の入口の國後島に赴く事が出來た。そして目ざしたのは先づチャチャヌブリ。それは強ち絶頂が前人未踏と稱せられて残された高嶺に對する好奇心ばかりからではない。山容、高度、生物分布など總ての點から見て先づ第一に訪れなければならぬと考へたから。そして此山は流石に裏切らなかつた。限らない喜びと願ひの總てを叶へて呉れた。

此さゝやかな記文、もとより不充分なものではあるが、今後若し又此處を訪ねられんと望まれる方にでも多少なりと何かの御參考にもならば此上ない幸である。

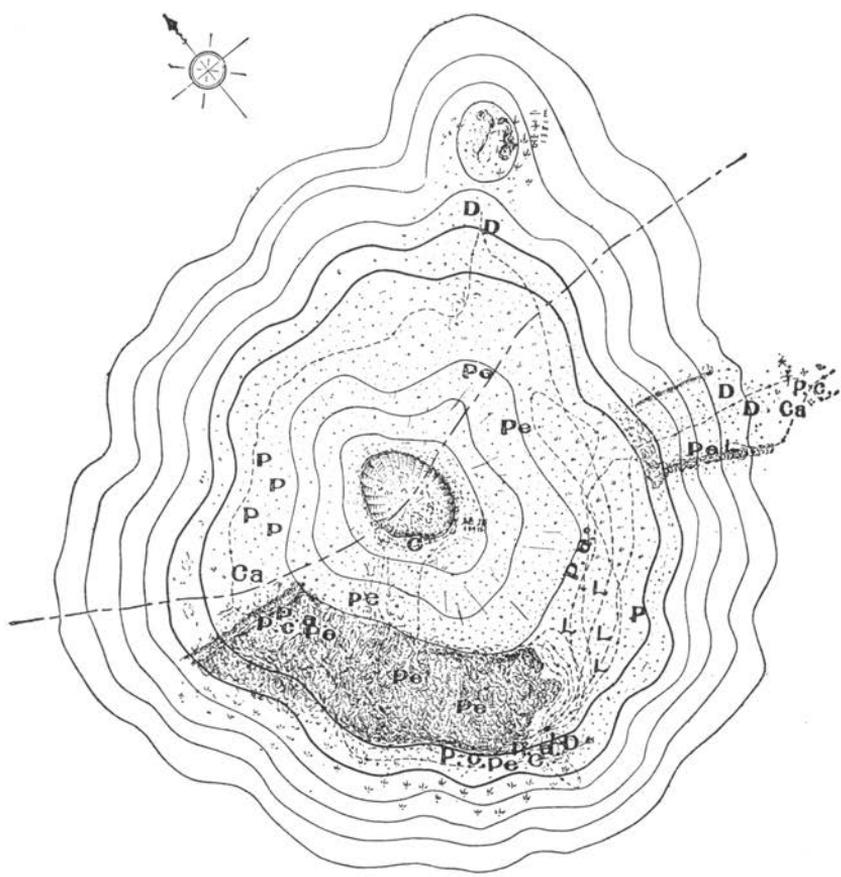
國後島の概略及びチャチャヌブリの概郭

國後島に就ては此處に今更ながら記す要もないのであるが、大體概念的の事を摘出して置くのも此稿を讀まれて行かれる上に多少御參考ともならうと思つて左に記すことゝした。

此島は千島列島の最南西に在つて、面積の廣さは列島中第三位に位するもので、國後郡をなして根室支廳に所屬する。根室半島と知床半島との間に根室海峡を挟み、北東は國後水道を隔て、擇捉島と對する。島形は北東から南西に長く延び、長さ約三〇里、幅約三里、周圍約百六〇里、面積九二方里を有する。其北端をアトイヤ岬、南端をケラモイ崎と云ふ。全島を千島火山脈貫き、主として輝石安山岩より成る。高山は中部以北に多く、一千米以上のものにチャチャヌブリ(一八四五米)ルルイ岳(一五〇六米)等の聳ゆるを見る。沿岸は峭岸をなす所多く、又溫泉湧出してゐる所も少くない。船舶の泊地に乏しく、南端の「泊」を最とする。鯨、鮭、鱒、鱈、昆布等の水産物殊に豊である。泊、東沸、留夜別等の數村があり、人口二三一五を數へる。(明治四十一年調。以上主として百科大辭典に據る)

チャチャヌブリは此島の東北方、島幅最も廣い所にルルイ岳(一五〇六米)と並んで堂々たる雄姿を峭立する。高距一八四五米(水路部海圖No.42による)東西約十四軒、南北約十八軒の裾を張り、典型的な美しい二重火山をなしてゐる。即ち丁度大小の富士山を重ねた様な形で、その重ね合せる所が最初の噴火口となつてゐて、其第一の噴火口は従來口碑によれば一大環狀湖沼をなすと稱せられてゐたものである。但此處は今平坦なる(西北側は熔岩累々と重なつた熔岩地帯をなす)臺地となつてゐる。

然して其臺地の中央部から更に後に噴火した時に出した熔岩の小形の圓錐形の堆積即ち尖塔(Central cone)が出来、其絶頂に更に新らしい第二の噴火口を有する様になつたものである。(詳細は後に記す)



凡 例

- 塔岩
- 砂礫地
- 郡界
- 登路
- 幕营地
- ▲ 三角點

Association :

- イハキスゲ *Carex Mertensii* Presc. var. *urostachys* Kükent.
- ハヒマツ *Pinus pumila* Regel.
- C イハヒゲ *Cassiope lycopodioides* D. Don.
- Ca イハギキヤウ *Campanula lasiocarpa* Cham.
- D コマクサ *Dicentra pusilla* Sieb. et Zucc.
- L ミネズハウ *Loisleuria procumbens* Desv.
- P メアカンキンバイ *Potentilla Miyabei* Mak.
- P.a. アラノツガザクラ *Phyllodoce aleutica* A. A. Heller.
- P.c. エゾツガザクラ *Phyllodoce caerulea* Bab.
- Pe イハブクロ *Pentstemon frutescens* Lamb.

チャチャヌブリ山頂附近

概念圖

附 主要ナル植物集團分布區域

ヲ示ス

山 名 に 就 て

チャチャヌブリの山名の由來に就いて私の讀んだところと聞いたのに二つある。即ち白山（ヌブリは山のアイヌ名）の意と爺山の義とである。

アイヌ語に暗い私はいづれが正しいか知らないが、此二つの傳へを聞くに、前者は全山一年の中、長い期間白雪に覆はれてゐる故とするのにあると云ふのである。然し之は當らない様に思ふ。此山は夏點々と残雪に彩られる位の雪量で、もう少し北へ行けばもつともつと白い山はあらう。何も強ひて此山に求むる譯はない様に考へる。然して後者の爺と云ふ意に由來すると云ふのには次の様な語り傳へが残されてゐる。

昔々のこと此島に年老いた白鬚のアイヌが一人ゐたと云ふ。そして毎日／＼熊を獵しては幾多の年月を楽しく送つてゐた。或日のことである。此老アイヌは一頭のすばらしい巨羆に會つた。すると熊は何と思つたか巨體をゆるがすと見る間に屹然として聳ゆる此山をめざしてのそり／＼奥へ／＼と入つて行つた。老アイヌも亦此熊の跡を追つて次第々々に山奥へ分け入つた。だがそれつきり此老アイヌの姿は再び部落には見られなかつた。

部落の者は皆ひとしく惜み且悲しんだ。そして此老人を記念すべく爾來此山にチャチャヌブリと命名したと云ふのである、もとより眞疑は問ふべきではないが、いかにも千島の山にふさはしい傳説であると思ふ。(ついでに、チャチャと云ふ語に老人と云ふ意味のあることは北千島のアライト山も一名をチャチャヌブリと云ふさうである。)

(日本水路誌第八卷(大正七年十一月刊行)二一五頁)

今竊に案ずるのに此場合のチャチャに老人と云ふ名を與へたのは長老、王者と云ふ意味で、北千島に屹然として四隣の峻峯を威壓するアライトは北の王者であり、南千島に諸々の群峯を従へて堂々たる雄姿を雲表に聳立するチャ

○チャチャヌブリへの旅 岡田

チャ岳は南方の盟主であつて、共に南北の山々の長老、酋長であると云ふのだ。

兎にも角にも此山が斯様な似つかはしい、神秘的な傳説に側面を飾られることはたまらなく親しくなつかい氣がしてならない。

文 献 に 就 て

(附、地圖及登山史)

千島(明治二年七月撰定せられた名。國名の出處は古歌)に關する文献は少くない。旅行記、採集記、論文、報告書等可成り見ることが出来る。然し意外に思はれるのは南千島に就ては存外尠い。北海道本道には最も近いから一番詳しくさうであるが、之が却つて少い理由で、多くは千島としては中北部を取扱つてゐる。中には千島の旅行記として、國後島以南は本島に近いから省略すとされたものもある。

生物学の見地から見られた千島には植物に(一)宮部博士、(二)松平氏、(三)遠藤博士、(四)武田博士、(五)工藤博士、(六)館脇學士其他(七一九)多くの名著を見るが、特に南千島に就ては色丹島に於ける武田博士の論文及び宮部博士の論文(一八八四年、色丹、得撫、擇捉等に採集)を見る位であつて誠に寥々たるもので、ことに國後島を主體として未だ取扱はれてゐない様に思ふ。海藻、地衣類等の下等植物に至つては尙更である様に思ふ。(但し昆布に就ては宮部博士の名著を見る。)鳥類に於ては邦人としては黒田博士、山階侯爵、内田博士、農林省等の研究調査報告等を見るが南千島に就いては殆んど報告なく、國後島の如きは(十)内田博士の鳥類目錄(動、雜、二四卷、二八三號)に乳岩路にて採集せられたもの三十點を擧ぐるにすぎない。

1. Miyabe, K.—The Flora of the Kurile Islands, 1890.

11. Matsuda, H.—List of Plants collected in Kurile Is. by T. Kitamura, in T. B. M. IX, 1895.

三、矢部・遠藤——千島占守島ノ植物（植、雜、XVIII, 212, 1914.）

四、Tateki, H.—The Flora of the Island of Shikotan, 1922.

五、Kuro, Y.—Flora of the Island of Paramushir, 1922.

六、Tatewaki, M.—On the Plants collected in the Island of Araid, 1927.

邦人の著書は以上の外、七、千島探検實記、八、北千島調査報文、九、博物學雜誌（川上瀧彌氏）等二三散見するものあり
十、内田清之助——千島産鳥類目錄（動、雜、二四卷二八三號八頁）

其他動植物の全般に亘つて本島は調査の行届いてをらぬ所と云つてよいと思ふ。即ち所謂暗黒地帯の所が尠くない。
5。

一方又チャチャヌブリに關する旅行記報告の類は寡聞の私の知る所では一つもない。此山そのものに就いて一般的の極く概略なものを記したものは私の目にふれたものに數點ある。今左に摘出して見たいと思ふ。

○千島聞見録（岡本監輔著、明治二十五年五月發行）第一頁に、

國後島。在根室之東北。周回一百六十里。山川清秀。物類殷繁。東北茶々岳。屹立參天。樹木葱鬱。絶頂積雪皚然。（下略）

○千島探險（笹森儀助著、明治二十六年二月）第百五十七頁に、

（前略）最高山ハ、チャチャノホリ凡五〇五八尺。（下略）

○千島紀行（川上瀧彌、博物學雜誌第二卷第二十號、一九〇〇年）第十六頁に

内灣（エトロフ島内保灣）々邊に立てば國後海峡を隔て、國後島のチャチャ岳に段をなせる圓錐形の奇峰を臨む

○チャチャヌブリへの旅 岡田

九

○チャチャヌプリへの旅 岡田

と記し、十五頁に「國後島チャチャ岳エトロフ嶋内保ヨリ海峽ヲ隔テ、望ム」とあるスケッチを掲げてある。

國後島チャチャ岳エトロフ島内保ヨリ海峽ヲ隔テ、望ム (博物學雜誌所載)



とあり、第六十二頁と六十三頁の間に十二頁に掲出した圖を入れてある。

此等の外チャチャヌプリに就ての記事の散見するものは各種の辭典(例へば百科大辭典III五一八頁)の外に根室

110

○日本山嶽志(高頭式著、明治三十九年)第二頁に、
爺嶽(別稱茶々登、祖父登)……。

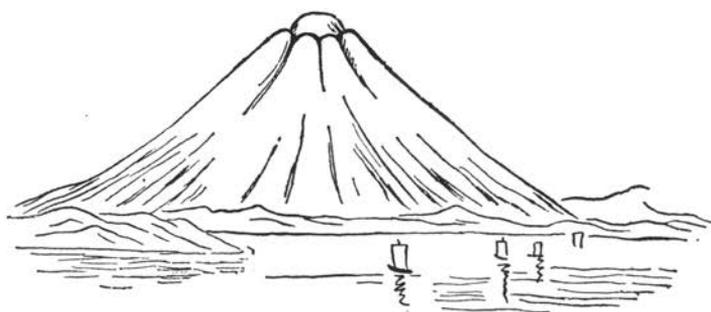
(名勝) 頂上ニ湖水アリ。周回數里。西流シテ瀑布トナリ、之ヲウケシルベト云フ。(摘譯) 圓錐形中又圓錐形アル一種不思議ノ形ヲナシ、甚ダ美觀ナリ。中ナル圓錐形高シ。土人ハ中ナル圓錐形ハ湖水ニ圍繞セラルト云ヘリ(参考書。地學雜誌第九十號)

○日本水路誌(第八卷、大正七年十一月)第四十九頁に
茶々嶽 國後島中ノ最高峯ニシテ高六、〇五一呎アリ。ルルイ山ノ南東方七哩十分ノ八ニ位シ北岸ハソコボイ、南東岸ハ禮文磯附近マデ約九哩間ニ跨リ截頭圓錐形上ニ更ニ第二錐形ヲ載セタルカ如ク頂嶺極メテ尖銳ナリ。四周何レヨリ見ルモ遠望顯著ニシテ航海者ノ好目標トス。云々。

要覽一五頁、根室支廳管内概況七七頁、チノミノチ村勢一覽と云ふ様なものもあるが、此等の案内書には單に該山

岳の前人未踏である事、高さの概略等と云ふ事が僅かにあるに過ぎない。

地 圖



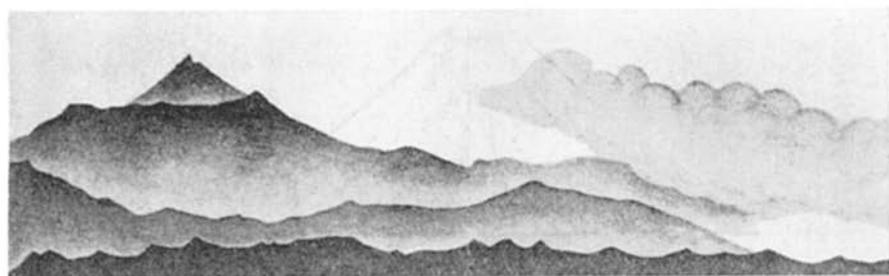
（載所志嶽山本日） 嶽 爺

國後島の地圖に就て目下我々の入手し得る最詳のは（私の知る所では）水路部の三十萬分の一圖であらうと思ふ。元來此島の陸軍陸地測量部の五萬分の一及び二十萬分の一の兩圖とも既に出來上つてはゐる様であるが、軍機の秘密上からか一度も發賣せられたことはない様である。

チャチャヌブリに就ては今から十二年程前に陸軍側で測量し、又海軍は既に其一年前に行つた様であるが、海軍側も右の三十萬分以上の圖幅は出されてゐない様である。

で、我々の一行もさし當り此三十萬分の一の海圖によらざるを得なかつたのであるが、もとより海圖であるから陸地、特に登山を目的とするものには殆んど頼り得ざる程度のものである事をまぬかれない。（今回我々の登路として選んだ大澤と稱せられてゐる頂上から稍々眞直に南嶺東に入る澤などや山頂の噴火口等の様なものは記入することを省いてある様である。）

此適當な地圖を得られないのも確かに從來此山に對して登山を試みられなかつたことが重要な原因の一となることと考へる。で今後もし此山へ登られる爲の地圖としてはやはり目下のところ此三十萬分の一の海圖と北大山岳部



嶽々茶 (6,051)

4,528

(本日水路誌所載)

一九二九年度年報百九十八頁のスケッチと本稿に附した臆測圖が参考せられ得る位のものであらうと思ふ。

登山略史

チャチャヌブリ登山を試みられた最初は今之を明らかにすることは出来ない。前述した様に此山に登山した記事は昨年度までにはない様であつて、たゞ話によつて集めてみると、アイヌ人が登つたらしい外に今から約十一年前の秋に海軍の測量隊が南方大澤から乳呑路にて人夫を求めて登り第一火口原に約一週間幕營をなして各種の測量を了した様で、(第一火口壁の三角標石も此時建てられた様である。)續いて翌年陸軍の測量隊の登山を見、やはり一週間位第一火口原に滞在してゐた模様である。其後一二年で海軍側から又確かめに登つたらしい。然し何れも眞の絶頂には達してをらない様である。

其後は絶えて登山を試みたものはない様であつて、一九二八年に至つて禮文磯の林某氏が四月中旬禮文磯側から登山を試みたと稱せられてゐる。(谿谷に硫黄の溜つてゐるのを探すためであつたと云ふ。)

又、此年に古釜布フルカブ小學校教諭(現、古丹消小學校々長)植木壽久氏が青年團員を率いて登山を試みられたが不幸果せられなかつた。然して此時まで登られた所は前記の様に第一噴火口まである様で、これから上、即ち眞の頂上には至

つてをる記録も目に觸れず傳へも聞かなかつた。

昨年度に至つては果然登山者の注目を引いて、初夏の頃には五指に餘る計畫を聞くに至つたのである。で、此年最初に赴かれたのは東京の早川植物研究所から植物採集の目的に派遣せられた伊藤某氏で、乳呑地に七月二十日かに到着せられ同地の伊藤某を案内として大澤から登られたが連日の疲労のため約三合目の附近より引返へされた。續いて北海道の永井農學士と島村氏が大澤から向はれたが生憎天候不良のため山中數日幕營の後中央尖塔に登りかけて下山せられた。

つゞいて氏等の乳呑路に歸られた翌日小生等の一行は同地に着き翌々日登山に向ひ四日目に山頂に到達した。此年八月に入つてからは小泉秀雄氏も樺太旅行の歸路此山を目ざされた様であるが詳細は不明である。

行程摘要記録

一行 長谷川傳次郎氏（ヒマラヤ、ティーベット印度等の山を數年歩かれた方） 瀨川孝吉氏（東京農業大學在學） 岡田喜一（外短期間案内人夫等五名加はる。）

一九二九年七月十五日上野發（午後九時半）——十七日朝桑園着——二十日まで滞在。

二十日札幌發（午後十二時二十三分）——二十日旭川着（午後五時一分）國後島に在住せられし植木氏訪問のため。

二十一日旭川發（午前五時四十五分）——根室着（午後十時九分）二十五日迄滞在。便船を待つため。此間に根室半

島沿岸一周、カツラムイ、^{オシホトウ} 濫根沼、タンネトウ、コタンネトウ、南部沼等へ採集撮影旅行。

二十五日濃霧。根室發（午後十二時）發動機船にて——二十六日終日霧^{ガス}。古釜布着（午前七時）——荷を馬に託す。

チカツブナイ——キナカイ——ウエンナイ泊。此旅行見學採集撮影を主とするものゝため以下記す所の所要時間も

普通の旅行に比して著しく多いこと豫め御承知置き願ひたい。(古釜布チノミノチ間馬上一日行程の由。)

二十七日霧。ウエンナイ發(午前七時頃)——セ、キ——新道(ルヤベツ川に沿つて溯りポントマリ山の裾を通ずる路。海岸寄りの留夜別岬を越ゆる舊道は歸途通過)——クラオイ——セオイ川を渡舟にて渡りオダイバケ——チノミノチ(午後八時頃)泊。二十八日雨天滞在。午後晴。オンネベツ沿岸採集の外、準備に暮す。

二十九日晴、時々霧(オカップにて驟雨)乳呑地(午前九時頃)——禮文磯——オカップ——サイノカハラ(午後四時)泊。

三十日晴天。サイノカハラ(午前七時)——大澤——第一噴火口内火口原東側幕營(午後八時半。途中道を選ぶため藪をくぐり歩きたるのと人夫に打撲傷を負ひたるもの出でたるため時間の空費多し)

三十一日天氣崩れ氣味。時々雨を誘ふ。休養。

八月一日晴天、微風。午前七時半テント發、火口壁に沿ひ西側へ廻り絶頂への登路を探す。西側より登攀、十一時絶頂。珍らしく殆んど無風。約一時間止る。南側より略真直にテントへ下降(十數分間にて一同テントへ歸る)

二日雨天。時々雨止む。休養。折々採集。(氣温、一日——二日、最高 25.0° 。最低 13.0° 。午前九時。)

三日晴。風強し。第一噴火口原内東側より一周。(氣温、二日——三日、最高 25.0° 。最低 20.0° 。午前九時)

四日晴。午後霧。主として西側火口壁の内外、火口原内に撮影及び採集。

五日晴。雲の流れ忙しく天候惡變の徵あり。午前八時幕營地發、ほど往路を辿つて下山。サイノカハラ獵夫の家に到着午後五時。宿泊。

六日晴。サイノカハラ——禮文磯——チノミノチ泊。

七日朝小雨。後曇。乳呑地(午前十時半)——オダイバケ——セ、キ——夜半、發動機に便乘、翌八日朝根室着。

九日晴。根室發(午後一時二十分)翌十日朝上川着(午後二時三十五分)。乗合自動車にて層雲溪へ。泊。
 十一日。曇。層雲溪——ヌタクカムシユベ——黒岳——石室泊。

十一日晴。石室——五色岳——白雲岳——赤岳——黒岳石室泊。

十二日曇。石室——層雲溪(正午)——上川。

十三日朝。札幌——桑園泊。十四日札幌發(午前十一時八分)——小樽下車(訪問午後九時八分發)——十六日東京着(午前七時五分)

旅 行 記

根 室 (二十一日——二十五日)

根室の街はづれ——。其處には嬉しい淋しさがあつた。期待した旅愁が待つてゐた。

牧柵の上にノゴマが一羽ゐる。陽に向つて眞紅の胸を張りながら高らかに健康さうに元氣な歌を歌つゐた。大海原を吹き渡つて來た濱風が一吹き、濱邊の雜草を撫でながら吹き上つて來た。ノゴマの胸毛はしきりに戦ぐ。風に負けまいと一段聲を張りながら懸命に歌ふ。人の來たのも知らないで——。

馬が放してある。牛も一緒に。仔馬が不釣合に長い脚を動して躍つてゐる。

夕べがせまる。草の上に孤立する無電の鐵柱。張り渡した針金が濱風に淋しく空高く高鳴つてゐる。

ポーと云ふ長く低い出船の知らせが夕靄に靜まる街の空にひびき渡る。やがて街の灯がきら／＼と見える。

根室は靜かだ。こんな嬉しい淋しさがある。

然し幾日々々もこれではやりきれなくなつた。人はなんて我儘なものだらうともしみく／＼思つた。

島へ渡る船を待つてゐるのだ。チノミノチへ直航する——。明日は入つて來ると云ふ。心だのみに單調さを我慢する。朝がくる。又、夕方になるらしい。一日又暮れる。翌朝がくる。こんなことに五日の日は過ぎた。六日目の夕方終に待ち切れず古釜^{フルカマツブ}布行の發動船に乗り込んだ。もつとも此五日の間とても毎日沖の鷗を見てばかり暮して居たのではない。根室半島を一周して北海道本島の東端ノサツブ岬へも行つた。カツラムイの岬へも出掛た。港の沿岸も船で廻つて遙かに國後の山々を眺めてひそかに胸をとどろかせました。數々の寫眞も撮し、採集も盛んにした(チリモの研究材料と海藻とが主であつた)。そして多くの新らしい知識と有望な材料をしこたま仕入れたが、山岳とは縁がちと遠いので本誌には全部省略することとする。

根室—フルカマツブ—ウエンナイ (二十六日—二十七日)

夜の十二時。満天の星のまたゞきはせはしい。

暗い波止場に七八人、カンテラの灯をたよりに舳に乘込む。港外にそれ／＼の目的地へと出港を待つてゐる發動機船にくばられて行く。古釜布行の船に運び込まれたのは我々三人と行商人一人。船と云ふと都育ちの者は——まして荒波を越えて千島へ渡る船——と聞くと甲板と船室、そこにはトランプでもやるのに都合よくテーブルと椅子、などと思ふかも知れないがそんな生やさしいものではない、こゝのは。船室は約幅四尺、長さ六尺、高さ三尺の箱である。大體船の大きさはと云ふとやつと二十噸。鷗が呑氣に遊んでゐる隅田川の船でももうちつと大きく、第一清潔である。今さらはるばる出掛けて來たのがうらめしいが仕方ない。とにかく之に積み込まれてさへ居ればこゝから多年の目的の島、國後へ行けると云ふので我慢をする。もつとも船賃も安いのだからあまり文句も云へないの

だが島へはこんな船で行くのだと云ふことを（一月一度とか定期船が行くさうであるがこれはいつどこへつくだか當てにならないとのこと）お知らせすることも必要だ。

此船は勿論一、二、三等の區別などなく、鮭鱒ともあまり區別されない。艙の縁の下の空き間——前に記した座つて頭が天井甲板とすれ／＼、寝ては頭と足がやつと一ばいにのばせる箱——の天井の周圍は一ばいの鱒の箱を積むことゝて、室は魚臭、油臭其他の異臭に満ち又夜通しのガタ／＼する發動機の震動、とても寝ることも起きる事もまづむづかしい。

でも幸ひ翌朝早く船は古釜布の港外に錨を投ずる。海面は幸に和ぎ渡り、波も静まりかへつてゐる。見渡せば一面の濃霧——。發動機の響がびたりと止る。と、同時に反動的にシーンと云ふ底氣味悪い程の静けさがおしよせてくる。船に作り出された波紋はゆるく遠く小波を越えて擴がり消えて行く。暫くして濃霧を通してザブリ／＼と規則的の波音。次第／＼に近づく／＼と知るうちに低い掛聲、すると目先きにぼつくりと霧に黒く、迎への聲。見れば舟先きに若者數人座して櫂を捻り漕ぎながら近づつて來た。聲はやがて一行を乗せて岸へと急ぐ。陸の影は未だ見えな。たゞ濃霧の中へと本船を離れて行く。

淺くなつた。海底が見える。と、ぼんやり眼前に展開された淡墨色の陸影。四邊は明けもやらぬ朝に靜かにねむつてゐる。脊黒鷗が二三羽聲をかすめる。風切る翼音が手にとる様。

見ればそこには、小波にゆれて鷗の群が波の上に浮び休んでゐる。船はやがて古釜布川を溯つて行く。午前七時頃、右手に白い丘が見える。近づき見れば貝殻の山！こゝら邊りで採れるすばらしく大きな帆立貝の殻の堆積である。

木橋の下をくぐる。すぐ左手の岸に聲は着けられた。鳥が一群けたましく叫びながら遠のいて行く。

再び静寂——。四邊はすべて静の一字の支配下へと返へる。道に人一人通るではなく、流石に千島に來たたと先づ思はせた。

道に馬力を引いた子供が來た。よき折からと掛合ひ込んで荷を積み、廢墟の様にひそまり返つた村を通過つて村はづれの驛遞鈴木屋山田喜作方に荷を下す。

旭川で植木壽久氏から戴いて來た紹介狀を出してゆつくり休息。朝食後今日中にセ、キか出來得ればチノミノチ逆行きたいものと、馬の用意を依頼する。ところが待つても待つても用意が出來ない。終に三時間程の大休憩となつてしまつた。

こちらは初めてで土地不案内の事故、馬をと依頼すれば五分か十分の中にはやつて來ると思つてゐた所が千島へ來てはとも通用はせず、早速に馬の仕度に取り掛つてもまづ大丈夫二時間はかゝるのだ。それはあの果しも見えな霧の牧場に野放しになつて何處に何してゐるか分らない馬を探して集めて來るからである。之を馬を取つて來ると云つてゐる。そこで小生はこの氣長の馬取りをしてゐる間にかねて植木氏から紹介せられた此附近にある古釜布小學校に松井校長をお訪ねした。校長は此土地のアイヌの遺跡の研究で驚く程澤山の骨器、石器、土器を蒐集せられてをられるとのことである。幸ひ校長在宅で色々此土地及びチャチャヌブリに就てのお話を伺ひ得た。アイヌの遺物も是非見て行く様に親切なおすゝめを戴いたが、今日の豫定地への馬の用意もあるし拜見するとなれば好きな事として長くもなるので残念ながら御辭退をした。それに歸途再び此處に島登山等へも登山のために戻つて來て兩三日滞在の豫定であつたから。——所が歸りは生憎意外に豫定の日數が食ひ込んだので歸つて來られなかつた。其上今年一月の新聞紙の報ずる所によれば小學校は惜しくも全燒の厄に遭はれたとの事、一目でも拜見してをきたかつたものを返へす返へすも残念である。

驛遞への歸り途、警察へ寄つて、特別狩獵許可書を示して、狩獵の承諾を得、更に附近で發掘せられた千島アイヌの使用した高さ二尺程ある（之も此旅行の歸途再び此處に来て、寫眞と測定をする豫定であつた）見事な土壺を所有せられてゐる方がある事を兼々聞いて居たのでお訪ねして、一見させて戴く。黒く重く硬い、口の狭まつたいい形のものであつた。

早々に驛遞に戻つて來れば馬は丁度來たところ。荷を馬の背に振り分けて、一行三人かはるがはる馬の口とりをして（四頭の馬は手綱を前の馬の尻尾に結び付けて一列にし、最前方の一頭の手綱をとる）ウエンナイをさして狭霧の中に道をたどる。行く事數町突然一頭の馬の荷物、鞍と共に一側にくりりと片寄る。三人戻さうとはするものゝやはり初めから荷をつけ直さなければならぬ。かうなると馴れないものには勝手が分らないし又この先どんな所でどうなる事とも知れぬので三人の中一人引返し、驛遞から特に一人口取りを頼んで來る。こんなことに益々時間を取つて正午に近くなつてしまつた。今日の豫定はいよくウエンナイ迄と縮少する。それにしても我々一行の様に寫眞を撮り四邊を眺め動植物の採集をしながら行く事となるとこれさへ覺つかないと云ふのだから心細いわけである。

とにかく古釜布川の右岸に沿つてあの廣々とした草原の一本道を行く。村を離れて五百米程の所で古釜布川を丸太をならべた小橋で渡り右方へ川と次第に離れて海岸へと出る。

此途中の草原チシマオホヒバリが多い。行く手の路上に點々と遊んでゐるのが目を引く。途は濱沿ひに行き間もなく右に砂坂を波打際に下りる。轟々の波音、潮風と霧、人影も渚の果しも見え、濱邊の風物は總てうら淋しい。チイ／＼と低く鳴いてせはしげに尻をふり跳び歩くハクセキレイ、飾りない砂濱にゆかしい香をたどよはすハマナス（或はハマナシ）の花、これがこの果し遠い北海の濱邊の又ない唯一一つの色どりである。渚には打上げられたヒ

バマクと *Cystophyllum* とエゾイシゲ、何れを見ても色は澁く更に映えない。

チャップナイを越して間もなく岩礁がある。イボノリが一面岩を覆ふ所があつた。波打際の磯に近い海底の凹みにはカタハベニヒバ、オキツバラ、クナシリワカメ等色とりどりに沈んでゐるのが目立つ。

やがて前方に蠟燭の様な天然の大石柱が屹立して、ヒメウが澤山群れ集つてゐる。又、左方の岸の大岩壁の割れ間にはケイマフリが丁度今營集中と見えて雌雄しきりに忙しく出入してゐる。ハクセキレイが波状飛行をしてはしきりに飛び交ふ。灰色な、單調な濱にいく分の彩りとにぎやかさを添へてゐる。

途は依然落傳ひ。砂濱に出たと思ふと岩礁に出合ひ、之を越すと僅かの砂濱。左手は濱邊近くまで針葉樹がせまつて、音なふものは轟々の波、飛んで来るものは鳥、いつまでも晴れないのは霧、はかどらないのは道のり、草臥れてくるのは足と、此邊一體はきまつてしまつてまことにつまらないものばかりである。その上、狭い岩間をぬける所で一行の馬が這つて怪我をする、荷物は岩角に當つて破損する、時間は遠慮なくたつと云ふ、弱り目にたゞり目の目に遭つてしまつた。

こゝからすぐ眼前に横はる海に突入する小半島を急坂によつて上下して眞直に越し、更に濱傳ひに草の小道をつどりながら草をつんだり捕虫網をふりまはしたりして（此邊にてヒメウスバシロテフを得）單調さをまぎらしながら行くとやがて静かな入江の様な所へと出る。道はいつしか高くなつて臺地の上になり、濱へと更に下つてゐる、ふと見やれば渚に鷗の大群が下りてゐて、それが一度にバツト飛び立つた。其壯觀！

此入江には人家が數軒、突き出た半島の懷に淋しく取りのこされてゐる。此處から道は半島をまわらず急に左折して路の悪い曲り坂を下つて平らな峠の上へ出る。前方に山を眺めて此峠の上は一面の草地、之を圍んでサルマガセの房々と下つたエゾ松、トヤ松の大密林。中にクワッコウが鳴き、ヘンソンコガラが囀るすこぶるのんびりと

した所であつた。

小憩の後、更に前進、路は右へ曲つてやがて林中に通ずる淋しい所となる。此邊遠くウグヒス、クラクコウを屢々聞く。濱邊へ下る坂を下つて行くうち、漁夫の家が點々と見えてくる。此邊の砂濱ハマベンケイサウの大株がちこちとあのグロークスの美しい葉に淡碧の小花を下げてゐるのが多く見受けられた。又、ハマハコベの大きな株も目を引く。濱の所々には帆立貝の殻がうづ高く積み上げられてゐる。早速此殻山に馳け上つて下向きに一行の進行振りを活動寫眞に撮す。

其中いつしか陽は山の端に近く、のんきに遊び歩いたむくひは早速にやつてきて、飽き／＼する單調な砂濱歩きのうち夕靄は次第に下りてウエンナイの驛遞菅野喜三郎氏に着くと間もなくランプに灯が點ぜられた位であつた。夕食後、ランプの下で採集品の整理。中々澤山の事とて意外の時間をとる。家への便り一つ書くのがやつこのこと。寝についたとき家中しーんと寢静まつて濤の音が轟々と四邊を壓する。外は一面の濃霧。

(此驛遞の主人公は村會議員をやつたり、東京へも數回來たりしてゐて萬話の分りがよく、客扱ひ食器寢具等とても千島邊とは思へぬ程心持ちよかつた。)

ウエンナイ——チノミノチ

濃霧の朝。渚は轟々と絶えまない濤音に聳するばかり。波頭がほのかに白く霧の中に躍る。水際に食をあさり歩く鷗の群の往來しげく、眞砂に入亂れる足跡は後つき寄する波足にまた／＼うちに消え行くのも面白い。

八時に近い頃霧の中をチノミノチを目ざして出發。荷物を三頭の馬の脊に託して、三人身輕となつて、銃を持つもの、胴亂を掛けるもの、寫眞機を手にするもの、おのがじし得物をとつて濱傳ひに先發する。

植内鼻を後にして間もなく大脊黒鷗の大群の囂々と呼ぶけたましい鳴き聲を聞く。折からの引潮に濱には平らの磯が現れてゐる。一行の一人此磯の上を霧の深いのをたよりに大脊黒鷗にしらび寄つて一發。轟然たる銃聲は波音を壓して暫時霧に籠る。見事な老若の二羽を得た。

磯の上に一面あじもを見る。又水溜にはフジマツモが澤山生えてゐた。濱邊に近い海底には巨大なスジメ、クナシリワカメ、ヒバマタ、ベニフクロノリ、カタハベニヒバ等とり／＼の色美しく沈んでゐた。

霧に單調化されて飽き／＼した物懶さを海藻に鳥に採集をはげんで氣を晴す。セ、キの温泉——といつても海岸に建てられた小屋一二軒にすぎないもの——に我々がつく頃、ゆつくり後から我々の荷を積んで來た馬の一隊はウエンナイの驛遞の主人を先頭に追付いて來た。

霧が稍々うすらいで來る。之れから大きな岩の出鼻を三つばかり濱傳ひに廻ると漁夫の人家が點々と濱邊に見えて來る。此岩の出鼻の一に人の横顔をつくりのがあつた。之をぬけて行くと眼前に大きな半島が行く手を遮るかと思はれるばかり大きく見える。留夜別岬である。間もなくルヤベツ川の川口が見える。川は此邊としては稍々大きい方で、水は冷く、透明で河底の小石につくあをのりが美しく見える。此處で路は二分する。もつともすつと先きへ行けばクラオイ川の川口で一緒になる同じ道だが——。右へ濱添ひに岬をいくつとない凸凹を越えて行く舊道と稱するのと左折して川の右岸に添つてポントマリ山の南側の裾をぐるつと大きく廻る新道とである。

一行は新道を行くことゝなつた。それは此方が道がよく樂だと案内が云つたから。ところが歸りに舊道を通つて分つたのだがこゝでも又土地つ子と我々との道の良否の標準がちがつてゐることを知つた。先方のは馬、此方のは人が標準。ちつと位の急坂や岩骨あらはな狹路などあつても眺望のよい近い方がこつちは良いとするのに先方はどうせ馬の脊で行くことであるから遠くても、途中見所はなくても、竹やぶや小川位あつても平らな所なら良い路で

あるからまるでわけが異ふ。今度行かれる方は土地子が悪いと云つてもこの舊道を行かれる事をおすゝめする。我々には岩のゴツ／＼した道、急坂などはなんでもないので。第一眺望のよき、月に泥齧りよりまだ異ふ。此舊道の眺めは斷然すばらしい。恐らく白糖以南の本島東海岸では第一であらう。

ルヤベツ川に沿つて行く道の左右は丈餘のオホイタドリには、アラジが止つてしきりに鳴く。此邊兎が多いさうだ。山鳩が五六羽行く手を横切る。

蝶の多い草原、鶯ののどかに鳴く草叢等を通つて川幅三間程の此の川の上流を渡つて(淺瀬である)左岸に移り、之からエゾ松、トマ松の寂然とした密林中や雜に刈つたネマガリ笹の坂道等面白くもない——左右草木が深くてゲームをミスするので鐵砲一つ鳴らすことも出來ず、碌な花一つない所——それを飽き／＼する程さんさん曲りくねりして歩くのだ。地圖を見ても勿論記入されてはゐず、目標に見たくも山は見えずおまけに暑さはきびしくてすつかり退屈してしまひ、笹原へ出た時などいつそ熊の一匹も飛び出してくればいゝ等と強がりを云つたこともあつた位。午後一時過ぎ、やうやく文字通りの山中の一軒家に着く。建てられて間もないもので建具などまだ入つてゐない。こんな山中にあつても驟遮ださうであるから今後行かれる方は便利である。晝食をすまさうと座敷へ上つてみると大きな熊の皮が一枚敷いてあつた。此處の主人が三年ばかり前に此附近で撃ちとつた二頭の中の一つださうで、一通り例によつて武勇傳を拜聴に及ばせられた。主人林某氏は年齢四十三四、此附近での有力者ださうで、夏は隱居もと云ふ様な風で話はすべて規模が大きく、内地あたりから行くと流石は千島育ちとびつくりする。然し此人は一面又氣の大きな良い所もあつて折角千島くんだりまで來たのだから少し曲り道にはなるが鱒が産卵のために川もうまる位溯上してくる所を——實際はそれ程でもなかつたが——案内してあげ様と忙がしい所をわざ／＼萬事投出し

て行つてくれやうと云ふ好意を寄せて呉れた。そこで折角の好意でもあり又とない好機でもあつたので我々三人だけ行くことゝして案内者は荷をつけた馬と一緒に本道を行つてチノミノチの宿で待つてゐる事とした。

鱒の非常に多いといふ川に行く間の路は相當遠いものであつたが、道々例によつて大規模の漫談をして呉れたので少くも厭きもせずすんだ。よく話にきく例の熊が鮭を竹にさしてかついで行く話もあつて、北海道本島で實際かついで行く所も魚をさしてゐる所も見たと云つてはゐた。

途中小さな清流があり通りがゝりにふと見たところ淡褐色の細長いものが澤山流れにゆれてゐた。硅藻でよもあるかと手に取つて見たら珍らしくも(千島では初めてと思ふ)ヒドルールス(*Hydrurus foetidus* (Vancl.))であつた。早速標本管に採集される。

鱒の溯つてゐると云ふ川は川幅二間位、極く浅い(所々、殊に川の曲り角等には馬の丈がやつと立つ位の深い所もあるが)河底は敷いた様に砂利が平らになつてをり、水は透明であつた。川に下りると間もなく川を利用して材木を搬出してゐるアイヌ人に會つた。異様な目なさで見送りながら黙々として働いてゐた。

鱒は一尺五寸から二尺位の長さのがスーツ、スーツと勢よく泳いでゐる。少し河底の深く静の様になつた所には概して多く集つてゐた。棒切れでこの集つてゐる所をかきまはすと何百とない大きなのが逃げまどふのは又壯觀である。周章たになると我々の足へぶつかつて行くのがある。(脊鱗が出る位水面近く泳いでゐるのに一行の一人が試みに十五番銃で五號の散弾を打つてみたが一匹も死んだものはなかつた)。

沿岸の水中に *Vaucheria* が澤山繁殖してゐる所があつた。(歸京後調べたら生憎 *steno* の種名は不明であつた。)

一行は徒渉をつゞけながら此川についてなほも下つて行つた。岸の兩側には四五尺のエゾブキが多くあつたが、案内の林君は此處のは食用とはならぬと云つてゐた。(同じエゾブキでも食用になると否とあつて葉柄の色で見分

けられる由。

川の浅瀬には屢々鱒の死體や氣息喘々としてゐるものを見た。視れば體に乳褐色をした綿の様なものぐべたり／＼と所々ついてゐる。Samolegniaが繁殖したためでもあらう。所々の岸邊の小砂利の上には大きな鰻の足跡がまざ／＼といくつとなく印せられてゐた。今更ながら此邊りを我物顔にのそり／＼と徘徊してゐる彼の姿を想像して遙々千島に渡つて來た感を深うした。

此支流が本流に合する邊りから水深は著しく増して來て徒渉することも出来なくなり右岸を草分け倒しながら進む。間もなく前方に木橋を見るが、その橋の袂で海岸沿ひの舊道と合する。川口に近く海に臨んで漁夫の家が點々とある。クラオイの部落である。

之から先きは濱傳ひ、此濱は實に／＼長いものであつた。そして又、この上なく單調で、淋しく、憂鬱の限りの所であつた。たゞ濃霧と耳も聾するばかりの怒濤の音。——大海原からは絶えず波のしぶきを運ぶ濱風が岸をめがけて絶えまなく吹き寄せる。友の脊に負ふ銃の銃口は折々低く浦風にポー／＼とひとりでにたよりなく鳴る。

行けども／＼砂濱續き、時折鷗が低く風に乗つては霧の中から忽然として現れ、振り返る間もなく又淡れ消えて行く。海藻の打上げられたものも少く、ヒバマタ、ケウルグサ、ウガノモクとたゞ褐色の單一な色を見るばかり。

ヒタ／＼と渚を傳ひ行く跳足袋の足跡は、印くと見れば波にひたつてすぐあとからと崩れて行く。思ふでもなく見るでもなくたゞ四邊を壓する濤音の中に、足袋の水浸る音のリズムに僅かな變化を求めて、人氣ない千島の濱をたよりなくひたすらに機械的の足を運ぶ。

午後三時半、セオイ川に行き當る。川口に漁夫の家がならんで、濱に網を繕ふ筋骨たくましい北海の漁夫の一團を見る。渡舟を頼んで渡る彼岸は又砂濱續き、行く先きはまた二里餘りとか。霧を通して見る陽はもう夕ぐれを告

げてゐる様。又續ける黙々の濱歩き——。

霧の行く手にぼんやりと淡墨に長く横たはる半島、さては流石の濱もいよ／＼終りをつげたかと勇む心に思はず足どりは捗つて進む程に點々と人家！ さてはいよ／＼チノミノチと喜び問ぬれば非ず。オダイバケと云ふ。チノミノチは此先きまだ一里餘と。あたりの家々にはすでに灯が見え初める。此處にも紹介されてゐる家もあり泊るには差支へないが我々の荷物は先刻すでに馬で乳呑地まで運ばれてゐることゝ更に單一に飽きた氣懈さを引きしめて前進を續ける。先刻霧中に大半島と見たのは今来てみれば一寸した岩の出鼻、之も毎度騙される霧の惡戯。

道は此オダイバケ鼻を越すと海岸を離れて海沿ひの草地へと通ずる。所々思ひ出した様に無人らしい家がぼつり／＼と半ば腐ちたまゝに道邊に立つて氣味悪い。四邊はもうすつかり夜の中に休んでゐる。背丈よりも高いオホイタドリが左右からさしかけた小道、ザワ／＼する葉づれの音、知らぬ土地とてうす氣味悪い。すると此オホイタドリの道の先きに遠くカンテラの光が一つ、フラ／＼ゆれながらやつてくる。さては宿やのものの出迎へかと思つて近づき見れば出合ひがしらに無言の中にカンテラをかゝけて我々の顔を穴のあくほど打ちながめる。變な男もあるものだ、宿やのものかかと聞くとさうではないと云ふ。なんだと聞くとだまつてゐる。チノミノチはと聞くとそこからまで案内してあげ様と折角來た道を先に立つてテク／＼歩いて行く。道が川に出る少し手前で此男の云ふにチノミノチはこの道を眞直行けばよいと教へて自分はすた／＼と横道へそれて行つてしまつた。何にしても奇怪なこともあるものだと考へながら行くうち木橋にきた。オンネベツの川である。

乳呑地の人家のはづれはそれから間もない。古釜布の植木氏に紹介せられた宿屋をたづね／＼海に面する砂濱の部落の前を（家は一側並べ、宿屋のところか僅かに町並をなしても大げさだが——）とにかく家が向ひあつてると云ふ寒村）通つてたづね歩く。

宿屋の親父が提灯をつけて迎へに來たのに會つたのは宿屋の一寸手前。此親父は我々の目さず宿屋の者でなかつたのだが、我々の荷物が此家に下してしまつてあるといふので、いや應なしに一まづこの伊藤旅館に落付くことゝした。

さて落付いてから親父に聞いて見るとチャチャヌブリへは我々一行よりも早く、二十日の日に此處に二組の登山家が來てゐるとの事。一組の方は東京の人で自分が案内して行つて來たが登りかけた所で疲れて引返して來て未だ此家に泊つてをり（早川植物研究所の伊藤某氏）もう一組は我々が行くつもりでをつた宿屋に泊つてをる北大の人で、今日下山された筈だとの事。夕食後荷作り等、かたづいた後、早速北大の永井農學士の一行をお訪ねして、札幌で永井氏宛に戴いて來た宮部博士からの御紹介の御名刺を出して御面會を得た。色々と親しく御面談した所、氏等は丁度小生の實弟の友人の方々であつて、打とけて夜遅くまで主としてチャチャ岳に就いてお話を伺つた。此の一行は生憎雨天のため頂上まで行かれず中央尖塔を登りかけた所から引返へされたとのことで、其處までの道や幕營地、残雪水流等に就いて詳しく話して下された。

歸宿後、明日からの我旅先きに幸あれかしと思ひながらいつになく早寢とする。

チノミノチ（二十八日）

朝、雨。滞在休養と一決。準備に手落ちなかれと、退屈しのぎも手傳つて充分に用意する。

午後、雨あがる。散歩かたがたオンネベツの川岸を溯つて採集、撮影にと出掛ける。

此河の兩岸は採集地として案外よい所で、色々面白い所もあり興味深いものがあつたが此稿には直接チャチャヌブリ登山に關係のない云はゞ横道のことであるから、總て省略することゝする。（採集品の中、鳥類だけは別稿目録中に

○チャチャヌプリへの旅 岡田

元

名稱あり。

序に、一寸此處に此地のチノミノチと云ふ名稱に就て記したい。これはいづれアイヌ語でともあらうが、意味は明らかでない。呼稱は土地ツ子はチノミノチと稱してゐる。本稿にも小生は之に従つてかく云つてゐるが（此地に永住せられる植木壽久氏の書翰による）此外、人により（此地以外の）書籍によつてこの外に、チノミヂ、チノミチと呼ばれ、一般には乳呑路（海圖には乳呑路 Tinomizi）の字を當てゝゐる。又、序にチャチャヌプリも稿頭に記した文献等によればチャチャ山、チャチャ岳、チャチャノポリとせられることもあり、茶々嶽、爺嶽、茶々登、祖父登の字をあてられてゐるのを見る。

チノミノチ——レブニンソ——サイノカハラ（二十九日）

早朝目ざむ。霧——。朝食を済す頃ほひ霧次第にうすらぐ。部落の後の臺地に登つてみたが依然チャチャ岳の雄姿は全く見えない。然し兎に角出發してみることにする。案内人夫は此處に到着以來極力探してゐたがまだ一人も無い。嘗て陸海軍の測量隊に加つて山頂の臺地へ登つた者はまだ二三人残つてはゐるが（第一火口壁の三角點の標石を脊負ひ上げたと云ふ前田某などと云ふのも居る）年はとり登山することを欲せず又、元氣更になく第一、登路の記憶すらもうすらいでゐて全く駄目である。よつて止むを得ず今日サイノカハラまで行く道々で荷かつぎを拾つて行く——も變だがとにかく集めながら行くこととした。何故に此地に荷かつぎにしる山への行き手がまるでないかと云ふに生憎目下は昆布、鱒の採取時期に當つてゐるため重い荷をかついで行つて骨折りをしても割に合はないと云ふので、今後行かれる方もやはり我々のつれて行つた様な大して役にはたさない人だが桶屋だとか床屋の主人公だとか（かういふ人でもやはり此時期には昆布取りの兼業をやつてゐるから決して喜んで行かない）云ふ者を狩り集めるより外致し方あるまいと思ふ。

ところでサイノカハラまで備つた荷物用の三頭の馬の來やうが遅いので出發も遅く九時頃になつてしまつたが今

日は行程も短かいこととて、荷の振り分けをすませてから道草食ひながら行くことにして、ゆつくり出發。
 入夫を道々募集しながら行くことゝして宿の主人を途中までつれて行くことゝする。

部落を離れて間もなく道は海岸沿ひの臺地の上に出る様になつてゐる。そして一行がそこへ來た時に突然、右手に、エゾ松、ド、松の林と悄然と白く枯れて立つ巨木の點在する草原を前景として大空に堂々と肩をそびやかし長く裾を引いた巨岳が展開せられた。云ふまでもなくチャチャブリの雄姿！ 頂に近く一段と段階を作り更にそれから尖頭の絶頂が高く中天をついてゐる。何たる壯觀！ 驚異とたゞ／＼喜びにわく／＼する。見渡す限りあたり山なく獨り黙然として座する、誠に聖者の座禪の姿の趣がある。靄のヴェイルを通して山膚の色はたゞ、一様に淡墨色にぼかされて影の様に見える。それだけにかへつて神々しくも恐ろしくも思はれた。

自分達はこれから幾日かの後にはあの尖頂に立たうとしてゐるのかと思ひながら、改めて打ち眺める姿は又、一しほに嚴肅と緊張の念を深く印せしめる。暫くはただ茫然と眺めながら立ちつくした。

製板所を越して間もなく再び海岸へ出る。渚には珍らしく多くの海藻が打ち上げられて、しかも色とり／＼の美しさである。こゝから禮文磯までの間は此島に着いて以來種類、量共に多くあつた。拾ひ集めてみると左の様な種類である。

- アナアヲサ(少) *To phylla* sp. (岩に一面につく)、ギンナンサウ(多)、エゾトサカ(少)、エゾナメシ、カレキゲサ(多)、ベニフクロノリ(多)、(大なるは五寸餘)、カシハバコノハノリ(非常に多く寄つてゐた所があつた)、コノハノリ(稍少)、フヂマツモ(多)ハケザキノコギリヒバ(少) *Odonia lia okata* (Mor.) J. St. ?、クシベニヒバ、カタハベニヒバ、オキツバラ、クナジリワカメ(多)、アナメ、マコンブ、トロ、コンブ、スジメ(非常によくのびてゐる)、ネコアシコンブ(此島へ來ては此處へ來て初めて見た)ヒバマタ、エゾイシゲ、ネプトモク *Pantonia mollis* Fur. et Setch.

禮文磯までの内、人家は思ひ出した様にぼつりぼつり点在してをり、濱も砂濱あり磯ありで此邊としてはさほど飽きると云ふ程の單調さでない。

濱では盛んに昆布を乾してゐた。(主にナガコンブとタチコンブと稱してゐるマコンブに似て短く中帯部のあまりはつきりしないもの)。又、川の流れに注ぐ所では小供達が稽に似たもので溯上してくる鱒を突いてゐた。一體に此旅行をした時は丁度鱒の溯河期で海邊から川へと鱒が盛んにやつて来る時だったので、色々の珍らしい情景(我々にとっては)を見聞することを得た。(二十六日にウエンナイの部落に入る一寸手前の川にも丁度池で鯉を飼つてゐる様に天然に群つてゐて、附近の子供等はたゞ棒でたゞいてとつてゐた様な事にも遭遇した)。

又、禮文磯附近の沖には——時には岸に可成り近く——此鱒をめがけてくるアザラシ(方言、トツカリ)が多く、ボツクリ／＼あのトボけた顔を水面に出しては遊泳して盛んに魚群を荒し、鱒網の中に入つてゐるものまでも食べ歩く——ではない食べ泳いでゐるのも少くない。であるから漁夫は此アザラシを憎んでゐる事は非常なものであるが撃ち取る事が出来ない。それで濱を歩いてゐるとよく退治に来てくれたと頭の鉢巻を外してはわざ／＼アザラシ退治を我々に頼みにやつては來た。

禮文磯は所謂店屋の最終の所で、此處は一軒の家に鍋釜の類から呉服、反物、野菜類まで日用品一切を扱つてゐる。我々の一行も此處で晝食旁々一休みして不足のものゝ買ひ足しをした。

人夫はチノミノチから此處までくる間に床屋の主人公だの桶屋職人だのと云ふのをやうやく三人集めることが出來た——サイノカハラまでに更に一人を案内と云ふ格で農夫一人を得た。何のことはない我々はいつとはなしに百姓一揆の旗頭の様なことになつてしまふ。一行はこの外に此床屋の主人の親類の者だと云ふ子供が是非同行させてくれと主人と共に強ひて頼んだので之は炊事洗濯係と云ふ格でつれて行くことゝする。その上に又、ウエンナイの

主人の息子(中學生)も先日來懇願して來たので、此人も一行に加はることゝなつたので一行總勢十人と云ふことになつてしまつた。(但し此人等のは我々の方で食料其他一切面倒を見ない約束で、自分でテント食料其他一切を持參して行つた。)

此處から宿屋の亭主を歸し、一行サイノカハラへと前進を續ける。(午後一時頃)。

オカツブ岬の邊は鴨(シノリガモ多し)が群をなして游泳してゐたので、盛夏の頃に鴨獵としゃれて興味一しほ深いものがあつた。

やがてオカツブへ來たときに突然夕立。幸ひ此附近の物持ちの方で至つて親切な漁夫の家で、暫く雨やどりをさせて貰ふことが出來た。此處でしばらくして雨も止んだのでいざ出發となつたがそのとき、山へ持つて行く様にと昆布、鹽鱒などの土産物までも頂戴して一行其御好意に感謝しつゝ午後三時頃家を辭して更にサイノカハラへ向ふ。此處から少し行つた所で一行のうち中學生の菅名君は親類の漁夫の佐々木安七方へ例の炊事係の子供と泊る事となつた——此邊は宿屋は勿論なく、と云つて一軒の漁夫の家へ大勢泊めて貰ふわけにも行かないので、少人數宛頼んで分泊する事となつた。我々は更にハチマキと云ふ大きな半島を其稍々急な傾斜面の中腹につけられた道をたどつて廻る。(此半島の岩壁にはシコタンサウの白花美しく點綴し、道邊は濱風に絶えまなく靡きゆらぐネムログヤヤクサヨシ等が多く見られる。)半島をめぐりきると海岸へ下り坂となる。そして丁度下りきつた所でキアシシギの十羽前後の群が二つばかり目に入つた。數發の銃聲は北海の靜寂さを破つてひびき渡り、數羽のよいゲームがあつた。一行のすぐ目の前には我々三人今日泊る豫定のサイノカハラの一軒家(佐々木留藏)が見える。爺、婆等心よく泊めて呉れる事となつた。(人夫達は少し手前の家へ分宿)。此家は海に臨んだ木造の平家で四邊の様子に調和して誠によい所である。家の臺所兼湯殿兼通路となつてゐる土間には流れをくの字に水路を變じて引入れてあるため、洗ひ場は芥、廢物の捨場ともなり、且つ此流にゐるイハナは鍋釜の洗ひ物をねらつては家の中まで集つて來てゐる。従て家

○チャチャヌブリへの旅 岡田

三

の中で釣をして楽しめると云ふ趣向。

此家の爺はチャチャヌブリへは測量隊と一緒に行ったことがあると云ふ元氣な面白い老人で、獵夫を本業とし、漁業もやつてゐる。

夜は久々で爐を囲みながら北の海の面白い話を夜更けるまで聞いた。此夜は夜もすがら降る様な満天の星。磯に碎ける波音がひとり荒くそして高い。

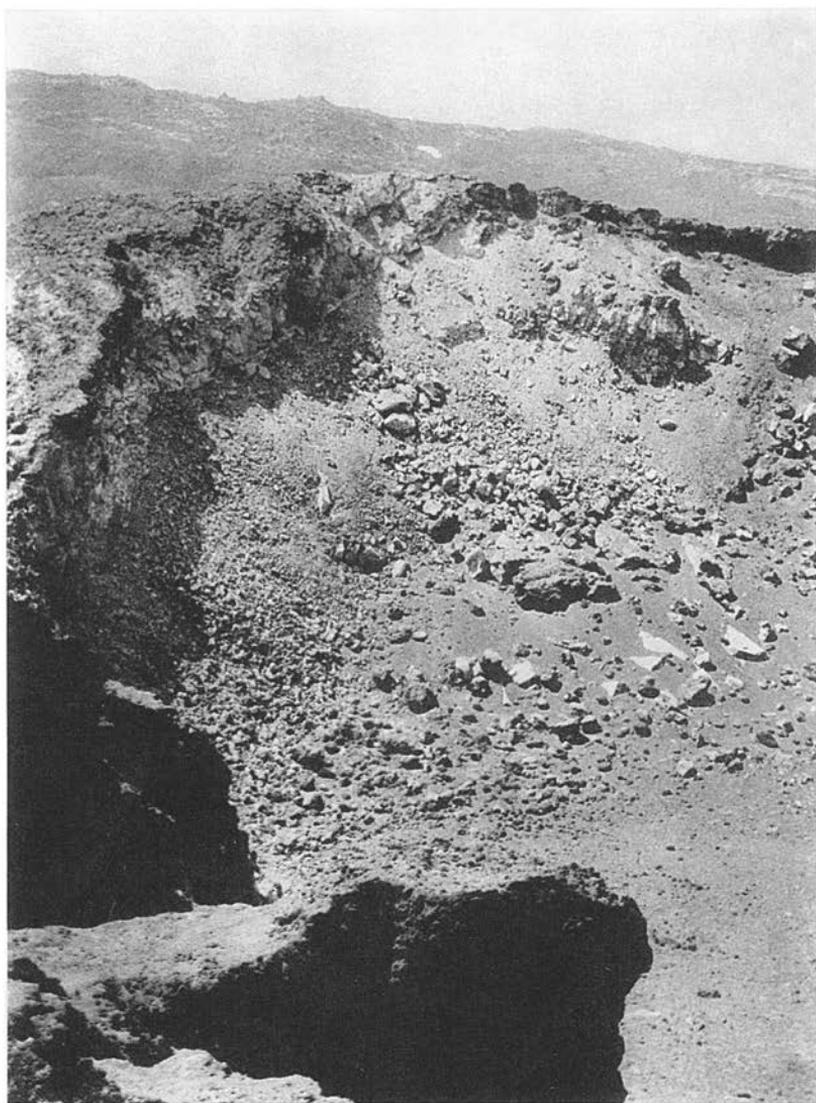
サイノカハラ——大澤——チャチャヌブリ第一火口原 (三十日)

晴天。元氣潑潑。早朝一行の人数集り、人夫の荷物の割振り(一人四貫目弱宛)旅装の仕度等手早く運んで、七時、記念撮影を済せていよ／＼チャチャヌブリ目ざして出發となる。

此邊の地形は海岸沿ひに一體に急な段丘をなして居り、路は此段丘の下、即ち海岸——ごろ／＼した丸石からなつた狭いもの——に平行してつけられ、地名の出所のサイノカハラと稱せられてゐる所は此丸石を積み重ねたのがいくつとなく並び(小樹の下に最近林某氏の建てた地藏尊がある。植木氏の談に、此丸石の堆積は明治四年とかに此島に來た古老の話に、既に此時からあつたと云つて居たと云ふ。)立つてゐる。之を過ぎると曲折する坂となり段丘の上へ出る様になる。すぐ右手に三角點の櫓が立つてゐる。

此段丘を丁度のぼりきつた其時、まづ眼前に大きく展開せられたのは堂々たるチャチャヌブリの雄姿! 一目見た瞬間實に何とも云はれぬ神秘的な崇高な感にまづうたれて終つた。拜する心持ちである。その姿と云ひ色と云ひ誠に一種不可思議の魅力と幽玄な趣をもつた山である。

絶頂をなす三角形の堆積は神秘的な暗赤色を呈して高く中天を突き、之を載せる山姿は一段劃然と段階をつくつ



チャチャヌブリ絶頂より第二噴火口を下瞰す(第一圖)

岡田喜一

て肩をつくり、其兩肩からは外に少しふくらんだ弧を畫いて碧空に雄大な山腹をつくり、異様な暗紫灰色に彩られてゐる。上下二段の二色の色調、其山形！ 繰り返し云ふチャチャヌブリは本邦稀に見る奇異な、神秘的な山である。

加ふるに四邊の景が又よい。此山の外には目をさへぎる小山一つなく、前には濃緑の針葉樹を配し更にその前は廣大な草原——そこには赤黄紫白、色とりどりの花が咲き亂れて高貴な絨氈を敷きつめた様。

一行は山を幾度となく左手に仰ぎながら此草原を横切つて行く。

もう一同今からすつかりうれしくなつてしまひ、遙々此處まで出かけた甲斐があつたと互に喜び合つた。

此臺地上の草原を右へ斜に横切りつくすと森林がある。それから笹原へ（道はつけられてゐる）。

之をぬけると左へ少し曲つて水のない澤を越して行く（大澤とサイノカハラの間こんな空澤が三つある）。間もなくV字状の川底（水はない）へ向つて下る坂に出る。之が今日行かふとする大澤なのだ。坂の上で先づ一休み。見下せば澤は左右に二分してをり、左の支流（本澤と同じ位の大きさに見える）の正面稍々右にチャチャヌブリが其右側山腹を樺の木にかくして見える。双眼鏡で見ると右肩の一寸下に相當大きな腎臓形の残雪があり、その左に淡く岩尾根が下つてゐる。一行は其岩尾根の更に左（之が大澤の源頭に當る）に登らうと云ふのである（山の形は澤へ入つてしまつてからはよほど登つてからでない）と森林、笹藪に妨げられてしまふから見られない）。

こゝで一寸申し添へたいのは大澤の位置に就てであるが、據るべき地圖は全然發賣されてゐないので如何ともいたし方ないが、此大澤の名は勿論、澤そのものも水路部の地圖等には記されてゐない様に考へる。（北大の永井、島村兩氏もさう云つてをられた）。山頂から下瞰すると此大澤はイカバノツノサキとハチマキとの出鼻との中央よりはるかに左（イカバノツノサキ）へ寄つた所に入つてゐる。小生の調べ得た地圖にはどれも入つてゐなかつた。之は今後行かれた方に是非とも詳

しく調べて戴きたい事と思ふ。

大澤口へ向つて急坂を下る。白糠への道は更に前方へ登つて行く様になつてをるが、我々は此處から左へ澤へ入るのである。澤の入口（即ち、道路と澤との交叉點）は此大きな澤のものとも思へぬ程貧弱なものでともすると思ふ。きすぎ勝ちのものである。

澤は一面にネマガリザサと雑草に覆ひかぶされて、ただ中央に幅二尺ばかりに丸い小石がずっと通つてゐて、之をたよりに進むのである。左右よりは人の丈より高いネマガリザサがさしかけ、之を押しわけゝ進むので、顔、頸、所かまはずビシゝたゝかれる。手は手袋で嚴重に保護をする。でも手頸には幾條かの血のにじんだ跡が印され汗がしみてヒリゝゝといたむ。

之より此澤をジグザグにしばらく進む。水は少しもない。やがて右手のオホイタドリ等を折り敷いた露營跡を見る（永井氏一行であらうか）。間もなくネマガリザサに苦しめられることは無くなつてきたのが、今度は單調極まる所となる。山頂が見えるでも四邊の眺めがあるでもなし、たゞ水のない狭い樹林に圍まれた澤を機械的に足を運ぶだけなのだ。此物うしさもやがて行く手に瀧を見つけたことによつて一時一散した。暫く瀧を眺めて心持よい休憩をほしいまゝにして更に前進（十一時頃）。これから上は澤に水も斷續的ながら出てくる。然し水溜りには白い細長いものが沈んでゐるので飲む氣もしない。此白い細長いものは歸京後、檢べたらハリガネムシ (*Gordius* sp.) の一種であつた。

やがて澤は左右にほど等しく分れる。何れが本流——と云ふと大げさだが實は狭い草の多い小道に過ぎない——だかまよつたので、とにかく荷を下して右の方のを試みに行つてみたがどうやら行きつまりさうなので左とする。

（後で聞いたのであるが、佐々木留藏老の云ふに之を右へ行つても行けるさうである。又、此二股で右股へ入つた

ら澤股で左へ〜と選んで行き、左股へ入ったら右へ〜と行けば間違ひなく頂上の臺地に達せられるとのこと。途中心持のよい晝食をさゝやかな清流を前にした草地ですませ、元氣一新して更に前進を續ける。可成り登つて——どうも曖昧な言葉で我ながら感心しないが、目下の此澤ではこれよりどうにも仕方がない。地圖はなし道はなし、空費する時間は多く、目標はなく眺望もない。たゞ藪くぐりと單調な小澤の連続であつて、距離は當にならず、時間も標準とはならずである。又、強ひて記すほど其必要も認めない——から、水のある小澤が左方より合する。一行は尙、右の空澤へと道をとる(歸路は此左澤を下つて來て此處から往路を歸つた)。

登るにつれて此空澤にもそろ〜砂に汚れてはゐるが残雪が所々に見え初めて來て何かしら喜びの胸中を往來するの感ずる。所によつては意外に大きな残雪がある。山の七合目邊へきたと思ふ頃やつと開放された様に一方に展望を稍々ほしいまゝにすることが出來て、今まで黙々として機械的に歩み登つて來た鬱蒼とした樹海を間近く斜視し、その暗緑の廣がり突然一劃を引いて、碧い鏡の様な平坦な海と境するところはイタシベナイ邊の海邊となる。そろ〜「山」らしくなる。ノビネドリ、エジスマラン等の花もちらほら見える。晴天の此暑い山登りに残雪を撫で、來た様なひやかな風が吹き渡つて來る。そしてその心持よさにほつと一息入れながらに運ぶ足どりは舊に倍してまことに現金な程自からはかどる。

やがて目前に行く手を閉すネマガリザサの密生地帯! 荷をよめ直し、拵へを嚴重にして之に突入する。人の丈より高い此中へ入つては眺望はおろか足もとさへ見られない。たゞもう山頂の方向へとピシ〜ザワ〜と體で無理やりに笹を壓し分けて進むばかりである。倒されたり、はね返る笹に顔をピシ〜叩かれる等は毎度のこと。可成り漕いでみたがさつぱりとぎれさうもない。よつて、人夫の一人を此笹の海に點在するエゾタケカンバの巨木に登らせて見當をつけさせる。すると行く手はまだ〜、當分この状態で、右へ尾根へでも出たらいく分丈も低くなり

歩き易からうと云ふので右折して苦心して低い尾根へ登りついでみれば、やはり人丈位の一面の笹の密生地。さっぱり樂にもならず更に面白くない。

木に攀ちて遙かに山頂を望めば、どうやら最初計畫の登路を誤つたらしいことを發見して更に右へ笹を壓しわけでは都合澤を三つ越してから一氣に山頂の方向へと遮二無二笹に突入しては、たゞもがき壓し分けては進む。

途中、エゾハンシヤウヅル、ウチハマンネンズギを見出して採集やらノートやら、忙がしい所がますます忙がしくなる。暫く之を續けてからやつと之がミヤマハンノキの疎林と變る所へ來た。此邊で誰から云ふともなくひとりにて一休みとなる。ふと足もとに氣がつけば點々として一面すばらしくオニクが簇生してゐるのに驚いた。(大きなのは一箇の塊莖から八本の莖を出してゐた。)

ホシガラスが一羽エゾノタケカンバの枝に居る。そしてやがてどこへともなく飛び去つて行つた。

此處まで來る途中で人夫の一人が躓いて胸を強打して苦み、恢復して來るのを待つてゐて約一時間停滯してゐたり、登路を求むるのに無駄な時間を費したりした爲に、豫定の時間などはてんで役に立たず、今はもう午後三時を早くも廻つてゐる。

之から先は大したこともなくたゞミヤマハンノキの林をくどりぬけて右へ斜に行くうち、突然廣い礫地へ出た。

(此途中ヒメコマツ? の點在するを見る。) 此處は頂上臺地から東へ下つてゐる熔岩砂礫地帯の末端に當つてゐて、眼前には遠く高く頂上臺地が立ちふさがつて聳へる。(圓錐狀の絶頂の尖塔は見えない)

四邊を遠く見渡せば此處らは早くも一帯、高山地帯を現出して、イハギキヤウ、エゾツガザクラ、ヤマハ、コ、コマクサ等點在してハヒマツ、ミヤマハンノキの矮樹、僅かながらに緑の彩りを添へてゐる。花から花へと飛來するコヒオドシが多く見られる。

願れば遠く眼下に深く彎入する白糠灣や東ピロクノ湖からアトイヤの岬を指呼の中に眺め更に又、海峡を隔て、はエトロフの山々が眺め得られる。

採集に撮影に思はぬ時は移り過ぎて、一行が山頂めざして此處を出發したのは午後四時半。行く手は左手に頂上へと續く一連の熔岩尾根。(右手にも此砂礫から成る廣い傾斜地を挟んで熔岩尾根がある。右手の尾根の次の澤の上部には山麓から明らかに見られた大残雪を存する。)

登り行く岩脈は登るにつけていよ／＼傾斜を増し、絶え間なく吹き渡る風はそどろに夕べ近きを想はせて淋しさも亦一入である。仰ぎ見る頂上は暗く、かすめ飛ぶ霧は後をついてせはしく、緊張と一抹の不安を抱かせる。足下にみる岩罅にはイハブクロ、イハヒゲの花が彩り飾り、右手の砂礫地帯はたゞ見る一邊驚くべきコマクサの群落。然もそれには珍らしくも純白の花さへ點々として混生してゐて一路の喜びと安けさとをいだかせる。

咲き争ふ百花は今、暮れ行く夕べを迎へて夕風に戦き、登り行く人々は緊張にひとしく聲なくひたすらに登高を續け行く。

眼前に近く頂上と仰いだ岩塊はやうやう登りつめて見れば更にまだ上があり、それから更にこの先きに目標を移して進み行く。すぐ近くと見て登つた頂上臺地も亦案外に遠く、後れた一隊がやうやく頂上臺地に登り着いた時ははや四邊は暗く、先發隊は何處へ行つたやら、何處へ幕營と定まるのやら不安の想ひは無言の中にもひとしく抱かれる。闇に凝視すれば、遠く見てゐたあの例の絶頂をなす尖塔が今はどうやら高く大きくすぐ目前に聳立してゐる。いよ／＼頂上臺地へ來たたと云ふ喜びと張り切つた元氣は流石に壓へ難いものであつた。然し其喜びの空想にふけてゐるのも束の間、今宵の宿泊地の心配に惜げなく拭ひ消されて終ふ(午後七時半頃)。

足もとはどうやら雑草の點綴する硬い平坦な礫地らしい。こゝから尖塔の方向へとたゞ疲労と寒氣に迷入り勝ち

な心に鞭つて臺地を一步／＼踏みしめながら歩む。

空は暗く夕風は蕭々と臺地を吹き渡る。呼ぶ聲は風にさらはれ、耳をすませばたゞ轟々と耳朶を覆ふ風の聲。暫くは不安と熟考の沈黙にたゞづむ。

すると突然、一發の銃聲！ 續いて二發、又、三發。先着のS氏が合圖の銃を撃ちながら迎へに來られたのだ。此處で先發隊の幕營地の方向を知つたので音の方向をたづねながら一途に闇に道を急ぐ。

S氏は更に大澤口の方へと、躡いて胸を打つた人夫を助けに行く。假泊地に集つた一同流石に疲労と空腹とを痛切に感ずる。寒氣は意外に甚しい。風は益々強くなり行くし、水は全くなく焚木にも乏しい。夕飯を炊くことは出來ず、たゞ雪を溶かして紅茶をわかし、ビスケットとバターを夕食に代へる。

寒さと烈風には起され勝ちの一行もいつとはなしに疲労と満腹には引づられて、うつゝの境にしばらくはさまよつてゐた。そしてこの夢も夜の更け行くにつれていつしかに消えて静まり、テントに映るランタンの火影と深霧に濕り重つたテントのはためきとが夜をこめてたゞ安らかに守つてくれたことであらう。

第一噴火口内假泊地——根據地 (七月三十日)

寒さに眼がさめる。ゾク／＼と寒い。考へて見れば馬鹿々々しい。眞夏の候だと云ふのに。午前三時。テントの外はまだうす暗い。案内者と人夫一人、一行の根據地をさがしに出て行く。昨夜折々雨をもたらした空模様は今日もどうやら思はしくない。

間もなく歸つて來てこの少し先き、三角點の峯の下の附近に良い所があつたと報告する、そして天候が悪變したから急いで引越さなければならぬとつけ加へた。

そこで急遽引移りと一決して大急ぎで荷物をまとめては運ぶ。

テントを張り終へて、荷物をかゝへて中へ入ると間もなく、氣味悪い風が一吹き——。つゞいて暗い早い雲の行き來、早くもポツリ／＼とうらめしい雨。人夫達は朝飯の仕度にいそがしい。

不出來の飯に朝食を濟せて、人夫を一人残らず下山させる。六日の後、迎へに來る事を約して——。先づこれで一安心、さあこれからは水入らずの三人で、當分の間のんびりと山の生活を味へるのだ。食料はたつぶり、場所はよし、氣分を害される人夫達は歸したしと——。考へるとうれしく、三人茶菓を前に喜びに話ははづむ。

雨はどうやら案外大したこともなくて濟みさうだが、風は依然すさまじい。今日はテント内の整理、登山準備に休養と、これは全く異議なく解決。先づテントを入念に張り直し、入口の左側に防水布で食器、食料品の置場を作る。外では土を掘り、石を積んで完全な竈を造る。つゞいて焚木を山から切つて來たり、水汲み場を作つたり、あはたゞしい中に日は暮れて、目の前には夕陽に神々しく映へてゐる山嶺の尖塔を仰ぎながら、焚火を圍む物語りは樂みにあふれて、夜更けるまでくつろいだ喜びの時は打ちつゞいた。

一寸此幕營地を簡単に記したい。それは此臺地には此處より外には適當の地はまづない所だから。場所は絶頂の南方、溶岩流の南の末端。後は火口壁で風は當らず、焚木は其處のハヒマツを切り下せばよい。正面には問題の絶頂の尖塔の全形を眺め、左手には大残雪。その融水は丁度目の前に流れて來て自から池を形作つてゐる。右手は坦々として遠くつゞく火口原を見渡されると云ふ理想的な所である。

幕 營 地——絶 頂 (八月一日)

晴。朝暾に明け行く絶頂を目の前にして、焚火を圍んで楽しい朝食。身輕に仕度して先づ火口原内を西側へ廻り

絶頂への登路を發見しやうと緊張と喜びに張り切つてテントを後にする。例の中學生菅名君と炊事係の少年二人は我々のすぐ脇に別に小さなテントを張つてゐる。も一緒に行きたいと躓いてくる。

熔岩流と火口壁内側の狭い接觸線に沿うて進む。大残雪があり、或は左右から狭ばまつた熔岩の門がある。熊の通路は隨所に見られ最近掘り起した穴も點々と認められる。銃を最先きに擬して、岩をめぐり残雪を渡つて進む。イハヒゲ、エゾツガザクラ、イハウメ等の花、互に色映えて岩罅壁面を飾つて美しい。四邊は靜に雪の面は赫々と朝陽にまばゆく輝いてゐる。見上ぐる山巔は命あるものゝ様に目の前に大きく默然としてそびえてゐる。

西側に廻つたとき遙かに山頂を視ると、丁度絶頂から稍々左手に寄つたところに小隆起があり、その鞍都から熔岩流らしいものが所々に現れてゐる所があつた。依つて先づ此岩流に沿うて鞍部へ出てみることに相談一決。尙双眼鏡に視ればそこには點々として白い集團が見える。注視すればシラガゴゲの繁殖してゐるため、これなら先づ地盤も相當しつかり安定してゐるものと思つた。

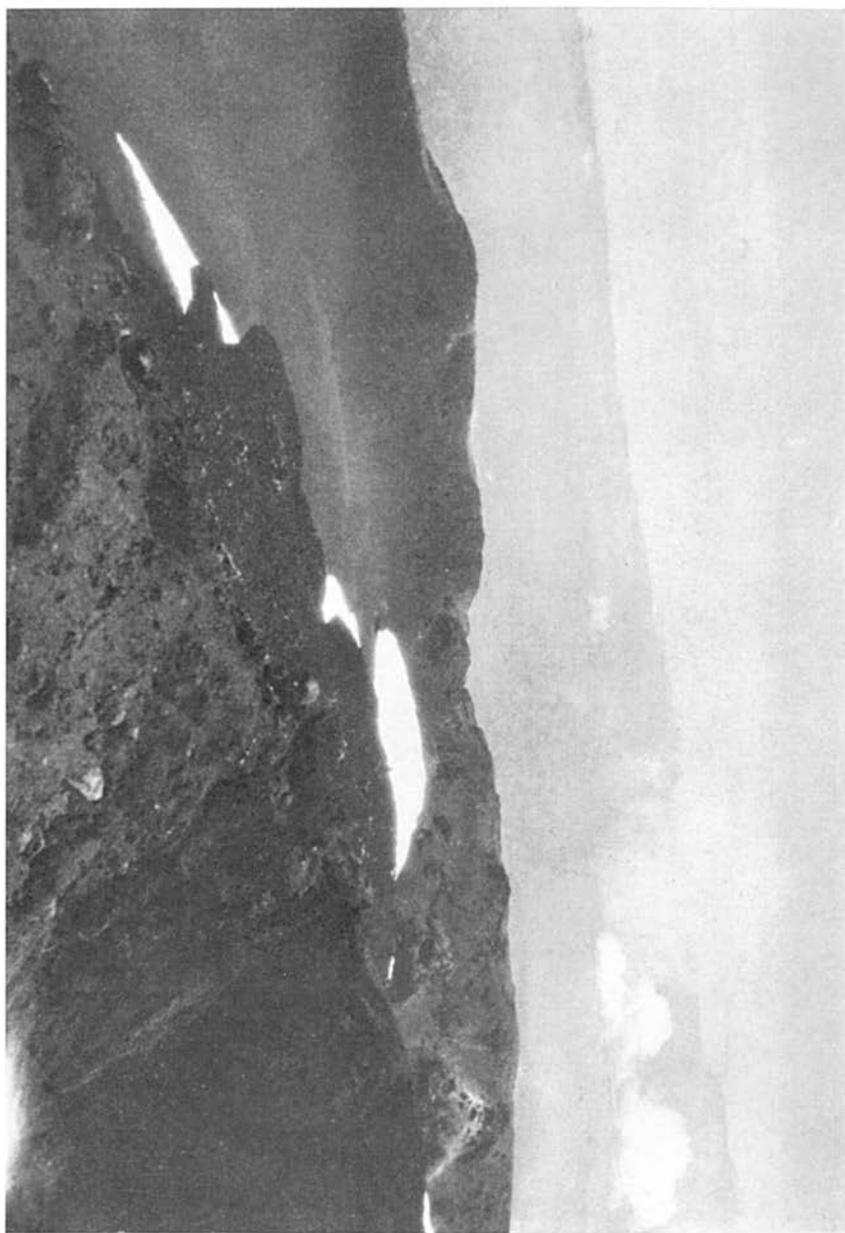
まづその尖塔の右へと目ざして山あり谷ありの熔岩地帯を眞直に登つたり下つたりして進む。途中イハブクロの花が美しく咲き誇つてゐる。岩上には黒ずんだ色の斑猫まじかが澤山歩いて居た。

熔岩流の裾に来て、身仕度をし、岩を攀ち上る。中腹頃から手に觸れる熔岩はどれも不安定でさはるとすぐ轉々と落下する危険があつたので右へ細礫の急坂へと路を轉じた。然し此細礫も踏めばすぐ人と共にすり落ちて行くので始末がわるい。よつて四這ひとなり、手足に平均に體量を分つて、ジグザグに登ることゝした。午前十時四十分、豫想通りに鞍部に到達することが出来た。豫想外に樂な登りであつた。

登りついて見れば頂上には意外にも大きな噴火口があるではないか。一同その思ひがけぬ光景に驚いた。

こゝから絶頂へはたゞ目の前の絶壁の上を右へ沿つて行けさうに思はれたので一まづ安心して小休憩を試みる。

チヤチヤズナツリ絶頂より南方を下瞰す(第二圖)



噴火口を下瞰したり、足下のイハヒゲの大群落を撮したりして暫く樂しむ。いよ／＼絶頂へとめざすことゝなつた。左手は噴火口の絶壁、右は山裾への急坂、熔岩は頗る脆く、ともすれば噴火口へ足もとにふまへる熔岩と共に轉落して行きさう。實際こんな脆い不安の状態にある熔岩壁は僅かの重量でザラ／＼と一氣に崩れはじめないとは限らない。右手の急坂は又一足毎に崩れて行つて一步ごとにすぐ足場をさらひ、足もとに注意を集中しながら緊張の歩を一步／＼と靜かに運ぶ。此時に何たる幸ひ、今までたえず吹いてゐた風はひたと止んでしまひ、珍らしくも全くの無風状態となつてこれが約三十分間も續いて呉れた。

終に幾年か、ひそかに待つてゐた絶頂に到達した。西北方を見れば遠くルルイの尖峯、群峯を従へて座を占め、白雲は切れ飛んで景趣を添へる。東北に當つては二子岩の岩頭現れ、眼下には第一噴火口内の礫原が坦々と砥の如く、空浮び行く雲は靜々と黑影を、引いては過ぎて行く。右方の礫原には熔岩流の末端、波状を畫いて黒く火口原内を覆ひ、その先端に一塊の白斑と見える大残雪と更にその一隅には眞にほんの一點と見える白い我々のテントが――。(第三圖)

更に遠く眼を走せれば、東から南へアトイヤの岬からチノミノチ邊りまで(それから先は霞んではずきりしない。)の海岸線は手にとる様に見渡し得られ、山麓の樹海もすぐ目の下に敷きつめたやう。島を圍む大海原も遙かに遠く續いては模糊の中に空と合する。

附近の撮影に記念撮影に一同時の移るも知らぬ内に一時間餘も絶頂に止つて終つた。

此絶頂と云ふのは前にも述べた様に實に第二噴火口の南微東側の噴火壁の一部が残つたのであつて、今我々の立つてゐる脚下は絶壁を以て噴火口に臨んでゐる。(第二圖)此邊一體は暗赤色の火山滓(屢々玻璃質の空泡の附着してゐるものがあつた)に覆れてゐる。

絶頂についたときは無風になったためか、昆虫が多く(殊に緑色のクサカメが多い)火山滓上に集つてゐたのは珍らしかつた。

尙此尖塔は右の路以外の所から登るには困難であらうと思はれたが下降するのは何でもない。たゞ火山礫の傾斜地をザク／＼降りるだけで、丁度富士山の砂走りと云つた様な所であるから歸路はたゞ脚下に見えるテントをめざして南側を真直ぐに下り降つて行くだけのことである。

途中は案に違はず誠に容易なものであつて、一行の中、早いものは十分間で下つたさうであつた。小生は途中火山弾を拾つたり(大小種々の火山弾がある。完全な紡錘形を保つてゐるものも少くない)雄大な展望に見とれたりしてゆつくり下つたため十五分間を費した。

尖塔を下つてからテントに向ふ道すがら、此臺地の西側から南側へかけて押出した熔岩の南側の波状に出入する末端に沿うて歸つて行つた。途中別段之ぞと云ふ面白いこともなかつたが、イハウメが少しあり(此山では多く見ない)、エツツガザクラ、アヲノツガザクラ、ミネズハウ等美しく咲き亂れてゐた。此邊りには残雪が多く、此花と雪と黒い熔岩との妙なる色彩の取り合せは、折からの風の無い暖かい山頂を彷徨ふ者に心行くばかりの喜悅を味はせるものであつた。

テントに着いては流石に重荷を下した様な喜びに一行の顔は心よいほゝ笑みに浸つて、焚火にあたり、茶を味ひながら目前に肅然と聳える山嶺を仰ぎ見て何かしらうれしい境を心行くばかりに味ひ暮した。

火口原一周 (八月二日)

(火口原内の植物分布生育状態に就ては後項参照)

テントのはためきがせはしい。仰ぎ見る絶頂の尖塔、屹然として黙立し、氣味悪い暗雲が頂をかすめて絶え間なく後をついで流れ行く。暴風の前兆歴然と感ぜられる。

十時頃まで天候を案じながら、テント内に引込んでゐたが、風も稍々静まつてどうやら恢復に向ひさうな氣配が見え初めたのでとにかく出發と決定。

先づ東側から火口原内を廻つて見ることにする。幕營地と大澤の源頭との間は三十日の日に來た所、一體平坦な熔岩砂礫地（所々極くゆるく低い小隆起が一二ある）——それも固くたゞかれた様な、丁度道に砂利を敷いて其上をローラーで地ならしをした様な所である。

ミネズハウの紅花と丈低いイハキスゲが點々と見られる位、たゞ見渡す限り廣々とした平地である。

進み行く左手は此平地のはるか向ふに大きく例の絶頂の尖塔、右手は平地を前にして一連の火口壁。この火口壁も大澤のつめを過ぎる頃から次第に陵夷して二子岩の對岸では全く無くなつてしまつてゐる。

一行が此二子岩の對岸近くに來た時は此火口壁との關係もあつたらうが、見る／＼うちに烈風が次第に吹き募つて來て、直立して居ることも出來ない位、風上に向つて腰をかゞめ、よろめきながら一途に二子岩の對岸へ行く。

一行は二子岩に登る豫定で此處まで來たが強風はいよ／＼はげしくなり、岩へと續く鞍部へ若し下つて行つたら恐らく吹き飛ばされてしまひさうに想はれたので、此寄り道は殘念ながら斷念して遠くから心行くまでに眺め、風をさけながら苦心して二三枚の撮影をした。腰を下して憩ふ一行の足下にふと視れば此附近一帯は點々として色美しいコマクサの花！ 吹き渡る烈風に戦き靡く其愛らしさ——。此火口原の周縁に沿うて少し行つたところにシラタマノキが矮生の柳（ミヤマヤナギと思つたが花がなかつた。）と混生してをる。折から澄んだ調べ高い妙なる鳥の鳴き音を聞いた。一行の一人、早速に裝彈、風に吹き消され勝ちの聲をたよりに近づく。轟然たる銃聲の烈風に持ち去ら

れた後には一羽の濼く美しい小鳥が一つ。ピンズイの雄であった。

此處から又、左へ火口原内に戻る。平坦な火口原も此邊は雨に洗ひ去られて浅い細い溝地が數條出來てゐる所がある。中央尖塔は此處(北側)から仰ぐと山頂は尖つてゐる。

更に西へ廻れば草木は一層貧弱になり(第一火口原内では北徼西方が最も植物に乏しい)、見渡す行く手は坦々とした廣い礫原で、山の上に居るとは思へない所。

火口壁もこの邊から先きは再び現れて來る。やがて丁度西側へ來たと思はれる頃、此火口壁近くの火口礫原地に四邊一面に黄金の花の花盛り。その美しさと突然のことに一樣に皆から先づ感歎のさげび。視れば意外にも(千鳥からは未知と思ふ。)メアカンキンバイの大群落であつた。折から強風も止んで、ことに此處は風當りの少いところとて、すつかり再びのんびりした心持に返つて遠近色々の撮影やら採集やらに時を過す。例のピンズイも數羽のどかに囀つてゐた。

中央尖塔は此處からは頂上が尖らず先端が截つた様に平らに見える。

更に火口原内を進むと今度は淡紫色のお花晶。イハギキヤウの美しい群落である。

之から先きは流石の平坦な火口原も變化を現し、小さな段階をなしてゐる所も一二あり、更に先きは全然凸凹はげしい熔岩流の押出したあとで、今まで來た礫原地帯と劃然と分たれる。そして此境の所には大きな熔岩の溝といふより谷と云つた方がよい噴火口を横切る一連の細長い凹地で仕切られてゐる。

四邊の風物も従つてがらりと一變してたゞ見る稜々とした熔岩の堆積ばかり。そしてそこには淡紫色のイハブクロ(タルマイサウ)と白いシモフリゴゲに美しく點々と飾られ、所々の凹地にはエゾツガザクラ、アヲノツガザクラ等が見られる。

一行は途中一ヶ所此邊として相當廣い凹地に遭つた。此處は僅少のハヒマツを配置しその側、淡紅色のツガザクラの一種(アヲノツガザクラとエゾツガザクラの雜種と思はれる點が多い)、濃紅色のエゾツガザクラ、アヲノツガザクラ、エゾミヤマナギ、純白色のエゾツガザクラ等一面に咲き亂れて靜かな樂園を造つてゐた。一行は心から喜び、撮影に採集に時の經つのも忘れる位。一行の或者はあまり夢中になつて大切の寫眞の三脚まで置いて來てしまつた。

あちらこちらと氣のむくまゝ足の進むまゝに歩き廻つてゐるうちに陽はいつしか夕べに近い頼りない淋しい色を帯びて、淡霧の行き來も何となく忙しげになつて來た。

ふと右手を見やれば一團の暗雲！ 此方を目ざしてやつてくる。天候險惡！ と今までの吞氣に引きかへて急遽荷物をまとめ、雨具を用意する。凸凹はげしい溶岩地帯の歩行ははかどらぬことおびたゞしい。熔岩と云つても此邊のは大きなもので、凸所とても見上ぐる岩塊の連りあり、凹所とても殘雪を置いて、見下す様な大きな谷をなしてゐる所もある。此凹凸の地帯を絶頂の尖塔を左手に見て越えて行くうちに先刻の雨雲、果してやうやく頭上に現れて來て、ぼつり／＼と降りはじめぬ。

すると今まで去來してゐた霧も次第に濃くなり目標の尖塔はおろか、いつしか四邊一帯に濃霧に包まれてしまひ三四間位の所までしかぼんやり見えぬ位となつてしまつた。雨もいよ／＼腰を据えて降り募り行く――。

さてこうなると大いに緊張し慎重にかまへなければならなくなつてきた。晴れてゐてさへ歩き難い凸凹はげしい熔岩地帯を雨にぬれ、低下した寒さの中に一切の目標を奪はれた濃霧の中に初めて土地に進路を求めて行くことは毎度のことながら困難である。まして地圖と云ふものゝ一切ない此山では現在の位置も方向も總て知ることには來ない。たゞ今居る火口原内から西南へ進めばいつかは火口壁に出で之について南へたどれば歸れると云ふ當てもとに西南の方向へと一途に歩いて行いたが暫くして氣がついて見るとどうやら見覚えのある異様な大岩壁にやつ

て来た。近づいて見れば先刻すで行き過ぎてしまつた筈の所である。即ち眞直ぐ歩いてゐる積りでゐたのがいつしか大きく一周りしてゐたのであつた。さていよ／＼こうなつてみれば方向の見當などは全然狂つてしまつた。たゞ濃霧の中に、未知の大熔岩地帯の中にボツンと置かれただけなのだ。霧は益々濃くなるばかり雨はいよ／＼腰を据えて降りつゞいて来る。日没はせまる。氣がもめてならない。行く手には何だか大きな困難が待つてゐる様な氣もする。一同流石に黙然としてしまふ。然し一行は誰もすつかり落ち着いて、さて少し事が面倒になつて来たわいと云ふわけで先づゆつくり雨中に相談をする。で、結局磁石を先頭に兎に角西南へと眞直に進んで火口壁へ出やうと云ふことゝなりH氏を先頭に一列縦隊を作つてひたすらに進む。

雨にぬれ濃霧に視界を奪はれた頼りなく味氣ない途——。でも岩鱗、岩上にしよんぼりと置き忘れたかの様に雨にうなだれて啖くイハブクロとエゾツガザクラに一路の喜びとなぐさみを覺えて暫くの間はたゞ／＼黙々と熔岩をふみ越え進んで行く。そして一行は果して火口壁の下に出る事を得た。

之から火口壁と熔岩流との接觸點のV字凹地を辿つて一路根據地へ急ぐ。此頃から雨もやうやくに止み、霧も次第に晴れて、テントに近くなつた頃はすつかり晴れあがつて雨後の入陽の空の色、一きはに明るく、聳え立つ尖塔は何とも云へぬ幻想的な印象的な色に輝き渡つた。そして寂寥と永劫の扉に跪づいてゐる氣に打たれた。

又、道すがらに見たウコンウツギの雨にさやかな淡黄の花、しとどの露に重たげなエゾツ、ジの紅花等今に忘れぬ優れた風情であつた。

歸りをいそぐ此道の所々には残雪が大きく残つてゐて、これに沿うて細々とした小道が——。はて！ 何人の？ 此疑はしばらくして所々に大きく、生々しく土を掘り起された穴によつて、此山を我物顔に横行する羆の所爲と知られた。

テントに戻つた時は晴れ渡つた雨後の静けさは一きはに著るく、四邊はすっかり夕べの化粧して、仰ぐ山頂は入陽にほかに輝き、淡雲ゆるやかに頂にまつはつて、風一つない此静かな夕べは我々には又たく祝福されたものであつた。夕餉の焚火が勢よく夕闇にパチ／＼と燃えさかる頃、明暮に舌鼓を打つ荒磯汁と我々が名づけた昆布と海苔と鱈と菜を煮合せたお汁は鍋一ぱいに湧き滾つて心よい音をたてゝゐた。夕餉の後は例によつて焚火を圍んで心置きな話のはづむ。静かな此日の星の夜、北海の孤島の山の頂にしみ／＼と味ひ聴いた且氏のあの寂びた聲の歌澤の幾語り、ひそみ静まつた山嶺に木靈こたまして、久し振りでしんみりした心持に歸つて、黙しつゝ思ひつゝ夜を更した。

根據地附近 (八月三日)

昨夜のこと、夜更けて、めつたに目ざめたことのないのに突然目がさめた。何となく異様の空氣がたゞよつてゐるのを感じる。と、見れば同じく且氏も目ざめてゐる。互に顔を見合せて静かに耳をすませばテントの外に何やら近づいてゐる模様！ さてはとばかりに兎に角、用意だけはと二挺の銃に實弾を裝填して待つてゐた。然し不可解な息吹きもそれきりではばらく待つたが後を絶つた。定めし罫がテント外の味噌でも舐めに (罫は味噌を非常に好むさうである。) 來たのであらう。

明方近くになつて雨になつた。朝になつても依然止まない。まゝ雨なら今日一日標品の整理に閉ぢ籠つてゐてもよいと腰を据ゑてゐると十一時頃になつて次第に晴れて行き、終には陽の目も折々見られる様になつた。よつて晝食後附近を出來得る限り觀察をしておかうとてテントを後に先づ後の火口壁上に登り撮影(折込圖版参照)やら採集をして更に越えて外壁の砂礫地を少し下る。(此處は無名の澤の源頭に當つて居り左右兩縁は密生せるハヒマツに覆はる。) シラタマノキ、イハギキヤウ、ハクサンニンジン(チシマニンジン)、イハオトギリ、エゾツガザクラ等點

在してをるが特に記すべきものもない。たゞタカネヒカゲノカヅラが僅かにあるのを見て悦んだ位。(之は火口内壁西南方の一局部にも僅少なからある。(目録参照))。

此處から南へ火口壁上を其内外を注意しながら三角點へとたどる。然し途中大したものもなく、ただ内壁の一部にコマクサの聚落を見出し得たのは喜びであつた。それから更に引返して西へ火口壁上を行く。

此邊は植物も概して貧弱でイハギキヤウ、イハブクロ等が礫地に散在してゐる位。然し此尾根傳ひがハヒマツの密生地域に妨げられて右へ噴火口原内へ下らざるを得ない様になつた少し手前の尾根上で僅少なからヘビノシタ、ミヤマクハガタ (*V. Stelleri* - *Pall*) 等此山に来て今まで見なかつたものを見出し得たのは喜ばしい事であつた。此尾根の上を可成り西へ廻つた地點で突然目前の岩上を鼠の様に早く越えて行く動物が飛び出した。銃を肩にして歩いてゐたH氏が間髪を入れず獵銃を取り直したと見ると同時に鳴つた銃聲——。手にとつて見ればシマリスであつた。このものは別段珍らしいと云ふ程のものではないがこんな殆んど食物のない高處に棲んでゐるのは面白い事と思つた(之は根據地後ろの火口内壁にもゐた)。

此日は之から火口内壁を下つて熔岩流との觸接點即ちほど前日通過した地を通つて西へ進み、前日歸路をいそいで觀察し得なかつた各方面を調べたり撮影したりしながら歩く。然し生憎天候やうやく險惡を想せる様な風行きとなる。濃いガス(霧)がどん／＼やつてきたので終に西側の火口壁が全く陵夷してゐる地點まで探つて根據地へ引返した。此區間は既に前日通過した地點であつたので加はり行く濃霧に心せきながらも流石に一路の安心を懐く事を得て相當丁寧に調べながら根據地まで戻ることを得た。途中種々興味ある事實にしば／＼逢着して一方ならず喜んであつたが此處に一々記すのも本意でないので省略することとする。(植物に就ての概略は別稿一一〇頁参照。) エゾコザクラ(僅かに一本)、マルバノミヤマダイコンサウ(十數本づゝよりなる株四つ見たのみ)等を此山に産すること



西側より熔岩地帯をへだてゝのチヤチヤヌアリ頂上(第三圖)

を見出し得た喜びも其一部である。

今夜はいよ／＼山を下る最後の夜。山に着いてからの歡喜と感激の六日間の明け暮れは過ぎて、頼れば洵に夢の樂園であつた。焚火を圍んでは語り、歌つて喜んで知らず／＼に夜は更けた。

幕營地——大澤——サイノカハラ（八月五日）

暗雲の流れせはしい曇り日、風淋しい今朝はさながら初秋を想はせる。天候惡變の徴が見える。朝食を心よく済ませて歸りの荷造りに取かゝらうとした時、約を履んで人夫が三人迎へに登つて來た。先頭はサイノカハラの鐵砲打ちの爺さんである。五人來る筈であつたのにと聞けば昆布取りに忙がしいのと山に來る辛さで皆逃げてしまひ、止むなく此爺さんが代つて先頭に立つてやつてきたとのこと。さてかうなると一人當りの荷は相當になる。どつしりと肩にこたへる荷は重いながらも又心持よい。

出發は午前八時。幕營の跡を掃いて片づけて名残をしい心持を残して一路大澤へと火口原を横切る。澤へ下る入口で絶頂を背景として記念撮影をして一息入れ、結束して一氣に砂礫の澤を灌木林まで下り降りる。

丁度富士の砂走り路の様、ザク／＼と一步毎にザレ下るのは歩きよい様で歩き難い。砂礫地を下り切つた所で、撮影やら採集やらに小一時間停滞してしまふ。此處は此上なくのんびりした處でコヒオドシやウラギンヘウモン等の蝶がのどかに遊飛してをり花はイハギキヤウ、コマクサ、アイヌタチツボスミレ、エゾツガザクラ、ヤマハ、コと色とり／＼に娟美を競うて此世のものとも想はれない樂園を現出してゐる。

之から先きは往きに此處へ出た所よりも右の方即ちもつと南寄り、大澤の右岸に近い所を下つた。之は案内の佐々木老の意見で此方が下り易いと云つたためである。全く實際此の方がよかつた。ネマガリ笹を壓しわけて行く努

力だけでも遙に僅少であつた。

下る途中は往路とさして異なる所はない。ハヒマツ林をこぎぬけ、ミヤマハンノキの林をくどる。マヒヅルサウ、オホアマドコロ、ハナヒリノキ等が下草に生ずる。

之から體を没するばかりにのびたネマガリ笹の密生地帯に突入する。壓し倒され^ふ腕き踰^よぎ、心は急きながら路は阻まれて、はかどらぬこと又夥しい。

此關門をコギぬけてしまふとあとは往路よりもはるかに樂な所、残雪を渡り、オホイタドリ^の急坂を横きり、瀧の岩壁を攀ち下り變化と眺望は相當に求められ、大して骨の折れる箇所もない。

正午、往路に合した所にて晝食。此處は水のある小溪の二又した處、往きには右へ行つたのである。之から先きは全く往路を戻つたのであつて、さして記す程のこともない。カラフトマイマイが澤山澤に落ちてゐたり、ダニが夥しく體にたかつてしまつたりした位。比較的單調だったためか大澤の入口即ち路に出るまで飽きくする程長いものであつた。時に午後三時。右手に坂を上つて臺地上に出で、海邊を遠く眺め、濃霧に山頂をとざす山を仰いで人氣ない小路をたどつてサイノカハラ^の爺さんの家^のついたのは五時頃。背負つた荷物は五貫四百匁丁度と秤られた。

願れば山の方は全く暗く頂は濃霧に消えてゐる。恐らく雨に荒れてゐることであらう。

夜は爐邊にトマの肉やマス等の馳走をうけ、ストゥブを圍んで島の傳へ、熊の物語、獵の奇談に珍らしく面白く夜を更して聞き入つた。

朝は心持よく寝すごして八時に目覺める。家の傍の小川に洗面に行く。洗ふ手先きは切られる様に冷く感覺を失ふ。時は八月の初め眞夏だと云ふのに――。

こんな小川にもイハナが澤山泳いでゐる。笹で一すくひすると四五尾は入ってくる。海を見ればアザラシが二つ三つ、あのとぼけた顔を出して眺めてゐる。淡霧に淡る臺地の樹木も未だ深い静かな眠りから醒めない。思へば流石に千島である。見るもの耳に入るものすべて新らしく珍らしく異郷の趣はまことにひた／＼と身にせまる。

今日の行程は僅かにチノミノチまで行けばよいことゝてゆつくり身仕度して出掛けたのが十時頃。爺さん婆さんに名残をしげに見送られて、サイノカハラの磯を傳ひ、ハチマキの出鼻をまはる。

オカツプに來た時、丁度盛んに鱒の網を上げてゐるのに出合ふ。潑刺たる二尺前後のものが磯に投げ上げられ磯の面を覆ふクナシリワカメの上を這つては磯の凹みに手際よく集る。我々三人物珍らし氣に見てゐた爲か此漁夫から沖に出て網を上げるのを見ないかと親切にすゝめられる。又とない好機と乘せて貰つて網を引き上げるのを見學する。次第に手繰よせられた網を引き絞つて掛聲勇ましく船にあげられた累々たる鱒の山！ ヒタ／＼と勢よく飛び撥ねてゐる音、四邊に飛び散り行く鱗の光、眞に壯觀なものである。

オカツプを過ぎて間もなく、朝來の霧多い天候は折々村雨をとまなひ、氣をもませる事一通りでない。

寫真機をしまひ雨具に身をかためて一行はひたすらに道を急ぐ。でも暗れ間を見ては海邊に群れるシノリガモを獵したり、點々と屯するキアシシギを撃つたり、單調の此渚傳ひも面白く歩むことを得た。海岸に打上げられた海藻は此邊一帶單調で、カタハベニヒバ、クナシリワカメ、オキツバラ、ベニフクロノリ、カシハバコノハノリ等が人目を引く。

チノミノチの旅館に戻り着いたのは午後三時頃。早速便りを書いたり、訪問をしたり相當忙がしい中に荷造りを

して船を待つ。然し夜に入つてもくる筈の船は終に着かず明日を待つことゝなつて終つた。

チノミノチ——オダイバケ——セ、キ (八月七日)

夜は明けて小雨。シト／＼と頼りなく降る。

當てにしてゐる船は終に此處には寄らないとの入電。そしてこゝから一里餘り先きのオダイバケに入つてゐるとの事。依つてオダイバケまで行つて乗船と急遽一決して出發となる。荷は二頭の馬に振り分けて往路をオダイバケへと急ぐ。

雨は幸ひ上つてゐたが、依然どんよりした曇りである。

オンネベツの橋を渡りシロクタブツやオダイバケ鼻を過ぎてオダイバケの部落に入る。

來て見れば意外、船は早朝に出帆してセ、キに停つてゐるとの事。之から又、セ、キまで船を追つて行つても乗れるかどうか疑問であつたが、さりとして又、チノミノチまで引き返すのも氣が進まずと一同相談の結果、とにかく前進と一決し又々往路に飽き／＼した長く單調な砂濱を辿ることゝなつた。

案の條、やつぱり濱は此上なくつまらないものであつた。

セオイ川を越えるあたりですでにすつかり飽きてしまふ。だが濱に打上げられた海藻類は往きと異つて比較的面白いのが見られてせめてもの退屈しのぎであつた。エゾナメシ、オキツバラ、トサカモドキ屬の一種 (*C. rhynchoxypa* Rupr.)、カシハバコノハノリ等多く散見した。又、クラオイ近くなつて此旅行では初めてだつたケウルシグサとか、ウルシグサ屬の一種 (*D. herbaea* (Turn.) Lam.)、ナガマツモ、ゴブノ (*Gobio simplex* (Saund.) Setch. and Gard. 等と云々珍らしきものを得た。

クラオイからセ、キへの道はこゝで二分する。眞直に海岸沿ひに山越えをする舊道と稱するのと右へクラオイ川に沿つて溯りデントマリ山の右をめぐる新道とである。前者は距離近いが土地の者の云ふには歩き難い（我々にはむしろ此方が歩き易い。土地のものは馬を標準としてのことである。）然し眺望は比較にならぬ程、優れてゐる。後者は之に反して單調な徒らに長くつまらない所である。一行は往きに新道を行くことを薦められたので今度は舊道を通つてみることにした。

道邊に美しく咲きつゞくアヤマの野生を眺めながら登り行く左右の笹山はサルオガセの長く下つた針葉樹の老木を點在して美しく、願れば人氣ない渚には波白く碎けて遠く遙かに打續き、果は霧に消え淡れて北海の濱の淋しさをひし／＼と懐かせる。

此時を越えて又峠。これを越えて又一つと幾度か峠を越えて道はめぐる。或は海邊を離れて晝なほほの暗い針葉樹林中の小道をたどり、又は赤土のぬかるみ道や礫石の坂道や草原等を過ぎ、又折々には忽然として海岸に巨岩聳立する奇嶺が現れて、變化の面白さ眺望の雄大さ美しさは眞に得難い優れたものであつた。生憎霧は折々雨を呼び撮影は出來ず時間にはせまられて心惜しくも急ぎ過ぎなければならなかつたのは此上なく残念なことであつた。今後もし此の近くまで來る事もあつたら再びゆつくり歩いて見たいと思はれる所であつた。

又、此半島の一寸沖に荒島と呼ばれる小島があつてウミガラスやエトピリカ等の繁殖地であるさうであつたが天候の不良と時間の都合上之も亦割愛しなければならなくなつてこれ又心残りの一つであつた。

此山道がつきた所は濱に下つて、しばらくして河に行き當る。ルヤベツ河である。

往路はこの河の右岸を行つたので之から先の濱は見覚えのある所。人の顔や獸の顔に見えるいくつかの大きな岩が濱に出張つてゐる間に漁夫の家が點々と續いて見える。

渚に海藻を拾ひながらひたすらに道をいそぐ。突然汀に一羽のウミガラスがうづくまつてゐた。打上げられた死骸かと思つて視ればどうやらさうでもないらしく、すばやく手をのばして捕へれば案の條元氣で喰ひ付きかねない勢ひである。人氣ない千鳥の濱では鳥も至極呑氣で夕方には濱邊に寝にやつてくるのでもあらうか。都育ちにせよこましくなつた者には又意外な感じのした拾ひ物であつた。

いよ／＼セ、キの部落の中心——と云ふと都會の者は人家櫛比する所とすぐ思ふがまだ／＼とてもそんなには開けてゐない。人家が五六軒。目ざすはその中でも大きな此附近では珍らしいラヂオを持つてゐる唯一の家。そこに荷をといたのはすでに夕ぐれ。このすぐ向ふがセ、キの温泉——といつても極く／＼簡約なものだが——があるらしふ。

早速に聞けば此處まで後を追つて探した發動機船は幸ひまだ此處に停つてゐるとの事で先づ／＼と、心持よく燃える爐邊に夕食をとつて寝につく。

セ、キ——根室（八月八日）

早朝小雨そぼ降る中を舢に乗り更に本船と云ふと大きさうだが僅か二十噸ばかりの發動機船に移つて、魚と油の臭氣満充した空き間に閉ぢ込められる。一路根室へと舢をむける。

夜中は少し時化て心持悪く、船の動搖に加へて發動機の震動と、魚と油の異臭に苦しみ通さねばならなかつた。再び訪ねて見たい此淋しく平和な島も此船の苦しみを思ひ出すと、はやる心も流石にひるんでくる。

然し兎に角、此島は良い。そしてチャチャヌブリの山は限りなく尊くすばらしい印象を残した。島も山も人も草木も木も總ては我々の期待を満して、喜びと慰めの深い思ひ出を刻んでくれた。

不愉快な船も明近くに平穩となつて、朝、根室の港に入る頃は雨もすつかり止んでしまつた。七時頃に上陸。早速以前の宿に戻り、訪問やら、たよりやらにあはたどしく一日はすぎる。久々で心持よい風呂に入りくつろいだ氣持で向つた夕食は又流石にすて難いものであつた。

根 室——上 川 (八月九日)

一行の中、H氏は此處から釧路に向はれ、S君と小生は更に大雪山に登るべく上川驛へと向つた。そして又々のんびりした山の旅を此山に數日送ることを得て札幌に戻り、一息入れて一ヶ月振りで歸京したのであるが之はこゝには省略することとする。

頂上附近に於ける二三の觀察に就て

頂上附近の模様就てこゝに二三、門外漢の貧弱な觀察ではあるが旅行記の一部として少し書き記してをくのも今後研究家にとつてあながち徒事ではない事と思ふ。然し何分據るべき地圖の全然ない地域(頂上附近三角點一個の高度すら極秘に屬することと云はれてゐて知るを得ない位)ではあり短時日の間の瞥見のことであるから今後の訂正は免がれないが、從來、小生の知る限りでは此處を取扱つた範圍のものは無記録に近かつたと思はれるので、多少の御参考ともなり、何かしら闡明し得ることもあらばと思つて敢て記すこととしたのである。

A 地形的觀察の二三

本岳の頂上の第一噴火口は(勿論實地測量したのではないが)東西約二・五籽、南北約二・六籽、最大直徑二・七籽(東

○チャチャヌブリへの旅 岡田

壘

○チャチチヌブリへの旅 岡田

英

北——西南間)と云ふほど圓形をなしてをり、この中央部に東西約一・四籽、南北約一・六籽、高さ約二〇〇米の第二次噴火に依つて生じたる圓錐形の尖塔 (Central cone) を置く。

然して此尖塔の頂上、即ち本岳の絶頂は海拔一八四五米(水路部の地圖に據る)と測られ、今回の登山の以前には手をつくして小生の調べ得た所では之は單なる熔岩の堆積である様に想はれてゐる様であつたが事實は立派な噴火口即ち第二回目の噴火口——大きさは東西〇・四籽、南北〇・五五籽位と思ふ——を有してをり、最高點は實に此噴火壁の南微東の一部なのである。此最高地點の直下の噴火口内壁は斷崖をなして、噴火口にのぞみ西方は稍々傾斜緩である。

此第二回目の噴火による堆積に就て意外であり興味ある事は此生成時代である。此絶頂附近は一體に赤褐色の脆い火山滓 (scoria) で覆れ、屢々之に濃いオリブ色の玻璃質の球形の泡を伴つてをる。此スコリアの數個を標品として採集して來て歸京後、東大地質教室の辻村太郎先生の御鑑定に與つたところ左の様な御教へに與り非常に興味ある事と思つたのである。

(前略) あの噴出物は明らかに玄武岩質岩石の火山岩滓 (scoria) にて、あの形狀より見れば噴出時期も非常に新しきものならんと考へ候

百年以内にてはなきかとも愚考仕候

此の噴出物に全く類似せるものは伊豆三宅島の明治七年七月三日噴火口の中(中腹にあり、熔岩を流す)にて多數採集せることあり、スコリアは同じく酸化し赤色となり(此れは長く高温状態にありし爲)且つ同様に瓦斯のふき出たる泡(硝子の球は熔岩が急に冷却せる爲に黒色を呈す)を伴ひ居り候。(下略)。

(昭和四年十月五日附、書信)。

此尖塔堆積の西南側の中腹には（他の側も同様かも知れないが、此處は調べ得られなかつた）大小の火山彈が地表に多く現れてゐる所があつた。

此圓錐狀の堆積を覆ふ熔岩滓は西側の一部を除く外は細かく、覆度厚く、従つて從來どの側からも登り得なかつたものと思はれる。たゞ此西側一部に熔岩の一部が僅かながら露出し熔岩滓の覆度薄く、地盤も比較的しつかりしてゐる。

第一噴火口の内部——環狀湖と信ぜられてゐた所——は實地に回周踏査して見るに目下の現状は之を二つに大別することが出来ると思ふ。即ち熔岩地帯と礫原地帯とである。前者は西から南へと其環狀の四分の一の面積を占め他は後者の占むる所である。前者は凸凹甚だしい状態を示して（残雪のある大きな谷合ひの様になつた所もあり、此谷は絶項に向つて大體放射狀をなしてゐる）、第一噴火口を埋め西部以南は火口壁内面と接しV字狀の溝をつつて之と顯著な境を劃する。其南方の限界即ち、末流は波狀を呈し（流出して來た末端）西方の限界は略々直線的の熔岩谿谷をなして礫原地帯と劃せられる。

礫原地帯は略々平坦であつて、たゞ僅かの緩い起伏を有する所がある（例へば南方火口壁三角點の東北に數個、山頂の東北、二子岩に對する所と大澤源頭との間、西北部の一部等）。此平坦部は細かい熔岩の礫原で堅く叩き固めた様に——ローラーでも地均しをした様に——なつてゐる。（東北部と西北の一部に雨水に洗ひ去られて火口原を横切る方向に僅かに溝狀凸凹をなしてゐる所がある）。

第一噴火口の火口壁は概して残つてゐる所（他の低い所は火口を埋めた熔岩及び上層の熔岩礫の溢れに依つて被覆せられた様に思ふ）が多い。概括的に云へば南方から西南に高く、東北部及び西方の一部は缺除してゐる。

依て右を以て見れば此の第二噴火口よりの噴火は西南方に向つて熔岩流を噴出し、第一噴火口内は此時の礫岩に

よつて埋められ、峨々として立つた火口壁も此時の細礫の灰の衣を着て、なだらかな起伏となつたことがよく分るのである。

又、以上の地形的の模様を考察してみると此第一噴火口内が環状湖として存在してゐたと云はれ來つたことは明らかで肯定し得られないものであると云ふ事は略々間違ないとして認め得られ様かと思ふ。(尙、積雪の融解期に一時的小溜水地點が點在することはあらうが。)従つて此環状湖の水が西に流れてウケシルベとなると云ふ記述は俄に肯定することは出来ぬものと思ふ。

B 植物分布状態に就ての二三 (稿末植物目録参照)

此頂上附近の植物分布状態に就て、觀察の結果の主なる點二三の中から一つ其最初に其特性に就て摘要を述べると、本岳の山頂附近にあつては所生の植物は種類は少く量に多く、西側第一噴火口壁の内外最も種類に富み(別稿の採集品目録の大部分は此處に見られる)、之に反して他の礫原地は著しく貧弱である。各々 association を作つて、概して未だ混交の状態に達してゐず、乾性中性の植物群落(點在的の)をなしてゐる所が多い。

之等の原因に就ては種々論じ得られ様と思ふが、こゝには以下二三愚考を記して御参考に供したいと思ふ。

目下の此地域の植物分布状態が此様な状態の許にあるのは一は此山の生成年代が新しい事に歸因するものと考へられ、従つて生育地は未だ充分安定ならず、沃土の成生充分ならず、又山容單一にて變化に乏しきため、種々の種類に適する生育地的變化を得ず、更に又、本岳の成因上、湧出、流水、濕地等の地域なく(降雨、積雪の溶融等の一時的供給はあるが)、加ふるに本岳の附近に品種の供給を受くべき山岳に乏しい事等にある様に思ふ。

然して此西側が品種に富んでゐるのは、之に對峙して聳立する生成年代のはるかに舊いと考へられるルイを北

の盟主とする一連の連峯が並び、品種の移入を見るとすれば先づ此側が最初であり（他の三方は直接海面よりの強風に妨げられる事も多い。）又、此側の地形は此山としては可成り變化に富み、窪地、小谷等もあり残雪を貯へ、風を防ぎ生育上の利便少なからざるに歸因するものと考へられる。

此山の山頂附近の植物に就いて奇異な感を覺えるのは本邦の高山で普通に散見するもので或は此處に有りさうな品種、例へばコケモ、ガンカウラン、シヤクナギの類、シコタンサウ、シコタンハコベ、イハツメクサ、オヤマノエンドウ、ホソバオンタデ、ウラシマツ、ジ、クロマメノキ、イソツ、ジヤ、龍膽科のものなどが全然見當らなかつたことであつて、之等も今後を待つ興味ある問題の一つであると思ふ。

次に別出の略圖に従つて少しく火口原内のものについて順次述べてみたいと考へる。

先づ南側から行く。北側の火口壁の内側にはハヒマツがある（火口壁の他の内側は勿論、この火口壁に取圍まれてゐる中には西側の極く一部の特殊地帯をのぞいては他に何處にもない。）が未だ浸入して間もない——と云つても十年や十五年ではないが——もので、最も興味ある事は火口壁を外側から乗り越してきてから、内壁に沿つて次第々々に三角點（火口壁の）直下の内側をめざして（目下の状態では）侵入してきてゐる状態が歴然と分ることである。

（此ハヒマツの侵入繁殖状態の觀察は面白いものと思ふので以下少し書き加へてきたい。互細に此侵入状態を視るに、ハヒマツは個々勝手に、單獨的に侵入して行くものではないと云ふことがわかる。と云ふ意味は平易に云へば種子が矢鱈にばらまかれ繁殖して行くのではなく穂果 (achene) のまゝに落ちて繁殖して行く様に思はれる。（クロマツ、アカマツ等の種子の様に翅をもつてゐない本種としては飛ばたくもべないのだが。）で、此侵入の前衛をなしてゐるものゝ附近を探すと礫地の中から澤山の所謂實生が集つて續々と生へてゐる。或ものは子葉の先端に種子殻をつけ或ものは既に展開してゐるもの等から、既に一ケ年を経過した葉落、二ケ年を経たもの等、種々のステージの集團を附近に見る事が出来る。既に一幹の大叢をなすと見えたものも根

もとを見るときは徑二三寸の樹幹の集團であつたりして、皆幾年かの一穂果分宛の集團である。

此處の内壁には此外、エゾツガサクラ、少量のミネズハウ、イハヒゲ等を見る。

此南側の礫原を東へ大澤源頭の少し手前まで行くと小隆起が二つありこゝまでの區間は大部分ミネズハウの點在的の純一な聚落であるが、(此處には此外に東南火口壁附近にメアカンキンバイと尖塔の裾にアヲノツガザクラ、イハブクロ等の小群落がある。) 此小隆起を越すと不思議にもミネズハウはイハキスゲを以て置き換へられ、そのまゝ東北部二子岩に對する所邊りまで續き、時折僅かにコマクサの一二年生のものを稀に混する位の程度で點々とした純正な聚落をなしてゐる。

火口壁は壁上三角點(正確の高距を知る事を禁ぜられてゐるのは遺憾であるが小生の種々の點から計算してみた所によると千四百餘米と見て大差ないと思ふ。) 附近にコマクサの群落があり、此附近一體の火口壁上にイハギキヤウ(花)、イハブクロ(花)、エゾコザクラ(花)等を見、外壁は一體にハヒマツの覆ふ所であるが、所々にある砂礫地には局部的にタカネヒカゲノカツラ、シラネニンジン(花)、シラタマノキ(花)、イハギキヤウ(花)、コメバツガザクラ(花)、イハオトギリ(花盛り稍々過ぐ)等を見る。

大澤源頭の右岸岩尾根上には、ミネズハウ(葉の極めて小形となれるものあり)、コメバツガザクラ、イハヒゲ(少)、コマクサ、イハブクロ、イハギキヤウ等あり、稍下つた左方(大澤源頭砂礫地帯の中央部)にはシロバナノコマクサ、コマクサの群落を見、更に下つてはイハギキヤウ、シラタマノキ、ヤマハ、コ、イハブクロ(花終るもの多し)、キクバクハガタ、エゾツガザクラ(花終る)、コバノイチヤクサウ、アイヌタチツボスミレ(花)、ヤマハタザホ、イタドリ、ミヤマハンノキ、ミヤマヤナギ、エゾミヤマヤナギ等が記憶に存する。

二子岩に對する火口壁外面にはコマクサ、シラタマノキ、ミヤマヤナギ等を見る。

西北方に廻れば一望總てメアカンキンバイの大群落と云ふ所がある（前にも記した様に此火口壁内には純正大群落を形成してゐる所の多いのは注目すべき事と思ふ）。

花は生憎稍々盛りを過ぎてゐたが、尙其黄金色の花の集りは壯觀譬へるにもない位であつた。之に續いて間もなく美しいイハギキヤウの純群落を見る。

之から少し行くとウコンウツギとしては最初に火口原内に飛び込んだものと思はれる幼樹が一つあつた。それから熔岩押出しに入ると急にエゾツガザクラ、アヲノツガザクラ及び兩者の雜種と思はれるもの一種やシロバナノエゾコザクラ、ミヤマヤナギ等が出てくる熔岩の谷がある。此附近に此山の火口原内としては珍らしくハヒマツが生育してゐる所がある。

此熔岩の押出しもこれから先きは單調となり南側の終末まで點々としてイハギキヤウと僅かにエゾツガザクラ等を混する位のものとなる。

之に反して西南側の火口壁（所によつては之が無くなつてゐる所もあるが）には種類が中々多い。此火口壁の外側は大部分ハヒマツの跋扈する所であるが、内側及び壁上には草木の種類も多く一々之を擧げるとは差控へるが少し列記すればヒメハナワラビ（ヘビノシタ）、キタアザミ（花）、ミヤマクハガタ（*V. Selleri* P. H.）（花）、アキノキリンサウ、ミミカウモリ、ウコンウツギ（花）、イハウメ、エゾツ、ジ、アカバナ屬の一種、マルバシモツケ、クロクモサウ、ヒメイチゲ、ヒカゲノカツラ、ハナウド、ヤマブキシヨウマ（花）、ホソバノイハベンケイ（花終るもの多し）等と云ふ此山で今までに見なかつたものが續々と發見せられる。尙、特に注目させられたのは極く僅かではあつたがマルバミヤマダイコンサウ（三株、花一輪、他は蕾）とエゾコザクラ（僅かに一本開花）が生育してゐたことである。

此等の外にはエゾツガザクラ、イハヒゲ（花）、コメバツガザクラ、アヲノツガザクラ、イハギキヤウ等多く、イ

ハオトギリ、タカネヒカゲノカツラ等もある。

大體以上で第一火口壁及び火口原内を略記したので次に中央の絶頂をなす所の尖塔に移る。

此處の植物生育地域を見るに其周裾と西南面の一部とであつて、他は熔岩滓の崩潰甚しいため生育してゐる所がない。前者の地域のは大部分イハブクロで、後者にはイハブクロ、イハヒゲ位のやはり少數のごく單純なものである。たゞ絶頂の少し下、南側の火口壁上のイハヒゲが見事な群落をなしてゐるものが二株ばかりあつたのは意外であつた。

以上で此一章を終ることとするが、今後目下の此状態が如何に變化發展するかは頗る興味ある事である。

次に、本岳所産の植物生育分布状態を見るに西北より西南にかけて種類に最も富んでゐる事を認め得られるのであるが、之を導く原因又少くない事ではあるが、少くとも主因の一部をなすものと認定せられるもの一二を挙げ得られやうと信ずる。

尙、本岳頂上所産の植物にて隣島色丹に見ないもの(例へば、ハヒマツ、イハヒゲ、コマクサ、コメメバツガヅクラ、ミネズハウ等)三十三種あり、意外に多い(全體の割合として)結果を示してはゐるが、之は主として高度の相違に歸因するものと豫察するのである。

摘 要

今回の旅行に依つて分明したるチャチャヌブリに關する分を摘出し要旨を列記すると、

一、環状湖をなすと傳へ記されてゐた第一噴火口は目下斯様な状態になつてをらぬ事。又嘗て——少くとも第二回目の噴火によつて第一噴火口内に現在見る所の小圓錐堆積を形成せられし以後に於ては——環状湖を形成したる

形跡を認め得ざる事。

二、第一噴火口内は噴火口壁と略々同じ高さに至るまで第二回目の噴火の噴出物によつて埋まり、西側の一部は押し出された熔岩流によつて覆はれ、他は平坦なる廣大の火口原を成す。

三、第二回噴出に依つて生じたる圓錐形尖塔は頂上に一大噴火口を有しをる事。目下活動全く休止しをる事。

四、絶頂尖塔は此噴火口の東側の火口壁の一部に依つて形成せられをる事。

五、此絶頂をなす圓錐形尖塔は暗赤色を呈するスコリヤより成り屢々玻璃質の空泡を伴ひ、堆積の中腹部には大小の火山弾が多い。

此中央尖塔の成生年代は意外に新らしいものである事。(採集し來れる標品に就いて理學士辻村助教の御鑑定によれば恐らく百年以内のものであらうと云ふ。)

六、本山岳頂上附近に於ける植物相は未だ分布の初期の状態にあり、種類比較的貧弱なるものである事。

尙、右は大部分乾性の植物聚落をなし、未だ混交の状態に達してゐない。

七、第一火口壁内の植物分布状態は、東南側は種類、量共に極めて少く、西北側は之に反して著しく異つて豊富である。又、西北側より東南側に第一火口原に沿つて左右何れからも次第に乏しくなり行くを見る。

八、本岳頂上附近に於ける動植物は別稿目録の如きものを産する事を知り得た事。

寫 眞 解 說

第一圖 絶頂より第二噴火口を下瞰す

噴火口の大きさは定かではないが、概測で東西〇・四軒、南北〇・六軒もあらうか。案外大きなものであつた。火口壁の東南方即ち頂上直下は絶壁をなしてゐる。噴火口は全く運動休止の状態にある。

○チヤチャヌプリへの旅 岡田

森

第二圖 絶頂より南方を下瞰す

中央部に横に長く続く一連の起伏は第一噴火口の火口壁で、左手の高い所に三角點がある。中央稍々右寄りの白いのは大残雪との左端に近く我々のテントが一點となつて見えるのである。

残雪の手前に波状の周縁を持つてゐる黒い所は火口原に突入した熔岩の末端。近景は第二噴火口壁で、其上縁をたどつて絶頂に來た。遠景はチノミノチ附近一帯の海岸である。

第三圖 西側より熔岩地帯をへだてゝの頂上

頂上の平らな處は第二噴火口。右端に高いのが絶頂の一部。熔岩地帯に點々白く見ゆるのはシラガゴケの聚落である。

折込圖 頂上第一火口壁上(南側)より中央尖塔及び火口原の一部

準備其他二三に就て

準備とは云ふものゝ大した所へ行つたのでもないのさして大がよりのことはないのであるが、内地から此山に行かれる方の爲に二三小生等の携帶品に就て心づいた事を記してみたいと思ふ。

鞆とエーヤポット 環狀湖があると傳へられていたので携帶して行つて使はずにすんだが、高山湖沼、殊に千島邊りの様な不便多い地域で用ひるのに携帶ポットをゴム布製でエーヤポットとして行くことは少なからぬ便利である様に思ふ。三人乗で二貫位ですみ製作費も非常に安い。

此ポットに空氣を入れる爲に持つて行つた鞆が山頂で朝夕の煮焚に生木を燃すときに非常に有効であつた。テント旅行には是非必要なものであると考へた。長谷川氏はチベットの土人がヤクの糞を燃料として火を起すときに用ふるやうな皮製の軽い簡單な

のを作つたらよからうと云はれてゐた。

銃器 鳥類採集用兼護身用としてブラウニング五連銃(十二番)とレミントン連發銃を携帯して行つた。裝彈は前者はエリーの九號、五號、B、B、S、Q、實彈等で三百發、後者用として實彈、散彈約二百餘りを用意した。前者の實彈はライオンレザルを用ひたいと思つてゐたが生憎札帳に無かつたため裝彈の後方にスクリユーのついたものを携帯してみたが良い様であつた。

千島も南千島殊に國後、擇捉は靄が多く出沒して其一撃に倒れる者の話も聞き又其皮もよく見せられることであるが、實際には左程恐れる事は無い様に思ふ。居る事は可成り居るが襲撃して來ることは先づ無いと思ふ。で、今後國後邊へ登山せられる方は銃の心配(護身用として)は先づ要るまいと考へる。勿論あるには越したことはないが——なまじ攻撃して、手負ひをすることは尙更危險だと思ふ。小生等の一行は一體少し準備が大き過ぎたやうである。土地の様子が分らなかつたので止むを得ず色々用意してみたがこんな馬鹿馬鹿しい事はやらないでよい。

寫眞機其他 一行三人の携帯したのは手札サンダースン(オールデイスレンズ。トライオレンズ並用。フィルダーはラットンK2其外)、アルビンカメラ(ヘリア手札)。コンテツサーネツテル(ツアイスOテツサー。手札)の三個とシネコダツク一つ。種板は主としてイーストマンフィルムバツク二十五打とシネコダツク用フィルム五卷、アグファ、オートクローム乾板一打、イーストマン、コンマーシャルオートのカットフィルム手札二打、外乾板四ダース。

千島は毎日霧の旅となることが多く、此霧のために乾板が湿け易くて困難すること一通りでない。シネコダツク等は此爲かどうかはつきり分らないが用ひる早々フィルムの回轉が悪く終に使用不可能になつてしまつた。

山頂附近は内地より風が非常に強く、テントの外に出ると立つても歩いて居られぬ日もあつた。テント及び寫眞の三脚は特にしつかりしたものを用意する必要があると思ふ。

虫害豫防 千島のネマガリ笹の密生してゐる所はダニが非常に澤山居る。之は防ぎ様がなく服裝に注意して時々嚴重な身體検査をする外に方法もない様である。

○チャチャヌブリへの旅 岡田

然し體質によるものか一行三人の中、二人は體にはたかつても一度も食ひ込まれることはなかつた。困るのは北海道本島の山でも普通のことだが、棘蚊とか云ふ細かい蠅の様なのが多くこれが特に夕方、澤などでたかられて弱ることが多い。通常白い寒冷紗で覆面して歩いて行くが、小生は今度之を暗灰色に染めて行つて見た所、目先きがよく見えて大變工合がよかつた。

通常の冬の仕度、毛布製のスリーブングバツグを携帯した位でよいと思ふ。幕營地附近は眞夏の候と云ふのに夜半、池（殘雪の流水の）の結水を見る位であるから相當寒い所である。然し晴天無風の日中は非常に暖かい。

防寒具 一行の中で幸ひ嘗つて作つてをいた羚羊の上皮を携帯して行つて使用したものが其効果頗る良好であつた。

食料品 白米、味噌の類は鳥へ渡つてからで充分間に合ふ。チャチャ岳へ行かれるのなら之は乳呑地で用意されればよい、少量なら禮文磯でもオカツプでも得られる。鍋、釜の類も鳥で充分間に合ふ。

案内、人夫 鳥へ来て一番困るのはこれである。殊に夏期は昆布採り、鱒取り等で一番困る。あつても一日十圓の二十圓のと請求する。よく／＼いひのでだまつて五圓、先づ案内で四圓見當、人夫は少し安くて行く。

荷は勿論内地の人夫に比してまるで春負へない。我々でさへ四貫乃至五貫春負つて行くのに四貫目も春負ふと非常に苦しむ。然し之は無理もないことで通常こゝではこんな仕事はしつけないから。

終りに國後島でいゝと思はれるのはルイ岳。チャ／＼ヌブリとは異つた味がある様である。山もはるかに古さうだし高さも千島としては相當であるし、殆んど登る人はないので山は少しも荒されてゐない様である。生物も定めし面白からうと思はれる。此山への記行文のものされることをのぞんで筆を擱く。

國後島の採集品目録に就て

一九二九年度のチヤチヤヌヅリ登山を兼ねての採集旅行に於て、小生の採集品としての主目的はチリモの研究材料の蒐集にあつたので之については出来得る限りの力を致したが、此採集の餘暇を利用して海藻、陸草、鳥類、昆蟲、貝類、兩棲類、石器等の蒐集をも試みた。又、チヤチヤヌヅリに於ては特に頂上附近に産する植物の採集に應分の努力を拂つて來た。之は此様な僻遠な土地の採集品は従來比較的少く従つて専門家の方々の研究資料としても之等は何かの御参考ともなり又、今後行かれる方の御参考の一端ともならうかと思つたので採集して來たのである。小生はもとより此等に就いては門外漢のことゝて此整理にも當り得られないので敢て之を各専門の方々に委ねて其目録を作り、右の小生の志を表はさして戴くことゝしたのである。然し本稿には雜誌の性質上、多少なりとも山岳に關係あるものに就ての目録のみを掲げて、獸類、海藻(全部)、貝類(大部分)、昆蟲(一部)、淡水藻類(全部)、等 は取りのぞく事した。之等總ては右の目的で持歸つた私有品であり、小生とてはもとより單なる蒐集辭者として終始する積りでもないから、もし之に就いて研究の参考とせられたい方には喜んで之を委ねるし、場合によつては贈呈することも辭するものでない。とにかく採集品を有益に用ひたい。云はゞ一度命を離れたものを意味は異なるが、再び生かして活動さしてやりたいのである。

此採集品の御鑑定には左記の方々の深大な御好意に與つてなされた。此處に改めて謹んで厚く御禮を申し上げる次第である。

海藻類——岡村金太郎博士並びに東道太郎教授。地衣類——朝比奈泰彦博士。鳥類——山階芳麿氏。兩棲類——

岡田彌一郎博士。(順序不同) 又、鹿野忠雄君は昆蟲類の本定を引受けて下された。

武田久吉先生は終始何かと格別な御親切と御注意とを御寄せ下された。殊に顯花植物の目録に就ては御鑑定戴けたものが數點ある。深い感激と大きな喜びを持つて厚く御禮申上げる次第である。

又、柳屬に就ては木村有香學士からいろいろ御親切な御教示を戴き得た。誠に忝く深謝し奉る。

又、柳山徳太郎氏からは色々御親切な御注意をお寄せ戴く事を得た。改めて厚く好意を謝する次第である。

尙、札幌を出發する時に宮部金吾博士は會議中の御多忙中を割いて特に、何とも恐れ入った次第であつたが、名もない一介の旅人をわざわざ御自身での御見送りに與り、その上此旅に就て御親切な御注意まで賜つた事は無上の光榮であり、忘れ得ぬ深い感激であつた。

目録に付せる略號。(學名の左肩のもの)

*印……………國後島より初めて報告せられるもの

此外 1 には左の略符を用ひた。

**印……………千島より初めて報告せられるもの

中印……………北千島(占守島、パラシュムシロ島)と共通なるもの

***印……………北海道より初めて報告せられるもの

卅印……………色丹島と共通なるもの

****印……………本邦より初めて報告せられるもの

十印……………單に千島としてのみ報告せられ所産の島名不明なるもの

○印……………未記録のもの

るもの

昭和五年十一月發行

1 千ヤチヤヌヅリ頂上附近産植物目録

1 本目錄に取扱ひたる範圍は頂上第一噴火口壁の内外、中央尖塔 (Central Cone) 及び大澤上部砂礫地帯(植物生育上より頂上の延長と見らるべきに依る)とす。尙、森林地帯のものより興味あるもの一二摘出して録末に掲載。

1 本目錄に依て見るにチヤチヤヌアリ頂上附近所産の植物は27科、44屬、45種、10變種を産する事を知る。其中未発見のもの2變種、千島より初めて報告せられるもの13種(變種を含む)、國後島より初めて知らるゝもの23種(變種を含む)なりとす。又、北千島(占守、バラムシロ島)と共通なるもの17種(變種を含む)、色丹島と共通なるもの20種なり。本岳頂上附近所産のものにして國島色丹に産せざるもの33種(變種を含む)。

I. Compositae (キク科)

西南第一火口壁上。稀少。

1 *Cacalia auriculata* De. var. *kametchica* Koiz.

1 *Anaphalis margaritacea* Benth. et Hook. f. ヤマハ

ミミカウモリ、エゾカウモリ

、コ

西南方第一火口壁上に點在す。

東南大澤上部砂礫地の下方末端附近にのみ見らる。孤立

1 *Cirsium kamtschakianum* Ledeb. チシマアザミ
西南方の第一噴火口内壁上に見る。附近にイハノガリヤ
ス、ハナウヅ等生育す。

點在せるミヤマハシノキの周縁に多し。附近エゾツガサ
クラ、イハギキヤウ、シラダマノキ、コマクサ、アイヌ
ダチツボスミレ等を見る。

1 *Swussurea Riederi* Herd. キダアザミ

II. Campanulaceae. (キキヤウ科)

西南第一火口壁上に點在。数多からず。

1 *Campanula lasiocarpa* Chama. イハギキヤウ

1 *Solidago Virgaurea* L. アキノキリンソウ

本岳に於ては南方第一火口壁上、東北方火口礫原地に

西方熔岩流末端と火口壁の接觸點附近。ミヤマカガハ、

點在するものもあるも概して集團をなし、大なるは西方火

ヒメイチヂク等と混生す。

口原と東南大澤上部砂礫地の末端部の二つあり、後者に

1 *Taraxacum ligatum* De. チシマタンポポ、

於ては生育良好にして二三の枝を分ちて花を着け、草丈

地上11.5c.m. (花共)に及び。

III. Caprifoliaceae (ヌヒカヅラ科)

* 8 *Dierilla Mollendorffiana* Carr. コソツツギ

西南方火口内壁。草丈2尺内外。生育貧弱なり。火口
原内には西方に侵入せる所あり。

IV. Scrophulariaceae (玄參科)

中* 9 *Penstemon frutescens* Lamb. イハヅクロ、ナル

イサウ

南方火口壁上、西南熔岩地帯、西方火口原内、第一火
口原内、中央噴出堆積の周摺、東南大潭礫草地下部及び
其右岸等に繁落を見る。

本岳に産するものは花色淡く、白色に近きものあり。

中* 10 *Veronica Schmidtiana* Regel. var. *typica* Mak.

キクバクハガタ ミヤマヒメトラノヲ

僅かに大潭上部砂礫地の末端附近に産す。多からず。

中* 11 *Veronica Sellieri* Pall. ミヤマクハガタ

西南方の第一噴火壁上。少し。

V. Primulaceae (サクラサウ科)

中* 12 *Primula caucifolia* Ledeb. var. *typica* Mak.

エゾコサクラ

南嶺西方第一火口壁の内壁に花を着けたる貧弱なるも
の一本を見る。附近を探したるも見ず。

生育地附近にはナルバミヤマダイコソツツウ、フカバチ
の一種等僅かに生育するを見る。

VI. Diapensiaceae. (イハツメ科)

中* 13 *Diapensia lapponica* L. var. *chondra* Fr. Selm.

イハツメ

本岳に於ては比較的少き種類にして、僅かに南方火口
内壁に生育するを見る。

VII. Ericaceae. (ツ、ジ科)

* 14 *Arctostaphylos nana* Mak. コスバツカザクラ

大潭右岸、第一噴火口壁南側内壁に産す。多からず。

中* 15 *Cassiope lycopodioides* D. Don. イハヒゲ

第一噴火口内壁西南より南及び大潭上部右岸にのみ僅
かに見る。

中* 16 *Gaultheria Myrtilina* Mak. シラタマノキ シロモノ

大潭上部砂礫地末端、二子岩到岸及び第一噴火口南方
外壁の三ヶ所に見る。大低し。

中* 17 *Loiseleuria procumbens* Desv. ミネズハウ

第一噴火口内火口原の南方に産す。本種も此山に於
ける其分布區域を劃然と限られる如き景観を呈するも
のニ一にして、即ち大潭上部の砂礫地にも火口壁上にも
中央尖塔にも見られ得ず、又單に火口原内にしても東西
北方には全く見當り得ずして南方に限る(火口原内熔岩

流東本端より正南の稍東へ礫帯を飾り、大澤に至る少し
手前の二低隆起の所にて劃然と其生育地を限りイハキス
ヅと置換せらるるを見る。)

** 18 *Phyllodoce caerulea* Bab. エゾツガザクラ

本岳山頂附近に於ては分布區域の最も廣きものにて、

大澤上部砂礫池末端、第一噴火口南方火口壁内外に群落
をなし、其他火口原内熔岩流地帯(西南方)に點々と見る
も東方、北方、西方の火口原内に見ず。

大澤上部にては花期冬く過ぎ一花を見ざりしも火口附
近にては丁度盛りなりき。

○ 19 *Phyllodoce caerulea* Bab. var. *albiflora* var. nov.

(假)シロバナノエゾツガザクラ(新稱)

第一火口原内熔岩地帯に見る。花雪白色にして花梗萼
濃紅にして美し。

中* 10 *Phyllodoce alautica* A. A. Hallov. フラノツガザクラ

本岳にてはエゾツガザクラに比し分布地域、數量共に
遙かに少きものにて、第一噴火口南方内壁及び火口原内
熔岩地帯の西南、其東方末端の周縁附近に見る。

21 *Phyllodoce* sp.

花色淡紅なる一品にして樹形エゾツガザクラに似、花
形フラノツガザクラに近きものにて一見兩者の交雜種な
る如く見ゆ。葉の横斷面はフラノツガザクラに近似す。

熔岩地帯西南方の凹地に多く、他は南方第一噴火口内
壁に僅かに見る。

中 22 *Therorhizon camtschaticum* Small. エゾツ、ジ

本種も僅かに第一噴火口内壁西南方に産す。花盛りな
りき。

VIII. *Pirolaceae* (イチヤクサウ科)

十* 23 *Pirola elliptica* Nutt. var. *minor* Maxim. コバノ

イチヤクサウ

大澤上部砂礫地に僅かに見る。

IX. *Umbelliferae* (繖形科)

中 24 *Orythium japonense* Drude (f. *normale* Tak.) シラネ

エゾジソ チンヤエゾジソ

南方第一噴火口外壁、西方の一部に見る。數量共に少
し。

中 25 *Terruclella lanatum* Michx. ハナウヅ

第一噴火口西南方内壁に點々と見るも少し。

X. *Oenotheraceae* (アカバナ科)

26 *Epilobium* sp.

南方より稍々西へ第一噴火口内壁を廻る所に極めて僅
かに見たるも花なく種名判明し得ず。

XI. *Violaceae* (スミレ科)

** 27 *Viola silvestris* formis W. Beck. フイヌカタツボス

○ 國後島の採集品目録に就し 岡田

ミシ

大澤上部砂礫地末端附近にあり。花あり。

のである。

花は全體として稍々盛りを過ぎておた。

XII. Guttiferae. (オトギリサウ科)

中キ* 32 *Syzygium beakii* P. All. ヲルバシモツケ

中* 28 *Hypericum kamischaticum* Ledeb. イハオトギリ

第一噴火口西南方内壁。数餘り多からず。

第一噴火口南方火口壁(即、葦管地附近)の内外に極

中キ* 33 *Sorbus sambucifolia* M. Roem. マカネナ、カマド

く僅かに産す。花稍々盛りを過ぐ。

オホミヤマナ、カマド

XIII. Rosaceae. (バラ科)

第一噴火口西南方内壁。少し。

* 29 *Geum callaeifolium* Mertz. var. *rotundifolium* Torr.

XIV. Saxifragaceae. (ユキノシタ科)

et Gray. ヲルバノミヤマダイコソウサウ

キ* 34 *Saxifraga fusca* Maxim. クロクモサウ

第一噴火口南稍々西寄の内壁に極めて僅かに(三株だ

第一噴火口西南方内壁。少し。

け見る。附近一體搜索したるも見ず)産す。花一輪あり、

** 35 *Sedum Rhodiola* De. var. *elongatum* Max.

蕾十餘個。

ホソバノイハベソウケイ ナガバノイハベソウケイ

中* 30 *Stevensia pentapetalala* Mak. チソウグルマ

XV. Cruciferae. (十字科)

永井、島村兩氏本岳に採集せられし標品による。小生

** 36 *Arabis nipponica* Boiss. ヤマハタザホ

は終りに逸す。(産地は大澤より北に寄れる澤なる如く、一

大澤上部砂礫地の末端に見る。附近キクバクハガタ、

體に本岳の植物分布の状態の特徴の一として少量の局部

コバノイチャクサウ等あり。多からず。花期過ぐ。

的分布をなすを以て之等も此ためにあらざるやとも考

XVI. Papaveraceae. (ケシ科)

ふ。)

** 37 *Dicentra pusilla* Sieb. et Zucc. コマクサ

** 31 *Potentilla Mijskoi* Mak. マアカンキンソウイ

本岳にては大澤上部砂礫地中央部に餘産し此外に群落

は第一火口原内の西方にあり。直径3尺もあらうかと思

をなせるは第一噴火口南方火口内壁(三角點附近)と二

はれる株の點々と集り續く有数は實に又壯麗極りなきも

子岩對岸の三ヶ所。西側、西南方等絶えて見ず。

東方火口礫原中に僅かに幼少なるもの侵入し初むるを見る。

○ 38 *Dicentra pusilla* Sieb. et Zucc. var. *alba* var. nov.

(假)シロバナノコマクサ(新稱)

花雪白色、花莖は淡緑。葉も一體に色淡く、普通品と混生するも遠方より一見識別し得。本岳に於ても本變種を産するは大澤上部砂礫地中央部に限りて見らる。

XVII. Ranunculaceae. ウマノアソギカタ科

†* 39 *Anemone debilis* Fisch. ヒメイチヂク

第一噴火口西方。少し。附近にアキノキリンソウ、ミヤマソカボ等を見る。

XVIII. Polygonaceae. (カズ科)

** 40 *Polygonum cuspidatum* Sieb. et Zucc. イタドリ

大澤上部砂礫地中央部附近に見る。コマクサと混生す。

XIX. Betulaceae. (カシノ科)

†* 41 *Alnus alnobetula* Hartig. var. *grucosa* Winkl.

ミヤマハンノキ

第一噴火口西南方火口壁、大澤上部砂礫地周縁等に見るも未だ火口原内に全く見ず。

XX. Salicaceae. (ヤナギ科)

†* 42 *Salix leucis* Frensch. et Sav. ミヤマヤナギ

第一火口原熔岩地帯(西方低凹地)に産するも多からず。

** 43 *Salix trianovi* Koidz. エゾミヤマヤナギ

第一噴火口内壁(南方西寄り)に見るも少し。♂のみ。

大澤上部の礫地に本種の♀らしきものを僅かにのみ見たるが、材料不充分なり。

XXI. Juncaceae. (ナギ科)

** 44 *Juncus campestris* DC. var. *pauciflorus* Buch.

タカネスズメノヒエ

西方火口壁下方に見る。

XXII. Cyperaceae. (カヤツリグサ科)

†* 45 *Carex hakodensis* Frensch. イトキンソク

第一噴火口西壁に見る。

** 46 *Carex Mertensii* Presl. var. *wrostaquus* Kükent.

イハキスグ

主として第一噴火口火口礫原内東南より北方迄の地域を占めて生育す、此地點内にあつては非常に多く見らるも(分布圖参照)、西南部、中央尖塔等には分布せず、此他の地にて稍々多くあるは大澤上部砂礫地末端部とす。

XXIII. Gramineae (禾木科)

†* 47 *Agrostis flaccida* Hack. ミヤマソカボ ヒメコ

マス、キ

西方第一噴火口内壁と熔岩流との接觸點附近に見る。

†* 48 *Calamagrostis villosa* Mutel. var. *Langsdorffii*

○風線處の採集品を寫し録し 圖田

刊

Hook. イハノガリヤス

西南方の第一噴火口壁に見る。(東、北、西の三方火口
壁火口原にも全く見ず。)草丈 1尺内外。附近にミヤマハ
ソノキ、ハナウド、チシマアザミ等を見る。

XXIV. Pinaceae. (マツ科)

中*49 *Pinus pumila* Regel. ハヒマツ

頂上第一噴火口外壁の周圍に最も高く登り来れるは西
南側にして、他の側は何れも遙かに低下す。然し此西南
方側と云へども未だ火口壁を越えて内壁にまで侵入する
状態に至りならず、たゞ南方(幕督地附近)にやうやく内
壁へと侵入しはじめを見る。

XXV. Lycopodiaceae. (ヒカゲノカヅラ科)

中 50 *Lycopodium clavatum* L. ヒカゲノカヅラ

第一噴火口西南方の内壁の岩蔭に小群をなす。

51 *Lycopodium complanatum* L. var. *anceps* Mitt.

アスヒカヅラ

西南方噴火口内壁に産す。

中*52 *Lycopodium chinense* Christ. ヒメスギラン

第一噴火口内壁西方より西南方にかけて蔭濕なる岩蔭等

に所々見るも多からず。

* 53 *Lycopodium sitchense* Kupr. var. *nipponense* Takekida

マカネヒカゲノカヅラ

今回一週間の中に発見し得たる本種の生育地は僅かに

二ヶ所にして、一は第一噴火口南側外壁(附近にシラカ
ソノキ、エゾツガザクラ、イハネトギリ、イハギキヤリ
チシマニソジン、ハヒマツ等を見る。)と他は之とは略反
對側の内壁(稍々西寄り。僅少。附近にエゾツガザクラ、
イハヒゲ、アヲノツガザクラ等あり)とに見出さる。

XXVI. Ophioglossaceae. (ハナヤスリ科)

* 54 *Botrychium lanaria* L. ヒメハナツラビ

西南方第一火口壁々上に一ヶ所に集りて僅かに生育す
るを見たるのみ。

XXVII. Polypodiaceae. (ノキソノゾ科)

* 55 *Althypium Fries-femina* Roth. var. *melanolepis* Mak.

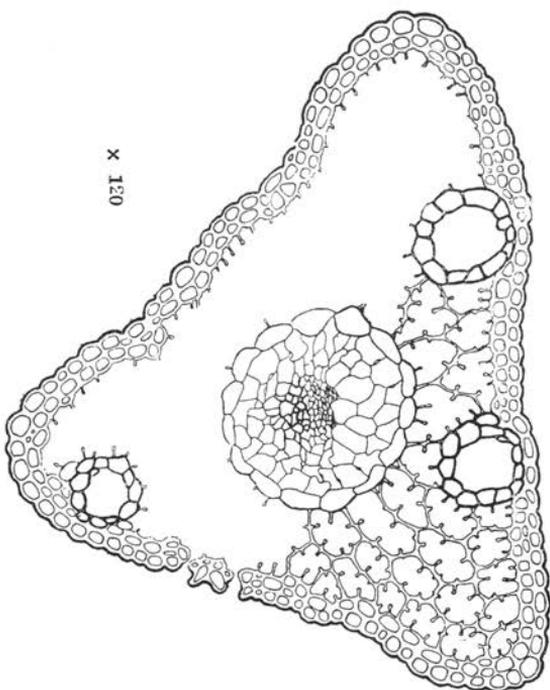
メシダ

第一火口内壁西南部の熔岩流と接觸點附近の炭濕地に
あり。附近にクロクモサウ、ウコンソウキ等産す。

以上は頂上附近に産するものを擧げたものであつて、
之より低い地點所産の植物も數多く、興味あるものも少
なくないが目下詳記すべき材料不充分であるので爰には
比較的興味あるもの一二を記すことにした。

1. *Pinus* sp.

大澤上部砂礫地の末端からミヤマハソノキの林に入つ



× 120

て間もなく（ネマゲリザ、の一面に覆ふ地點まで下る手前）本種を見る。一行が此地帯を通過した時は往復異なる所を選びたるが往復共に見ることが得たり。然し數少く、點々とミヤマハソノキの疎林に混じてあり、高さ6呎位、若木多く椹果を付くるものを見ず。樹性纖弱にして斜上す。高距約120)米の地點。葉弱かにして細長、長さ約6種、上縁に微鋸牙あり、斷面三角形、樹脂道3一見

○圖後島の採集品目錄に就し 岡田

ヒメコヤツに似るものにはかに決し難く、葉の斷面。

(中央部を掲げて御参考に供する。(挿入圖版参照))

2. *Clematis fusca* var. *mandshurica* Takeda

エゾハシシヨウゾル

大澤の上部、ネマゲリザの密生地帯に見る。多からず。分布上の興味あると思ふまゝ掲げる。

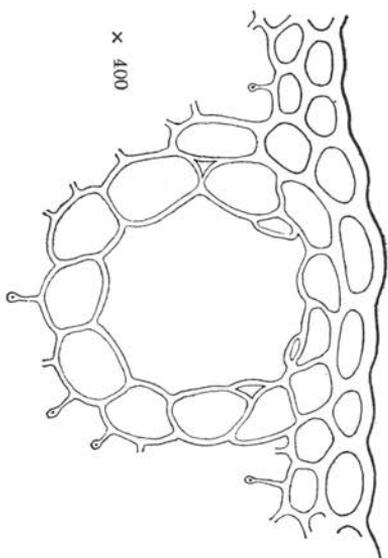
此外附近 3. *Maianthemum bifidum* DC. ヲモツルササ

4. *Roschניה globosa* C. A. Mey. オニク 5. *Zaucothoe*

Grayana Mak. var. *Tschonoskii* (Max.) Takeda ハナヒ

リノキ 6. *Sprengelopus amplexifolius* DC. オホバクケソウ

ラツ 7. *Polygonatum japonicum* Morr. et Decne. var.



× 400

Machonotkazii (Max.) オホアヅロコロ 8. *Platanthera*
decipiens Lindl. ノビネチドリ 9. *Platanthera Choris-*
ana var. *glata* Finet. ミヤケランソ 10. *Epipactis papillosa*
Fr. et Sav. エゾスヅランソ等を見る。

2 頂上附近の苔類

Marchantiaceae.

*** 1 *Treissia quadrata* (Scop.) Nees. ♀アカゼニエケ
頂上第一噴火口南方内壁に産する。

本種と同定するに當り、thallus の周縁の特長、Pore
の周縁細胞の數、斷面、peduncle の毛溝の數等の重要
なる點に一致を見たるにより本種とす。尙、アイルラン
ソ邊りに於ても高山帯乃至亞高山に産すると云ふ。

3 チヤチヤヌヅリ頂上附近産

地衣類目録

I. Lecideaceae.

*** 1 *Phizocarpon geographicum* (L.) De. チツエケ

II. Cladoniaceae.

*** 2 *Cladonia coccifera* (L.) Willd. サソエジエエケ
*** 3 *Cladonia sylvatica* (L.) Hoffm. ヲラハチエケ

*** 4 *Cladonia uncialis* (L.) Hoffm. イバチエケ

*** 5 *Cladonia furcata* (Huds.) Schrndl. var. *palanara*
(Ach.) Nyl. ヴダキエケ

*** 6 *Cladonia cyathipes* (Sommerf.) Wain. ミヅイロキエケ

**** 7 *Cladonia subsericornis* (Wain.) Du Roietz.

*** 8 *Stereocaulon deudatum* Flk.

III. Lecanoraceae.

*** 9 *Lecanora gelida* Ach.

IV. Parmeliaceae

*** 10 *Cetraria islandica* (L.) Ach. f. *angustifolia* Krph.

コバノエイランソイ

*** 11 *Cetraria juniperina* (L.) Ach. ヲヒエツエケ

尙、チノミノチ、レブソイソ間の海岸にて *Calopogon*
Heppiana Müll Arg. を得、上記の中10は小生も探るも
他は瀨川氏採集所藏。

4 國後島採集鳥類目録

Phalacrocoracidae 鸕鷀科

* 1 *Uruba pelagicus pelagicus* (Pallas) ヒメウヱはウガ
ラス 古釜布よりウエソチイの間に多く見たリ。

Anatidae 雁鴨科

2 *Histrionicus histrionicus pacificus* Brooks. シノリ

ガモ

オカワツアの海岸先きに數十羽群泳し居りしをみる。

Falconidae 鷹鷹科

* 3 *Buteo buteo japonicus* (Temminck & Schlegel)

ノスリ オカワツアの岩上に止れるものを棒にてたゞきて

捕獲したりと云ふ skin を同所の漁夫より得たるもの。

Charadriidae 鶺鴒科

4 *Heterosceus incanus brevipes* (Vaiilott.) キアソシギ

サイノカハラ及びオカワツア附近の磯多き海岸に10羽前後群をなすものに屢々遭遇す。

Laridae 鴨科

* 5 *Larus canus major* Middendorff. カモメ

* 6 *Larus schistiaquus* Stejneger. オホセゾロカモメ

** 7 *Larus crassirostris* Vieillot. ウミネコ

オカワツア附近に獲たり。前二者に比して少きものゝ如し。

Alcidae 海雀科

* 8 *Uria arctica californica* (Bryant). ウミガラス

購送せしキの海岸にて夕方静止せる生鳥を手捕にする事を得たり。

9 *Cappius carbo* Pallas. ケイマツリ

フルカワツアよりウエンナイへ向ふ途中海に面する岩壁の

岩壁に群集し居れり。

Picidae 啄木鳥科

10 *Dryobates major japonicus* (Seeholm) エゾアカゲラ

オソネベツの川近き樹林に獲たり。少し。

Alaudidae 雲雀科

* 11 *Alauda arvensis blakistoni* Stejneger チソマオホ

ヒバリ

フルカワツア附近の草原に可成り多く見る。路上に下りて

遊べるものに屢々出會ひたり。

Motacillidae 鶺鴒科

12 *Calodides cinereus caspius* (S. G. Gmelin)

キセキレイ

ウエンナイ附近の川の川原に多し。

13 *Motacilla alba lugens* Kittlitz. ハクセキレイ

古釜布附近の海岸に多し。

* 14 *Anthus hodgsoni berezovskii* Suvudny. エンズイ

チヤチヤヌアリ山頂附近(ca1400m. 第一火口原東北及び西侧)に見るも数少し。

Turdidae 鶇科

15 *Calliope calliope camtschaltensis* (Gmelin) オホノ

コヤ 古釜布附近、オダイベツ附近の海岸に滑ぶ樹林

の枯木等に止りて轉るを屢々聞く。

* 16 *Lanius c. cyanurus* (Pallas) ルリビタキ

オソネベツ附近に得たるも数少し。

17 *Sarcicola torquata stejnegeri* (Parrot) ノビタキ

オソネベツの川近き墓地。

Prunellidae

* 18 *Prunella rubidus* (Temminck & Schlegel)

カヤクヅリ

チノミノチ附近。多く見ざりき。

Sylvidae 鶯科

* 19 *Loeusella lanceolata* (Temminck) ヲキノセウ

ニウ

Sittidae 五十雀科

* 20 *Sitta europaea clara* Stejneger エゾコジツカラ

オソネベツの河原近き柳の大木上に獲る。

Paridae 四十雀科

21 *Poecite palustris lensoni* (Stejneger) ヘソソソコガ

ヲ ルカヤツツアヨリウエソナイへ向ふ針葉樹林中に

多く見る。

Corvidae 鴉科

* 22 *Corvus corone uidepositus* Laubmann.

ハンボソガラス

東海岸到る所に多し。

Fringillidae 雀科

* 23 *Fusser montanus saturatus* Stejneger スゞス

全島人家附近に普通なり。

以上の外、産する事確實なるものに次の亞種あり、(標品は

損傷甚だしかりしたため作り得ず)

24 *Emberiza sordacephala personata* Temminck

アラジ

セセキ附近の川岸のオホイタドリ茂みに多くみる。

尙、鳴聲を聞き得たるものに(阿れも古釜布よりウエソナ

イへの途中)

* 25 *Horornis cantans cantans* (Temm. & Schleg.)

ウグヒス

26 *Cuculus canorus taylorianus* Heine. クラツクウ

27 *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham) キジバト

又、姿を見たるものに

28 *Microopus pacificus pacificus* (Latham) アツツバシ

チヤチヤ岳大澤上部亜高山帯に多く見る。

** 29 *Troglodytes sinensis sinensis* (Gmelin)? ヨシゴイ

禮文磯附近にて。

以上を通計して見るに此旅行に於て採集及び見聞したる本

島産鳥類は10科27属62種24亞種を数ふることとなる。

尙、本島の北方に聳立するルルイ岳にはエゾヤヅドリを産

飯豊山塊

地名及登路圖

—(○)—

二高山岳會原圖

(1925—1930)

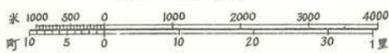
—(○)—

凡例

(1) 記號

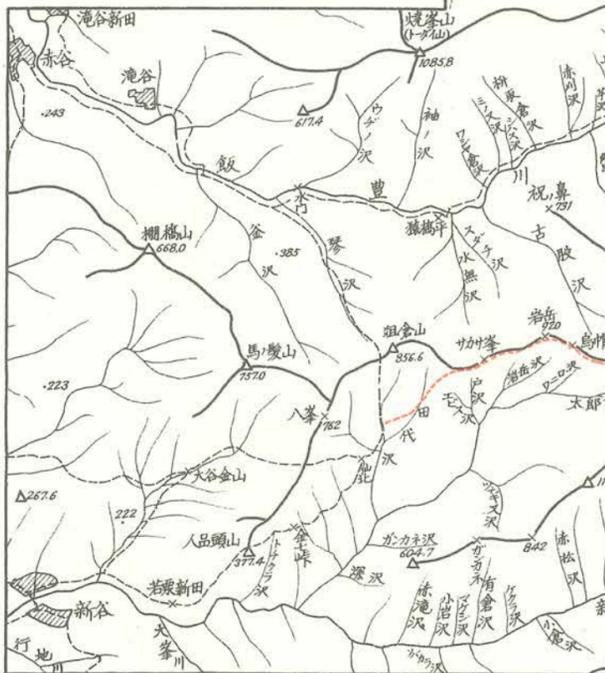
- 1234 山連走向と測量三角点及其標高
- 河川流路
- × 字名地点
- 道
- 筆者等登路
- 良き泊り場
- 積雪季使用=堪エル小舎
- " 堪エス "
- 部落
- 橋
- 鐵道及駅
- ♨ 温泉

(2) 距離



(3) 註記

- 1. 参照陸地測量部地形圖
- 2. 十分の一地形圖
- 村上、仙台、新潟、山形
- 5. 五分の一地形圖
- 玉庭、加納、飯豊山、大日岳、新津田、津川
- 本号「飯豊山の登路」について参照
- ハ、地名ハ皆左書きナリ



「山岳」第二十五年第二號附録

昭和五年六月發行

日本山岳會

すと云ふ事を聞けり。確報を待つ事切なり。

5 國後島産兩棲類

赤蛙科

- * 1. *Rana temporaria* Linné エゾアカガヘル

オダバテ附近の海岸沿ひの草茂る土手上にて一頭採集。今回の旅行にてはこれ以外に兩棲類を見ず。

6 頂上附近産昆虫目録(鱗翅目、鞘翅目のみ)

蛭蝶科

- ** 1 *Vanessa urticae comera* Butler. コヒオドシ
大澤の上方によく見る。
- ** 2 *Argynnis adippe pollescens* Butler. ウラギンノウ
モシ
少し。大澤の上部砂礫地にて二頭見るのみ。

I. 瓢蟲科

- ** 3 *Ybida murasei* Ohta. カラフトジエウシホシテ
ントウ
- ** 4 *Hilone leucaspilata* 19—*parvula* Kano
ジエウシホシカメノコテントウ

○國後島の採集品目録に就し 田田

II. 天牛科

- ** 5 *Aserum amurense* Krantz. ヴルケビヒラダカミ
キリ
- ** 6 *Strangalia aethiops* Poda. コクロハチカミキリ

III. 地膽科

- ** 7 *Maec lobola* Gebler. カラフトツチハンソウ

IV. 埋葬蟲科

- * 8 *Silpha perforata* Gebler. ヒラダシデムシ

V. 步行蟲科

- ** 9 *Damaster rugipennis* Motschulsky.
エゾヤイヤイカブリ
- ** 10 *Carabus opaculus* Putzys. ヒメクワラサムシ
- ** 11 *Carabus granulatus japonensis* Bates. エゾラサムシ

VI. 斑蝥科

- ** 12 *Cicindela nishiozana* Bates. ミヤヤハンソウ

7 チヤチヤヌブリ産腹足類

- Karyotholia fasciata* (Fulton) カラフトヤイヤイ
大澤の中腹以下の澤(水なし)に多し。

田田

中央尖山の登攀

鹿野忠雄

紀行

博物學的觀察

植物に就て

動物に就て

地質に就て

山名及び附近蕃人との關係

附記（遠望及び登攀に就て）

一、出發まで

比較的山頂の風貌に變化の少い臺灣山岳の中に在つて、その一瞥にも秀魁と凄絶の感銘を刻みつける山と云へば、大霸尖山と中央尖山とを擧げることが出來やう。何れも尖山の名を與へられたこの二つの山は臺灣の北部に聳立しグロテスクな容姿を群山の中に際立たせて居る。愚かしき比較を敢てするならば後者は槍ヶ岳に模する事が出来る

も知れない。

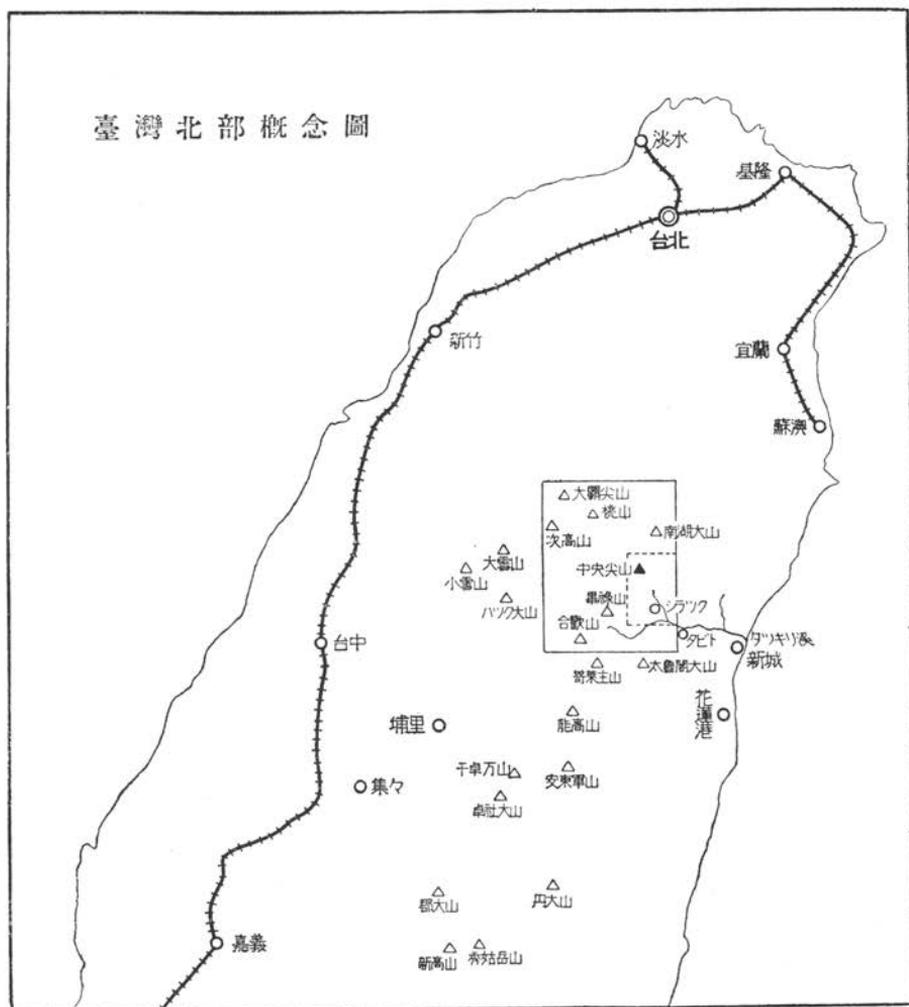
中央尖山は筆者が數多く望見した臺灣山岳の中でも大霸尖山と共に最も心を惹かれた山である。急な荒くれた斷崖を廻らした三角錐。南湖大山に起つて南走する中央山脈の連々たる山波の中に、この尖山はその尖頭を北の空に直立させる。その槍の尖端の附近には白い斷雲が宛も魅せられた様に絡みついて——この様な現象はマッターホルン等の尖つた山岳によく見られる——動かうともない。愚かしき事かも知れないが、この山が未登攀の山だと云ふ事は一層筆者の決行慾をそゝるのであつた。未だ人間の足跡に汚されない處女峯。それには今まで感じ得なかつた、原始と壯麗の香が嗅げる様な氣がした。

次高山に登つて眼前に呼べば應と答へさうなこの尖山の冠が、旭光を浴びて薔薇色に輝くのを見、又新高山の山頂から北の方遙か雲烟の定かならぬ所、山波の激する中にこの尖頭を認め得た後は、是非共來年はこれを試みて見やうと心に誓つたのであつた。

翌年一九二八年早々、筆者はその用意に取掛つた。そして山頂の雪も消える夏も近づいたのであるが、臺北一中新沼佐助大尉が同中學校山岳部の部員を率ゐてこの山の最初の登攀を行ふべく新聞紙上に發表したので、筆者はこの行に加はるのが便宜と思ひ、同氏に會見の上同行を御願ひした所、筆者がこの行に加はるは力強く又博物學的の收穫も期待されて大いに歓迎するとの事に、余は大いに喜び又氏の好意に深く感謝したのであつた。

臺灣山岳の登攀は今や黎明期にあり、一般の登山は二、三の限られた山にのみ行はれる状態であるが、この中學校山岳部は獨り他とその趣を異にし、未だ道不案内の山に一般團體登山としての先鞭をつけ、後進を指導して居る様な有様で、その活躍は目覺ましいものがある。未だ體軀も固らず山にも餘りなれない年少者を具して未開拓の深山行を決行すると云ふ事に就ては一般の議論もある事であらうが、兎に角從來幾多の山岳を開拓した功績は認める

臺灣北部概念圖



べきである。又その間よく之を指導して一の間違も起させなかつたのは、教導者新沼佐助氏及び瀨古氏の努力の賜でなければならぬ。

一中登山隊の臺北出發は八月の一日で、蘇澳より船にて花蓮港に上陸、それより花蓮港研海支廳のタロコ峽谷を溯つてシラツク駐在所に至り、此處を本據として中央尖山行を試みると云ふ。筆者は七月の初めより山歩きをする事にして居たので、八月五日頃この根據地なるシラツクにて落ち合ひ、其處で蕃人人夫の狩出しや食糧等萬端の用意を整へる事になつた。

筆者は七月初旬臺北を出發阿里山に一週間を費し、それより埔里社に出で卓社大山(一〇八二六尺)に蕃人を連れて登高、それより霧社に出で、能高越道路を採つて苜蓿主山南峯、能高山を極め花蓮港に出でた。それより研海支廳の所在地新城に至り二日を費してタロコの峽谷を溯り、中央尖山登攀の根據地なるシラツクに着したのである。

このタロコ峽谷に就ては、近時次第に探勝する人士の者多きを加へて居るので、筆者は茲に敢て拙劣なる文字を連ねてその景を叙したくない。併し當然の順序として一通りの説明を試みよう。

タロコ峽谷は花蓮港研海支廳のツツキリ溪が、中央山脈の山懷に食ひ入つた所に現出せしめた溪流である。溪谷の比較的老年期にあるためか、粘板岩質の軟弱なる構成による爲かは明でないが、臺灣には峽谷と名づくべき溪谷は見當らない。この様な事情の下に於て、タロコの峽谷丈はこの名に値する丈の壯大と偉容を具へて居る。水の流るゝ川床は石灰岩が多く又その兩岸の崖は石灰岩、片岩、粘板岩に依つて構成されて居る。今谷筋を辿つて見ると、川口から次第に奥に入るにつれて谷は列れ、兩岸の岩壁は次第にその壯大さを増す。七、八里にしてタビトに至るが、是より奥は中央山脈の山懷に多數の支流を流出して、その狀は恰かも扇を擴げた様である。その兩岸の崖壁は實に壯大の一語に盡きる。直下何千尺の露はな斷崖は惜し氣もなくその地肌を見せてこの溪谷の兩壁を飾つて居る。

その絶壁の大規模又その峻峻は臺灣の諸溪谷の中でもその比を見出す事が出来ない。この山岳地方にはタイヤル族セーダツカ亞族タロコ蕃なる蕃人が占據して居るのであるが、彼等は臺灣蕃族の中でも最も慍悍な種族であつて曾てはこの一族の爲に當局は多大の犠牲を拂つて大討伐を行つた事がある。彼等は勇敢であり、豪膽であり、頑強であり、又敏捷である。山を飛び廻る事野猿の如き彼等はこの偉大な天險に頼つてあくまで反抗を續けた。之には當局も可なり弱つたものであつた。現今では彼等は歸服してよく當局の意に従つて居るが、然し何時蜂起するやも知れない懸念から軍隊を駐在せしめ、非常時に對しこの道路を修理し駐在所を配置し又電話を通じて緊急な場合に具へてある。岩を開鑿して切り立つた斷崖の横を絡んで作られた、か細い路は危くも通じて居る。この道にあつて下を見下せば、深淵に暗い水は渦巻き碧淵に白い玉は躍る。對岸の急な斜面には蕃屋が二、三こびりついた様に點在し加ふるに氣紛れな斷雲は峯頭より轉じて溪間を放浪する。

眞にタロコ峡谷は壯大と云ふ事が出来る。その突兀として聳立した斷崖の雄大さは他にその比を見ないものである。然し筆者をして云はしむれば尙之に加へたいものが二ある。その一は森林であり他は川床である。

今にも崩れ落ちる様に直立した大斷崖は壯觀無比である。然し惜い哉之には潤ひが足りない。僅かにかゝる雑木の類は乾燥した感を與へるに過ぎない。若しもこれに美しい樹木の密生がこの兩岸に飾られてあつたならば如何ばかり美しからうかとは、あながち筆者のみの感想ではあるまい。次に川床である。これには緊張味が足りない、弛緩して居る。徹頭徹尾息もつまる様な奔湍の連続でもなければ又梓川式の緩かな流れでもない。さりとして又激流岩を噛み奔湍淵に躍ると云つた様な急流と平和な潺緩たる流れとの交響樂もない。又その水は普通の場合稍々濁つて居る。これは水晶の如く透明な方が望ましい。

以上は極めて平凡な正統的美學の見地から叙したものであつて、決してこの意見が絶對的に正しいとも筆者は思

はない。内地の自然に培はれた筆者は結局内地式的美を求めて居るのかも知れない。

されど亦タロコの溪谷の美を以上の様な型にはまつた觀賞法を以てするのを間違つた様にも筆者には思へるのである。何の虚飾もなく無造作に立ちただかつた岩の屏風、ノスタルヂアを誘ふ赭色の岩肌、透明に澄みもしない溪水、又強烈な南の太陽、それ等は前述した様な人懐かしい自然、優美なる自然、整ひ過ぎた自然とは全く對蹠の位置に立つ又別な美學の創造に依つて始めて解し得る自然の一表現ではあるまいか。臺灣の自然美はノスタルヂアから離脱しなければ觀賞し得ないとは、或る時筆者が痛感した事であつた。

八月四日、余はこのタロコの溪谷を溯つてシラツク駐在所に着いた。このシラツク社はタロコの中心地とも云ふ可きタビトから四里許り山奥にあり、タビトより略北に入り込んだ谷を二里許り溯ると谷は二分して右すればタウサイ溪、左すればコワヘル溪になる。このコワヘル溪の右岸を一里餘溯るとこのシラツクに着するのである。途中花蓮港から五十八の餘り若からざる體軀を携へた阿部善助翁と道連れになる。同氏は今回の一中の登山計畫を聞き行を共にしやうと馳せ参じたのださうで、宮城縣の産、若くして臺灣に渡り、討伐當時警部補として蕃人繰縦の任に當り、又退職後は臺灣東海岸山地の礦物探檢に老軀をいとはず従事されて居る一種の氣骨を有する人で、御互ひに老壯の差こそあれ山に對して鬼印的の性格は二人を隔意ない談笑に導いたのであつた。道すがら危険ではあるが愉快な探檢の模様や山の話に花を咲かせながら行く。氏が純朴な山の人である蕃人をよく理解し同情を持つて居るのには非常に同感を催し、又好意が持てるのであつた。天氣は稍曇り勝ちで、初めて見るタロコの溪谷は薄い陽光の下に展開し、峰頭を渉る斷雲の動きは緩かで、次第に雨雲は濕氣を帯びた山氣の中に低迷して來る。時刻を超越した二人は岩ある毎に立止り流れある毎に憩ひ、又草ある毎に見入つて、一向に涉々しく行かず途中蕃人と無駄話

○中央尖山の登攀 鹿野

八六

をして深水温泉に浸り、神聖なる處女峯に至る準備として俗界の汚れをあくまで流し去つた。温泉は川床に近い見事な石灰岩の岩床から湧き出で、透明で快い。この温泉はタロコ蕃討伐當時深水大尉の發見に係るものであると云ふ。湯に浸り乍らも思ひは常に中央尖山に飛ぶ。眼の前を惶しく流れて行く溪水に見入つて、再びこの水の仍つて来る水源、中央尖山の山懷に思ひは暫し放浪する。

この訪れを歸りの日に約して、尙も溪間を傳ひ、いよ／＼雨雲の氣色ばむのに足を急がせてシラツク駐在所に着いたのは五時過ぎであつた。淋しい駐在所だ。雨雲は一面に擴つて、白い色はこの山境を塗りつぶし、溪谷の岩壁の頭丈が黒くその面をぼかす。愈々夕方の訪れと雨雲の進軍である。天氣を氣づかひ、ほの暗いランプの下に地圖を幾度も見直して見る。この五千尺の高所では蚊軍の襲來もない。明日來り會す可き一行の姿を思つて厚い夜具にくるまつて夢路を辿る。

明ければ八月の五日である。一行と落合ふ日である。そして、明日いよ／＼奥山行の準備をする日である。天氣は良くない。大氣は濕氣を含んで、薄れ又濃くなる白い雨雲の裾からは細かい霧雨がはら／＼と落ちる。然し何となく明るい感じに、やがて晴れるのを當てにしていそ／＼と準備を整へる。時折眺めやる窓の外には南畫風の山が細雨に煙つて、徐々と動くともなく動く雲の動搖に、山の黒い頭が現れては薄れ、又消える。雨雲の晴れ間に外に出て四邊を見渡すと、このシラツクは山にとり圍まれた境中にあつて、東北にはコワヘル溪の複雑な谷を隔て、三角形を三つ並べた三角錐山（八八八二尺）が雲上に頭を抜き、右手に海鼠山（五一〇尺）を指呼する事が出来る。

雲の上昇に仍つて突然現れ出たシラツクの背後は急な山稜で、ロサヲ蕃社に通ずる蕃路は蚯蚓の跡の様に認められる。振返つて、中央尖山の方向に眼を移しても、目的の山は前山に遮られて見えない。

やうやく一行を迎へる事が出来たのは三時頃であつた。早速新沼氏に會つて一行との顔合せも済み、直に準備にとりかゝる。一行は全部で二十人で、タビトから四里の道を行んで来たとの事である。

二十人となるとその荷物も大變である。これに五、六日分の食糧と露營用具がある、又蕃人の食糧がある。これ等を等分に分けて、蕃人に背負はせるに過不足ない様にするのは容易な事ぢやない。山行に連れて行く蕃人の頭數も揃ひ、略萬端の用意も出来て一風呂浴び、新沼、瀬古氏等と一室におさまつたのは、薄闇の迫る頃であつた。山行につけて氣になるのは天候の問題である。殊に蕃人を除いて、何人も今迄入つた事のない未知の領域への門出には、天候の如何は生死を決する問題である。同じ思ひで皆が見上げる所は、何れも空の色である。空模様はどうも芳しくない。薄暗い空の地に徂徠する白雲の動きに、つい眼の前の山の頭が現れては消える。

この時堂々たる體軀に、白い山羊髭ある温乎圓滿な相の人物が窓から現れて、我々に刺を通す。それには花蓮港廳研海支廳第五監視區駐在警部補今村榮次郎とある。我々の登高しやうとする中央尖山は、蕃人の居住する地帯所謂蕃地にある。即ち行政區域以外の地にある。この蕃人の操縦には臺灣總督府で警察の理蕃課が當つて居るのであるが、この様な關係上未知の領域中央尖山に登高せんとする時には我々丈の單獨行動を許されないし、又運搬人夫たる蕃人の狩集めや、道案内としての蕃人の斡旋に、是非とも、その地方の支廳乃至郡の助力を得なければならぬのである。この助力の現れとして通常理蕃課の定めによる搜索隊を編成し、我々の守護に當る好意を提供してくれるのである。

これには人數の多少や、引卒蕃人の數、地域の如何によりて増減があるが、この行には警部補一名巡査部長一名巡査二名警丁一名が同行して下さる事になつた。この搜索隊の指揮官として、今村榮次郎氏は五里許りのタウサイ山里駐在所から來られたのである。

氏はこのタロコの地でも古手でタロコの三羽鳥として知られ、タロコ討伐當時からこの地方の蕃人の討伐や操縦に功績のあつた人で、この方面の地理や蕃語の造詣に、又蕃人間の信望に於て第一人者と稱されて居る。この有力なる氏を我々一行に迎へる事が出来たのは、如何ばかり力強く又我々成功の因が如何ばかり氏に負ふ所大であるか知れない。

外には全く夜の帳が下された。劇しい雲の動きは細雨に變り、駐在所前の廣場にはうらめしい雨滴の音が聞えるのであつた。明日の出發は五時である。愴惶として寢に就く。興奮した頭には水量を増したコワヘル溪の溪聲が耳について寢られない。

八月六日、床を蹴つて窓外を眺めたのは四時頃であつた。未だ明けやらぬ薄闇の中に太い雨條はシト／＼と線を引き。コワヘル溪の溪聲は大きい、昨夜上流は雨が降つたと見える。敢行か？ 休養か？

晴雨何れかに迷ふ雲と同様に、こちらの決心も又迷はざるを得ない。しばし茫然として居る中に蕃人が昨日托した荷物を背負つて、三々五々廣場にと集つて来る。そしてどうするのだと聞く、引きしまつた體軀よ、炯々たる眼光よ、鐵の如き腕よ、敏捷そのものゝ如き脚よ、腰にかゝる彎曲した尺餘の蕃刀よ。我々は御身達に頼らなければならぬ。山の人である御身等蕃人の、經驗と力に頼らなければならない。この數日間努力と危険とを分つべき蕃人は決して他人の様には思へないのである。雨は今日一日降ると云ふ。蕃人の言は信じてよい。結局より以上の活力を更に養ふ可く、今日一日を自由な休養に過す事になつた。いざ出發とねぼけ眼に起された連中は、喜び勇んで又も暖い寢床にもぐる。

胸も高まる憧憬の山の門出にはさう安閑と寢て居られるものではない。もぐつた寢床から、又も匍ひ出して、荷



南湖大山西斜面六合日より東方に中央尖山を望む

物をいぢくつたり地圖を見たりする。

天氣は左程悪くない、降るみ降らずみの天候である。附近に散在する蕃屋を急な山坂を上つたり下りたりして訪れる。出發延期となつた今日、蕃人達は圍爐を圍んで苦い煙草を燻らして居る。彼等は余に、一緒に山に行くのだと云つてはなつかしさうな眼をする。片言まじりの蕃語で山の様子を尋ねる。余は今までに蕃人達とは、實に愉快な山旅の日を數多く過した。歩く所は原始の氣漲る臺灣の山岳、それに又、余の相手となるのは浮世の風を超越した純朴の野人である。これからも又この自然人と相交はる機會があるであらう。少くともこの數日は余の熱愛する蕃人達と山に日を過す事が出来るのである。如何なる危険も如何なる冒險も来るなら來い。人間の奥底に潜んだ原始と野蠻を狩り出して、出来る丈闘つて見たい。何時も乍ら奥山行の前には必ず起る興奮を、無理強いにした沈着さで壓へつける。勧められた自家用の粟酒に早くも洵然となつて、小雨降る中を駐在所へと歸る。

今村、新沼、瀬古の諸氏は地圖を擴げて評定の最中である。元來今度の山行は全く未知の領域で、皆目見當がつかない所に行くのは不安でもあり、又面白くもある。初め地圖上のみで中央尖山の登攀の計畫をした時は、タウサイ方面からタウサイ溪を溯行し尖山の東肩から登る可く豫定したのであるが、この計畫を所轄の花蓮港廳に紹介してみると、廳はこれをその地元のタウサイの主たる今村氏に紹介した。所が今村氏は曾て各蕃社の狩獵區域の調査上、又附近地勢の觀望上この東肩から尖山行を企てたのであるが、時恰も冬期で積雪のためと險しい斷崖に遮ぎられて登頂を果さなかつた經驗があるので、これを尖山附近に狩獵區域を有する關係上、地理に詳かなシラツク社方面の蕃人に聞いた所、彼等はこの方面に度々狩獵に行くので路を知つて居ると云ふ。それでこのシラツク社を根據地としこの方面の蕃人を教導としてこの奥山行を決行する事になつたのである。

この様にこの山行は全く蕃人を頼りの心細い山旅なのである。そしてその途中も露營地も何れに選ぶ可きかは分

らないが、兎に角中腹に蕃稱ブレンノフと云ふ水のある所があり、其處で蕃人はよく野宿をするといふので、その先はそれからの事として一先づ其處まで行く事になつたのである。其處には朝早く立つと晝までに着くと云ふが、獸の如き蕃人の足と我々の足とは同じ尺度で律すべきでない。又、それから先が問題である。どんな悪場を通らねばならぬか。又あの三角錐を抜く最後の尖山の頂は如何であるか。これ等は、たど／＼しい蕃人の話を此處で聞いて居るよりは、一步でも尖山の頂近く近づいて研究するより外ないのである。我々は決心した。そして最後の用意を綿密にしたのであつた。

この山行には又、商賣柄博物學的の收獲が期待せられた。現今臺灣が相當調べられて居ると云つてもそれは低い所であつて、未探險の地方そして高山領域は未だ暗黒に近いと云つても過言でない。中央尖山地方に於ても又同様であつて、地質地形的の問題は別としても、如何なる珍奇な動植物がこの探究により齎られるかも知れないのである。この行に於ても最大の努力を此等の收獲に注ぎたいと思つたのであつた。余は後に當局の許可により蕃地に於ても銃を使用する事が出来る様になつたが、この時には未だ持つて居なかつたので、この不便を補ふには、どうしても蕃人の助力を借りなければならぬ。余は、蕃人の弓自慢のものに弓矢をもたせ鳥や獸を射らせて、これを賃金制度で買ひ上げる事にした。この方法は感心した方法ではないが、この場合は非もない。弓で射られた小形の獸や鳥等は甚だしく破損せられるが、この未探險の山の博物學的の智識を少しでも得たいと云ふ欲求の前には問題でない。鼠がいくら、栗鼠がいくら、ムサ、ビ、イタチがいくら、小鳥がいくらと、法外な値で以て彼等を驚かし、彼等蕃人の助力を藉りる事になつた。

我々の居る室の窓に群つて好奇の眼を注いで居た蕃人も、一人二人と歸つて行つた。そして静かな深い夜に、蟲の音が響いて來た。明日はいやが應でも出發しやう。未知の領域よ初遊の地よ、床に入つてからも興奮は俄かには

去らないのであつた。

中央尖山附近略圖
約 $\frac{1}{10000}$
等高線間隔500尺



一行二十人に蕃人の人夫四十人を加へて都合六十人、内地の山行とは異つた半ば探險的のこの大部隊は、長い縦列を作つていよ／＼、憧憬の山へと歩を進める。余は今村氏等と共に一足先へと出發する。

駐在所の裏より坂道を下り、清冷な谷川を岩を飛びつつ渡り、相當急な坂路を一氣にあえぎ乍ら上る。濕つた霧氣が踏み分けて行く草や灌木に宿つて、霧と草との香が鼻をつく。漸く明るかつた四邊も暗れやらぬ霧が棚引いて

二、シラツク出發

八月七日、床を蹴つて外を眺めると天氣は相變らず餘り芳しくない。五時である。早朝の薄明に白い霧が山をぼかして居る。急いで朝食を食べて居る中に、蕃人は三々五々、山の様な荷物を背負つて集つて來る。霧をついて蕃人の友への門出は肅然たる氣持になる。午前六時いよ／＼出發である。

居るので、山の様子もよく分らない。その濃淡の隙間からは森の密生した山腹や、紫色したガレが時折のぞく丈である。間もなく茅戸の尾根上に出る。露しげく丈高い茅を分けながら三十分も進むと、途中舊コワヘル蕃社から来た路を過ぎて一寸した山の山腹に出る。其處には粟が作られて、白い顔面に刺墨の跡生々しい女が一行を見送る。此處が蕃社から一里足らずの所でもあらうか。此處が人間の香を嗅げる最後の場所、これからは全くの原生林の森林中を傳つて中央尖山の山懐深く分け入るのである。此處で暫時休息する、丁度黄色くなつた粟の穂が實つて地を制ひ、雨のために和げられた穂の色は、これから奥山に行く者にとつては人懐しい感じを與へる。

天氣は相變らずである。一足先へ出た我々も足の早い蕃人には直ぐ追ひつかれて、彼等は我々の傍に、ドツカリ荷物を下す。見れば彼等多くの手には六尺の桃の木の長弓が握られ、又それには二、三本の鳥用の矢さへ添へられて居る。余は此等蕃人の成功を信じて疑はない。武勇優れた彼等は必ずや余を満足させる事であらう。彼等の勇ましい様子に思はずも微笑んで、マーガル、パハンネツク等と、危い蕃語を放つて見る。バラ／＼と起き上る彼等にせき立てられて、我々はいよ／＼この森林中へと歩を運ぶ。

森林の樹種は多く落葉潤葉樹で、タイワンハンノキ、ムシヤダモ、タイワンクルミ、ハスノハカヘデ、アリサンハヒノキ、コバノシロダモ、ミヤマシキミ、ウラジロヤツデ等が眼につく。陰濕な森林である。折からの濕つばい天氣に森林中は殊更陰鬱で過ぎて行く我々の頭上よりはハラ／＼と時折雨滴がこぼれる。道は稜線の右側稍下を上しながら傳ひ、その下には、一、二千尺の所からコワヘル溪の本流が涪々の音を送つて来る。路は蕃路とは云へ思つたよりよく、急な斷崖等を絡む時は丸太が用意せられて居て左程の困難を感じない。この地方の蕃人がこの方面に屢々狩獵に来る事が推定せられる。

路は尙もこれ等の木の下道を過ぎる。下草は余り高からず、林中にはムヨウランの黄色い花梗が丈餘も地を抜き、

上下する度毎につかまる岩角にはイラクサの棘が待ち構へて居る。時折左手からは清らかな小流が湧き出でて谷間へと落ちて行くが、水は石灰分を含んで居るのでうまくない。岸邊に青い苔を着て居る石も多くは石灰沈澱を被つて淡褐色を呈して居る。一行は黙々として歩む。時々足を踏み外して、谷間に落ち込みさうになる事もあるが大した事もない。灰色の空からは遂に細雨がシトシトと降つて来てこの暗緑の淋しい森林の空気を一層淋しいものにする。森林の幽寂は益々加はり、枝の込み合ひ緑の茂つた邊には怪しい霧の妖精が宿り出す。さつきから谷間の茂みからはミ、ジロチメドリの、ホイビー、ビー、ビーと呼ぶ聲が、他の小鳥の聲を壓して響いて来る。そしてかすかな羽ばたきと共に、又別な鳴き聲を送つて来る。この森林中には椎茸やセンボンシメヂが、數日の陰雨に勢よく倒木の上に生え揃つて居る。夕食の足しにもと見つける毎に蕃人に採らせて行く。もう可なり來た時分だもう半分は來たらうと蕃人に聞くと、笑ひ乍らうなづく顔に稍ホツトする。一行の減入つた心持に飯でも食へば少しは元氣が出るだらうと、少し晝には早い乍ら晝食をすます。

これは平凡な経験乍ら、山頂の英姿を眼前に仰ぎ乍ら登るのは元氣が出るものである。然しこの様に出發以來一度も目的の山を望まないのはそれ丈暗示的で良いかも知れないが、中々もつてそれ所ではなく待ち遠しいものである。我々一行の休んで居る眼前の僅かに開いた木立の隙からは、天氣ならば中央尖山の頂が見えるさうであるが、白い霧はその奥に展開すべき雄景を全く覆ひ隠して居る。未だ目的地への半分しか來ないのである。この果てしない森林の擴り、行つても同じ様な緑の帳、時々木立が空いて視野が開ける毎に空に眼を遣つて、白い霧の彼方に何物か見やうとして見る。然し休息地を出發して同じ様な減入つた氣分で歩いて居る中にも、我々は次第に露營地に近づいて居る事は事實であつた。前に見慣れた木の種類が知らぬ間に影を潜め、その代りに見慣れない木が姿を現し出した。そして紅の肌と女性的な直線を抜く紅檜が、あの夢みる様な枝を擴げ出して來た。紅檜が出て來れば

相當の高さに上つたのである。然し露營地が實際の所如何程の高距にあるかは分らないのである。余は蕃人にもその高距を植物の分布の上から、大約推測しやうとして、其處には、ハロンはあるかと聞いて見ると、あると云ふ。何れにしても、高距の上では、此處から左程遠くはないのである。

雨は前より激しくなつて來た、午後の天候である。思ひなしか暗くなつて來た様である。前から鳴いて居た山鳩（タイワンジュズカケバト）の聲が、一層胸にしみる。仰ぎ見る大きな木立の一本の枝には、霧のヴェイルに呑氣に構へた山鳩が三羽許り餘り高くない所に止つて居る。今村氏がY巡査の騎銃をとり上げると鳩は人聲に驚いて林の奥深くへと逃れ、淋しい聲は遠くから又傳つて來る。空は確かに暗くなつて來た、雨も劇しくなつた。我々の衣服も又相當濡れた。いよゝゝ急ぎ足に行く。無心に進む余の肩を一人の蕃人が叩いてブレンノフは彼處だと指さす。見れば、眼前の開けた木立の彼方には、森林に被はれた山が急な斜面を前にしてたちはだかる。その山の中腹は確かに平坦なのが明かに認められ、其處からは紫の煙が一條細く上つて居る。先へ行つた蕃人が火を燃やして居るのだと分る。一行は辛うじて元氣を恢復し急ぎ足に行く。直ぐに音高い溪聲が響いて來る。一寸急な悪場を下りると下は河原でコワヘル溪の水源である。下流の様は石灰に白濁せず、此處こそは清冷玉を溶かす様な清浄さである。露營地が近いと云ふ安心に、一行は喉を潤し汗を流す。タロコの下流は斷崖こそ大規模ではあれ、何となく物足りない谷川の趣なのに、此處こそは中央山脈の胸元近く抱かれた清浄無垢な仙境である。水は飽くまで清徹で、その兩岸を飾る岩壁の美しい事よ、珪岩や片岩に圍まれた硬い美しい兩壁、そして川床、清い水に剝られた岩のただすまひ。上手は淡赤い急な岩壁になり、それを傳つて二條懸る美しい銀線の下には、白玉の躍るタルがこれを受けて居る。流れが速く又相當深いが、これには蕃人獨特の木の枝で作つた簡単な假橋が残つて居たので、割合に容易に對岸に着く事が出來た。渡ると直ぐに急坂である。最後の一ファンバリをファンバツて、今日の露營地ブレンノフにや

うやく着く事が出来たのは三時半過ぎであつた。

蕃稱ブレンノフは平らな所の意である。成程この邊は山稜の中腹に可なり廣い平地を存して居る。四邊は、ヒ、ラギカシ、コバノシロダモ、ホソバシラカシ、ニヒタカガマジミ等が茂り、これにタカネゴエウ、タイワンイヌガヤ等の針葉樹が混淆して居る。植物の分布から見て、この地は明かに八千尺の高距を有して居る事が分る。この森林の下地は陰濕性の草木が茂り、水は所々に湧いて流れを作り飲料には事欠かない。

總勢六十人の今夜の用意は始められた。この木暗い森林の氣の中に、蕃刀の木伐る音は丁々と響いて、木は刈り拂はれ天幕は張られた。薪は集められて懐しい焚火は作られ、景氣のよい青い煙は林中にたな引く、大部隊の炊事用の釜からは夕飯の湯氣がのどかに立昇る。雨もしげなくなつて来る、又夕闇も次第に迫つて来る。皆は大童になつて働き出す。

このブレンノフは如何なる所にあるのか？ 附近の地勢を見て置きたいために余と新沼隊長とは更にこの奥なる高所に偵察に行く事にする。針葉樹の下草は直ぐにオヒワケメダケの叢生になり、露にビツシヨリになつて一寸した急坂を攀ちて行く途中に、蕃人の狩獵小屋が數屋、檜の皮を葺いて立派に設けられて居る。坂に背を向け風を防いだこの山小屋は構造こそ簡單であるが、地利を辨へた蕃人の經驗から作られたもので、此處に宿れば如何なる暴風雨にも絶対に安全である。自由なる狩獵の日よ、彼等蕃人は時折この様な狩小屋を根據にしては、鹿や猪を狩りに終日何のこだはる所もなく山を走り廻るのである。天井に吊された水汲の瓢箪、隅に置かれた使ひ古した鍋、黒くなつた鹿の頭骨や羚羊の角、それに蕃刀、懐しく遣る白い焚火の灰、それ等は彼等の愉快な日を想像するに充分である。萬端整つて居る小屋の中には、薪や付け木まで用意せられて居る。

これはいゝものを見つけたと喜び勇んで尙も坂路を登ると尾根上に出る。樹木はなくなり、眺望は濶然と開け、

薄緑の草が廣く擴つて居る。然し一面の霧に眺望は遮られ、所々に立つ木の立木が如何にも淋しさうだ。天氣ならば恐らくは此處からは、中央尖山の英姿が見られる筈である。そして又恐らくは、この尾根は尖山の胸元に續いて居るのであらう。蕭々と吹き渡る高山の寒い風に又元來た道を辿る。附近の地勢を幾分なりとも知るを得、又狩小屋を見つける事が出来たのは望外の幸ひであつた。

露營地に歸り着くと一行は我々を待つて居て、直ぐに夕飯をしたゝめる。欲張つて採つて來た茸が味噌汁に山の香を添へ、疲労と空腹は元氣と満腹に變る。困つた事には雨が甚くなつて來た。木の葉を叩く雨滴の音はいやが上に増す。上から來る雨は平氣であるが、下地の濕つて居るのはどうしやうもない。先刻發見した小屋は少し狭いが、位置もよし下が乾いて居るのが何よりなので、疲労のためいやな顔をする一行を無理に移す事にする。この様な奥山行に露營地の揀定は絶對的に必要である。天候の具合一つで、幾日滞在する様になるかも知れないからである。

面倒な引き越しもやうやく済んで、皆が蕃人と一緒に小屋の中に納まる事が出来た時には、もう夜が全く暗い帳を降して居た。前面に自由な繁茂を見せて居る森林の頭もかすかにそれと判ぜられるに過ぎない。焚火の赤い色を見て居ると山を思ふ、そして山の天候を思ふ。明日はどうなるのだ。これから先きは全く如何なる難所が待ち構へて居るのか、又山頂までに如何程の距離があるのか、又飲料を得る場所があるのか、皆目分らないのは、何と云つても一行の統率者の一人として不安でならない。結局明日は出来る丈早朝出發し、防水、防寒用具其他非常時の食料以外無駄なものは全部省いて身輕になつて行く事にし、若しも距離が遠くて時間が足りない場合には、岩蔭にでも野宿してこの尖山行を決行しやうと云ふ事になつた。

計畫が決つて皆は寝に就く。いよ／＼最後の突撃である。寝なければならぬ。いやでも就眠時間を充分に採つ

て疲労を恢復しなければならぬ。ゴロリと横になつた傍には細い火が燃えて居る、そして蕃人が寝て居る。森々と更ける夜、この静寂はどうだ。深夜の寂寥と襲ひ来る寒氣、皆はこの山中の一角に寝て居る。自分丈が起きて居る。深山深夜の不可思議な魅力に次第に引入れられて行く中に、この様な所に自分の生命と魂が唯明日の劇しい登攀を一圖に思ひつめて、呼吸して居るのが全く不思議の様に感じて來た。それにしてもこの緊張した瞬間を自分は唯楽しんで居た。明日の登攀が若しも簡単に済んだら、早速下界へと引き返すのだ。さすればこの山の試練も少く愉快な蕃人との交遊も日少くして終るのだ。自分は一方に於て明日の登攀の成功を祈りながら、又他方に於てこの山行が波瀾重疊に富んだ多難なものである事を切に望んで居るのであつた。

三、露 營 地

八月八日、グツスリ寝込んだ身體と魂をゆり起されて飛び起きたのは四時頃であつた。新沼氏が今日はどうしやうかと、未だ明けやらぬ暗い空を指して相談せられる。大氣は非常に雨氣を帯びて居る。そして氣懸りなのはかなり急な速さで走つて行く黒い斷雲の一團である。瞳をこらして見ると、この雲は何かしら力強い底力を藏して居る様な氣がして來る。我々はこの場合迷はざるを得ない。殊にこの二、三日中に暴風雨がある事を測候所から聞いて居た我々である。毎年もの深山の登攀の成功に今年こそはやられさうだと思つて居られる新沼氏である。この山行は大いに自重してやりたい、又一日延びればそれ丈愉快な日が多くなると思つて居る僕である。この黒雲の現出は次第に出發延期説に導くのであつた。ポツリ／＼起き出す皆と尙も話して居る中に、雨さへ降つて來る。かうなれば文句はない。又も寢床へともぐる。

かなり寝込んで眼をさましたのは、六時過ぎであつた。朝飯を済まして煙草をふかして居ると、二、三人の蕃人

が鼠を持つて来る。昨日頼んで良をかけさせて置いたのがかゝつたのである。見れば大、小二種居る。蕃名 Kaurit と Kaurit Dugeiyakka である。この高山に於て哺乳動物は稀少になるが、鼠類は相當に發見せられる。そしてこれ等は平地のものとは全く異なる山地種乃至高山種であつて、高山帶動物分布の研究には最も重要なものである。この收獲を喜んで居る中に、雨は止み、稍明くなつて来る。ヂツトしては居られず、少しでも山の様子を見て來やうと、新沼氏と原徹郎君、それに案内知つた蕃人二人に弓を持たせて、偵察にと出發する。他の蕃人には精々鳥を取れと云ひ残して行く。

昨日來た尾根まで來て見ると、茅戸の緑はすが／＼しく、露にしとつたニヒタカシラタマの實が寶玉の様につや／＼して、ニタネス、キの間から顔を出す。心もち明るさへなつて、コワヘル溪の水源地方の山々が稍晴れさうになり、雲の薄れ目からは懐しい青い山の色さへ覗いて來る。この一寸した明るさにもイワイヤマヒカゲ、ヲジロヒカゲ、ニヒタカゴマダラシロテフ、ホツボアゲハ等高山性の蝶が心浮き立つて尾根の此處彼處を飛び廻る。空こそ晴れないが天氣は思つたより有望である。スガ／＼しい朝の空氣にのんびりして居ると、突然大きな崖崩れの音がコワヘル溪の水源地方に響き亘る。崩れる光景こそ窺へないがその規模はかなり大きいらしく、その岩を呼び谷間を轉落する音は韻々としてこの山境を震撼し、奥山行を控えて居る我々に一種言ふに言はれぬ感を與へる。

中央尖山の方は一面に雲が蔓つて居る。そして我々の立つて居る尾根は果てもなく北東の方向に續き、其奥は雲に没して居る。尾根は相當廣く圓味を帯び、傾斜は割合に緩かである。我々はこの尾根を出來る丈辿つて四邊の地勢を觀望しようとして露しげき下草を踏んで進み出す。道々ニヒタカシラタマの實を口にほゞばりながら行くと、傾斜は次第に加はり、闊葉樹の森林を通り抜けると、尙一層激しくなる。行手には圓い隆起が雲の中から現れ出る。これに上れば四邊の眺望はよく窺へると思つて漸く辿り着けば、更に上には又も同様の隆起がある。これに釣られて

次第に登る中に下草はオヒワケメダケの短生に變り、ユヒタカトドマツの太い立枯れの幹が白骨の様な姿體を灰色の空に悄然と何木も曝して居る。路も無くなつて來た。傾斜は加はりメダケに茨の數も増して來た。そしてトドマツの巨大な倒木が無残にも縦横にその殘骸を横たへて、我々の行手を塞ぐ。その慘たる光景は山津浪の跡の様で、この尖山を領する山神の兇暴性を見せつけられる様な氣がする。藪を分け倒木を踏み越え又は傳つて更に登る、四邊は相變らず落漠たる景色の連りである。皆は無言だ。タイワンジュズカケバトが、何處からか飛んで來て、淋しい高いトドマツの枝に止る。蕃人が弓矢を持つてこれに近寄ると、鳥はこの枝を去つて、雲の中へと消えて行く。倒れたトドマツには時折ウチハタケが生えて居る。これを取つては休む暇に焼いて食べる。香はたまらなく良い。途中危い倒木の上を傳はる様な箇所は蕃刀を持つて刻目を作つて行く、我々はこの様な同じ尾根の連りを唯ひたすら登つた。そして三時間以上をこれに費した。併し尾根の様子は少しも變らうとしない。地圖に依ればその時間と云ひ距離と云ひ、相當尖山近く來て居る筈であるが、この邊りの様子は目的地にかなりの隔りのある事を示して居る。尙も少しく地勢を明かにしたいものと小半時も登つて見ても矢張り同様な状態である。灰色の霧、淋しい立枯れの木、荒涼たる尾根の連り、そして肌寒い高山の空氣と滅入る様な森閑さである。約一萬尺までも來たらうか、變るべき周圍が少しも變らない。この尾根の長大なのに今更の様に驚いたのである。尙少し行きたいのを止めて前進を打切る事にする。斯くして疲れた足を引きづつて、露營地まで歸り着いたのは一時半であつた。

尾根は斯くの如く長大である。この偵察に依つてこの事實を確かめ得たのは幸であつた。この様子では、朝普通に出發したのではこの尾根の登攀に丈でも時間をとられて、尖山近く行く頃には午後になり、又唯さへ悪い天氣は午後には必ず尖山を雲で覆つて終ふ。而して途中に水があれば其處で露營してもよいが、あの尾根の様子はありさうもない。それで甚だ英斷ではあるが、朝食と晝飯を共に今夜中に作つて置き、出来る丈輕装して夜中の十二時

松明を持つて夜間行動を開始し、ひたすら登つて行けば夜の明ける頃にはこの尾根の終りに着くであらう。そこで登れさうなら直に登攀を始め、又その間に露营地を蕃人に捜させる。又駄目なら尙一晚露营地に宿泊して最後のフンバリをやる。事此處に及んではこれより他に方法がない。夜間の行動は感心しないが、今日偵察した様な尾根なら天氣さへ良くユツクリ行けば行けない事はないと云ふ事になる。斯う決ればいよ／＼準備である。蕃人を皆集めて、松明となすべきハロン(油松)を取らせる事にする。蕃人達は大きな蕃刀を携へて思ひ／＼に森林の中に潜つて行つた。間もなくゴソ／＼と枝をかき分けて出て來た蕃人の背には澤山のハロンが集められて居た。これで準備も整つた。これからは少しでも體力を恢復すべく睡眠を採るより他にない。今晚十二時に起されるのだ。

皆は寝て居る。僕も眠むたい。然しオット仕事が残つて居る。それはこの附近の鳥や獸や昆蟲等を調べて置く事だ。今日調べて置かなければこの附近の動物を知る事は出來ないであらう。蕃人四、五人に弓矢を持たせ僕は捕蟲網を持つて、この森林中を此處彼處と歩きまはる。茂つた木の上からは色々の鳥の轉りが響いて來る。そして緑の幕には大きいのが小さいのや鳥の影が動いて居る。踏んで行く濕つぽい下地には獸の足跡が續き又は亂れて居る。鹿のが一番多い、それから羚羊、猪等のが認められる。蕃人は注意深くその足跡を眺めてはこれは雄だとか、雌だとか又何時間前に急いで通つたとか云ふ。彼等は如何にも残念さうだ。何故なら鐵砲を持つて來なかつたからである。

又携へて居る弓の矢は鳥を取る矢で、この大きな獸には用をなさない。鳥の矢は鋸齒を持つた竹の枝が、矢の尖について居るのである。鐵砲があれば鹿の一頭や二頭はこの場に於て獲られたであらう。それには理由がある。即ち中央山脈の東西にはタイヤル族とセーダツカ亞族との異なつた部族が住んで居る。彼等同志は昔から仇敵關係で互ひに首狩に餘念がない。そしてこの中央山脈の脊梁は丁度兩種族の狩獵區域の接觸點に當つて居るため、時にどうかすると狩に出た兩者が遇々この山上に於て相見ゆる事になる。さうすると其處には必ず戦闘が開始されて、何れ

か死傷を出さない中は納らない。この中央尖山に於てもこの例に洩れない。即ち西側からは溪頭蕃ピヤナン社、シカヤウ蕃の蕃人が来るし、又東側からはタロコの蕃人が行く。この様な懸念から飛道具さへ携帯を禁じたら大丈夫だらうと云ふ事になつて、持つて來させなかつたのである。この様な事情では是非もないが考へて見れば残念な事であつた。

この森の美しい原生林の中を、蕃人と共に、數多い蕃人の中でも最も武勇を以つて鳴るタロコの蕃人と思出多くも歩いて居る中に鳥の數々は次第に集められる。余は彼等が弓をひく様を忘れる事が出来ない。強弓の満を離れた矢が勢よく鳥や栗鼠に飛んで行く。次の瞬間には獲物が地上に落ちて來る。矢の尖が分れて居るためか時に矢は、樹上高く引つかゝつて落ちて來ない事がある。然し彼等はこれを捨てはしない。如何なる困難な立木にも躊躇なく危険を冒して登り出す。そして枝が細くて届かない所は、腰の蕃刀を揮つて枝と共に伐り落す、それは決してこの矢が惜しいのではない。獲物を得る事なくして無駄な矢を失ふのを又なき恥辱と心得て居るのである。余はこの武士的の氣分を嬉しく思つた。

斯くして夕方に、種々の收獲物に心躍らせ乍ら歸つて來ると、手に々々獲物を携へた他の蕃人は小屋に集つて余を待つて居た。それには新種と見なされるモ、ンガがある。翼を紫色に輝かし腹の茶色つばい綺麗な森の鳥、チャバラオホルリが居る。ヤブドリ、シマドリ、カムムリチメドリ、ヒメフクロウ等從來新高山より他、産地を得なかつた珍鳥の多くを集める事が出來た。これで、中央尖山の八、九千尺附近の動物は大體これをうかがふ事が出來る。この上部に續くべき又より貴重な高山帯の動物の收獲は一にかゝつて明日——短時間ではあるが、明日の奮闘如何にある。山に於ても最もその神秘と壯麗とを多く藏する山頂の觀察に、僅か明日の一部を充てるに過ぎないことは非常に物足りなく思はれるが、この様な場合は非もない。余は最善の努力を明日の行にかけるべく心に固く誓つた

のであつた。

外には、早、夕闇が下りて白い霧は益々濃く擴つて来る。今晚は眠い中に起されるのだ。皆は寝て居る。僕も横になつて居る。枕元には、二食分の辨當と大きな胴籠が明日の出發を待ちわびて居る。起きたら直ぐこの荷物を持つて出掛けるばかりなのである。乗るかそるかやつて見るのだ、今日一日の勞働に疲れ切つた僕は焚火のほそるのもそのまゝにして深い眠りに落ちて行くのであつた。

四、尖山に向ふ

八月九日、夢の中に蕃人の叫喚の聲が聞えた。驚いて起きて見ると、松明の火がねぼけ眼を強く射た。時計を見ると十二時二十分だ。深夜の靜寂に蕃人の聲高く呼び交す異様な響が出發の前の戰慄を強ひる。深山の深夜に時ならぬ物音は起つて、皆はドヤ／＼と起き出しガタコトと出發の用意は始められる。十二時三十五分、この行に幸あれ、いよ／＼出發である。各自に持つ松明に火は點ぜられて草木も眠ると云ふこの眞夜中に行動は開始された。縦列を作つて皆はこの黒い山を行く。長蛇の様なこの列に松明の火は勢よく燃えて、綺麗と云ふよりも物凄しい。森林帯を抜けて間もなく茅戸の尾根上に出る。霧は晴れ上つた。そして黒い寒い闇が擴つて居る。ふと行手を見て驚いた事には、この紺黒の闇を通して中央尖山の一塊が黒々とこの闇よりも黒く、翼を擴げて居るではないか？ 初めての行に於て仰ぎ見る尖山の雄姿、それは今迄の何よりも大きな構へを張つて居るのであつた。今迄容易にその面を見せなかつたこの山、それも遂にその顔を現はした。今日は有望か？ 然しこれも晝の訪れと共に又その面を雲の中に隠して終ふのではあるまいか？ その側山を従へて堂々と兩翼を張つて居る姿は實に雄大であつて、中央山脈の一峯として優に他に愧ぢないものである。闇に擴げられた翼、それは暗黒に棲ふ蝙蝠の何か知ら怪奇的なある

性格を現はして居る様にも思はれた。それにしても此處から尖山まではかなりの距離がある事が明になつた。果して今日登頂を終へて、無事歸還する事が出来るであらうか？ 斯く考へると心はせき足は急がざるを得ない。併し夜間と團體の行動である。足は思ふ様に進まない。

先頭は己に數町先に行つて居る。そして後尾は尙二、三町の所にある。赤い松明の列がゆらめき、見え隠れして山に登る様は、確かに變つた美しい光景だ。路は次第に悪く又急になる。一行は約十分乃至十五分毎に二、三分の休憩をとつては進み出す。足許こそ稍々悪いが、この木のない急な尾根條を晝間陽に照らされ乍ら登る事に比べれば反つてよいとも云へる。道は更に急になる。無造作に轉つた倒木の上等を渡るときに昨日刻んで置いた足が、非常に役に立つ。路は益々深くなる藪の中に没しそれを迎ふ事は容易ぢやない。時々路を探すに手間取る先頭の火が右往左往するのが分る。忘れられない夢の様な悪夢の様なこの難行の瞬間が四時間も續いた頃、暫時の休息をとるべく尾根上に休息する。そして元氣を恢復すべく朝食の半ばを平げる。

斯うして動かないで座つて居ると、そして一面に擴つた闇に流れる松明を見つめて居ると、又この寂漠たる空氣にふるふる團體の聲を聞くともなく聞いて居ると、走馬燈の様に色々の事が頭を往來する。不安、好奇心、希望、勇猛心……

そして、その奥に、糸を引いて居るものはあやしい山への誘惑である。何しに此處まで來たのか？ それは理屈では行かぬ、言葉に表はせない不思議なある力である。十五分も休んだであらうか、一行は又も同じ様な道へと歩みを續ける。松明の光に時計を透して見ると四時三十分を指して居る。

一行は尙も進む。もう夜が明けるのも遠くはあるまい。我々は可なり尖山近く來た筈である。それが證據には尖山の姿は見えなくなつて居る。尙も無心に歩いて居る中に朝に近くなつたためか、白い霧が大氣に滲み出して來て

居た。あれ程眼を射て居た松明の火が次第に薄れて、足元を見るのが楽になり、霧の幕は高山の朝らしい趣を加へて來た。オヒワケケメダケの藪がいよ／＼深くなる頃、急なかなりの峻坂を木の根岩角に摺つて攀ぢ登るとニヒタカトドマツの森林中へと入る。もう松明を消しても歩ける。參差たるトドマツの枝には蒼然たるサルヲガセが懸りその下には青く苔蒸した岩が轉つて居る。森林中に低迷する闇と霧は次第に消えて、時は已に晝の領域である。朝の訪れに寢不足の頭も稍々判然として、思ひ切りこの高山の大氣を胸深く吸つて見る。このニヒタカトドマツの純林は已に一萬一千尺近い事を示して居る。臺灣のこの高距には必ず現出する高山景である。ホノボノと明けかゝる森林中を夢の様に移る運んで居ると、簡単な狩小屋が二、三ある。會てタロコの蕃人が此處でビヤナン社の蕃人に首をとられたと話す蕃人の顔は、如何にも残念さうだ。この松林もやがて次第に丈低くなつて、ニヒタカビヤクシンの洒落たる姿が現れ出し、我々一行は遂に中央山脈の脊梁が間近かに見える所まで辿り着く事が出來た。時正に七時であつた。

五、尖山を見る

一行は此處に暫し休む。寒い筈である、腰を下すべき岩角には白い霜が下り、ビヤクシンの葉には薄い樹氷が宿つて居る。一行は森林帯に入つて、早朝の冷氣に慄へたのを覺えて居る。一面に立籠めた白い霧は頻りに動いて次第に明るくなつたかと思ふと、遂に懐しい美しい高山の澄み切つた日光さへ洩れて來る。喜んだのは我々丈ではない、足元に寒さに惱んだシホガマヤリンドウが俄に嬉しい面を輝かし、木々に宿つた露の玉は黄金の光に微笑み出す。寒冷に凍へたモリシヤクナゲの葉が生々しい光澤を恢復し、サルヲガセの綿な着物は蒼白い銀色に染つて、春光一過、我々一行を實に駘蕩たる氣分に逍遙させる。雲の動きと共に陽浴びる領域は擴大されて、中央山脈の低下



中央尖山頂上附近階段地より頂上の方向を望む(最高點は此處より見えず) 熊澤 熊太郎

した脊梁の岩壁が赭く映え、其處に生えて居るビヤクシンの一枝一葉までも判然と映し出す。果して今日は天候に恵まれるだらうか？ 少くともこの二、三日よりはいい事丈は確實である。神の與へたこの一日を以てこの山を訪れる事は出来ないものであらうか？ 夢にも見た中央尖山はもうこの邊りにその尖頭を抜いて居る筈である。雲の動搖は尙も盛んで軽やかに上昇して行く雲の裾からは遂に尖山の大觀雄景が現れ出した。一片の樹木をも纏はない稜々たる岩の尖塔、その頂上に纏はり付いた雲は拭ひ去られて、尖銳魁偉の全山容は今や我々の眼前にある。あゝ我々は遂にこの神秘的な恐るべき山の胸元近く忍び寄る事が出来たのである。果してこの山靈は一行の登頂を許すであらうか。雲の去つた尖頭の右肩には今や原始的な赤い太陽が昇つて、尖山の荒くれた岩壁は逆光線に紫に霞む。

一行は皆、今更の様にこの尖山の偉にうたれて居る。我々の前面に展開された斜面は優に七十度の急斜である。そしてむき出しの赤裸々な岩石は太古の劇烈な地形變動を語り、水平なるべき地層は此處に於て六十度近くの傾斜を判然と見せて居る。加ふるにそれは剝脫轉落常ならぬ粘板岩の構成である。この母體を離れた岩片が、カラ／＼と雨後の日の空氣を轟かせて谷底へと落ちて行く。尖山は日々に崩壞の途を辿つて居るのだ。余がこの尖山行を計畫した時には、各處からの遠望によつて急な岩壁の岩登りを敢行しなければならぬ事を知つて居た。然し他の臺灣山岳の多くが比較的尖頭を有せず圓い頭を有して居るのは、一に風化して崩壞し易い粘板岩の構成に仍るためであると信じて居た余は、この尖山が他と異り尖頭を有するは必ず他の岩石より硬い岩石で構成されて居る事を信じて疑はなかつた。硬い岩壁ならば相當急であらうとも、努力に依つては或ひは成功しないと限らない。余はこのためにロープやピトン等岩登りに必要な一通りの道具を整へて行つた。然し事實は今や眼前に直面して居る。それは粘板岩のポロ／＼である。それにしても眼前に一行を威壓する尖山の姿は實に堂々たるものである。それは遠方から打ち眺めたよりも一層の迫力を有して居る。我々は或ひはこの天然の障壁に遮ぎられて登頂を斷念しなければ

らないかも知れない。然しこの胸元近く来た丈でも満足と思はなければならぬものかも知れない。尖山の斷崖の下には崩壊したガラ／＼の岩石が長いスロープをなして、コワヘル溪の一水源に續いて居る。そしてその下方には粘板岩の礫を通して降つて来た水が銀線を閃かし乍ら更に下方へと流れて行く。山腹は未だ糲糊たる雲が靨鬱して去らないが、その合間からは夜中辿つて来た尾根が長々と續き、又更に下方にはコワヘル溪の深谷が森林の密生に被はれて居る。そして又遙か彼方にはシラツクで眺めた三角錐山が小さく見えて居る。若しこの附近に露營するすればこの水源の森林中に地を選定して、水はこの溪から蕃人に擔ぎ上げさせるより他に方法がないであらう。

雲は終始動いて止まない、そして中央尖山の山頂は或ひは隠れ或ひは現れる。今日の天氣も當に出来ない。この山頂が雲から解放されて居る間に是非とも登頂を果さなければならぬ。我々の前面の斜面は前にも云つた様に、とても取付けない荒くれた斷崖である。そこで一旦中央山脈の脊梁、尖山の肩の鞍部まで辿り着き、それから此處から見えない裏手を廻つて行かうと云ふ事になる。直に左方に見える鞍部までガレの斜面（この斜面は、尖山の斷崖程甚くない）を横ぎつて登り出す。ともすれば足元の岩石は搖ぎ、ガラ／＼と下の谷へと轉つて行くので注意しながら進んで行く。二、三個所危険な所も無事に通過する事が出来て鞍部は間近い。此處は比較的傾斜が緩かになり、粘板礫の崩れさうなものもなく大きな磊々たる岩石が固つて居て、ピヤクシン等も生え休息にはいい所である。これから先は急斜許りと想像され又飯時でもあるので、辨當をしたため元氣を養ふ事にする。岩の間には愛らしい高山植物が覗いて居る。ニヒタカハタザラの白い小さな花、ニヒタカマツムシサウの藤色の菊花、それから青いミヤマシヤジン等が眼につく。和かな日光は透明な大氣に漲り、マルハナバチやアブ等が花の間を忙しさに翼を響かせて飛び廻り、高山のはかない短時間の陽光を楽しんで居る。白雲の間から覗き見る青空は透んだ桔梗色、いやセリアン、ブリニューで、それと岩壁の輝いたブリ、アント、イエローとの對照は素晴らしい。この時東南の白雲の

切れ目から突然突つた高い頭が二つ顔を出す。これが問題になつたが、新沼氏と議論の末、太魯閣大山（一〇八六三尺）及びその附近の無名峯だと云ふ事になる。

六、尖山の登攀

さあ腹も出來た。雲の出ない中に登らなければならぬ。ガラ／＼の岩石から成つた傾斜地を一氣に登つて鞍部に着く事が出來た。時正に八時である。尾根はこの鞍部に於て極く幅狭く全くの瘠尾根になつて居る。東側は今一行の通つて來た傾斜地であり、西側は絶壁をなす崩壊地で赤つばい岩が峨々として急な斷崖を作りその下は覗き込む事も難しい。中央尖山は此處から見るとその三角錐の略三分の二の所に一寸した階段が認められる。望遠鏡の力を借りて偵察した後、其處まではどうにか辿り着く事が出來ると云ふ見込みが付く。天氣は晴れさうになり、又雲の徂徠がしげくなる。その度毎に或ひは陽氣になり又陰氣になる。山の面は刻々にその色彩を明暗濃淡に變へて行く。

綿を千切つた様な白雲の動く下からは次高山稜の雄大な山波が間近かに迫つて居るのが窺はれる。然しその全容は未だ雲のために遮られて見えす、時折怪奇的な大覇尖山（一七九二尺）の岩壁や次高山の斷崖がほの見えるに過ぎない。南湖大山も遙か彼方にその大らかな山容を見せ始める。南湖大山からこの尖山への縦走は可能であるか？此處から見た所では西斜面は物凄い斷崖が連り、餘程下を絡まない限り縦走は覺つかない事が認められる。蕃人の導くまゝにこの鞍部から中央山脈の長軸の方向に延びた急な山稜を登り出す。

道は稍、裏手に逸れてニヒタカトドマツやニヒタカビヤクシンが叢生した、晝尙暗い密林中へと導かれる。實に見事な森林である。六十度は確かにある急斜にこの針葉樹が、その眞直な幹を何本も直立させて眞黒く茂りに茂つ

た景觀は實に見事なものである。この様な景觀は内地の山岳に見られない所のものであらうと思ふ。下地は緑の草が柔く然も勢よく生え出でて、ニヒタカキンボウゲやフクトメキンバイ等の黄金色した花が咲きこぼれて居る。この急斜面を幹に縋り乍ら横に絡んで行く中に、濕つた苔に被はれた土の中から頭を擡げたユウレイソウを得る事が出来た。この植物が一萬一千五百尺を抜んずるこの様な高所に發見されるのに一驚した。この森林中を暫時潜つて行くと森林は途絶えて、尖山の頭から下りて來た無樹の地帯に出會ふ。これから上は恐らくは岩の多いのと風當りの強い爲とであらう、この様な喬木林は影を沒し、全くの岩場、ガレ、高山植物の草園、それから内地のハヒマツに比すべきハヒビヤクシンの波である。見上ぐれば頂上はこの階段地に遮られて見えず、この段になつた岩の廣場はその行手に微細な粘板岩の風化した小砂礫の急坂を前にして聳えて居る。この砂礫の急斜に至る前には一寸した岩場の悪場があるがそれもどうやら攀ち登る事が出来て、いよ／＼この砂の五十度もある斜面にかゝる。この砂地には種々の高山植物が現れて來る。ニヒタカセキチク、タカサゴカラマツ、ニヒタカマンネングサ、アリサンイチヤク、ニヒタカアザミ、ニヒタカアヅマギク等は最も多い。この様な急斜であり砂礫は崩れて來るので一寸骨が折れるが危険は全くない。この急斜面を喘ぎつつ四百尺も登ると傾斜は稍々緩くなり、ハヒビヤクシンが地に低く枝をくねらせて茂つて居る所に出る。この地帯も左程長くない、何分か後にはこの波も泳ぎ切り、尙暫らく登つて一行は遂にこの尖頭下の段の所まで取りつく事が出来た。

この階段は思つたより廣く優に百人位の人數を座らせる丈の餘地がある。割合に細かい砂礫で所々には大きな岩が頭を擡げ、或ひはハヒビヤクシンの群叢がある。北東は尖山の頂に續く岩壁であるが山頂は前の壁に遮られて見えず、尖山の東南の岩壁が物凄く見下される。風は時々かなりの勢で白雲の斷片をこの削壁へ叩きつける。この崩壊し易い風化した岩壁からは岩片が深谷の底へと物凄い音を轟かして落ちて行く。この無氣味な音に聞き入りこの

ポロ／＼の岩壁を見て居ると、自分達が此處に居る間にもこの尖塔が崩壊する様な氣がして来る。

太陽は、暖かな光線をこの平地一面に漲らせ、スレート細片は白く光つて眼に眩い。此處には下方には見られなかつた高山植物が又現出した。マーガレットに似たニヒタガシラヤマギクが岩角に美しい花を付け、コダマギクは



白い介殼の様な小花を絨氈の様に群生させる。又、絹の綿で作つた様な

南カハカミウスユキサウの花も見付け

る事が出来た。此處で第一の發見は

よリタイリンアカバナである。艶々した

葉にサツキツ、ジの様な桃色の合辨

花を丈低く砂地の間から抜き出して

中居る。よく見るとこれは南湖大山地

山尖の珍花として、他に分布を知られ

なかつた種である。又所々に見られ

るナンコシヤクナゲも、矢張、新産

地として報ぜられるべきものである。やがてかなり遅れた一行も全部此處に揃ふ事が出来た。尙も暫くの休息を採る。ビヤクシンの茂みには翼の早い鳥が鳴いて居る。蕃人が矢を放つても思ふ様に命中しない。

白雲の徂徠は益々急で風も加つて來た。時は已に早朝の平和な一瞬から險惡に遷るべき時刻なのである。風と共になぐり付けられる濃い白雲に太陽が暗く見え隠れする。山は荒れ出した。失敗するとしても早くやつて見なければ

ばならない。此處までは來られても眞の難所はこれからである。ロープも使へないこのポロポロの岩の堆積を如何に切り抜けて行くべきか？ 何處から攀ち始めたらいいか？ 余は天氣が悪くならない中に、一瞬も早く出發すべきを今村氏と共に高唱した。新沼氏はこれから先は危険だからと、一行の中稍弱い者を此處に残して行く事にする。一行が尙も休息を持つて居る間に今村氏と余は數人の力強い蕃人を伴ひ、一足先きにこの岩場を登りに掛る。少しでも早くこの岩壁を見て置きたいからである。

この廣場の直ぐ上部はポロ／＼の一枚岩が一行の登攀を阻んで居るので、この登路を斷念して尖塔の西側を絡む。蕃人三人が先頭に立つ、それから余、今村氏、蕃人二人といふ順である。踏んで行く足元は風化し盡した赤褐色の岩片で、左手は底の見えない急な崩壊地が我々の墜落を待ち構へて居る。手をつけるべき岩角はポロ／＼で頼りにならない。僅かに足の懸るべき岩角を丹念に探し、身體の平衡を慎重に保つて、一步々この西側の削壁を絡んで行く。足元から崩れ落ちる岩は大袈裟な響を放ち岩壁に打ちのめされて細片と碎ける。余等も足を踏み外せばなくなるのである。暫時進むと切り立つた斷崖が右手を塞いで居るのでどうする事も出来ない、これは引返さなければならぬかと胸を痛めて居ると、先登の蕃人が右手の岩壁を尖山の方向へと登り出す。十間近くを隔てて蕃人が盛んに道を探して居るのが分る。岩角に危くも掴まつてキョト／＼と道を求めて居る蕃人の姿を見て居るのは氣が氣でない。然し鹿を求め羚羊を追つて山野を狩り、祖先以來何千年を山の生活に過して居る彼等は今の場合頼るべき唯一の神である。余は只管に、この蕃人を信じた。そして如何なる危険があらうとも蕃人の斷念しない間は、飽くまでも登高を続けやうと心に誓つて居た。

蕃人の努力は報いられた。彼は遂にこの岩壁を攀ち、一段高い所に至り余等を手招きして此處から登れると云ふ。稍々安心してその場に行くと、岩壁は流石に急である。蕃人の助けに依つて危くも此處を乗り切ると、更に上には

急な角張つた岩石が長いガレを作つて居る。そしてその上には今にも崩れて來さうな大岩が、オーバーハングして居る。このガレを間隔を置きつつ、蟻地獄に陥つた蟻の様に喘ぎ／＼登ると、すり出した岩石は非常な勢で弾み出し、深谷の底へと飛び込んで行く。この悪場も無事に通る事が出来て、垂れた大岩を巧みに避けつゝ尙も登ると、傾斜は稍々楽になつて頂上は間近い。尾根筋に出た故か白雲を伴つた突風が兇暴に吠え乍ら余等を吹き飛ばさんと荒れ廻る。

絶頂は間近い。尙も粘板岩の岩面を踏んで行くと、驚いた事には粘板岩は姿を消し、その代りに蒼白い石灰岩が頂上附近を占め、岩のただすまひは俄に變つて終ふ。硬い崩れない岩石、この山頂附近は夥しい龜裂が入つてゐる。その龜裂は實に深く、又その幅は廣い。今や余等は尖山の殆ど頂上に辿り着く事が出来た。最高點は北部にあつて先頭の蕃人は其處に休んで居る。あゝ、余はこの尖山の頂に立つ事が出来たのだ。今迄の努力も無駄でなかつた。止め度ない歡喜と感激が身體中に湧き上つた。そして我知らずこの山頂の岩場を野獸の様に馳せて、蕃人の居る所に立つた。九時四十五分である。

息はずませて、喜びに夢中になつて居る様を見て蕃人も亦微笑する。そして「アナタキンタマアリマス」と覺束ない日本語で云つて呉れる。余は終生この言葉を忘れまい、臺灣蕃人の中でも最も勇猛果敢なタロコの蕃人に云はれたこの言葉を、一生涯余の若かりし日の元氣の思ひ出として永久に忘れまい。登頂の成功に有頂天になつて居る余にはこの言葉が特に嬉しく感じられたのであつた。

今村氏も長い軍刀を杖に突いて徐ろに靜かな調子で登つて來られる。雲はだん／＼勢を増して來た。そしてタウサイ方面の荒くれた山稜がチラリと見えたと思ふと、それつきり尖山の頂は濃い雲の渦中に陥つて終ふ。風は益々強くなる。岩陰に身を寄せて居ると威嚇する様な風の遠吠が聞えて來る。襲ひ來る高山の氣に體温は次第に冷えて

来る。この白雲の徂徠、風の音、そして寒い空氣、冷い岩、これ等が醸し出す悲壯な光景を見詰めて居ると、余の頭は次第に感激から平靜へ、興奮から冷靜へと歸つて行くのであつた。初登攀とは何であるか。處女峯の初登頂とは果して何であるか？ それは神のみの逍遙する神聖な自然の莊園を下界の香を以て汚す事ではないか。今まで風や雲、日光や雪のみが愛撫した岩の面を、文化人と自ら叫ぶ慎みない動物の足下に踏みにぢる事ではなからうか。斯く考へて來ると、今更の様に我々の行動が自然の何等かの方法に依つて罰せられるのが當然である様にも思はれて來た。それにしても余はこの尖山に今迄心から慕ひ引き付けられて來たのだ。この山に對して、冒瀆的な行ひは考へた事もない、我々は咎めらるべきであらうか。次第に哲學的な反省に引き入れられて行く間にも、兎に角この尖山の登頂を果したと云ふ事は嬉しいのであつた。そしてこの高山の氣に酔ふ沈黙はかなり遅れた一行がやつて來るまで續けられたのであつた。(十時五分)。

一行は蕃人の忠實な助力に依つてこの絶頂に立つ事が出來た。見ると五人足りない。階段の所に待たせて來たのである。風は益々劇しい、雲も濃くなつて來た。そしてこの尖塔の上から間近かに展開すべき北の方南湖大山や、西に雄大な根を張る次高山稜、又、南に群聳する素晴らしい山波を大觀する望みは全く絶たれて終つた。少くとも此處から南湖大山に續く尾根とタウサイ方面に延びた尾根とはこの山頂からよく偵察して置きたいのであつたが、それは遂に失敗に終つた。時折眼前の雲が吹き拂はれて僅かに展望の届く所には、突几たる大岩が慄然とする様な大口を開いて居る。

山頂は寒い。わざ／＼携へて來た葡萄酒の栓を抜いて、尖山の山靈に登頂を許されたるを感謝し、一行の成功を祝福したのであつた。氣壓計を見ると二五四耗を示し、高度計を讀むと三八四〇米を示して居る。この高度計を俄に信ずる事は出來ないが、今迄のこの中央尖山の高さとして知られて居るのは三一七一五米であるから、若しこれ



南湖大山西斜面八合目より東南方に中央尖山を望む

を正しいとすれば中央尖山の實際の高度は更に高く、富士山よりも六四米高い事になる。實地踏査の缺けたこの高山領域、そして正確な水準點に因る三角測量の行はれないこの地方の山岳高度は將來の測量に依つてどうなるか測り知れない。凍りついた様な岩は吹き荒ぶ風に默禱し、灰色の空氣はいよ／＼この尖頭を荒涼たるものにする。寒氣も又徐々に加はつて来る。一行は已に歸路を思ふ。然し努力して辿り着く事が出来たこの尖頭の魅力に寒さを耐へ乍ら座つて居る。早く歸路を辿らなければならない。十一時、一行はこの尖頭に惜しくも別れを告げる。

七、歸 路

登る事は登つたが歸路が心配である。崩れ出す岩、強い風、それに多人數の行動である。如何なる椿事がこの成功に酔つた登攀者を悲しませる様になるかも知らない。蕃人を間に入れ、長い間隔を置いて恐る／＼一步／＼この惡場を下りて行く。時折崩れ出す岩が恐しい響を放つて落ちて行く毎に、一行は生きた心地がしなかつたが幸にも事なく一部を待たせて置いた階段の所まで下りる事が出来た。此處まで来れば左程危険ではない。多少氣安い氣分になつて鞍部を指して歩を早める。砂の急斜を滑り、下の惡場も通る事が出来て、ニヒタカトドマツの生えた密林の急斜面を抜けて鞍部に着いたのは十二時半であつた。

今までの緊張が稍々緩んで急に空腹を覺えて來た。直ぐに晝食を採る事にする。喜びに酔ふ一行には雲間を洩れて來る太陽に輝いた、あらゆる山の情景が、又なく楽しく美しい。ガレの岩は赭つぽく光つて居る。紅紫黃白色とり／＼の高山植物が斜面を毛氈の様に埋め、サツと吹く風に眩ゆくも搖ぐ。見上れば尖山の頂が雲に吠え肅然として聳え立つ。登頂を全うした今、この尖塔を二、三時間前に辿つた經路を思ひ浮べ乍ら見て居るのは愉快な事である。日光浴をし乍ら思はずも時を費し早々此處を出發する。これから昨夜辿つて來た長い長い尾根を過ぎて露營地

に歸るのには餘程急がなければならない。

ガレの斜面を横ぎつて行くと陽は次第に陰り出す。今迄飛んで居たナガサハジャノメが岩蔭に影を潜め、霧を迎へたヒメイワツバメの飛ぶのが多くなつた。道々振り返り乍ら行く尖山の頂は今にも雲に隠れさうだ。

愈々森林帯だ。コメツガの梢に小さなチメドリがチュツ／＼と淋しくも鳴く、今朝初めて尖山を眺めた地點に来る、これからは一氣に露营地まで馳け下りるので、尖山の眺望も最後と暫し立止つて後を顧ると、いよ／＼勢を増した雲の跳梁に尖山は殆んど姿を消して居る。雨氣さへ帯びて來た空は次第に暗くなつて、森林の樹下には早くも幽暗の氣が漂ひ始める。少し待つたが晴れさうにもない、是非なく露营地指して最後の急行を開始する。

針葉樹の茂みやヤダケの藪に鳴く小鳥を得たいものと蕃人を督して進む中、何時しか森林帯を抜ける。そして立枯れの木の散在する尾根に出る。昨夜否早朝、我々はこの尾根を傳つて登つたのだ、今や我々はこれを降りて居る、それは極く遠い日の出來事の様に見える。單調な同じやうな尾根にも夜間の思ひ出はある。彼處で休んだとか此處で滑つたとかそれ等は今では楽しい追憶となる。昨夜は見えなかつた見晴し、それは別に特記すべきものでない。

唯一望荒涼なる茅戸の起伏である。遠くの山が或ひは黒く或ひは白雲に包まれて眠たげに連つて居る。登りと異つてこの様な長い尾根を倒木を飛び越し、草藪に潜む思ひ掛けない岩角に膝を痛め乍ら下降を續けるのは相當辛い事である。愈々露营地近くなる頃夕闇は早くも迫り、擴つた雨雲の裾からは細い雨さへ落ちて來た。今頃尖山はどうして居るであらうか。恐らくは強い風が荒れ、劇しい雨が尖山の面を叩いて居る事であらう。今日一日の奮闘に依つて無事登頂に成功したのは何と云つても辛な事であつた。雨は尙も勢を増して雨滴の音も強くなつた。濡れるに任せて歸路を辿る一行には如何なる風雨も、山暴れも完全にこれを防ぎ得る懐しい狩小屋が待つて居る。この小屋に膝の關節を痛めてやうやくの思ひで着く事が出來たのは、五時少し前であつた。

懐しい暖い焚火が作られた。濡れた衣服は乾かされ、幾日振りとても思へる暖かい飯に皆は満腹した。尖山の成功にブランドーの栓は勢よく抜かれて、山の酒は快くも腹の底に滲みて行く。外はもう夜だ。登攀の苦勞が多ければ多い程、成功した今ではそれ等は懐しい思ひ出である。共に嘗め合つた登攀の思ひ出話に皆の心は融合つて、愉快な心置きない談笑は自ら湧く。蕃人も嬉しいに違ひない。向ふの小屋からは陽氣な異國のメロデーが響いて来る。そしてそれ等は我々の心に直ちに反映して、安易な氣分に誘ふのであつた。ロマンティックな晩である。僕はこの氣分に何時までも浸つて居たいと思つた。昨年から、いやそれより前から思ひ焦れて居た尖山は遂に今日一日十七時間のたゆまない勞苦に依つて登頂を完ふする事が出来たのだ。いゝ氣になつて傾ける壺の數にブランドーの大瓶は殆んど空になつて、前後を知らぬ、昨日とは異つた熟睡にと落ちて行くのであつた。

博物學的觀察

山は人間にとつて、又少くとも我々山狂人類にとつては力強い又魅力ある自然の創造物であり、又崇高なる神そのものであり、これなくしては耐え得られない生命の源泉ではあるが、筆者にとつては又智識の殿堂でもある。山に遶つて山岳の美と神祕に心酔し、山靈の私語く摩に耳傾けるは第一の願ひではあるが、その山の骨とも云ふべき岩石や、その衣服とも見られる草木や、又其處に群れ遊ぶ動物を知る事は又、その山の姿をよりよく知る事であり、又未だ探求せられない博物學的の事項を汗なす努力によつて知る事は、敬虔なる山への讃仰の心にとつて慾を擲れた満足でもある。この様な氣持で筆者は山をさまよひ谷を歩く。岩壁に可憐にも咲く花の一輪にも、筆者はその山獨特の神祕と美が喚びる様に思はれてならない。

この行に於ても筆者は最大の努力を博物學的觀察に拂ふ事を怠らなかつた。その様な觀察の精細な記述は、専門家ならざる一般讀者の讀了を強ひるべきものではあるまい。然し乍らそのエッセンスはこれをこの小文の終りに、筆者の小さな記念として又成ひ

は他の参考として掲げさせて戴く自由を得たいと思ふ。

一、植物に就て

植物に就ては一般の興味も稍々あると思ふので、筆者が一萬一千尺以上の地域にて得たる採集品の目録を掲げ、向この行にて得たる分布學的收獲を述べる事にしよう。

中央尖山採集植物目録

1	クイナノカニツリグサ (<i>Trisetum formosanum</i> Honda)	小 葉 科
2	ホウライウヅラ (<i>Goodierya nantoensis</i> Hayata)	十 字 科
3	クソダメモジズリ (<i>Amitostigma Tomingai</i> (Hayata))	景 天 科
4	ニシウチサウ (<i>Orsistium trigynum</i> Vill. var. <i>morrisonense</i> Hayata)	薔 薇 科
5	ニヒタカガソビ (<i>Melandrium transalpinum</i> Hayata)	12 ニヒタカソモツケ (<i>Sujinea morrisonicola</i> Hayata)
6	ニヒタカセキチク (<i>Dianthus pygmaeus</i> Hayata)	13 フクトメキンバイ (<i>Potentilla leucocoma</i> Don. var. <i>morrisonicola</i> Hayata)
7	タカサマカラマツ (<i>Thalictrum Hayakana</i> Koizumi)	14 ニヒタカフクロ (<i>Geranium uniflorum</i> Hayata)
8	ヒメウマノアシガタ (<i>Ranunculus japonicus</i> var. <i>yakuishimensis</i> Yamamoto)	15 ニヒタカオトギリ (<i>Dryopteris nagasawai</i> Hayata)

柳葉菜科

- 16 *Epilobium r-seum* Schreb.
 17 *Epilobium nankotaiense*
 Yamamoto

鹿蹄草科

- 18 *Pyrola morrisonensis* Hayata
 19 *Pyrola albo-reticulata* Hayata

石南科

- 20 *Rhododendron Oldhami* Maxim.
 21 *Rhododendron Mori* Hayata
 22 *Rhododendron pseudo-chrysan-*
thum Hayata

- 23 *Rhododendron nankotaiense*
 Hayata

- 24 *Gnaphalium bornensis* Skarf.
 櫻草科

- 25 *Primula Myrsinaria* Ito & Kawakami

龍膽科

- 26 *Gentiana scabra* Hayata
 27 *Swertia randoensis* Hayata
 28 *Gentiana arisanensis* Hayata

女參科

- 29 *Veronica morrisonicola* Hayata

- 30 *Pedicularis transmorrisonensis*
 Hayata

山蘿蔔科

- 31 *Saibissa Incerifolia* Hayata

桔梗科

- 32 *Adenophora polymorpha* Ledeb. var.
lanarckii Trautv.

菊科

- 33 *Cirsium kawakamii* Hayata
 34 *Erigeron morrisonensis* Hayata
 35 *Anaphalis morrisonicola*
 Hayata

- 36 *Pixis morrisonensis* Hayata

- 37 *Atemisia oligocarpa* Hayata

- 38 *Anaphalis nagasawai* Hayata

- 39 *Leontopodium microphyllum*
 Hayata

- 40 *Laetuca chinensis* Makino

- 41 *Aster scaberimus* Hayata

上述の採集品に依つて得たる植物地理的收獲は如何。中央尖山は從來未採録の山岳なので、此處に記録した植物は何れも中央尖山より初めて報告せられるものである。而してその多くは從來新高山や能高箭葉方面、又南湖大山以外に産地を得なかつたものである。然し乍らその最も注目すべき種類はダイリソクカバナ及びナンソクナグの二種であらう。この兩植物は從來南湖大山の特産として記載せられて以來他に産地を發見せられず、比較的探察の行き届いて居る新高山にも知られなかつた種である。この兩植物が中央尖山にも發見せられたるは、位置的關係上兩山の近縁は初めより豫想さるゝ所であるが、植物の分布よりも又有力に證明せられたと云ふべきである。ナンソクナグは、南湖大山に於ては西斜面タケジソ（一萬一千尺足らず）より上部に見事なる純林をなし、葉の裏面の樹色の密毛に依りて遠くよりこれを望めば獨特の景觀を現出し、南湖大山高山景に特異の風景を構成するものであるが、中央尖山に於ては左程優勢ならず鞍部より上部の岩角に比較的少量を見得るに過ぎない。ダイリソクカバナは兩山の他、又次高山よりも小林勇夫氏に依つて採集せられて居る。開花期は從來知られて居ないが、余が南湖大山にて見たるは八月二十二日、中央尖山にて八月十日故、八月中旬乃至下旬に開花するものであらう。南湖大山に於ては頂上直下の露营地ブナツケ周圍の峭壁の砂地に少なからず發見せられるが、中央尖山に於ても同様砂地に生ずるは前述した如くである。斯くの如くこの植物は次高山、南湖大山、中央尖山の三山に極めて狭少な分布を示す植物であるが、この三山に限つて生ずるは如何なる理由に依るか。臺灣の植物學者佐々木舜一氏はこれを疑問にして居られたがそれは次の原因に依るものであらう。即ち臺灣高山帯は北部と南部にて已に三千尺の差を見せるが、北部の上述の三山の山頂附近の寒冷なる地理的環境は、南部の諸高山に存在しない。換言すれば臺灣島内にて最も寒冷なる地帯を共通に有する事に依つて、この三山がこの植物を分布せしめて居るものであらうと思はれる。

又、ユウレイソウを一萬一千尺の地點にて採集したが、斯くの如き高所に分布するは從來知られない事實であらう。

尙シホガヤの一種 (*Pedicularis spec.*) 及びルリソウを得たが、臺灣にては未録乃至新種の植物らしく、目下中井猛之進博士の御研究を煩はして居る。

二、動物に就て

動物は植物の様に静止しない。これを目撃し得ても逃げられ、ばそれ迄である。然し自ら蕃人の助力に依つて、忙しい山登りの副産物としては比較的的好結果を得た。それ等の報告は、別の機会に詳述する考へであり、又その一々を記述するは面倒であるから、その興味ある收獲をかいつまんで書いて置く事にしやう。

(1) 哺乳類

この類の最大の收獲は、モソツガ (*Belomys spec.*) の未知種を得た事である。ケラシモソツガ (*Belomys personi Kalaensis* (Swinhoe)) に類似するが、稍小形にして灰色なる事、其他、各部の測定に於て、明に區別せられる。黒田長雄博士に依り記載されるであらうが、この種はアレンソフ附近に棲息する。鼠は露管地アレンソフにて二種を得た。一種は *Microtus* 屬のもの目下研究中である他はトゲネゾミ (*Rattus coxinga* (Swinhoe)) で、これは従来低地にしか知られなかつたが、僅に八千尺の高所に棲息する事が明かになつた。而して興味あるはその名の由来せる如く、低地産のものは棘毛を叢生するが、中央尖山にて得たる標本は棘毛が著しく減少して居る事實である。これは如何なる原因に依るか、動物形態の高度に依る變異として研究を要する問題である。

(2) 鳥類

鳥類は露管地より上部を特に注意した。實際に採集し得た鳥類は、次の如くであるが、(1)(2)(3)を除きその多くは新高山の他知られなかつたものである。

- | | |
|--|--|
| (1) タイソソジエヌカケバト (<i>Columba pulchricollis Blyth</i>) | (7) タカサエミソサザイ (<i>Pranoeryga albiyventris formosana</i> Congr.) |
| (2) ヒメソククロウ (<i>Glaucidium pardalotum</i>) | (8) カムムリチヌソウ (<i>Yuhna brunneiceps Grant</i>) |
| (3) チヤバラオホルリ (<i>Gymnis virida Swinhoe</i>) | (9) タケソウ (<i>Pryanastes poecilorhynchus (Gould.)</i>) |
| (4) シヤソウ (<i>Actinodula morrisoniana (Grant.)</i>) | (10) キソバネホイセイ (<i>Trochodopteron morrisonianum</i> Grant) |
| (5) ヤソソウ (<i>Trochola steeri Swinhoe</i>) | |
| (6) タイソソツグミ (<i>Turulus albiceps Swinhoe</i>) | |

其の他、知日鳥科 (*Timaliidae*) に属する小形の未知種二、三種を得た。

(一) 爬虫類

九千五百尺の地點にて、ハブの一種 (*Trimerescturus spec.*) を得た。又七千尺附近にて *Bungarus* 屬の蛇を得た。之等は共に未知の新種であつた。前の黒色のハブは其後南湖大山九千尺の地點にても捕獲するを得た。其他この類のものにて尖山鞍部附近のガレにてカナヘビの一種を目撃し得たが採集し得なかつた。

(二) 蝶類

昆蟲類に就ては又別の雜慮に詳述の機会があらうと思ふので、此處には唯、蝶類のみを簡単に述べやう。即ち高山蝶として認められたものは

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | ラケボノアゲム (<i>Papilio horishannus Mats.</i>) | 6 | イワヤヤヒカガ (<i>Lethe nitidana Mats.</i>) |
| | 露營地附近に目撃せられた。 | | 尾根上及び、ニヒタカヤダケの敷に、飛翔す。 |
| 2 | ホツボアゲム (<i>Papilio hoppyo Mats.</i>) | 7 | チガサハジヤノメ (<i>Satyrus nagasawae Mats.</i>) |
| | 露營地上部の尾根上に見られた。 | | 尖山鞍部のガレにて。 |
| 3 | タカムクテラ (<i>Dakoryia moltrechti Oberthur.</i>) | 8 | タカムクウラナミジヤノメ (<i>Xythis auragus Fruhstorfer.</i>) |
| | 露營地直前の森林中に稀ならず飛翔す。 | | |
| 4 | ゴマダラシロテラ (<i>Dolus balladonna taiwana Wilem.</i>) | 9 | オホゴマダラシジミ (<i>Tygenia atroguttata Oberthür.</i>) |
| | ホツボアゲムと同様、尾根上にて。 | | 露營地に至る森林中に、タカムクテラに混りて、飛翔す。 |
| 5 | ラジロヒカガ (<i>Lethe dura neolides Fruha.</i>) | | |
| | 同様、尾根上を活潑に飛翔する。 | | |

(ホ) 其他の動物

其の他、若干の蜘蛛類、多足類、蛭蚓類を得たが、此等は整理されて居ない。又一萬一千尺の地點にて早朝寒冷な岩上を匍匐し

て居たナメクジ(屬不明)を發見したのは、興味ある事であつた。

三、地質に就て

北部中央山脈の地質構成は、粘板岩である。臺灣總督府殖産局の出版に係る臺灣嶺南地質地形圖(大正十五年發行)にもこの領域は粘板岩系を示す黄褐色の色彩に一律に塗られて居る。所が今回の登攀に依つて、中央尖山の最頂點は二百尺許り石灰岩である事が判明した。従來實地の踏査を缺き單に遠望に依つて想像した尖山の頭は石灰岩であつた。此處に於て地質圖は塗り直されねばならない。余はこの發見を今回の登攀の記念として永く記憶したい。この發見に由つて想像さるゝ中央尖山附近の地形學は別に論述する機會があらうと思はれる。

山名及附近蕃人との關係

中央尖山なる山名は何時頃何人に依つて命名せられたか、これは南湖大山や畢祿山等の如く漢人の命名にかゝる古い名稱ではなく比較的に新しいものである。即ち大正二年、今より十八年前、臺灣山岳探險時代に於て令名ある野呂寧氏がタロコ討伐のため地勢觀望の目的を以て、南湖大山に登山せられ、その折直ぐ南に直立する無名峰を認めてこれに中央尖山なる新稱を與へられたのである。即ちその名は中央山脈中に聳立する尖山の意義に由來するところである。

中央尖山の東西に占據する蕃族のグループは、タイヤル族シカヤウ蕃と、セーダツカ族タロコ蕃である。此等は中央尖山に對して古來蕃稱を與へて居るが次の如くである。

タロコ蕃——ボクスキ・サラガ

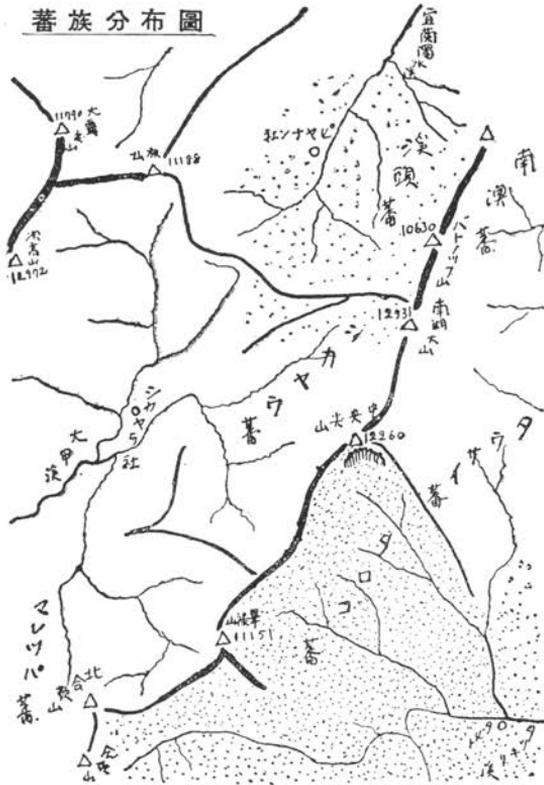
シカヤウ蕃——ブシガ、

○中央尖山の登攀 鹿野

○ 中央尖山の登攀 鹿野

ボクスイサラガの意味に就てはこれを詳にするを得なかつたが、ブシガ、はブシハガイの轉訛で、ブシはタイヤル語の帽子、ハガイは崖を意味する。即ち西側なるシカヤウ社より尖山を望見する時は、尖頭に見えずして冠狀に見え、崖がこれを形造つて居る故に命名せられたのである。

次に中央尖山と彼等蕃人との關係を述べやう。臺灣島に於ける何處如



何なる山地も、古來原住民なる蕃族に占據せられ、狩獵を事とした原始時代に於て、一片の土地も皆、狩獵區域として何れかの蕃族により所有せられて居た。この所有權は勿論その地方の先住の蕃族のグループにより得られたものであつたが、其後の

他種族との争闘の結果や又合意の分譲に仍つて、所有者を換へる様な場合もあつた。中央尖山附近の山地に於ても同様の事が云へる。尖山を中心とした現在の蕃族分布は挿入の地圖にても明瞭であるが、中央山脈の脊梁を境として、西側はタイヤル族シカヤウ蕃、溪頭蕃が居住し、東側はセーダツカ族タロコ蕃及びタイヤル族タウサイ蕃が占據して居る。シカヤウ、溪頭兩蕃は共に親戚關係を有し、略々南湖大山より桃山に至る山稜を境として居る。一方東斜面に於てタロコ蕃とタウサイ蕃は前者の場合程密接な關係はないが、中央尖山のタウサイ尾根を境とし共に争

闘する事なく平和である。所がこの中央山脈を差挟んだ兩グループは古來仇敵關係である。就中タロコ蕃に對するシカヤウ、溪頭兩蕃の關係是最惡の状態にある。即ち兩者、各々の狩獵に於て山に相見えんか、何れかを殺傷せぬ間は納らないのである。彼等は相互ひに敵蕃の狩獵區域を侵し之を侵略せんとする。當局の嚴重なる監督も急な場合には用をなさない。現在の狩獵區域は別圖の如くであるが、シカヤウ蕃はタロコ蕃の優勢に依つて絶えず已が領域を侵されつゝある。中央山脈の脊梁を遙かに越えて、シカヤウ社の蕃社間に、夜間火を焚いて戦を挑む事があると云ふ。彼等蕃族の現在の占據状態は前述したが、昔時に於て中央尖山は永くシカヤウ蕃の有であつたものらしい。何千年を單位とする臺灣蕃族の古代史に於ては、タロコ蕃がタロコの峽谷に侵入したのは比較的近年の事である。タロコ蕃の祖先是霧社附近なるセーダツカ族トロック蕃である。彼等は合歡山を越えて東に移住し、タロコ蕃地に散布した。そしてタロコ一圓に擴つた彼等は更に逆コースに中央山脈を西側へ擴らうとして居る。

シカヤウ蕃が、古くより中央尖山を自分の山として崇めて居た事は前述したが、彼等はこの中央尖山を附近に於て最も高い山であると思つて居る。實際尖山より高い次高山や南湖大山よりも高いと思つて居る。而して自分達を守護し作物の豊穰を齎す祖先の靈(オツトフ)は、この尖山に住んで居ると信じて居る。彼等の間には又一の傳説が説へられて居る。即ち、プシガマ(中央尖山)、バボーハガイ(次高山)、バボービョン(南湖大山)は、三人兄弟だと云ふ。そして上記の順に年長だと稱するのである。

附 記

最後に中央尖山の諸所よりの遠望に就て述べ、尙登攀に就て一言して置かう。

中央尖山は臺灣北部何れの高山よりもこれを望む事が出来る。而して北方及び南方よりは山形三角錐に見え、西

○中央尖山の登攀 鹿野

一三四

方よりは冠狀に認められる。即ち北部なる南湖大山頂上よりは兩者中間の瘦尾根を隔て、この尖山の頭を間近く見る事が出来るし、南部なる合歡山や畢祿山にても無名峯（一一〇四六尺）を隔て、三角錐に望まれる。次高山よりは登路の途中終始尖山を眺め得るが、常に帽子狀、冠狀に認められる。中央尖山は又新高山の絶頂よりも、これを望む事が出来る。主山の北方に蟠る新高北山、その左肩に遠く北中央山脈の波濤を望む事が出来るが、中央尖山は南湖大山の右手に明かなる三角錐を示して聳立する。臺北、新竹等の西海岸平地よりはこれを認め得ないが、曾て臺灣縱貫線の豊原附近にて車中南湖大山と覺しきものを認め得た。臺灣山岳は高山標式となるべき雪を持たないので、鑑別は非常に困難である。時恰も一月、低く見えた南湖大山は夥しい積雪に依りて識別せられた。その南に聳立して居た尖頭は、この中央尖山ではなかつたか、今後の研究を待ちたい。

今回の登攀がタロコの蕃人を使用し、タロコ蕃地コワヘル溪右岸を溯行して、尖山の南肩に達し、登頂に成功した事は前述した通りである。若しも今後の登路に別のコースを選ぶとすれば、如何なるコースが可能であるか？ それ等に就て一言して置かう。今回の搜索隊長今村榮次郎氏が曾てタウサイの蕃人を連れタウサイ溪を傳つて、登攀を試みられ、天候の悪變によつて中途引き返された事は前述したが、このコースは不可能でないと想像する。今回の行に於て、尖山間近く迫り、之を惟ふのであるが、このコースは或ひは今回のコースより樂ではあるまいか。次は西斜面シカヤウ社よりの登路である。余がシカヤウ社蕃人に聞き得たる所では、この行は可能であると云ふ。即ち大甲溪上流なるシラガン溪を傳つて登ると云ふ。然し乍ら結局余等の取りつき得たる尖山南肩に達し然る後、同様の登路を取るものではあるまいか。前述の他南湖大山方面よりの登攀が思ひ出されるが、尖山とこの山との間は非常な瘦尾根又崩壊し易い斷崖が巨口を開いて居る。故に餘程下を絡まない限りは登攀不可能であらう。可能とするも北面より直下に尖山の頭にとりつく事は今の所甚だ困難と見られる。(了)

乾 燥 雪 崩

——主として劔澤の雪崩に就て——

藤 田 信 道

一、昭和五年一月劔澤の遭難に就て

昭和五年一月、東京帝大スキー山岳部の先輩窪田、田部氏外二名、人夫二名の劔澤遭難に關して同部は窪田、田部兩氏の追悼出版として「銀嶺に輝く」なる冊子を發刊した。この中に盛られた若きアルピニストの非業の死は全篇鬼氣迫るものがあるが、更に遭難者が残された遺書、寫眞を通じて帝大スキー山岳部員が推論された中にも尙幾多の疑問の點があるやうに思はれる。

第一回の搜索隊には部員は加はつて居ないから雪崩の原因に就て歸納すべき材料が比較的薄弱になつてゐる事は誠に残念なことだが今となつては致し方がない。

何が遭難の直接の原因であつたか、又雪崩發生の原因となるべきものに對して當時の事情を綜合すれば

「去年の暮に全國を訪れた異常な暖かさが劔澤を襲うて、こゝにも十二月廿七日、雨を降らしたものとすればそれが根本的原因となつたものである」

「一行の撮影した十六耗映畫を見ても雨のために荒された積雪らしく思はれる。これが引續いての嚴寒の爲に凍結してクラストをなし、その後多少は降雪があつたにしても四日まではこの状態が續いた。そして四日の午後降り

始めた雪は五、六、七日と吹雪き通し、八日に多量の積雪をもたらしたものでらしい。そして九日の朝に起つた強風に依つてこの新雪が自身の重さにより落下したものである。田部君の遺書に遺された「音モナク降ル雪ハアハナダレヲオコシ……」の文句はかうした新雪表層雪崩を意味するのだらう」(『銀嶺に輝く』五二―五三頁)

以上の推論を纏めてそれを雪崩崩落の條件を醸成させる氣象、積雪状態、地形の三點から分析、批評して見たい。雪崩に遭遇した日は田部氏の遺書にあるやうに九日午前四時二十分であるとす。

一、氣象

(A) 八日の氣象

天候、吹雪(田部氏遺書)

終日猛烈なる吹雪(窪田氏遺書)

尙富山縣廳の調査された富山市に於ける天候に依れば、一月八日、午前一時十分より降り出し、終日降り通し、午後八時四十分より大吹雪となり同十一時三十分風のみ歇む。而して九日午前九時雪歇む。

當時の天候は以上の如く終日劍澤を襲うて居た。吹雪とある以上風は猛烈であつたに違ひないが、溫度が記されていない處を見ると連日さしたる變化なく零下七度乃至十二度位の邊りを上下してゐたものではなからうか。従つて當時の氣象は冬期の雪崩發生の條件を完備してゐたものであることは想像に難くない。

(B) 七日までの氣象

七日まではどんな天候が続いてゐたのだらうか。田部氏の遺書(砂糖紙箱に記された)に依つて一見出来るやうに

元日(觀測地點 弘法小舎)

吹雪後晴 温度最低零下十八度

二日(観測地點 劍澤小舎)

晴後吹雪 温度最低零下十七度

三日(同 同)

午前吹雪・正午晴、午後八時温度零下十一度

四日——八日までには連日連夜晴れるともなく、強風を伴つた雪が降り續いてゐた。

以上で解るやうに昭和五年一月三日より一週間の間、僅かに一行が鶴ヶ御前尾根に登れるだけの晴間を得る事の出
 來た三日の午後以外には絶えず雪が降り頻つて居て、劍澤は日毎夜毎に積雪量を刻々と増して行つた。冬期登山に
 經驗あるものは何人も知つて居るやうに、雪崩を崩落せしむる外的條件(自然的條件)として冬期は降雨、太陽の
 照射、氣温の上昇等の現象は比較的少くして、風力がその主動的原因たり得るのである。斯くして一行が劍澤の小
 舎に起き臥して、劍の山頂を目指してゐた間に(遭難後各自のスキーにシールがついた儘發見された事からして、
 室堂に行くのならばわざ／＼前夜よりシールをスキーに付ける必要もないから、前夜より斯る準備をなしてゐたの
 は一行が八日に至るまで尙劍の頂を目指してゐたと考へるのが妥當である。別山、別山乗越、鶴ヶ御前へと續く素
 晴しい雪稜には雪崩の將に落下せんとする状態を、日一日と具現しつゝあつたのである。斯る時一行が雪崩に對し
 て如何なる處置をなしたか、それが私たちの批判の對象となる。

二、積雪状態

A、積雪量

四日に下山したR、C、Cの會員加藤文太郎氏の談に依ると山上の積雪は弘法小屋では八尺位、劍澤小舎附近で

は十一尺以上はあるものと察せられる(前掲書二十頁)。四日に於ける劍澤が十一尺以上の積雪があつたとすればその後五日間吹雪通した八日に於ては四日以後更に十尺以上の堆積があつた事は想像するに困難でない。恐らく斯る低温度に於て降り積つた雪は小舎附近に於ては二十尺以上あつたのであるまいか。そしてそれは當然劍澤小舎を半分以上も埋め盡して了つたであらう。

(B)積雪層の構成状態

「寫真に見られるやうな波状は風のみ依るものだとどうしても考へ得られない」(前掲書五十二頁)。劍澤小舎で六人の生命を奪ひ去つた雪崩の問題に特に關係ありと帝大スキー山岳部員が思惟される「流水線に沿ふた波状雪」はどんな役割を持つてゐたのだらうか。

處が帝大スキー山岳部員が考へられるやうに波状雪とは風のみ依つて構成されるものでないとしたら、果して何に依つて雪が斯る形状を呈したのだらうか。最初に引用した「銀嶺に輝く」の中にあつたやうに昨年末に降つた雨に原因されてゐるとした點には果して誤りが無いであらうか。

波状雪とは「弱い風が積つたまゝの粉状の雪面を吹き渡ると雪面に波紋を生ずることがある。これは恰も砂丘に出来る波紋や静かな水面に生ずる小波と同じもので、雪の特性は變らず、たゞ外貌だけが變化するものと見る。もつと強い風が吹くか、またさほど強くなくとも長い時間続けば、處女雪は堅く壓縮されて比重を増し、丁度砂糖菓子の子のやうになる。(中略)同じくクラストであるが、陽光の場合とは異なり雪を一旦融解せずになど緊縮した丈である」(加納一郎氏著「氷と雪」一七二頁)と考へられて居る。

波状雪に關する加納氏の定義に従へば、波状雪は風のみ依つて出来るクラストであるとされる。冬期陽光の弱い點から氣温上昇、降雨にそれを結び付けて考へられたる點は誤つてゐるやうに思はれる。十二月廿七日以後三日

迄に降雪無かりしに非ざる點、及び斯る形状の積雪帯は凡て風に曝される事の多い場所に於て發見される點より見て、斯る解釋は餘り妥當でない様に思はれる。

然しながら當時劍澤上部の積雪構成が根雪が——それは乾燥雪か濕潤雪か一寸斷定出来ないが——クラストの直下部に於ては乾燥雪を蓄へ、そのウインドクラスト上に多量の雪が八日まで降り積つてゐたことは想像が出来る。

(C) 雪質

雪崩の性状を乾燥新雪表層雪崩と推定されて居るが、遭難者の手記中に四日以後に於ける溫度が書かれてないから雪質を具體的に云ふことは出来ないけれども、三日までの溫度より想像しても、低溫に於て連日降積つた乾燥雪であつたことは疑を容れない。殊にテブリの靜止状態より歸納すると、それは昭和二年十二月三十日、早大山岳部員が針ノ木大澤小舎附近に於て遭遇したものと同一のものらしい。

「デブリは半米位のブロックが積雪面より三分の一米位高くなつてゐる程度で新雪に覆はれてゐた」(銀嶺に輝く 四十三頁)

乾燥雪崩にはデブリを残さないものと、デブリが劍澤のそれと同じやうな状態に置かれるものと二つある。前者に於ては落下した雪崩が附近の積雪の質と變化なく置かれるために崩落雪がブロックを示さないばかりか、崩落雪が周囲の雪と同質であるためにそのけじめさへも認められない。これは濕潤雪或ひは板状雪には見られない特有な現象であつて、我々は屢々冬期の登山に於て落下後デブリを認めざる斯る乾燥雪崩を見ることが出来る。

この問題に就いては最後の「乾燥雪崩」の條に於て述べてあるから此處では省略するが、遭難當時の一月の劍澤小舎附近の雪質は實に多量な乾燥新雪であつたことは事實である。クラストの上に堆積した雪は崩落し易い状態にあるのであるが、十二月廿七日以後九日早晩まで何故雪崩を惹起させなかつたかこの點は大いに研究を要する。且

つ波状雪が所謂ウインドクラストと違つて、初期の過程であり、況んや波状雪の全く變質した——今迄舊雪と呼ばれてゐた——雪即ちクラストや濕潤雪よりは乾燥雪の堆積に對してより大なる磨擦を與ふるに於ては、波状雪が雨のために出來たものではないと云ふ事が裏書される。従つて劍澤には殆ど同質の（時間的に過程上の相違はあつても）雪が降り積つてゐたと考へて差支へないと思ふ。

三、地形

地形上から云へば別山側の方が鶴ヶ御前側に比して傾斜度は大である。劍澤小舎を襲ふた雪崩は鶴ヶ御前側から崩落してゐたものであると云ふ榮作の證言（第一回の搜索に従事した人夫）が信すべきものでありとすれば、私は何も云ふことが出來ないが、北西風の吹く劍澤に於ては鶴ヶ御前側の雪は常に吹き落されてゐて、小舎を破壊し去る程の雪崩は出ないのではないかと思ふ。地形上、鶴ヶ御前の上部には雪庇が生長するとは考へられないし、又劍岳の肩に於て認められた雪庇（遭難者の撮影した十六ミリ映畫に認められる）さへも極めて小さなもので、雪崩崩落の誘因となるには餘りにも力ないものである。

又寫眞でも解るやうに小舎の入口の方よりもその背後により多くの雪量をたゞへてゐる事等も別山側により多量の乾燥雪が風に吹き飛ばされて集まつてゐることを示してゐる。傾斜度の大小は乾燥雪崩には大なる關係がないとしても、私は別山側にも當時大きな雪崩が出てゐたのではないかと想像する。積雪量、當時の氣象から兩者を比較した時、他の點が凡て等しいとすれば別山側に雪崩が出たものであると私は主張したい。

無雪期の形貌は此處では餘りに問題とならない。何故なら斯かる雪崩は底雪崩と違つて地底から雪を全部拭ひ去つて落ちたものではなく、雪層間の内部磨擦の限界が破れた爲に崩落したものであるからである。

劍澤の地形と雪崩の關係に就ては私は多くを知らない。又先日の日本山岳會研究會に於て地形上から見た今回の

雪崩を帝大の方々に質問したのであつたが大して得る處はなかつた。この點は後日の問題として保留して置き度い。

二、立山、劔澤の氣象と雪質に就て

以上雪崩崩落の直接原因となるべき氣象、積雪状態、地形の三點から今回の劔澤の雪崩に就て論じた。勿論私がこの問題を取扱ふに際しては帝大スキー山岳部發行の「銀嶺に輝く」を中心としたが、これのみでは普遍的妥當性を具備してゐるとは考へ得られない。

殊に雪質を變化せしむる主因となる氣象に就て立山一帯は北アルプスに於ても特殊な條件を具へてゐるものである。

「立山は日本北アルプスの最北端に位し、すぐさま日本海の海岸線に及んでゐるので、この濕潤な海洋氣象の影響を受けることが多い。そして特に冬期の特徴とする北風と西風とは何等緩和せられるゆとりもなく又何等の障りも受けないで直接にこの山群に吹きつけて来る。これが爲に立山の冬は非常に風の影響が烈しく、濕潤な大氣は極めて多量の降雪を齎す。(中略)この濕潤は一方に於ては冬期の登山者を極めて悪い條件で悩ますことがある。それは濕潤な霧と霽とである。だから立山の冬の登山者は雪と風に對する準備だけではなくその上に雨混りの霽に對してまでも準備をして置かなければならないことになる。」(「登高行」第七年第五十二頁青木勝氏「立山冬期登山」)

冬期に於ける劔澤に入つた例は前記青木氏等の紀行と今度の一行の記録以外に私は聞いて居ない。従つてこの二つの經驗を以て直ちに立山から劔へ掛けての冬の天候の正規の状態を窺ふ事は出来ないだらうが、青木氏が指摘されてゐるやうに穂高連峰一帯と立山群峰を比較した時に、氣象上の相異、それは必然に積雪状態及び雪質に變化を及ぼし、雪崩に對しても多かれ少かれ、異つた影響を與へてゐることは考へられる。

青木氏の経験によれば、第一年（一九二三年一月）は間歇的ではあるが晴天の日が多く、第二年はこれに次ぎ第三年は最も濕潤な天候が続いてゐる。これは立山室堂に於ける観測であるが、一度雷鳥澤を越えて劍小舎に到つた時に、立山室堂附近に於けると同じやうな「最も濕潤な天候が続いた」かどうか。

青木氏は劍澤に於ける雪質を詳細には書いて居られないが、その雪質や登攀直前の天候を豫想する事の出来る資料を調べて見やう。

一九二五年一月九日

「一九二二年四月、三田君らが初めて積雪期の劍岳に登攀した際は最初から山稜のみを傳ふものを撰んだ。それは劍澤の雪崩の危険を非常に危惧した爲であつたが、後に至つてこの劍澤の上半部には雪崩の危険性のないことを知ることが出来た。」

「惜しむらくはこの日は谷一回（劍澤）は數日來の風にひどく風化の影響をうけてゐて、どここゝも粗雑な不均整な雪質となつてゐた。風壓と自らの堆積とによつてぎごちなくなつた凝結粉雪の地域があるかと思へばカン／＼になつたクルステが突如として現れると云つた具合であつた。」（登高行第七年六十三頁）

「別山乗越附近はクルステが頗るかたい。劍澤は期待に反して、種々の雪質にケークドパウダーを交へて一気に滑降をゆるさない。」（登高行第六號年報十一頁）

此處で第一に考へなければならぬことは天候と雪質との因果的關係である。前にも書いたやうにこの年は所謂濕潤の大氣を比較的感覺しなかつたのであるから、日射は兎も角として氣温上昇の作用に依る雪質の變化は見られない。であるから前に述べた三項中の第二にあるやうに風壓硬雪（Windharsch; Wind crust）が一帶に擴がつてゐた。「カン／＼になつたクルステ」とは融解堅雪（Schmelzharsch）を指すものか、風壓硬雪を指すものか不明だが、

他の外力の作用少なき事實を前提として後者であると断定すべきであらう。

次に第三項のケークドパウダーの問題だがアーノルド、ラン氏が *Mountaineering on ski* (Mountain Craft p. 407) の中に於て云つてゐるやうに、これは粉雪に對して風の影響した雪の一種であつて同氏の定義に従へば乾燥雪の意味が一層はつきりする。

ラン氏は風の影響を三つのファクターから成り立つてゐると考へる。

一、風力 (The strength of the wind)

一、時間 (The time during which the snow is exposed to the wind)

一、雪の形状 (The type of snow exposed to the wind)

風に影響された雪の種類は凡てこの三項の何れにか入れられる。ケークドパウダースノーは風力と時間に關係を持つてゐる。即ち僅かに強風が吹くか、比較的長時間風が吹くとケークドパウダースノーを生ずる。この雪はエキスパートには非常な愉快な滑降が出来るのであるが、「一氣に滑降を許さなかつた」處を見ると事實はケークドパウダースノーではなくて、程度の差こそあれウイントハルシュであつたのでなからうか。

「粉雪上の風の影響は常に良くない、強風が吹き且つ長時間に及べば雪質は益々不良となる。」(Mountain Craft p. 408 Arnold Lunn)

といふ言葉に依つても、劍澤の雪質がウイントハルシュであるに違ひないと信ずる。

一九二六年一月

この年は前年と比較して更に好適な状態に置かれてゐた。「積雪量もあまり深くなく、密度もいゝくらいな粉雪状態」であつた。この言葉も一寸解釋し難いのだが、何れにしても冬期の氣象から云つて理想的な状態を現出してゐる。

たことは事實である。

また更に同氏等は劍岳頂上への壯烈な登攀の歸途、再び劍小舎附近に於てマーブルクラストに遭遇して居られる。これもウキンタースノーの一種であつて、非常に堅く横切りをし易いソリツド、スノー——即ちマーブルクラストは冬季南向きの斜面に於て屢々發見され、又更に早春高峻なる谷の上部に於て發見される。

以上の事實を綜合した場合に第二、第三の兩年を通じての經驗は劍澤に於ける積雪状態が濕潤な氣候に支配されたとはいへない。要するに、先年楨氏の遭難の事實に依つて知つた多量の水分を持つ雲状の降雪は、明らかに立山彌陀ヶ原一帯に於ては、海洋氣象の關係から來たものであることは豫測し得られる。従つて第三年（一九二六年一月）には濕潤な天候が（立山室堂附近では）續いたに拘らず（登高行第七年一〇一頁参照）劍澤に於てはそれらの濕潤な氣象に影響される事のない粉雪状態——場所に依つては風的作用を受けた處があつたにしても——を持續してゐたのは氣象的に冬期に於ける劍澤が立山一帯（室堂を中心とする）と非常に異つた條件を具へてゐるのではなからうか。

冬期立山を襲ふ北西風の濕つた風が劍岳及びその山稜に遮られて劍澤に及ばないのではないかと想像される。けれどもそれとても、未だ劍岳北面の經驗を我々が知り得ない限りは何れとも斷定出来ないが、所謂「フェーン」であるとして西南風（これは歐洲大陸の地理的特種事情から生れたもので日本にもその儘適用されるとは考へないが）の暖氣に對しても劍澤は影響されない事がその雪質上から證明されてゐる。

私が今迄冬期に於ける立山の氣象、雪質の状態を述べて來た理由は、出來る丈けの經驗——それも、大正十二年一月の楨有恒氏等の貴い先驅者の體験、更に大正十三、十四兩年度の慶應義塾山岳部の經驗及び昭和五年一月の帝大スキー山岳部の先輩の遭難、四回に亘る該地方への登山記録から、登山家としての當然考へ得べき氣象、雪の状

態を雪崩に關聯せしめて規定せんとしたのである。

それらの四回の忍苦と困難と戦つて來た輝かしい積雪期登攀も、曾てはバイオニヤ板倉勝宜氏の若き靈を白雪の立山に捧げしめ、そして今は又六つの若き貴き生命を劍澤の丈餘の雪の中に、陰慘な遺書と共に埋めて了つて、涙を以て綴られた空前の悲劇に直面しなければならなかつた。

私が一月の劍澤及び立山の積雪期の状態を斯く取扱つたのは、雪崩に對する觀察を登山に於て如何にしなければならぬか、即ち雪崩觀察方法に主點を置いて考へたのであつた。乾燥雪崩に於ては如何に風が積つた雪の上に影響を與へるか。勿論例外としては氣温の上昇、太陽の照射等の影響も考へなければならぬけれども、この場合は寧ろ濕潤雪崩に屬すべきものであつて、風力、風向、風の時間等が乾燥雪崩に於ては種々なる變化を雪に與へる。これが雪崩の誘因となる主要素であつてその上に積つた量の問題と相關して實に一見簡單ではあるが複雑な調査をしなければならぬことは明瞭である。横有恒氏の「山行」に於ける「板倉勝宜君の死」や「登高行」第七年の青木勝氏の「立山冬期登山」、又は今回の劍澤の遭難に於て斯る材料が纏つて得られない許りか、結論を導き出すのに尙幾多の疑問を差し挟まねばならないことの多いのは今日雪崩に關する研究が誠に幼稚なものであつて、冬期登山は雪崩に關する限り餘り充分な検討がなされてゐないのではないかと考へられる。

斯くして私の論點は再び本年一月の劍澤の遭難に戻る。劍澤小舎に九日まで壯烈な劍岳の登攀を志してゐた我々と同じ冬の山を志す仲間が、連日連夜の降雪に依つて、刻一刻と彼等の周圍には慘らしい死を豫想させる雪崩崩落の絶好の條件がひし／＼と迫つて行つたにも拘らずそれを知る由もなかつた事を思ふ時に、私は餘りにも冷く慘たらしい運命の惡戯を思はず居られないのだ。

劍澤の遭難當時社會に捲き起された喧々囂々たる世の非難、淺薄なる皮相的なる山を知らない多くの人々の悟り

顔の非難は、彼等の常識すらも疑はしめたではないか。

更にまた、今日の冬期登山界に於て何人かよく雪崩の危険なき時を指適し得るものがあらうか。雪崩崩落の條件は冬が深まるに連れて次第に増して来る。この時、我等山に登るものゝ求むる眞美への憧憬は、嚴冬の山をば志すことを拒否し得るであらうか。否、否、斯る危険を知る時に於て、我等の心は嚴冬の山々に、更に我等の求美躍動の精神となつて展開するのではないか。

冬季山岳に於て、瞬間的にしか得られない登攀と機會を待ち希んでゐるのも、我々が限りなく山を憧れるからなのだ。

山に對する登山者の技術が山の危険より劣つてゐることが斯る悲惨な遭難を産んで了つたのであらうか。私はそれを一應肯定せねばならぬ。だがそれは我々に冬の山に行くなと云ふことである。我々の山への戀情と熱愛とは更にその危険を克服し、それを巧みに廻避しつゝ、より危険多き登攀を志すことは我々の大なる喜びでなければならぬ。

劍澤小舎に六名を心行くまで弄んだ運命が同じ戯れを何時かは他の人々の上に襲ひかけるかも知れない。我々はそれを知つてゐる。だが心の中に深く刻まれた山への愛情は、何時も我々を遠く、高く、雪の山々へ驅り立て行くであらう事をも常に考へずに居られないのだ。

三、冬期劍小屋使用の限度

劍小屋が建設以來幾冬かを無事に存在してゐたにも拘らず、小舎を倒壊せしむる大雪崩にどうして逢つたのであらうか。結果論ではあるが劍澤の雪質状態から推して雪崩に遭遇すべき條件が、小舎を破壊し去らずと共今迄恐ら

く數へきれぬ程の好條件を具備しつゝあつたであらう事は上述の如くである。小舎建設者も小舎使用者も先づ雪の量とそこに襲ひかゝる雪崩に關する條件とを充分調査するのなれば、小舎の安全性を確認することは出来ない。單に小舎の位置がそれ自身では雪崩に對し安全であつても次のやうな例もある。

大正十二年二月五日有名な案内者小林喜作がその子や獵師を伴つて棒小屋澤附近に小舎住ひをしてゐた時の事、對岸の斜面から落下して來た雪崩が谷を埋めその餘勢が小舎に向つて跳ね上り、小舎を埋没して喜作父子は慘死して了つた。

大正十五年二月何人も小舎に泊つて居なかつた爲に大きな問題とはならなかつたが槍澤小舎が赤澤岳の對岸のクールアールから落ちたものらしいが雪崩の爲に崩壊して了つた。小舎の背後は雪も付かぬ險崖であり、槍澤はスキで直滑走をしても大してスピードも出ぬ所であつて、雪崩の落下を殆ど豫想することが出来なかつたのが、直径七寸もある柱を切斷し小舎前の湯殿を十數間も押し流して了つた。

此等の事實を見ても、何れも小舎がその建設者には雪崩からは安全であると豫想されて建てられたものであつても往々にして破壊される。殊に濕潤雪崩は氣温の上昇と陽光の照射等の影響で雪そのものが濕潤となるのであるから豫知され易いが、乾燥雪崩に於ては一定の條件が飽和状態に達すれば夜となく晝となく到る處から落下するのであるから常習的のラウイーネツツク（雪崩通路）は決定し難い。即ち正規状態に於ける定期的雪崩と云ふべきものは考へ得られない。昭和二年十二月三十日籠川谷に於て早大山岳部員を襲つた雪崩に對して、當時我々はあれ程の破壊力を持つ雪崩が出るとは豫想することが出来なかつた。と同時に大正十三年一月我々があの谷に入つてからも雪崩の跡は見なかつた。けれ共今後と雖も尙決して大きな雪崩が出ないと云へないし、又何時かは籠川谷一帯を埋め盡すやうな乾燥雪崩の惹起されることも考へ得られる。

劍小舎を破壊した雪崩の直接の原因は何であつたか。一つには東南面に出来た雪庇が崩れて粉雪斜面に落下した爲に崩落の原因を早めたといふ説がある。けれども地形上、鶴ヶ御前尾根附近に就て、斯る雪庇が形成されるとは考へ得られない。降雪量少き一月の始めには、雪庇が出来さうな斜面（西三三三、西三三三、西三三三）にさへも大きな雪庇が成熟するとは思はれない。

「雪崩の發生した地點は此の日（第二回の搜索隊の到着した日）、全然見られなかつたし、又雪庇も見えなかつた」（銀嶺に輝く第三十一頁）

これは雪庇が破碎されて了つたのではなく始めから此處には形成されてゐなかつたと解釋すべきである。

従つて雪庇の崩壊が一月の劍澤には重大な根據がない限り、雪崩崩落の誘因なりと斷定することは出来ない。

劍澤に小舎が建設された當時（大正十三年）から小舎に衝突する程度の雪崩の發生してゐたことは考へ得られる、然し小舎を破壊し去る程のものではなかつた。降つた雪が風の強かつたために一瞬時も降下地位に停まる事が許されず劍澤の下へ下へと吹き流され所謂「デブリを認めざる乾燥雪崩」の爲に斜面上に積つた雪が小舎に當つた際にも、それを破碎する程大なるものがなかつたのであらう。

而も、本年一月四日から九日の早曉まで、立山一帯が荒天に虐まれてゐた時に、風が絶えず、積雪の斜面を下から上へと、即ち雪の落下方向と反對に吹き付けてゐて、ともすれば吹雪のやうに落ちて行く雪崩を喰ひ止めてゐた。そして九日に至り急に風向が變り、強風が鶴ヶ御前の方から劍澤小舎に向つて吹き通したものとすれば一行の運命も全く此處に決したと云はねばならぬ。風が雪質を變化せしめる事實は雪崩崩落と勿論密接な關係がある。だが雪崩崩落に風力、風向が直接の誘因となるであらう事も、今回のアクシデントが充分に、事實を以て證明してゐる。

この雪崩に關する間接の原因——雪崩構成條件としては前述の氣象、積雪状態、地形に就ては已でに述べた通り

である。

小舎破壊に就て當時各方面から議論が行はれて居たが、その中の一つを私は次に掲げることにする。當時一月四日と想像されてゐた遭難が事實は九日である事、従つて九日の劍澤の雪量は非常に多量であつたであらう事實と神戸商大の田中氏の推測とが如何に隔りがあるか参考として紹介する。

「然らばあの様な地形上に建てられた三田平の小舎が五ヶ年間破壊されずに残存してゐたか、問題は依然として残る。私はそれを次のやうに解釋し度いと思ふ。前にも述べたやうに今年度は大變雪の少ない年であつた。これがために劍澤の積雪量は極めて少く、小屋も半ば以上露出してゐた（一月四日に於てはさうであつたであらうが、九日に於ては然らず——筆者）さうである。もし積雪量が私達の行つた時程あつたならば（昨年三月）今回の如き表層雪崩は假令、出ても、屋根を飛ばす程度で済んだかも知れない。また積雪下層面の岩石、偃松等の雪に對する支持點が比較的多くそれがために雪崩に大きなものが出なかつたのであらう。」（昭和五年一月週刊朝日）

この田中氏の論文中前の部分に於ては遭難されたと云ふ時日の誤りが矛盾を與へ、更に後の部分に於ては雪崩を流動の過程に於ける乾燥雪崩の原則を無視した重大なる誤謬ではなからうか。

四、乾燥雪崩

雪崩分類は今日まで多くの登山者乃至は學者に依つて行はれてゐる。けれどもその分類名稱は區々たるものであるが大體に於て左の三つが基準となつてゐる。而もこの三者を相互に結合せしめて複雑に雪崩を分類せんとしてゐる人々もある。

(A) 雪質に依る名稱

○乾燥雪崩 藤田

(B) 崩落雪層に依る名稱

(C) 崩落形状に依る名稱

(A) は純然たる雪質——崩落以前の——に依つて名稱を冠する。即ち乾燥雪崩と濕潤雪崩とである。今日雪質を中心として分類されてゐる方法として新雪舊雪の名稱があるがこの分類は少し妥當ではないと思ふ。

加納一郎氏は「實際に當つては容易にその特徴を知ることの出来る點」を強調されて雪崩を新雪、舊雪に二大別されてゐるが、その根據が私には充分に得心が出来ない。假令、ラン氏の新雪と舊雪の區別を、一旦降つた雪がシユメルツハルシユ（太陽の輻射熱、又は氣温の上昇に依り溶解した雪が更に凍つたときに出来る雪面上の氷の殻）となつたとき、それが更に溶けた雪を舊雪とすると云ふ定義を是認するとしても、現に降つてゐる濕潤な雪と一旦クラストが融解した雪が雪質上同一の場合もあらう。斯くの如く新雪濕潤と舊雪濕潤とは雪質に於ては同一のものであるやうな時に、尙新雪、舊雪の區別を以て雪崩分類が最も「簡單明瞭である」としてもこの大別に拘泥する必要があるとは考へられない。又加納氏の新雪、舊雪を以て分類の主要點となすために、乾燥雪が降つて後、濕潤雪に代つてこれが落下した場合にも、これを新雪濕潤雪崩と呼ぶやうな矛盾さへも認めなければならぬ結果に陥つて了ふ。（加納一郎氏「氷と雪」第二一〇頁）雪が外力——自然的影響を受けて尙且つ新雪であるとしたならば融解雪は凡て新雪であり、ラン氏の雪崩定義中にある雪崩分類中の第二、濕潤新雪雪崩（即ち全然溶解したクラストで構成されてゐる古い濕潤雪とは異り、溶解し始めてゐる雪）(Wet new snow avalanches) とは濕潤舊雪雪崩と同一條件に置かれるものではなからうか。

私は純然たる雪質の分類であつたならば、舊、新の別をとつても何等差支へないと思ふ。而もその方が——單に雪質からは乾燥、濕潤の方がより合理的であると考へる。たゞ比重に依るこの分類はその程度を以て區劃すべきか、

私には大島氏の乾燥、濕潤の比重を以て直に明確な區劃線とすることは斷言出来ない。この點に就き、大方の御教示あれば幸である。

(B)雪層に依る區別にしても今日、上層、全層又は全層、表層の名稱があるが、發生地に於て、雪が上層丈け雪崩れても静止状態の直上部に於ては全層の雪が落下することもある。斯る場合には果して何と名付くべきであらうかラン氏、加納氏、森田氏等がこの稱呼を省かれてゐる點は正當である。

(C)崩落しつゝある時の形状又はデブリの形状に就いては、今日の研究は未だ不充分である。前者は舟田三郎氏がその著「スキー登山」の中「冬雪崩」に於て一研究を發表して居り、後者は最近アンドレー、アリー氏の文献を通じて紹介されて居る。

一、加納一郎氏「氷と雪」二〇八頁

二、舟田三郎氏「スキー登山」六四頁——六六頁

三、拙筆早大山岳部發行「リュック、サック」第六年「雪崩と其の觀察」

四、田中薫氏著「登山」及び「地理學評論」昭和三年五月號九頁

五、アンドレー、アリー氏(グルノーブル高山地學研究所) The avalanches (The Geographical Review, Oct.

1924) Les avalanches (R. G. Alpine Grenoble XIII 1925)

右掲の文献に依つてデブリの形状に依り雪崩を歸納的に研究する方法が次第に明瞭になつて來たと思ふ。乾燥雪崩に於てはデブリを認めることが出來ぬものがあるから、デブリの觀察のみが雪崩全部を説明することが出來ないであらうけれども、雪崩に關する注意力乃至は觀察力は(C)の研究に依つて我々が助長されることが多いことは確かである。

以上の推論から私は雪崩を次の如く分類する。

雪崩
 乾燥雪崩
 濕潤雪崩

(B)、(C)に關する分類は特に區別することなしに以上の二つの分類の説明語として適當に附加するならば更に明瞭な雪崩名稱が出來上ると思ふ。

この一文を書き始めた時から使つてゐた乾燥雪崩を今改めて、我々の經驗から抽象化して見たい。

比較的長い急峻な斜面で雪崩を起すに必要にして且つ充分な運動量を生ずるに足る乾燥雪の容積と量とが存在する場所に惹起される雪崩を乾燥雪崩と云ふ。乾燥雪は一般に強い内部摩擦力を有してゐて、一般に雪崩を起すには強力な外部衝擊を必要とする。斯る衝擊の最大ものは風である。登山者が小舎に在つて今日は安全であると思惟してゐても、突然の吹雪のために雪崩が惹き起される事が決してないとは言へない。乾燥雪崩が落下しつゝある過程に於て強風を伴ひ來るのは一般に物體の落下原則に依るのであるが、更に乾燥新雪に含まれる空氣の爲に一層強力な破壊的のものとなる、これが乾燥雪崩の特徴である。斯る雪崩は落下の後、デブリが認められるのは落下中摩擦のために雪が濕潤となり、それが凍つて、青白いブロックが認められるのである。

乾燥雪崩の落下する現實的な條件を考へて見たい。但し風は絶えず雪崩々落の方向に吹いてゐるものと前提する。

(一)乾燥雪上に更に乾燥雪の堆積

(二)ウイントハルシユ(ケークドパウダーよりスカブラ更にマーブルクラストに至る雪の形狀を凡て含む)上に

乾燥雪の堆積

(三)發達した板狀雪(風成堅雪)の人為的又は自然的破碎

右の如き冬雪崩の落下の原因となるべき條件は正規的な冬の狀態としては當然に有り得べきことである。殊に北アルプスに於ては快晴の日が四日に一日とか、一週間に一日位にしか、恵まれないと云ふのが正規狀態である。荒天の日に頂に立つことは希み得ないとすれば、快晴の日こそ目的を果し得る時である。だが冬の山々は快晴の日に、よりよき雪崩崩落の條件を具備するに於ては、登頂の歡喜を得らるゝの日は、餘りに遠き希望であると謂はねばならぬ。

乾燥雪崩に就ては冬季の高山に於て絶體的にその危険性を認めねばならないにも拘らず、我々は北アルプスの冬季に安全な登降路を求め熱望に驅られる。私は冬季に於て或る安全と思惟される特殊な狀態を考察して見たい。冬季の高山に於て果して安全なりと考へられる時が有り得るであらうか。

「太陽熱の影響を受けない新降雪は、その落ち付くまでは多量の空氣を含んで居り、その落ち付いて了つた時でさへ、相當量の空氣を含有してゐて雪は粘着力少なく且つ雪崩れ難いものであるから、これがために安全を保つてゐる」(ラン氏アルパイン、スキーイング、雪崩分類の項)

乾燥新雪の雪崩れない状態は、降雪後快晴の日が続いた時の翌朝などに發見することが出来る。スキーはさ程埋まらず、且つ雪が風の影響もないことが見出される時は安全であると考へられる。

又、北アルプスの特有性から考へて嚴冬に於てさへ三千米の高地に濕潤雪の分布されてゐることは想像に難くない。

本年一月、私が岳川谷から前穂高岳を、更に他の一隊は岳川谷から天狗澤を登つて奥穂高岳を目指した時に、その後何等の降雪なかりし潤澤谷の數日後と比較して雪質上に於て非常な變化があつた。

昨年十二月三十日から本年一月一日に掛けこの岳川谷は、太陽の照射に依る影響で雪が濕潤となつて居た。天狗

澤の上部及び前穂高の一枚岩より上部は全くこの影響なく依然として素晴らしい粉雪をたゞへてゐたが、我々の通過した他の斜面即ち一枚岩の對岸には濕潤表層雪崩を見ることが出来た。他の一隊が天狗澤の鞍部までスキーを高めることの出来たのも濕潤雪の存在に依る處極めて多かつたと考へられる。乾燥雪の多量の堆積は天狗澤に於ては猛烈な雪崩となつて崩落することは何人と雖も當時認めてゐた事である。

又昭和三年一月、農大山岳部の先輩石塚氏が西穂高岳に岳川より登つたときにも、岳川谷の天候に起因する、より速かなる雪の濕潤化を利用して西穂高のクールアールにあつた濕潤雪崩のデブリを登つて居られる。

次に本年一月後立山山脈の赤澤岳に登つた鈴木、森田氏等は籠川谷一帯は粉雪に蔽はれてゐたに拘らず、鳴澤岳の山頂間近く、水の滴るやうな濕つた雪を發見して驚いたと云つてゐた。この點も今迄雪崩研究に就いて顧られなかつた高度と太陽の輻射熱との關係を提示せる興味深き事實であつて、且つ冬季の雪崩の安全性を求むべき重要な研究の對照となるものである。

デブリを認めざる乾燥雪崩に就いて次に述べよう。本年一月四日、私達が洞澤谷から前穂高岳と奥穂高岳の鞍部（前穂高寄り）から前穂高の頂を極めての歸路、北尾根や自分等の立つて居る斜面の上部一帯に亘つて一齊に雪崩が落下し始めた事があつた。けれども私達は何等の不安も危険も感じなかつた。崩落して行く雪は下へ、下へと押し流されて止まる處なく落下して行く、當時の天候は午前十一時頃から悪化し、三時頃には吹雪と化して了つて、その爲に荒天に悩まされつゝ、私達は前穂高の北壁を登つてゐたのであつた。風は五時頃に至つて猛烈となり、その爲に雪崩は起つて來たのである。併し、デブリは一切認めることが出来なかつたのだが雪の量は相當に多く岩の下の穴に落ち込んだ私の身體は直ぐに埋め盡される程であつた。

斯る雪崩の落下條件に就いては

一、傾斜角度が大であること。

二、落下斜面が平滑であること。

三、雪は比重の少ない乾燥雪であること。

四、風は雪崩の落下方向に吹き付けてゐること。

このやうな條件はよく高峻なる山岳に於て降雪中に起り得る。この雪崩は乾燥雪崩中に於て非常に重大な役割を務めてゐる。デブリが発見されない關係から我々は多く看過して了ふのであるが事實は降雪中無數に落下するものであると考へられる。この雪崩の崩落前提條件は冬期の最も合理的な氣象から生れて來るものであり、天候恢復後、大きな乾燥雪崩が案外に落下しないのは降雪中に斯る雪崩が雪を下に崩れ落して事實は大きな乾燥雪崩を落下せしめる雪をその時には既に蓄へて居なかつたのだと云ふ事になる。私たちが今迄大澤小舎を中心として、それを取り圍む幾つかの峯に登ることが出來たのも、結局雪が降雪中に落下して了つてゐたのである。又劍澤小舎が今日まで破壊されなかつたのもまた同様である。

であるから針ノ木の遭難にせよ、劍澤の遭難にせよ、雪崩崩落の危険中の極めて少ない可能性に直面して了つたことが、當事者の餘りに慘らしい運命であつたと考へるより外はないと思ふ。

私は乾燥雪崩の落下條件が冬季の正規的狀態に於ては常に具備せられて居るものであると考へる。だがそれが流動の過程に於て、風の力に先づ雪が止まることなく押し流されて了ふことのあるために、我々は大きな雪崩の惹起さる可き氣象上の條件を認むるに拘らず、必ずしも常に劍澤の雪崩、又籠川谷の雪崩の如く人間を惜しみなく虐み盡す大雪崩が生ずることが稀にしかないものだと思ふ事を教へられた。だから何時、如何なる條件の際に、大雪崩が落下するかと云ふことを規定することは更に大なる困難なる事實であると云はざるを得ない。山に於て、人命を

○乾燥雪崩 藤田

一四六

奪ひ去る雪崩は窮極我々の豫想し得ざるものであらうか。私は自分自身の見解を發表し來つて、今大きな障壁に直面する。雪崩回避の問題は最後に於て運命の神の決定する微妙なものではなからうかと云ふ悲觀的な結論しか生み出すことが出来なかつた。

登山家の若き生命をあやつるものは風か、將又雪か、知らず、冬の山の危険を回避することが出来ず、その若き靈をアルプスの雪に捧げて了つた人々の自然の冷かな惡戯に虐まれる悲しい運命を想起せずには居られないのだ。

—了—



二十五週年回想錄

○山岳會と山嶽志

高頭仁兵衛

拙者は幼年の時から身體が極めて虚弱でありまして、尋常小學校に在校中は、一年の半數以上の登校を致しました年には、父母や祖父から褒美を貰ひました位でありまして、「この兒は三十まで生きては居るまい」とも申されて居りました。尋常小學校を卒りますと、母の實家である與板町の山田家へ預けられました。與板高等小學校に通學を致して居りました。

當時の拙者の宅に近い高等小學校と申しますと、長岡町と長岡本町と片貝村との三校がありました。何れも一里以上二里以下の道程でありまして、毎日三四里の徒歩を致さねばなりませんので、拙者の父母や祖父は、拙者が夫れに耐へまいと云ふので、山田家へ預けて與板校に通學をさせる事にしたのでありまし

た。

或る日、學校で讀本に載せてありました、塙溫古堂先生の傳記を教へられました、その中に先生が多病であられたが、徒歩旅行をされたので、強健になられたと云ふ咄しを聞きまして、それから拙者は考へました。拙者のやうに多病では生きて居てもツマラナイから、兎にも角にも身體を健全に致さねば駄目だ、それには運動をするのに限りまするが、拙者の性質と致しまして、運動と云ふ名目が付きますると、どうも怠り勝ちになりさうに想はれましたので、是非とも毎日の日課と致しまして、永續實行の出来る事を致して見やうと存じました。

當時は交通が不便でありましたので十一歳や十二歳では旅行も出来ない有様でありました。よしんば出来ましたと假定を致して見ましても、父母や祖父父母が許可を致しまする筈がありませんと想ひましたから、こ

これは宅から一里半の道程の片貝校に通學を致して見やうと思ひました。現に拙者の宅の分家や配下の子弟であります、拙者の友人が四五人も片貝校に通學を致して居りました。そこ

で拙者は山田家や父母や祖父母の承諾を得まして、十二歳の春から宅から片貝校に通學を致しました。

その時の片貝校の地理歴史の擔任の先生が現今の日本山岳會の名譽會員の大平晟氏でありました。大平先生は日曜や祭日の休暇には

必ず附近の小山に登られて居りましたので、日に焼けてましたお顔に菅笠の緒の當ります所だけが白く見えて居りました。大平先生は折がありますと、金倉山カナクラヤマ（標高一五一米突）や、彌彦山ヤヒコヤマ（標高六三一米突）や、米山コメヤマ（標高九七六米突）の登攀談を致されました。また修



郷西片町の山岳會最初事務所

學旅行には時には荻城ヲギノツツヤ（小丘、松本大學と云ふ人の舊城趾）や、升形山ノスカタヤマ（小丘、上杉霜臺公の勇將、甘糟近江景持の舊城趾）などへ連れて行かれました。拙者は次第に身心も強健にな

つて参りましたし、

山に登りましての眺望慾も増長致しました。只今から四十一年前の十三歳の暑中休暇に拙者は始めて彌彦山に登りましてその雄大な景觀に驚きました、二十一歳の暑中に御殿場の太郎坊から富士山に登

りまして須走に下りました。その頃に志賀矧川先生の『日本風景論』を読みまして、益々登山慾が強くなりました。二十一歳の秋に郷里の八海山（標高一、七〇五米突）と苗場山（標高二、一一〇米突）に登りました。此時には拙者は戸主ではありませんでしたが、弱年でありまし

たので、諸事を親族や分家の人達と協議を致して居りました。

八海山は可なり險阻でありますので、拙者が八海山に登山をしたと聞き傳へた、分家の長老の又内翁がビツクリ致しまして、拙者の宅の番頭で眞ツ正直の山崎彦吉をヒドク叱りましたさうでありました。何分にも約四十年前の事でありまして、又内翁は六十有餘の年齢でありましたので、山中には大蛇や狼が棲んで居りまして、危険でありますものと、確信を致して居りましたのも決して無理とは想はれませんのでありました。

拙者はまた拙者で、一山に登りますとそれだけ登山に興味を持ちまして、登山の準備を致して居りますと、山の知識も登山の経験も無い、又内翁や彦吉に禁止を命ぜられました、拙者が理屈を申しまして聞かれませんので、兩人は拙者の母を説きまして、母から拙者に登山の嚴禁を申し渡させました。が拙者も母と喧嘩をしてまで登山を致さうとは存じませんでした。

もしも此事が有りませんでしたならば、拙者の登山癖は案外に短日月で終つたのかも知れません。

登山の禁止をされました拙者は壯年血氣の時でありましたから不平で堪りませんでした。その不平を漏らしまする爲に、手當り次第に地理や和歌や詩文集や紀行書を読みまして、山の記事の書き抜きを致しまして自分一人で嬉しがつて居りました。これが可なりの量になりましたので、拙者は假りに『日本名山綱』と名付けて置きました。

その頃に小島烏水兄が雜誌『文庫』に頻りと山岳の記文を載せて居られましたので、拙者は『文庫』を愛讀を致して居りました。當時拙者の配下が神田の小川町に白米商を致して居りましたがその時に文庫社が駿河臺下の紅梅町にありましたので、拙者は米屋へ行きまして序に文庫社を訪ねまして、小島兄に御面會を願ひますと店員が「只今御留守です」と申したのを、拙者は小島兄が御旅行中だと獨りで呑み込んで、歸宿を致しました。これは明治三十一二年の頃かと存じます。

拙者は自記の『日本名山綱』の材料を取捨整理を致しまして一書を編み出版刊行をして、世に同志同好者の有無を試みに問はふと思ひまして、それに着手しましたのが明治三十五年夏でありました。

翌三十六年の初冬に一書を成しましたから『日本名山鈔』と命名を致しまして翌三十七年の二月二日の父の正忌日に法會を畢り次第に上京を致しまして印刷に着手を致さうと存じて居りますと、日露の外交が次第に險惡となりまして、二月五日に國交斷絶となりました。拙者は村人に依頼をされまして、戰爭中は村治の統一上、尙武會長を勤めましたので、この事に盡力を致して居りましたが、尙原稿は認めて居りました。

これは前年の冬に小川琢治先生の高教に従ひまして山系と火山帯と區劃の變改を致しましたため、山岳の排列順が異なりましてので、既成原稿の全部八百枚の書き換へを致しましたからであります。

それが四月の下旬に纏まりましたから、拙者は村人の快諾を得まして上京を致しまして、本郷の西片町に借家を致しまして印刷に着手を致しました。また友人の大竹貫一君と同行して、志賀先生を訪問を致しました。そして、先生から始めて小島兄が横濱正金銀行の行員で居られる事を承りました。これは小島兄の白峰紀行が博文館の雑誌の『太陽』に載つて居りましたので、小島兄の噂が話題に上つたからであります。

先生は日本の深山の事は西洋で出來た日本案内書の方が詳しいからと申されて、拙者が横文字が讀めぬと云ふと、毎朝に原書を読んで聞かせるから、時間を定めて來訪せよと申されました。

その時には文庫社が本郷の空橋の附近にありまして拙者の借家からは近くでありましたので、拙者は早速に小島兄の御住所を知りまして、その翌日の夜中に小島兄のお宅を御訪問を致し、拙者の原稿の一部を御覽に入れて、増補の記事をお願いを致し、その御快諾を得ました。

小島兄は『日本山嶽志』と改稱せよと申されましたので拙者が勝ち過ぎませんでせうかと申しますと、小島兄は「だつて君、日本に従前からコンナに山を専門に書いた本は、無いでは無いか、名が勝ち過ぎるんか」と謙遜なんかせんでもいいさ」と申されましたので拙者も「それもさうですな」と自惚れまして改稱を致しました。この時小島兄からウエストンさんが英國へお立ちなさる時に、日本でも一日も早く山岳會を設立すればいいと申された事や、また『博物之友』を刊行をされて居られた、若い人達が、植物や昆蟲を熱心に

研究されて居る事も承りました。拙者が小島兄を御訪問申しました時日は明瞭を缺きますが、五月の十日以前でありました事だけは確證があります。

七月七日の午前十時に高野兄と梅澤兄と山川兄（當時は河田氏）とが小島兄の御手紙を御持参になりました、拙者の西片町の宅へ御訪問になりました。その時に高野兄は下旬に八ヶ岳と甲斐駒岳へ登ると言つて居られました。

幾日かの後に武田兄も見えられました、だん／＼と山岳會組織の機運が熟して参りました。

その中に城敷馬さんと小島兄とで武田兄の御宅で協議を致しました事がありました。これは三十八年であつたかも知れません。三十八年の十二月に山嶽志の本編が終りましたので、拙者は山嶽志の索引を西片町の留守の人々に依頼を致しまして歸國を致して居りますと、某日の夜に、城さんから電報で、明日伺ふとありまして、その翌朝に城さんが拙者の宅へお見えになりました。

明治三十九年の二月の初旬に山嶽志の製本が出来ましたので、拙者は上京を致しました。

山岳會の主要な協議は先年中に纏まつて居りましてその機關雜誌の「山岳」第壹年第一號は、その年の三月十五日に刊行發賣をする豫定でありましたが、實現を見ましたのは、四月の五日でありました。

雜誌の命名に就いては、最初は「雲表」と云ふのが勢力がありました。小島兄の「山岳雜誌」は如何かといふ御説が outcome として、最後に武田兄の發案に發起人の一同が賛成を致しまして、今の名に確定を致しました。

拙者は只今、東京で病後の靜養中でありまして、參考の材料が尠ないのでありますから、ホンの記憶に存して居りますことだけを陳べて置きます。他日に折を見まして、改めて發表を致さうと存じて居ります。

餘談ではあります。序に付記と致しまして、拙者の馬鹿さ加減を申し添へて置く事に致しました。昨年の秋の頃から國に居ります二三の友人知己から國の方で拙者を評しました妙な噂があるのを聞きました。その噂と申しますのは「河内（拙者を指す、拙者は深才村大字深澤小字河内に棲んで居りますから、拙者の地方では、拙者の戸籍面の名よりも、この方が通

りがいいのであります。は近頃の登山氣運の勃興を目されて、自分達の獎勵鼓舞宣傳の力であるかのやうに誤解をされて居られるやうであるが、アレは全く金のお蔭であつて、金さへあれば誰にも出来る事であつて、別に河内の主人に何等の能力があつた譯では無いのだ」と云ふのであります。

成程、拙者が『日本山嶽志』の出版をすることが出来たのも、山岳登攀をすることが出来たのも、雜誌の『山岳』を印刷刊行をすることが出来たのも、みんな金の力に依りましたものには毛頭も相違はありませんが、鈍物な拙者は、それが分つたやうで判りませんものと見えます、只今でも拙者は、今日登山氣運の勃興には拙者の微力が、幾分か關係を致して居りますやうに考へられてなりません。(昭和五年九月二十三日、谷中清水町壺番地の寓居にて認む)

〇山岳會創生記

高野 鷹藏

斷續斷續、記憶は夢の如く模糊として居る、遠い昔

を夢見る如き心持がある、山岳會創生記は斯くして語り出さう。

古い昔からの岳友諸君は斯く思ふであらう、あの大地震でよく、横死しなかつたものだ。死は免れたが一切のものは烏有に歸した。實を云ふと餘りの未練さに燒跡にうづ高くなつて居た山の寫眞の乾板の塊、自分や友人の精魂をぶち込んだ山の寫眞のあの塊を見て——どれもが溶け合つて素硝子の如く透明になつて、その數は無慮千一、三百枚、その中には辻村の寫したのや三枝君の寫したのなど今は又得難い——何とも言ふに言はれぬ思ひでちつとそれを恨しくも眺めて居た。その他一切の山の資料或ひは今日の廿五週年の時に使ふつもりで、残してあつた、小島君自筆の原稿、一年一號の原稿等數は多過ぎる程の材料が失せた。五十年記念迄は生きられるかどうかは想像出来なかつた當時、だから廿五年記念には大にやるべしとの期待があつた。どう云ふわけか或ひは年のせいか大地震を境にその前の記憶は斷然淡くなつてしまつた。従つて今書く事は或ひは誤りなしとせず、又他の同人の記憶と一致しない點があるかも知れない、何事でも創生記は

夢の記録である、總ての同人の記憶をまとめたものが事實なのであらう。

老人（ではないが山岳的には老人である）の世迷ひ事は今のアクティープ、クライマース諸君には興味も起るまいが、今にして書きつらねて置かねば、今後の二十五年は山登りもならぬ年月を送る事は困難であらう、暫くの我慢をして頂きたい。そして兎角古い事を書く事は手前味噌ともなり、遂には自惚れとなり自慢ともなる、これを先づお詫びしてから書かう。

× × ×

山岳會が生れる前に吾々同人が集つて博物同志會と云ふ今から考へれば子供の會、當時としては意氣壯々たる若人の集りがあつた。「博物の友」は今は極稀品であるが、それがその機關雜誌、その内容を今見ても決して耻しくないと思ふ。その同人で山岳會と因縁淺からぬ人々は、發起人の中では武田君、山川君、故人となつた梅澤君と斯く申す拙者、役員の中では鳥山君、此外多士濟々たる感があつた。どうして拙者がそのグループになつたかどうしても思ひ出せない、記憶のいゝ武田君にも聞きたゞしたが判らずじまひ。兎に角斯

く云ふ若い學生の生物好きの人々が集つて居た團體があつたと思つて頂きたい。この團體の人達は植物なり動物(昆蟲)なりの採集に絶えず活躍したもので、それから遂に専門の學者となり、始終を一貫した人は、武田博士、山川理學士(前掲の發起人)、此外會員の矢野宗幹君(理學士)、少しく方向が違つたが死んだ梅澤君は理論物理を出た理學士、今東大教授の市川三喜君などもこの仲間であつた。

斯くて機關雜誌「博物の友」はその採集旅行記、ひいてはその多くは登山紀行文となり、聊か登山紀行文を持って餘し氣味となり遂には別に登山紀行號を出すべしとの議もあつた。即ちこの集團に屬する今日の發起人はその當時は山登りが従て採集が主であつた。事實は兩者同じであつたかも知れないが少くもその登山の動機は標本の採集であつた。

斯くて二三年も経つたか、今は廢刊された「太陽」と云ふ博文館から出た雜誌の一年一號であつたかに今の小島鳥水君(發起人)が白峯三山の紀行を書いた(その頃は吾々とは未知の人)。それにすつかり感激したのが武田君、どこをどうして聞いて來たか、「なんでも小

島と云ふ人は横濱に居る人ださうだと云ふ話だから君一つ探し出してくれ。」と云ふ無茶な話、その當時は生れてから大地震迄横濱に居を持つて居た拙者としては當然の役廻り、安受け合ひはしたものの、人相書があるわけでもなく、皆目判らずに時を送つた。それこそほんとうに或日、(今の私には震災前のもは塵一つない身で記憶をたどる何物もない) 多くの方々には御承知あるまいが、横濱に野毛山と云ふ丘がある、開港當時の俗話に

野毛の山からノウエ、野毛山の山からノウエ

野毛の山から異人館を見ればね、云々

と云ふあの歌の野毛山の中途で、何でもその日は何かの選挙日であつて、看板があつた記憶がある。舊知の山崎紫紅君が立つてる。確か羽織を着て居たから冬の初めかも知れない、何の氣なしに、「小島烏水と云ふ人を御承知ですか」と聞いて見ると「あゝ小島君かい、僕の友達で西戸部の山王山に居るよ」と餘りにも無造作な返事に、先づ鬼の首でも取つた位、尙聞けば自分の家と一丁ばかり離れて居る正金銀行へ毎日出勤と云ふ話、かたの如く紹介状をもらつて別れた。

斯くて吾々と小島君と結れる縁の糸の端が繰り出された。或日、(武田君の日記でもあれば正確に判るのであらうが) 冬の半曇の寒い日であつた、茲に山岳會の芽生えるべき時が來た。總ては自然の推移である。武田君と自分とは小島君の舊居、山王山尙番地かを探すに可なりの骨を折つた。小島君の舊居がそんなに小さかつたと云ふ惡口ではない、番地の整理がついてないからなのだ。これは後での話だが、「僕の家は判りいゝよ」と事實二度目からは間違はずに行けた。斯くて山崎君の紹介状を持つて青書生二人は恐る／＼伺候に及んだわけ、その當時の小島君の家は家の中から横濱の北部から神奈川方面の見晴せる家で、その後やはり山王山の他へ移り、それからアメリカに行かれ今は自分の居る同じ阿佐ヶ谷に居られるとはどうした風の吹き廻しか横濱では近く(勤務先が)、とうとう世間から逃避して來た自分の居も亦近くこれも亦不思議の縁、繰り出された糸の一端は或日の山崎君の一言にありと思へば復面白事でもあり、それが又山岳會創生記の第一頁でありとせば世に不思議は多い事である。

斯くて恐る／＼推參した青書生二人、何でも犬に吠

えられた様な氣もする、これは追つて御當人に聞けば判る事。折り悪しく當時は鳥水先生なる小島君は風邪氣味で寝て居られたが折角の來訪と云ふので、強ひて會つて下さつた事を覚えてる。今更ながら當時の事を思ふと面白い。その時は何でも小島君は富士山に「クモ」の研究に行かれての後と云ふのでその氣焔當るべからず、その氣焔凝つてこの「雲表」となつたのかも判らぬ。クモと聞いて驚いたのは斯く申す拙者、段々御話

が進んで「シロイクモ」に三種ありと云ふ所あたり、昆虫に興味を持つ自分には不思議千萬愈々話は興に乗り「シロイクモ」三種の説明に曰く乳白色、曰く……迄來た時に、自らの頭の悪さをつく／＼と感じた。現代語で云へば「ダア……」と云ふ所。さてそこで話は變つて他の話となる。當時小島君は「文庫」（文藝雜誌で、文庫同人として今日文壇に名をなして居る人々は多々ある）の主筆をして居られ盛に文庫誌上に紀行文、特に登山記に就て縦横の筆を振つて居た。即ち小島君の當時の山登りは紀行文を書く爲であり、登山の結果紀行文も出來、恰も吾々博物同志會の一團が山が主か採集が主かと同じく方面こそ異れ、山に憧憬を持ち山に

愛着を持つのは全く同一であつた。

金平糖の中心はケッツプ、雨の中心は微細なる塵とか聞き及び、兎角物事は出来る機會と、その核心となるべきもの、又それを育成する或る力を必要とする、山岳會創生記第二篇は斯くして語り出される。

吾々博物同志會の一團と小島君と接觸して行く一方、小島鳥水先生なる恆星に向つて突進して行く彗星、高頭仁兵衛氏なるお百姓さんが現れた（氏自ら斯く云ふ）。それはあの、とてつもない日本山嶽志の著者であり、又今は即ち老友として時々お小言を頂戴するあの高頭君である。氏はその頃日本山嶽志の稿本成つて、當時「文庫」に割據して登山文章の大錠を振つた小島鳥水先生にその稿本も見せ校閲もしてもらひたき希望があり、當時本郷西片町にあつた「文庫社」を訪ねて小島先生を求むる事數回、絶えてその片影をも窺ふを得なかつたのである。それは當然過ぎる程當然、小島君は横濱に鎮座し、文庫社は東京にあつて、如何なる理由か、或ひは當時の文學青年退治の秘法か或ひは社の政策上の事か全く小島鳥水先生の影何處に求むべきやと三嘆したと云ふ話は後年仁兵衛老から承つた話。

斯くて高頭君もとう／＼鬼の首を取つた方、山王山の一端に躡居した烏水大人遂に高頭君の巨大なる「日本山嶽志」の稿本を積み重ねられて、感嘆久しくした事はよく話に出る。

即ち茲に期せずして三つの分子が集つた。即ち小島君と云ふ核心、高頭君と云ふ特志家、並に吾々博物同志會を中心としたる一團、即ち小島君が金平糖の芥粒なら高頭君、吾々並にこれ亦馳せ参したる城數馬老(事實當時一番の老人)、斯くしてこれが醸成され金平糖の様につの／＼だつた山岳會が敢て發生したのである。

尙もつと詳説する必要がある、少くも高頭君は吾々より先か、或ひは同時頃に小島君の家に突入したのである。吾々は小島君に「博物の友」登山紀行號を出す話もした、すると小島君が曰く、「どうです一方にさう云ふ計劃もあり、又他方に高頭君と云ふ特志家もあり一つに打つて一丸として登山雜誌を出し、會も作つて見たらどうです。」と云ふ事になり、それならば一度吾々も高頭さんにも御目にかゝり、又色々御相談もしようではありませんかと云ふ段どり迄進んだのであつた。その頃高頭君は本郷西片町に居をかまへ、山嶽志の編

纂に従事せられて居たので、武田君と自分と梅澤君とで御訪ねした。その家は今でも舊態を存して居るさうであるが、そこで總てが相談されたか、その後何處で相談したか等一切自分には記憶はない。その後愈々山岳會が成立する迄には色々の経緯があつた、それ等二、三の餘り誰もが知らぬことを書いてみよう。發起人の一人、今は故人となつた棲碧、城數馬君は、その當時知識階級にもてはやされた高山植物の栽培、その頃は山草と云ひ、特に會員の松平唐民子(故人)や、城さんなどが先達となり大いに宣傳、且、栽培に勉めたもので「山草會」と云ふ會合もあり、今なら早速營林署あたりから警告される位盛に採集したものである。即ち城さんが發起人になつたわけは山草に因を發するので、これ亦金平糖の角に當るわけである。當時城さんは東京市會議員で本職は辯護士、發起人中での最年長者であり、職務柄中々手きびしい所もあつた。當時の發起人は前にも述べた如く金平糖の芥子粒と砂糖であり、出來上る迄は親和力も薄いものであつたわけで、そこで棲碧老、會を設立する前にわざ／＼高頭君のお國迄出かけ(新潟縣三島郡深才村)、失禮な云ひ方だが

城さんが自分の發意で云はば高頭君の身元調べをやつたわけで、御年役(當時の)とは云へこれ位の注意があつて初めて山岳會は二十五年の歴史を數へ得たのかも知れない。當時としては長老榎碧氏は別格、次で小島君高頭君と共に壯年時代、武田君、自分、梅澤君、山川君は青年時代(大體年の順)、一同元氣潑洩、只「山が好き」と云ふ一點張りの強行軍であつた。創立當時は城氏の法律事務所に事務所を置く事になり、毎週何回か武田君梅澤君等が事務所へ行く事になつて居たが、さて中々さうも行かず、城氏はめつたに事務所には居ず、事務をとる人間は城氏の玄關子、うまく行かう筈もなく、その後城氏が朝鮮の覆審法院長に任ずるに及んで事務所は城氏の令弟の所に移りなどして、全くふら／＼の有様それでもよくあれ丈けの雜誌も出したり、仕事もしたものと思ひ出される。榎碧老の功決して没すべからず、よく創立當時の動搖を避け得たのも又同氏の功に一部を歸すべきであらう、今や地下に眠る同君、さぞや小言の一つも言ひたい所であらう。

山岳第一年第一號の四十一頁に日本博物同志會の規則書があり、その中には「本會々員にして本會内山

岳會の正會員たるべき者は同會々費を年額金八十五錢に低減さるゝの特典を有す」と云ふ條項があるが、この一項は知る人の餘りに少い事である。創生記としては脱し得ぬ事でもあり、創立に至る迄は生みの惱みの數々があつたが、この問題も亦その一つで簡単に説明すれば、山岳會が日本博物同志會を母體として發生した事になるのだ。當時の議論としては結局さうする事が一番便利であり一番障害のない方法であつた。今でこそ總てが溶融して「山岳會氣分」であるのだが、創立當時としては又免れぬ點であり、恰もアミーバの一つが分割した如くその各々が結局は獨立したのではあつた。愈々山岳會が成立したのが明治卅八年の秋、越えて三十九年の春に「山岳」第一年第一號を出した。忘れもしない、第一號の編輯會議は武田君の家で行つた。當時は山の寫眞などは極く少く、あつても口繪などになるものは少く、當時の山岳寫眞家としては志村烏嶺君が活躍したものであつた。

度々引き合ひに出す金平糖も、只砂糖と芥子粒だけでは出来ないの、それを動かす力も必要で、山岳第一年第一號の會報を御覽下されば判る如く茲に遙かに

英國から一脈の刺戟と激勵とが來た事で、吾々山岳會
 同人がウエストン長老に接するの日は一日早かりせば
 一日早く山岳會が出来たかも知れない。醸成されんと
 した山岳會は愈々此好刺戟に由りて、恰も秋の日の茸
 の如くめき／＼と成長した。長老ウエストンも廿五年
 を迎へる、吾が日本山岳會を、さぞやあの細い目を細
 くして眺めてる事であらう。ウエストン長老はその後
 再び日本に來た。そして今は再び英國に歸り三度我國
 に來る機會はないであらう。

最後に一つのゴシップを書き加へよう。私の所へ事
 務所が移る様になつてから、小島君との用事が愈々多
 くなり、毎日電話で同君の勤務先の正金銀行へ電話を
 かける、又向ふからも來る。しまひには銀行の交換嬢
 と私の所の交換嬢と相互に聲音を覚えてしまつたのは
 結構。然し私の家業上、正金銀行とは絶えず用事があ
 り時々電話をかけると、その電話は小島君の係り以外
 の仕事であるにも係らず、私の家から掛けるとだまつ
 て小島君の所へ接続してしまふには弱つた。

——了——

○今昔の感

武田久吉

日本山岳會設立當時の委曲については、嘗て梅澤君
 が執筆される筈であつたので、吾々も同安心して居る
 と、ポツクリ他界されてしまつた。然らば梅澤君に次
 いで——或はそれ以上に——記憶のいゝ河田黙君にで
 も御願ひしようとしても、山川と改姓後、同君は山
 方にはどうか知らないが、なぜか會の方には一向寄り
 つかれないし、御願ひした處で承諾の返事を得られさ
 うもないとは困つた話である。それで順番は私の方に
 廻りさうなのだが、山岳會設立の第三年目即ち明治四
 十年の春以來——「山岳」第二年第一號が未だ發兌され
 ない前に——東京を離れ、十年間もあちこちと、而も
 その大半は海外に漂浪して居た御蔭で、昔の細かい事
 は大抵忘れてしまつたから、宜しく高野君その他の方
 に御鉢を廻してしまふことゝした。

明治三十八年の秋に會が誕生して、この秋で丁度滿
 二十五年。僅々二十五年が何だ！と言はれればそれ
 迄の話。だが然し二十幾年に互る光輝ある歴史など、

おだて上げられればまた豪らさうにも見える。兎に角日本には空前であつたものが産れ出たのであるから所謂エボック、メイキングといふ譯。先づ今日の登山家と名乗りを擧げる人達は、直接間接に、その當時山岳會の旗下に馳せ参じたパイオニアースの感化影響を受けて居ないと言ふ譯に行かない。いや俺達は明治四十何年の産れ、山岳會などの厄介には微塵もなつた覚えなし、而もかく一流の押しも押されぬ登山家なり、なんて威張つた處で虚假威し、嗤はれるのが關の山。まあ、空威張りだけはよしとく！

とに角山岳會の藥は慥に利いた事、昨今流行の強精劑以上！ 但し盛り方にチト手落ちがあつたと見えて眞面目な登山家は比率が恐ろしく低下し、唯もう流行病性患者として、一種の病院にでも收容すべき類の者が殖え過ぎてしまつたやうである。辻村をして言はしむれば、上げ潮に漂ふ猫の死骸にたかる金蠅銀蠅の類なのだらう。そのまた金蠅銀蠅が、どこをどう戸迷ひしたか、腐つてもしない山岳會目がけて飛んで來る翅の唸りの五月蠅いこと！

本當に山岳を愛し、山岳の氣分を味ふ爲めに山に赴

く人は居ないのかと思はれる程、山の中があらされて居る。低級な下界趣味に適合しようとする、あの山小屋の有様はどうだ？ どうせ荒れ果てた上河内の如きは、蟻共に投げ與へる梨の心同様に、有象無象の逃避所としてやつても宜いが、どこかに清新な氣分の横溢する箇所の一つや三つは残して置き度いものだ。

尤も山中が俗化するのを、何一つおせつかいもせず放任して置いた山岳會が宜しくない、など、横槍が飛び込むこともあるといふが、一般の登山者が山にピツタリ來る様な高尚な趣味さへ持ち合せて居たなら、あんなむかつく様な山小屋は自然に淘汰されて、姿を隠してしまふのは必然だから、微力な山岳會が暇をつぶして騒ぎ立てる必要もないことであらう。

登山の準備とか技術とかも恐ろしく進歩したものだ。ルツクザツクもビツケルも勿論ないのだから、その昔の山行きには雜囊に金剛杖、經木の帽子に着莫塵といふいで立ち、履きものは勿論草鞋に限るとされたもの、それが今はどうだ！ 運動具店の廣告隊かとさへそそつかしい者は間違へさうな姿をしたのが、あつちに一組、こつちに二組！ 雪も氷もない穂高にビツ

ケルを引摺つたり、富士にザイルを背負ひ上げるの勞を敢てする。尤も昔だとて、惡場に出遭へば、用意の細引位は取り出したものだが、幼稚な道具は唯一に山に登る方便に使用されたもので、岩にかぢり附く爲めだとか、氷や雪の上を滑る爲めに山に赴くのは目的とする處が己に違つて居た。登山には岩や氷雪をマスタ

ーすることが必要だ。そしてその技術だけを十分に修得練習するだけでも容易でないと共に、又それに伴ふ興味も湧いて来る。しかしこれが登山の總てでないことは言ふに及ばないが、中にはさうだと思つて、誤まつた觀念に捉はれて居る。尤もそれが自己陶醉に掛つて居るだけなら、何も文句はないが、さうでなければならぬかの如く、他人に強ひて、而も容れられざるに及んで惡罵するに至ると、チト狂氣の度が過ぎる。何の事はない羊羹を食ひ茶を飲んで舌鼓を打つ者を見て、酔拂ひが罵倒する様なものだ。

短い様で長かつた二十五年。その間にし度いと思ひ乍ら資金や適任者が得られないで、爲し得なかつた仕事は澤山ある。また折角計畫したり、或ひは改めて見た處で餘りに時代から進み過ぎて居た爲に、周圍が幼

稚で共鳴者を得なかつたこともある。然しもとゞ同趣味者の集りであり、誰に頼まれたといふ譯でもない以上、與へられた仕事を等閑に附した廉で、汚ない御尻を持ち込まれても、受附ける術がない。

それでも門外漢から何のかのと言はれる丈け、山岳會も豪くなつたものと見える。尤も始めた自分達は初めからゑらいのだと許り思つては居たが。然し最近に於ては、幹事になり度い爲に醜運動さへ行はれたと聞いて、山岳會の幹事といふものが、それ程までに美望(?)の的となつて居るものかと、吾乍ら驚きもし又呆れもした。そしてまた會を羨やむの餘り、それに對抗しようとする、螻蛄組もどこかの隅に頓して居るといふが、假令末法の世ではあるとも、山岳界に桃色の繪の具をぶちまけるのは、海の彼方は知らず、我が國では餘りに大人氣ない業であらう。梅澤が生きてゝも居たら、二十五週年の記念事業として、山岳會を一と思ひに解散してしまつたら、さぞさば／＼してよからうなどと、言ひ出さない限りではない。そして同じ酒でも、一層旨く飲めるといふものさ! まあこれで駄筆は打ち切り〜。



笑

この頃の
人々
笑

〇日本山岳會成立まで

小島 烏 水

前置きの長い文章に、いゝ作は少ないもので、遺憾なことに、この文章にも、多少の前置きが附く。

日本山岳會成立までに、同志の人々は、何十回となく會合した。恐らく何百通といふ手紙の、やり取りを（みんなの分を合算すれば）やつたらう。私の所藏の手紙だけでも、數括の多きに達した。それが今日では

——故人となつた人の眞蹟もあるし——貴重なる史料になるべき筈で、私は珍藏のあまり、渡米の際も、持ち廻らずに宅に残して置いたのがいけなかつたので、關東の大震災で、私の宅は、幸ひに、倒壊も焼燼もしなかつたが、傾斜したので、家族は附近の竹藪に避難した。その留守に、避難者だか、暴徒だか知らないが宅に闖入して、米櫃から米を持ち去り、書齋から幅物や書類を、失敬して去つた。その書類の中に、右の山岳會關係の分、凡べてと、初代廣重の肉筆日記があつ

たことは、返す／＼も残念である。鼻紙にでも使用したとするならば、その男の鼻は、今頃、南部の鮭のやうに、曲がつてゐるだらう。諸君もし、途中でさういふ罰當りに遇つたらば、早速私に、その旨を報告してくれたまへ。

といふわけで、私の手許の史料は、書翰である限り殆ど散逸してしまつてゐる。だから、私は記憶を辿つて、この文章を書く。然るに記憶といふやつは、時代が前後したり、相手方の彌次さんが、喜多八になつてしまつたりする類の、頗る當てにならないことが多いのを斷つて置く。

私自身の關する限りに於て、日本山岳會の發祥地は槍ヶ岳であつた。槍ヶ岳登山のおかげで、私はウエストン氏と相識るに至り、ウエストン氏に教へられて、世界の各國に、山岳會といふ會が存在してゐることを知つたのだ。そして、その以前に於て、私に山岳會といふものゝ暗示を與へてくれた人は一人も無かつた。然らば何故、私が槍ヶ岳に登つたかといへば、それを書物の上で煽動教唆してくれたのは、故志賀矧川（重昂）先生に外ならなかつた、煽動者に謝す。

私の少年時代に「少年文範」といふ本があつて、その中に、柴四郎氏、徳富蘇峰氏、志賀矧川氏等、其他諸文豪の文章が收められてあつた。就中、柴氏の四六駢麗躰ともいふべき、漢文くづしの名文、徳富氏の、マアコレー卿の文脈を採り入れたやうな、和洋折衷躰の文章は、私を動かしたが、更に志賀先生の詩味饒たかな感傷的な文章は、私を興奮させるのに充分であつた。其當時、徳富氏の「國民之友」に對して、志賀先生は「日本人」といふ蜻蛉を描いた表紙の、雑誌を發行せられ、歐化主義に對抗して、國粹保存主義を提唱され、青年の思想界を二分した形があつたが、志賀先生は、國粹保存の見地から、日本の國土愛に着眼せられ、「日本風景論」を著はされた。この本は、私の記憶してゐる限りに於て、十數版を重ねたが、貧乏なる私が漸く手に入れたのが、第六版になつてからであつた。私はこの本を、山水の經典のやうに信頼して、反覆熟讀した。一體、私は健康上の關係から、徒步旅行が好きになり、箱根や淺間にも登つてゐたが、この本を讀み出して、一層山に深入りする氣になつた。そこで富士山に次ぐ高山が、槍ヶ岳であること、槍ヶ岳の峻拔にし

て、溪水の晶明なること、原始の風光の保存されてゐることなどを、教へられ、槍ヶ岳に第一登山を企つることを、命掛けの仕事と考へるに至つた。既に播隆上人が江戸時代に登山してゐたことも、明治以來ゴウランドやウエストンの登つてゐたことなどは、當時知らう管がなかつた。槍ヶ岳を書籍の上で研究して見ると「風景論」には、三千五百三十一米突、松嶋剛氏の「近世地理學」及び矢津昌永氏の「日本地理學」には、一萬一千六百五十二尺とあつて、正に富士山に次ぐ高山に相違ないと思はれた。後になつて「風景論」の三千五百三十一米突といふ標高は、農商務省の技師、坂市太郎氏の「飛驒四近地質調査報告」に依られたもので、山中光景の記事は、倫敦ジョン、マアレイ出版の「日本案内記」の英文を反譯されたものであることを知つたが、それはすつと後の話である。ともかくも、私は仰山なる用意を以て、かのアルバート、スミスなる飄飄者が、アルプスのモンブラン登攀に、一と世帯の道具を擔ぎ込みたる昔話も、笑ひ事ではないやうな用意を以て、明治三十五年八月に、友人岡野金次郎氏と共に、槍ヶ岳を白骨温泉方面から登つた。白骨から霞

澤山の尾根に取り付いて、カミダチ(上高地)に下り、初めて梓川に駭き、穂高岳に戦慄し、槍ヶ岳に登つて魂を天外に飛ばした。その紀行文を明治三十五年の秋末から、三十六年の夏に亘つて、月刊の青年文學雜誌「文庫」に連載した。望外なことに、この文章は、當時の或青年のサアクルに、愛讀者を得て、殊に或人の如きは、毎號、この文章のところだけを切り抜いて、一冊に綴ぢ合せ、私が頼みもしないのに、出版者を捜して歩いてくれたといふ話をさへ、私は聞いて、感激したことをおぼえてゐる。幸ひに明治三十九年になつて隆文館から「山水無盡藏」と題して、他の紀行文をも併録して、出版されたが、感激序で又一つ話さしてもらひたいことは、此本を出すに當つて、島崎藤村氏に、序文をお願いしたところが、島崎さんは、ハガキにたつた一字「諾」と書いて返事をよこされた。それから後暫くして序文を送られて、巻頭を飾ることが出来て、私は非常に悦んだが、後で他の人からうかゞふと、島崎さんは、愛嬢が醫科大學の病室で、なくなられた御不幸の際に、筆を染めて下すつたのださうで、何とも濟まないことゝ、恐縮した次第である。

槍ヶ岳に第一登山をしたことを、鬼ヶ島征伐の桃太郎のやうに、稗氣滿々と、悦んでゐたのも束の間であつた。同行者の岡野君が、或日血相を變へて私の宅に飛び込んで来て、報告することには、彼岡野君が、支配人(當時岡野君は横濱の紐育スタンダード商會の書記であつた)から、一冊の洋書を郵送するやう命ぜられて、不圖その本を披くと、あらはれ出たのが、何と夢寐の間にも忘れなかつた槍ヶ岳の寫眞であつた。おやと思つて、標題を見ると「日本アルプス」とある著者はウオルタア、ウエストーン、發行書肆はジョン・マアレイ、發行年月は一八九六年(明治二十九年)……彼の駭きや想ふべく、その報告を受けた私の茫然自失も、笑止の至りであつたが、追つかけて、後日譚が語られる。

岡野が商館で手にした英字新聞は、山手のパブリックホールで、日本アルプスの講演があると報じた。その講演者の名は、誰あらう、今の今まで英國にゐるとばかり思つてゐたウオルタア、ウエストーン師である。ウエストーンは、宣教師として眼と鼻の先に居住してゐたのである、こんな偶然が、我々を、どうして結び付

けずり置かう、そしてその偶然は、我々の間に、山を介して、必然の仕事に進ませたのが、山岳會成立の筋書きである。

ウエストンを初めて識つたのは、同じ山手の居住者といふ關係で、岡野であつた。その後、岡野と私の二人が、ウエストンの住宅、山手の百二十六番館を訪ねたとき、ウエストンが、私たちに話して聞かせたのはラスキン先生の「近世畫家論」第四卷「山の榮光」といふ明文の一節であつた。私は解らないながらも、ラスキン先生に頭を下げる氣になつた。それから見せてくれたのは、北齋「富嶽三十六景」の傑作、程ヶ谷の一枚であつた、私は浮世繪の輕んずべからざることを覺つた。次に私たちの前に、展開されたのは、英國の山岳雜誌「アルバイン、ジャーナル」幾冊と、その大會の案内狀、展覽會の目錄、山の寫眞、アルペンストック、登山帽、等、等であつた、全く以て、私たちに、新しい世界であつた。しかも英國の山岳會が世界に於ける山岳會の鼻祖であり、世界の文明國は悉くといつて可なるほど、山岳會を有してゐると、聞かされるに至つて、私たちが、いかに興奮して、後髪

を引かれるやうに、同氏の宅を去つたかは、今日なほ自分で自分の姿が、見えるやうである。

私は先づウエストンの事業を、日本人の間に紹介しなければならぬと思つて、其後ウエストン氏からもらつた手紙を、桑田春風氏主宰の「手紙雜誌」に、寫眞版として、解説を添へて掲載した。それから博文館發行の雜誌「中學世界」に「日本の高山深谷を跋渉したる外國人及び其紀行」(明治三十七年)を寄せた。それ等の書物を、誰かウエストンに譯して聞かせたと見えて、ウエストンは、私の勤務先の銀行に訪ねて來てくれた、そんなことで、ウエストンと、私の間の交渉は、益々親密を加へるに至つた。

この前後に於て、私は山の紀行文を「太陽」早稻田文學「明星」中央公論その他へ寄せた。「雲表」といふ本に收めた「梓川の上流」は初め「早稻田文學」に出したものだ、上高地を書いたもので「槍ヶ岳探險記」中の、上高地の一文と共に、明治年間の最も古い文献の一人であると信じてゐる。それ等が、山好きの人たちに、私といふ人間の存在を知らせるのに役に立つたと見えて高頭仁兵衛君は、浩瀚なる大著「日本山嶽志」の稿本

を携へて、初對面に私の宅を訪れた。尤も書名は、初めは違つたものであつたと記憶してゐるが、「日本山嶽志」といふ名前にしたのは、誰の意見であつたか、記憶してゐない。それから或日、若い人たちが、連れだつて、私を山王山の宅に訪ねて來られた。孰れも初對面の人たちで、書生ツぼながら、袴を穿いて、キチンとしてゐられたのを記憶してゐる。それが今の武田久吉博士、故梅澤親光氏、高野鷹藏氏たちであつた。私が明治三十八年に「日本山水論」といふ本を書いたと

きに、序文に「友人武田久吉氏が、植物標本を、高野鷹藏氏が、胡蝶標本、及び右に關する材料を貸與せられたるを徳とす、二氏年齒少うして、きはめて篤學の士、居常、余の二氏に負ふところ多し」と書いたが、今となつては、高山植物の權威なる武田博士や、小島の會の創立者、鳥類の恩人、高野君などを、少年扱ひにしたやうに取れるのは、全く濟まない氣がする。武田君等は、當時中學生であつたかと思ふが、「博物之友」なる雑誌を發行し、種々科學上の新見を發表せられてゐた。私は同氏等の知己を辱うして、科學に對する興味が、益々加はつて來た。併しそれは、畢竟、興

味の程度を出ないものであつて、科學者たる素質がないから、依然として科學の門外漢ではあるが、刺戟はたしかに受けたのである。

そこへ、大人の役者が一枚加はつて來た。それは、後に朝鮮の控訴院長になられた、今は物故せられた、城數馬氏のことで城氏は、當時日本橋の辯護士で、東京の市會議員で、高山植物の採集家で、現に九十九草なる高山植物は、同氏が初めて採集されて、同氏の父君の老齡になぞらへて、命名されたものであると聞くが、同氏は早くから、白馬岳や、八ヶ嶽へ登られてゐたらしく、やはり雑誌に出した寄書のことと、私を記憶せられ、初對面に、勤務先の銀行へ、私を訪ねて來られた。そしてその足で、ウエストンをも訪ねられた筈だ。

高頭君の資材と、強き意志と、城數馬氏の社會的地位と、老練なる注意と、博物同志會の若き人たちの眞劍なる努力と仕事と、ローマンチックの空想で、パイロン擬きに山を讚嘆して、空疎なる文字を列ねてゐた私とが、寄つてたかつた仕事といふのは、山に依つて結合された仕事、即ち山岳會の成立に、歸着するのは

自然の數である。

明治三十八年、ウエストンは、日本から英國に歸つた、その歸航の數日前に、私は岡野、武田、高野の三君と共に、ウエストンを横濱のオリエンタル、パレーズ、ホテルに訪れた。ウエストンは、繰り返へして、日本に山岳會建設を、諸氏の力に待つてといふやうな意味のことを言はれたが、果して英國に歸國してから英國の山岳會のママ氏、プリストル、ビショツプ氏連署の日本山岳會設立に關する激勵の手紙を、寄與せられた。その手紙の全文及びそれに依つて山岳設立の決意を固くして、組織に急いだことは、我が「山岳」の創刊號に、書いて置いたから、参照せられたい。

斯くて、明治三十九年に、山岳會が生れ、「山岳」が發刊された。其當時は、只「山岳會」とのみ稱したが、後に「日本」の二字を加へることにした。そして山岳會成立の曉に於て、我々同人が、全會一致して名譽會員として、推薦した人々が、志賀重昂氏とウエストン氏の二人であつたことの當然を、認めてもらへればいゝのである。

○山 岳 禮 拜

中村清太郎

山は有り難いものだと思ふ。山は眺めて有り難く登つて有り難く、想つても有り難い。有り難いといふので足りなければ、西上人の詠つた「かたじけなさ」か。偉大、神秘、至上なるものゝ前に頭を垂れる時の、嚴肅敬虔の念、畏るべくして親しむ可く、愛すべくして馴る可からざる感、身も心も慄へるやうな崇高な一種の歡喜：これらは眞の登山者の經驗する所の心境であると思ふ。本當の登山者といふものは、どうしても宗教心を缺いてはならない、竟に深い信仰を抱かなければならないものと思ふ。登山の目的が智識の探究にあつても、文藝にあつても、或ひは漫然たる遊行にあつてさへ。日本の登山史は、宜なる哉、宗教家に依て開かれてゐる。

現代の登山者は、實に完全な扮装の下に現れるに至つた。その使用する器具のあるものは寧ろ過ぎた程で、武器といつてもいゝ位だ。登山の技術は巧妙を極むる

に至つた。外形は全く整つた、然らば内容は——悲しい哉、多數の登山者の中から幾何の眞の登山者を見出せるであらう。茲に他の種の登山者がある、あの白衣を身に着けた昔ながらの所謂「道者」だ。そのうちに却て現代登山者の學ぶ可き美質がある。山をあらたかなものとして崇み敬ひ、苟も之を汚すまいとする慎しみ深い行儀がそれである。「武器」を鏝つた現代登山者が之を白眼視するのは誤つてゐる。無智、迷信、過去のものなど、片付けるのは、反て自らの淺薄蒙昧を曝露するものだ。智識の累積が、自然に對する敬愛謙抑を失ふなら、それは生きた人間の智識では無い。祖先の靈と國土の至高至純の境とを結び付けて尊崇するのは形を代へても存続すべき精神である。若し又現代登山者のあるものが、往々山の「征服」などいふ合言葉を吐き、戦車が敵の堡壘でも蹂躪するやうな氣でゐるかに至つては、小兒辯を通り越して狂氣の沙汰といはなければならぬ。

好んでする險難の開拓、先頭争ひの類さへ登山に許せないものではないが、それは清純なる自然に參ぜんとする心から出る時に始めて意味があり、功名客氣も

畢竟、愛山心の騒々しい一面に過ぎない所に辯解がある、争ふものは人であつて、自然は登山者にとつて終りに決して敵ではないのである。スポーツの要素は性質上、登山の中では、思つたより狭く且外面的のものであり、漫遊趣味も亦淺きを憂へる、共により深い登山の法悦境に到達する入門に過ぎない、といふのは素直な感じ易い心を打開いて山に直面する者は、目的の如何に拘はらず、その堂奥に導かれなければならないと思はれるからである。

登山者は逐年増加し、山は必然開かれる運命にある。開かれるのは多數の濟度に意味があるのだから、その山を出来る丈け山の匂ひの薄らがないやうに保たなければ何にもならない。それには都會文化臭を山中に持込まない事で、凡て原始天工を損ふことを極度に恐れなければならぬ。便利も度を越ゆれば矛盾に陥る。

止むを得ない人工施設にも鋭い選擇批判の眼を働かせる必要がある。之を成すのは眞の登山者の、山を愛し敬し崇ぶ心の業でなければならぬ。なるほど山の立體的存在は容易に崩し難い、けれどもそれを飾る七寶の莊嚴は、心なき輩の爲めに動もすれば損ぜられるの

である。之は許し難き冒瀆である。

由來東洋人殊に日本人は、自然を愛好崇拜する美しい性情を持つてゐるとされる。現代生活にそれが到る所裏切られるのは歎かかしいが、殊に登山者の中にさへ、例へば山上の岩石を無意味に落したり、白樺の樹皮を徒らに剥き去つたりするのがあるのを見ると、日本人も怪しいものだと思はれる。そこから迄海の彼方から學ばねばならぬとしたら、耻かし過ぎる話だ。山に入る程の人はもつと此の邊に自覺の必要がある。そしてこゝにこそ、もつと自尊の氣があつていゝと思ふ。若し又夫の山中に於ける近代的企業（主に電気事業）に至つては正に山の痛だ、茲にもせめては事にたづさはる人々に一片斯の崇山の心があるやうに祈つて止まない。

○登山の思出

本邦登山界の現状に對する感想と希望

大 平 晟

登山は精神修養上、身體鍛練上、將た科學的研究上

至大の效果があるなど、説明宣傳する時代は、既に過ぎ去つた。

今は實行の時代に入りつつある。年一年登山の氣風は勃興しつつある。

畏多くも 聖上陛下が攝政殿下として、大正十二年七月二十六日富士御登山を始とし奉り、秩父宮殿下の我邦中央山岳及歐米の嶮峻峰御登攀の御壯舉あり、各宮殿下にも亦各地の高山深谷を御探勝あらせられるといふ氣運を拜し奉ることは、國民精神作興上、誠に欣喜に堪へぬ所である。

願れば、明治三十年前後に於て、我輩が毎年各地山岳の跋涉を繼續するのに對して、或人は物好きの變人とし、或人は虚榮心に驅られる山狂とし、或人は信仰的行者の亞流と怪んだものさへあつた。然し當時に於ける我輩は、寧ろ一種の物好きであり、一種の山狂であり、一種の行者であると自任し、種々雑多な世評は敢て辭さぬ所であつた。唯可笑しいのは、予が學生若しくは青年團體を率ゐて登山するのに對し、或人は危険思想の宣傳者かの如く惡評し、或官憲は、危険の虞ありとして、之を差止めたことさへあつたのである。

近年屢々宮様方の御登山を拜し奉り、又我新潟縣に於ても、縣青年團の主催で、登山講習會を開催し、各郡市青年團の主催や、各學校山岳部の計畫で、登山の實行は、益々盛況を呈するとは、實に今昔の感に堪へぬのである。

明治三十五年予が富士山淺間山に登つて歸郷した時「富士山は雲の上に聳える高山で、繪には描くが、人の登れぬ山だと思つたのに」と驚く人もあれば、「淺間山は火を噴く山で、登れば焼け死ぬものだと思つたのに」と怪しむ人さへあつた位である。

明治三十九年高頭志村兩氏と、越後口蓮華温泉より蓮華山頂を乗越し、信州四ツ家(四谷)に降り、信州側の所謂白馬岳は、越後側の所謂大蓮華山と同一山名であることを確めた時分には、同山上には、縣營や村營の小屋などは勿論無く、乗鞍大池の小屋も、白馬尻の小屋も無い。唯頂上に陸地測量部員が陣取つた跡に、小屋板が壊亂してゐるのを集めて、僅かに野營した位である。従て山上にはウルツブサウ、コマクサ、ウラジロキンバイ、ミヤマアゲボノサウ、クロユリ、チンマギキヤウ、ツクモグサなど、人目を引くに足る高山

植物の珍品も多かつたのだが、其後千客萬來の結果、今は殆ど目に入らぬ程となつた。

明治四十一年槍ヶ岳に登つた時、同山には大槍小屋や槍澤小屋などいふもの無く、唯彼の播隆上人が籠つたといはれる所謂坊主小屋の岩窟があるだけで、我等は其處に宿り、嘉門治翁が案内の途上、梓川で釣つて來た、數十匹の岩魚を鹽焼として賞味したことがある。我等はこの佳肴に酬ゆべく、特に金若干也を案内料に添へて差出したが、翁は「お前様方に雇はれてゐる時間内の獲物は、全部お前様方に差上げるのは當然だ」といつて、固く辭退した。其廉潔さは、今時の所謂剛力輩には殆ど見られぬ。

今や登山氣風の勃興に従ひ、一面には亦種々な弊害が伴はぬでもない。彼の富士山に、盲人團體の登山や、獸類賭競を試みるなどは別問題とし、唯流行を追ひ、血氣に逸り、輕舉無謀の登山を企て、脆くも生命を失つたり、或ひは登山に誠意を缺き、山小屋や、岩石や、高山植物などに對し、不謹慎の行爲、所謂登山道徳を無視するものなどが、意外にも益々多いことは、遺憾の極みである。

一方には、案内人夫の弊害を防止すべき縣が、其料金を一日二圓とか、二圓五十錢とか、制限を加へてあつても、其宿料食費は雇主持ちとなつてゐるので、そこに所謂法網を潜る種々の手段が行はれる。天下の靈場大峰山の剛力の如きは、下山に際し、公然と御山祝の名義の下に、酒食の盛饗を請求するを以て、殆ど普通とするが、天下の名山富士山でも、尙幾分この傾きがある。

我邦は、天孫が高千穂峰より御降り遊ばされ、富士山には聖德太子が御登り遊ばされたといふ傳説もあるが、役行者が、大峰山上に靈場を開いてからは、この流を汲む白衣の行者連が、各地の靈山に登拜する氣風を生じた。羽黒山、月山、湯殿山、相模の大山、木曾の御岳、石槌山、英彦山などは、其著名なものである。

この種の行者は、精進潔齋、白衣を身に纏ひ、法螺貝を吹き、鈴を鳴らし、六根清淨を高唱しつつ登山するもので、一種の宗教的迷信的の點もあるが、所謂敬虔なる登山精神の點に於ては、大いに感心すべく、彼の遊戯的輕薄的登山者流の如きは、省みて寧ろ忸怩たらざるを得ぬのである。そして登山道德を無視するもの

所謂山荒しをするものは、前者には殆ど絶無で、後者に多いのである。

近來山小屋の雜沓と、其持主が暴利を貪るのを嫌ひテント野營を試みるものが年一年流行しつつある。これは至極結構なことではあるが、これ等の人達に於ては、特に登山道德發揮の必要がある。即ち汚物や、空罐紙片などの始末をし、燃料採集のため、風景美の大要素たる樹木の伐採を慎むなどがそれである。燃料採集に對しては、ある地域を限定するは勿論、場合によつては、薪炭供給の方法をも講ずる必要がある。

學生の登山に對しては、學校當局に於て、登山知識を講ずると同時に、特に登山道德を涵養すべく、青年の登山に對しては、我縣が本年試みた登山講習會や、天幕生活講習會の如きものを開催して、意義ある登山精神を養成することは、將來益々榮え行く登山界に對する、一大急務であらねばならぬ。

○本會創立當時の回顧

片 平 重 次

會員番號第十番を持つて居るが爲に、僕も亦先輩扱

〇二十五週年回想錄 片平、北澤

一七三

ひにされ記念號に何か書くべく希望せられたが、登山といふ事に關しては僕は全く幼稚園の生徒で、先輩と呼ばれるのは當らぬ。唯、入會當時の回顧を少しくして見やうなら、僕も最初の山岳會員の多數の人と同じく博物學同志會の會員であつた。それで自然に毎年暑休には諸先輩の眞似をして、淺間山、八ヶ岳、日光の諸山、尾瀬などに植物採集に行つたものである。山岳第一號の口繪寫眞は其頃僕が中禪寺湖畔で買つた寫眞などを複寫したものゝ様に信ずる。其頃の會などには、故人の城、梅澤氏なども定つて顔を出して居られた。白馬や、槍、穂高などに登つて居られたのは Westcott 氏の他は烏水先生や武田先生其他少數の人々であつたらしく思はれる。僕の登山は其後、バイエルンのフォアアルペンで終りを告げてしまつたが、もう一度俗化して居ない、山々に遊びたいものと思つて居る。

〇二十三年前

北澤 基 幸

中房へは明科驛から入る。七月の末制服の中學生は

四貫目程の荷物を押し込めた雑囊を肩にして唯一人温泉へ着いたが、夜行の睡眠不足と暑さでかなり弱つた。帳場へ燕岳登りの事を話すと案内者を呼んでくれて、夕方には下の村から上つて來た、次の日は米を洗つて乾したり其他の準備で費す。

登山者は勿論他にはなく近郷の入湯衆が一人では淋しからうと溪間で採つた露の煮びたして御茶をよんでくれる、鬮球盤へ交せてくれる、白瀧の湯へ行くからと誘つてくれ老壯男女がぞろ／＼出かける、喧嘩口論無用と高く掲げられた女湯へ入つては輕口をたゞき鄙唄を片隅できく、八面大王の話もきいた。明日は何合炊きますかを宿の人にきかれ、いゝ加減に答へて置くと翌朝それだけを容れた櫃と味噌汁を鍋ごと運んで來た。午に成つても何の沙汰もない。すると隣の客から朝のを喰べるのだと云はれた時はすっかり面食つて終つた。後で勘定書を見ると飯がいくら、汁、毛布、蒲團とすべての費用が細かく記されて有つた。

出立の朝は清々しい嵐氣が身にしみ、二夜の泊りで馴染になつた浴客は御無事でと口々に別れを告げてくれた。

○ルツクザツク

石 川 光 春

山岳會も創立以來會運隆々發展して止む時無く茲に廿五年記念號を出す氣運になつたのは誠に目出度い儀で祝着申上げる。自分も創立の際會員の末筆に加へて貰つたがあれが最早廿五年の昔かと思ふと人並に月日のたつのが速いのに驚入つた。顧るにその當時は未だ紅顔の美青年であつたが成程頭を撫でると山巔が不毛で其處らの谿谷も深くなつて不滅の霜も降りはじめた。イヤこれは自分の山の事だが大自然の山は其處へ行くとそれつばかりの間に無暗に變化しない處が頼母敷い。唯人の力が加はつて變つて來た事は大した物で樹が無くなつたり、道が縦横に拓かれ、橋が架り小屋が出来登山も頗る樂になつた。是も皆山岳會の直接間接に人氣を導いた賜であらう。尤も山が開けると人も澤山登る、従つて山も所謂俗化するであらうが之は如何にも致方が無く、一利に一害は必ず附いて纏ふもの未だくこの大勢は動いて止むまいし「待つた」も利く

まい。然し峠を越えれば廳では人氣が落ち再び愛山家獨占の舞臺が廻つて來る時節もあらう。而してありし銀座通も偃松の下に名残を止め岩高蘭の茂りに今業平の遺跡と天然記念物の杙が立つ處も出來やう。

顧るに明治卅七年七月小南清、竹崎嘉徳の二君と八ヶ岳に登つた其際竹崎君が故山崎直方先生に就いて山の様子を伺つた時ルツクザツクと云ふ物の重寶な事を教へられた。勿論そんな物は鐵の草鞋で捜さば兎に角一寸手に入れる事が出來ぬ時節なので早速各自先生から拜借した品を手本にして拵へに掛つた。小南君は器用なので材料を揃へ自身針を操つて立派なのを拵へ上げた。竹崎君は萬事おふくろさんの手に一任してこれも見事に出來上つた。自分は一番無性で且後れて居るので上野廣小路のカバン屋へ誂へた。丈夫を要するとあつて厚い帆布を材料とし、たしか兩君の拵へた何れかを見本にして兎に角出來上つた。特に慾張つて一廻り大形にしたので之にはち切れる程用具を入れ背負ひ出すと生れながらのコンパスが短いのにたゞられまるでルツクザツクが歩いて居る様で遠望すると囊が躍つて居たさうであつた。思ひ起すと山上では兎に角下界

に於て行き歸りに改札口の關所を抜けるのは並大抵の苦しみでは無かつたが紅顔の美青年そんな事は意に付せず頻に囊を躍らせたものだつた。時には戸隠の百間長屋で囊にお伴して斜面を轉々しネマガリ笹であぶなく助かつて今日を得た事もあつた。爾來星霜幾秋、戰場往來を重ねる程にルツクザツクも汚れに汚れつぎだらけ、或ひは饅頭大のお山の印が膏藥の様にあちこちに當時の名残を留めた。が惜む可し其後出火の際跡形も無く灰にして了つた。これだけは今だに考へても惜しい氣がする。小南竹崎二君は現に珍藏して居られる事であらう。そのうち自分は脚の工合が變になつてからお山も御無沙汰勝になり加ふるに時の餘裕も無く、先立つ物も思ふに任せずと有つて三拍子揃つた形。會員として遂に無資格を宣言せられて了つた。でも圖々數く會員席にかぢり附いて居る有様。だからアルプス・ギンブラなんて未だ體驗しないし山上で別嬪の日に焼けた顔を見た事も無い。

扱て口幅つたさうな事を云ふものゝ過去どれだけ山に登つたかと數へて見ると登山履歴は誠に貧弱で新に山岳會の入會審査には勿論落第。たゞ昔の好みで乞

をして貰ひ人名録の隅に小さくなつて居る身分である次第。

〇回顧漫談

今村己之助

日露戰爭が終結して劃期的に日本が世界の舞臺に本當に割込み出した頃、日本の山岳會の鼻祖でそして世界的代表者たる使命を持つた本會が丁度産聲を上げたのだから、先頃陸海軍で二十五周年記念の催しをやつたと時を同うして本會も、二十五周年を記念すると云ふのは誠に意義の深い事で大いに祝すべきである。

創刊號が神田の書店に出たので本會の出現を始めて知つて入會を願ひ出し第一一號で會員たる事を許可された私も、當時繁茂してゐた天窓が今じや空薬罐と物變り私よりも會員としての先輩だつた百十人が昭和四年末には五十五人に半減し、其中には發起人の城氏や梅澤氏や名譽會員の矧川先生の他界された等あり實に感慨無量たらざるを得ないが、幹部諸氏の不斷の御盡力で今の如く盛況にあるのを草葉の蔭から見居る

物故諸氏の會心の笑みがまさ／＼と見える様だ。

會員諸氏の多くは學生時代から高山深谷を跋涉されてるだらうが、私は本會が世間に進出した明治三十九年に三十八歳で始めて二千米級の山を踏んだと云ふ山の晩學者で、だから年に一部分づゝの山谷を禮讚して歩いてまだ僅かしか経験しない中にもう還曆を通り越して仕舞つた。この夏尾瀬で長藏山人とお互の年齢の話などしてナーニ未だこれからだなどと力み合つたのも東の間、それから一月と立たぬ翌月あの頑健な勇敢な山人が忽然西方淨土へ旅立つて仕舞ふとは餘りの無常迅速に呆れ返るの外は無く、今日は人の身翌日は我身と來ては心細くてたまらない。

私の様な老骨になると山に對して自然畏敬の念が湧きたちそれが神を崇めると等しい感情に支配されるが若い御方は兎角征服だなどゝ山を呑んでかゝるので却て山に征服される様な羽目に陥る事も珍くはない。須らく登山は敬虔の態度のもとに合理的に自重して貰ひたい、それでないとは所謂尊い犠牲とやらは無限の遺憾を只遺す丈けであるから。

それから本會の二十五周年の事に戻るが男子の厄歳

が二十五歳と四十二歳と相場が決つてゐるが生理的から見ても肉體精神の劃期的に當るのだから緊揮一番過去に鑑み以て將來に策すべきである。であるから壯年期の厄歳を通過しようとする本會もまたこの劃時代に際し會員及幹部互に雅量を第一義として向上發展に精進したいものである。

○黒部川の過去と現在

(及びその歩道に就いて)

冠 松次郎

私は今年「黒部」と云ふ小著を刊行した。處がその後ある新聞紙上で「黒部川のありし面影こそこの書に期待してゐたのであるが、繙いて見ると、それは雜然と紀行に入つてゐるだけで纏まつて書かれてゐないので、聊か失望した。」と云ふ意味の批評をされた方があつた。私は當時、成程それも尤だと思つた。

然し實際の處「黒部」を書いたときには、黒部川の現在を主題としたので、まだ私には黒部川の過去について、具體的に述べる事が出来なかつたのである。何故ならば、あの「黒部」を書いた時分には、下廊下の中心地點である十字峽から

白龍溪に到る日電の歩道が、完成したばかりで間もなく冬に入つてしまひ、歩く機會を失つてしまつた。少なくとも一度その歩道を通過して見ないことには、そして黒部川としては最も肝心な箇所について、過去と現在の比較をすることが出来なければ、私にはどうしても書く氣になれなかつたのである。それが爲に黒部峡谷の變遷については、具體的に書かずにしまつた。たとひ「黒部」に書かずとも、後に刊行する豫定の黒部流域に關した小著に載せる自由もあるからとも思つたのであつた。

日電の歩道は、去年の晩秋漸く完成したばかりで、この冬と春の雪崩で、黒部別山谷を中心とした最も險惡な、そして壯麗な處で無慘に破壊され、今日ではそこを中心としての上流の連絡は全く断たれてしまつた。この歩道をすらくと通つた者は、登山家としては偶然に去年の秋、歩道の通じたばかりのとき黒部へ入られた、別宮、岩永の兩君あるのみである。

今夏私も十字峽から白龍溪まで入つて見た。そして黒部隨一の麗壁と美澗と絶景とを觀賞することが出来た。それで私はこの記念號に、過去の黒部について、少しばかり書いて見たい希望を生じたのである。

又しても黒部のことかと思はれる讀者もあるだらう。然しさう云ふ人にこそ私は「黒部へ行つて見たまへ」と云ひたくなる。少なくとも内地の他の山水と比較を絶した、この流域一帯に亘る優秀な自然、それに對するとき私等は寫真ならいくら寫しても、畫ならどれだけ描いても、記録をいくらとつた處で、それは多すぎると云ふことはない。深く探れば探る程、親しめば親しむ程、その雄大に、豪麗に、男性的の魅力に引き込まれて行く。いやしくも自然美に憧憬を抱いてゐるものはこの大きな自然のもつてゐる根強い誘引力を拒むことは出来まい。

實際を云ふと四季を通して僅に一ヶ月位の觀賞ではとてもこの自然を味ひつくすことは出来ない。少なくとも春、夏、秋に涉つて半年以上この山谷に生活して大峽谷とその流域を繞る山々の、自然の移り變る様を觀察して見なければ、まだまだ黒部の渾然たる味ひを知つたと云ふことは出来ないと思ふ。

飛脚のやうな旅をしてゐる私でさへ、「山水無盡藏」と云ふ、驚嘆の聲を幾度發したことか。私の下手な寫眞でさへ、黒部と云ふものが無かつたなら、恐らく今

日でも手を附けてゐなかつたかも知れない。黒部が寫眞を教へてくれたのだと私はさう思ふことさへある。

黒部へ行つて、溪流、岩壁、森林、山岳の美に、自分の魂を溶し込むやうな、その楽しい現實の意識を離れて、都會に歸つて來た當座は勿論、それから暫くの間は、私は毎日のやうに暇さへあれば、自分の撮つて來た寫眞を見つめてゐる。そしてその流れの姿、岩の皺一つ一つ見逃すまいとする。寫眞から谷の響がくる。壁の陰翳、山の光輝は紙面に溢れて、耳に眼に、心の琴線に觸れて火花のやうに散る。それが何とも云へない幸福な感じである。

この原稿を書きながらも、今夏見て來た白龍溪の美しさの中に、私の心は遠く越中の峽奥を辿るやうな跳躍を感じてゐる。愚かなものよと嗤ひ給ふな。自然は私等の母體だもの、その懷に、その愛撫の下に、その燦爛たる傑作を眺めては、どうして私等自然兒はじつとしてゐられやう。私は自分の身體を投げ出してしまふ。岩に抱きつく。森林の香に酔ふ。そして純美な谷水に生命の泉をくまうとする。

黒部川が變つた。それは下流の小黒部谷落口から下に於て甚だしく、黒雜川の落口を中心として殊に甚だしい。時代はこの峡谷にも安逸を許さない。人の營力は壯嚴無比の自然の殿堂を破壊して迄も、自分達の慾望を遂げんといそむ。

宇奈月に冬、猿が群を爲して食をあさりに來たとか熊が幾匹か迷ひ出たとか云ふ記事を、東京の新聞の三面に見出したことも、つい近頃のやうに思つてゐたのに現今の宇奈月の繁榮は何と云ふ意外な事であらう。

七八年前まではバラツク建の湯宿と、物賣の家が一軒あつたばかりの、廣い丘のやうな山間の平地が急速に發展して、僅か數年の中に北陸一流の溫泉地になつてしまつた。ハイカラな停車場は出来る。廣大な旅館料理店は續々と建てられる、猿の代りに化粧した女達が、この建物に粧を凝して客を待つてゐる。またよく暇に人口數千になつた。こんなに驚くべき發展をした處は、恐らく北陸には他にないであらう。

水力電氣事業の進展に伴ひ、鐵路は敷かれ溫泉は開發された爲である。何しても宇奈月は日本電力の勢力の下に發展したので、電力事業の消長は、直ちにこの

新しい温泉街の運命を支配してゐるやうだ。現に今年
は水力の第二期工事即ち「小屋の平」附近の堰堤工事
が着手されなかつた爲に、それから黒部上流には全く
水力の仕事が中止した爲に、宇奈月は大恐慌を來たし
もう一年も仕事がなかつたならば、小さな旅館や水力
目當の物品や食料を供給してゐる商人の多くには、倒
産者や移轉者が相次ぐやうな噂を聞いた。

宇奈月から奥、鐘釣温泉までは兎に角鐵路が通じた。
それは旅客用でないとしても、半日餘も要する道筋を
僅か、一時間にして達せらるゝ程便利になつた。その
爲と水力の工事の影響を受けて、この沿道は即ち最下
流の黒部峡谷は、太古のまゝの山水から一變して、現
今の箱根や鹽原とさへ選ぶ所がなくなつた位、少なく
とも感覺上に於て差違を生じて來た。

便利になること、殊に水力電氣の工事の爲に便利に
なると云ふことは、その結果の恐るべきを豫期しなけ
ればならない。

山を崩す、ハツパをかける、トンネルが穿たれる。

やがて鐵路が完成して、バラツク其他の工事の爲雜然
と谷筋に蟠まつてゐたものが一掃せられると、沿道は
整然とした美しさを回復する。それからだ、仕事にか
ゝるのは。堰堤を築く、取入口を造る、暫くすると下
流に宏大な發電所が出来る。それから後の溪谷の様は
思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

黒部も全く昔日の儂がなくなつた。それはもう數年
前鐘釣温泉から宇奈月に下つたとき、つく／＼とさう
思つたのである。森石谷の奥、佛石の茶屋の附近のし
つとりとした、大きな谷の味ひは今何處にある。黒雜
川の水の殆ど全部は水路に取り入れられ、會てあつた
雄大深遠な景趣は、その脈管を流るゝ水の缺乏だけで
さへ、全くだいなしにされてしまつた。後曳橋の上に
傲然として山溪を跨いでゐる鐵橋は、人力の偉大(?)
なのを暗示するが、人に迫るやうな原始的の自然は、
既にその影を潜めてしまつた。哀れなる水の姿よと私
は叫ばないわけにはゆかない。何故なれば森林、岩壁
は如何に立派であらうとも、もうそこには溪水は生き
てはゐないから。

黒雜温泉の状態は遙に悪くなり、その上の二見温泉

は涸渴せる爲休業したと云ふことも聞いた。七谷越え附近それから猫又川落口下流の岩壁なども、水を絞りとられた後の色調は、何となくひからびて見えるのも是非がない。實際貯水池の出来た猫又川落口附近の、昔日の美観は最早求むるに痕跡がない。

猫又川落口から上流、鐘釣温泉を経て、猿飛に到る間の美景は、第二期工事の完成した際にはどうなるであらう。猿飛の奇勝、小黑部谷落口附近の壯觀が水面下に没し、鐘釣温泉が出なくなつたとしたならば、黒部峽谷の下流は完全にスポイルされてしまふだらう。

宇奈月から猿飛までは約七里の距離があらう。黒部はこの七里の間でさへ、他溪に見ることの出来ない雄大な深遠な面影があつたのである。相當ポピュラーな名勝でも、所謂名勝として保存されてゐる處でも、黒部下流のやうに七里近くの間を雄大な風景のつゞいてゐる處はさう多くはあるまい。まだく黒部には上流に十數里の原始境があるにしても、今迄でさへ水力電氣の爲随分高い犠牲を拂つてゐるのである。私はこの

谷の將來のことを考へると、そしてこの調子で上流の原始境まで水電の工事が延びて行くならば、黒部は如何に墮落してしまふかを思ふにつけ、それ程尊い代價を拂つて迄も、そして日本に二つとない雄大な風景を汚損して迄も、水力電氣の施設をしなければならぬ程の必要が何處にあるのかと疑はざるを得ない。

かく云へばとて、私は無下に水力電氣會社のことを悪ざまに思ひ、又悪ざまに罵るものではない。それどころか探勝者の爲に随分便宜を計つてくれることを深く感謝してゐる。然し事實は事實である。それを如實に書き又談することは、黒部を熱愛する私の己むを得ない因縁であり、權利である。

さて猿飛から上流の黒部はどう變つたか。猿飛から上流十字峽までは、まだ自然は殆ど破壊されてゐない。この間は測量の爲、歩道が出来、小屋場が幾ヶ所か設けられた位のものである。それにつけても思ひ出すのは、大正八年の夏である。それは恐らく黒部としては最も記念すべき時であつたらう。その時分までは黒部

には全く水力の者は入つてゐなかつた。猿飛から奥二町程の祖母谷への分岐點から上流の黒部には、岨道は殆どなかつたと云つてもよかつたのである。

この年の七月、古川合名會社が黒部川の探検隊を組織して、黒部川を溯ると云ふことが新聞で報道された。エヴェレストに遠征隊が向つたとか、W2やカンチエンジュンガに探検隊が出發したと云ふことよりも近いだけに、そして私等の大きな關心事であつた爲に黒部を覗つてゐるもの間に少なからぬ興味と衝動とを興へた。古川の探検隊は、祖母谷から黒部川の右岸に沿ひ、可なり山の中を道を拓きながら、最後に十字峽の四丁ばかり下流右岸にある、大きな岩の上になつてそこに泊場を定めた。それが今の樺小屋の小屋場であつて、それから上流を十字峽附近まで觀測したのである。

丁度これと前後して入つたのが、會員の木暮理太郎中村清太郎の兩氏であつた。古川の探検隊が右岸に道をとつたのを、この方は左岸を辿つて行つた。黒部下流に明るい音澤村の助七を伴つて行つたので、彼が往年漁獵に通過した跡を尋ねて溯つたのである。事實山

勢は右岸より左岸の方が遙かによく、川から可なり上の方を通つたとは云へ、右岸に比すれば崖側のみ辿つたと云ふてもよかつたのである。左岸の山勢のよかつたと云ふことは現今日本電力の步道がその方を通じてゐるのでも分かる。

この時分歩道の拓いてない峽側は、非常に悪く危険は甚しかつた。一週間位で「平」まで上るつもりでゐたのが、仙人谷まで、それ以上の日子を費してしまつた。勿論天氣も悪かつたが、峽側の急斜面を、立壁を避けて百米突前後の所を、朝から夕までへつりつゞけて行く辛勞と危険とは容易なものではなかつた。支谷から支谷へ出る迄は全く下るところがなく、崖側に泊場を求むることは困難である爲、樺平からシマミ坂、シアヒ谷、オリオ谷、アソ原谷等から本流の岸迄に漸く下つて野營をした。その當時のことを考へると今日歩道を辿り（歩道さへ破損してゐなければ）、樺平から十字峽迄一日もかゝらずに行けるやうになつたことは、電力の歩道の御蔭であり、夢のやうな話である。仙人谷までと溯行を止め、木暮中村の兩氏は立山から歸られた。

これより先七月の中旬、會員近藤茂吉氏は劍澤を黒部本流に降り、更に棒小屋澤を上つて、劍岳から鹿島槍に至るすばらしい縦断コースを目論み、芦峯の平藏を先導として、先づ劍澤を下つて見た。當時全く無人境の劍澤の下部を下るのは恐らく暗中摸索の感があつたらう。然し一行は劍澤の廊下の峻嶮にして下降不可能なのを知つて道を仙人谷にとり、その黒部への合流點に下り立つた、この一行は仙人谷落口の上手につゞく岩壁の上から木を組んで筏を造り、谷の中へ差し出し、屈究な人夫が一人、先づ腰繩をかけて激流に躍り込み、對岸にうつつてロープを渡し、それから一行は渡河を強行した。本流を溯つてその左岸を東谷落口に辿り着いたが、種々の都合から、崖側を藪尾根に上り、牛首岳から鹿島槍に上ることを餘儀なくされた。

同じ八月には會員沼井鐵太郎氏は東谷を下つてその瀧場を避け、全く道のない崖側を、略ぼ今の作郎越の道筋を辿つて、最後に棒小屋の小屋場に下つた。そして古川合名會社の探検隊を驚かした。この附近で下る處は今でもこの小屋場へつゞく凹みでなければ、他は壁で下ることが出来ない。それから上流を溯つて見ら

れたが準備不充分的爲に戻つて、小屋場から今の東信步道と略同じ道筋を棒小屋澤の二俣に上り、それから棒小屋乗越に出られた。大正八年には前記古川合名會社を初めとして、日本山岳會の人達、木暮、中村、近藤、沼井の諸君が黒部川へ向つて殺到した。黒部川が生れてから恐らく一番忙しかつた年であつたらう。

古川の探検隊の道はその後全く廢道となつてしまつたが、大正九年から以後、左岸に歩道が開鑿され、今では下流から十字峽までは谷沿ひの歩道の他、約千米突の高度を水平道が通じてゐる。

前述の如く黒部は樺平から十字峽迄の間に於ては、その自然美は殆ど害はれてゐない。小屋場に使用した處が荒され、歩道が出来た爲に人臭くなつたのは已むを得ない。然し歩道が通じてゐるとは云へ、電力の人が入つてゐない年、道の修覆してゐない年には、十字峽迄でさへ容易に入ることが出来ないであらう。

現に今夏は小屋の平から奥の工事は中止されてゐた爲に、谷沿の道はシアヒ谷、オリオ谷の間に二三ヶ所悪い岩場の棧道が落ちて通過が困難であつた。アゾ原のあの大きな瀑布の下に架かつてゐた釣橋は、全く落

ちて上手の岩壁の處へぶら下つてゐた。その爲に以前通つた道をアソ原谷に下り、又歩道へ上らなければならなかつた。僅か十數間の處を一時間餘を費やし、勞力を無駄にした譯である。東谷の高い廊下の中途の歩道、棧道、釣橋を辿つたときは、周りの自然の雄大を喜びながらも、何時通れなくなるかと相當危惧の念を抱いて歩いてゐた程であつた。棒小屋の小屋場の對岸に來て見ると、小屋場の岩石段丘に向つて釣橋迄架けられてあつた。然しそれはもう横木は幾本となく落ちてゐてある處は針金の上を渡つて行かなければならなかつた。

十字峽附近は随分な變り方だ。今から四年前に、別宮、岩永の兩君と劍澤へ入らうと思つて、十字峽の上流神潭の上手で架橋して、右岸から左岸の立山側に移つた。その時分には棒小屋の小屋場から上流にはまだ歩道は出來てゐなかつた。一行は橋を渡り岩壁や、草崖を横に廻り、黒部別山から十字峽迄下りてゐる大尾根の下部へ上り、それから劍澤の落口の右岸を、黒部

への合流點まで下つて見た。この尾根の下部には森林が茂り、非常に緩かな勾配で谷を降つてゐるのを見て驚いた位であつた。今年入つて見るとその緩傾斜の尾根裾は刈り擴げられ綺麗に均されて、案の如くよい泊り場となつてゐた。そして少し劍澤の流の上の處に向つて、炊事場と湯殿の跡まで残つてゐた。こんな廊下の中としては本統に贅澤な位の泊り場である。東谷の落口の温泉の出る處や、こゝにヒユツテでも造つたらさぞよいだらうと私は思つた。

十字峽から上流、それは大正十四年の夏、沼井、岩永の兩君と共に、峽見ヶ丘から棒小屋澤の瀧壺に下り文字通り急峻削るが如き溪側を昇降して漸く神潭に下り、それから後立山側の川身を、右岸に沿つて壁をへつり、ピトンを穿ち、ロープに縋り、ある處は僅か數間の深流に阻まれ、驚く程の高廻りをして、神潭の泊り場から丸一日かゝつて漸く下のタル澤から一町程下手の磧の、頗る悪い所で一夜をあかした。その時に反對の立山側の方が山勢が遙に穩かであつたやうに覺えてゐたが、今年歩道を通つて見ると案に違はず、會つた川瀬を瞰下しながら、神潭、ピトンを打つた處、

廊下の廣河原を近く脚下に見ながら、下のタル澤の前まで、僅に一時間で通過することが出来た。實際以前のときの勞力を考へると、あまりにあつけないのに驚いた程であつた。

黒部川は下のタル澤落口の處から急曲して、その曲り目から直ちに深い澗流となつて約二町程、滿々たる碧淀を湛えてゐる。下のタル澤から一町程は岩壁の上を辿る事が出来るが、それから俄然大きく冠つた岩の懷に歩道は棧橋となつて降り、深淀の眞上にかげられてある。そこで生憎と棧橋は落ちて残骸のみ所々にぶら下つてゐた。この附近二町の間は全くつる／＼の立壁で兩岸を圍まれ、殊に左岸の立山側は、丸い懸壁が危く川に望んでゐる。日電の人の所謂白龍溪であつて大正九年以降、前後五回も近づきながら通過出来なかつた悪場であつた。この白龍溪の棧橋が落ち、すぐ上流の黒部別山谷落口附近の屏風岩の棧道が、無残にも破壊されたのでこの間は通れなくなり、黒部上下流の連絡は断たれてしまつた。

然し大へつりの壁につけられた棧道はどうやら残つてゐた。そして新越澤落口の對岸から上流へは、平の

小屋まで舊來の歩道（大正十三年に出来たもの）を全く危険を感じずに通過することが出来た。

歩道は勿論、電力の者も全く入つてゐなかつた大正九年に、私は長次郎を連れて、「平」から、黒部別山谷落口まで川通しを下つて見た。その當時三日近く費したこの川筋を、歩道の出来た今日では僅かに半日で、然も樂に通れるやうになつたのを考へると、道は有難いものだと思つた。然し川身を巨岩を縫ひ、絶壁をへつり、架橋などをして、先人未踏のこの深谷の廊下を下つた。その時の楽しみは、深い印象は、生々した心の躍動は、とても味はへなくなつた。

その時分「平」から川通しを、赤澤附近まで来た時には、測量部の五萬分一の圖幅にある瀧（今の地形圖にもある）の事が氣になつてならなかつた。赤澤の落口から下流で、岩壁は益々高大になり、川床は可なり激しく落ちて行くので、今に瀧かと心待ちにして下つて行つた。實際この旅行の最初の偉觀は、この瀧であらうと大きな期待をもつてゐたのであつた。然し豫想

は裏切られ、黒部本流には瀧はないと分つた。それはかりでなく、可なり長い距離を立壁の連続のやうに想像してゐた内蔵ノ助谷落口の主流の、丸山の下が案内短距離で樂に、三度程ロープを用ゐただけで、内蔵ノ助谷の落口の處で本流の汀に出ることが出来た。然し樂と云つてもこのへづりに一時間半程を費やしたやうに覺えてゐる。現今歩道を辿つて僅か十分位で通過出来るのとは比較にならなかつた。

内蔵ノ助谷合流點の上手、黒部川の澁の斜面で、岩のゴロ／＼した中の僅かの草地に天幕を張つた。私はそこ迄下つたとき、赤澤側の約百米突も高く本箱を立てたやうな赭黒色の大直壁を見て驚いたのであつた。丸山の側壁は實に高いし、下流は丁度この出合の處で直角に折れ曲つた、大タテガビンの側面と赤澤の岩壁とで細く高く限られてゐるのを見上げ、實際深い／＼函の底にゐるやうな感じがしたのであつた。

然しさすがに内蔵ノ助谷の主流は明るく、低く青空を見せてゐた。夕陽は金色に照り映えて、茜色の薄雲は東の空に向つて靜に流れてゐた。あゝあの明るい處が内蔵ノ助平だと思つた。數年前から一度探つて見た

いと思ひつゞけてゐたその高原へ、もしも黒部を下降することが出来なかつたら是非訪れて見たいものだと思つた。私は獨りで考へてゐた、その内蔵ノ助谷の大きな窓、その水上の方から夕日に羽を光らして、無数の岩燕は木の葉落しに舞ひ下りてきた。谷の底、流れの上をめま苦ししい程飛び廻つて、やがて自分達の雛の待つてゐる時に歸つて行く。この無数の小鳥は赤澤の高壁の懷に刺られてゐる洞穴に、谷水近くの穴に巢喰つてゐた。その靜かな生活を、安心して暮してゐた彼等を、最初に怯かしたものは私等であつたかも知れない。この附近は大正十三年に歩道がつけられた。もうその時にはこの岩場にはこの小鳥の巢を見なくなつた。そして下流の新越の高壁の上部に群つてゐるのを見た。

内蔵ノ助谷落口から下流は、前進を阻まれながらも、未知境を行く好奇心と、大きな自然に引き入れられながら降つて行つた。丁度谷が左に折れて行く處、道が高くなつてゐる下で、ロープを用ゐたやうに覺えてゐる。間もなく今の鳴澤小澤の落口の前に出た。その上手の狭流の左を抜け、そこにある巨大な岩の上に休んだ、そして覺束ない墨筆で石上に記念のサインをし

た。一行は私の他に、大山村の宇治長次郎、宮本金作、山田竹次郎であつた。その時の巨岩は今でも谷に蟠つて目立つて見える。私には一生涯忘れることの出来ない岩である。

黒部川は殊にその下廊下は、その後電力の人夫が入り込み、歩道がつけられた爲、岩魚は驚く程少くなりそして非常に小さくなつてしまつた。然しこの時分には目の下一尺位のもが普通で、稀に一尺五寸以上のものさへゐた。激流の下に淀む深潭に無數に動いてゐる魚の群は鈎を投げればすぐかゝつて來た。泊り場についてから一時間に二三十尾位は釣れたものである。

鳴澤の前にある榛の木平は、大正九年のときには氣つかずに川邊のみを辿つてしまつた。大正十三年に岩永君とこゝで野營をした。その後日本電力はその平を歩道開鑿の溜り場として、今では二階建の大きな小屋が出來てゐる。

黒部別山の赤壁の下で通れなくなり、途方にくれてゐると、戻つて行つた長次郎は、人夫と三人で長い流木を擔いで來た。そして立山側に沿つて二度、巧妙な架橋をしてこの難場を切り抜けた。こゝも今では、二

十米突位の處を岩場を貫いて道は開鑿されてゐる。

それから新越の瀧を見、その下の深流と麗潭の美に酔ひ、楽しい中食を採つた。私等は尙下つて新越澤落口の對岸の大残雪を越え、愈々大へつりの岩場にかゝつたのであつた。現今では岩が爆發され棧道が架けられて、僅か數分で通過出来る大へつりの壁も、その頃には二十幾回かもロープにより、二三ヶ所は可なり危険な思ひをしてへつゝて行つたのである。二時間餘も費やして漸く大へつりの嶮を了へると、その先は大屏風岩で前進は全く阻まれてしまつた。この屏風岩から別山谷落口までの歩道は、昨秋最後につけられたもので、殆ど全部棧道となつてゐる。それがもう僅か半年位でこの春には、棧道は最も悪い立壁の所で、幾所も崩落してしまつたのである。この附近の雪崩の恐ろしさがよく分る。

私等は屏風岩の處で行き詰ると、すぐ脚下にすばらしい川瀬のあるのを發見した。川底が丸石で敷きつめられたやうな美しい澗流、下廊下もそこだけは徒渉が出来る程穩かな瀬を擴げてゐた。私はこの時程喜んだことは少い。人夫も聲を揚げて喜んだ。それから私等

は皆衣類をかたぐり捨て、サル又一つとなつてその美流の中に身體を浸した。人夫は荷を頭に載せて胸までひたる深水の中を對岸に渡つた。そして美しい白砂の上に、屏風の如き大岩壁を前にして、黒部の清流を眺めながら野營をした。

その時に黒部別山谷落口の下まで下りて見たがそれから下へは降ることが出来なかつた。天氣も悪くなつて來たので、僅か一間程の岩の割れ目を匍ひ上つて、岩小屋澤岳から下りてゐる二〇六七米突の平な峯まで上つてしまつた。

今夏も文部省の活動寫眞班をつれて、岩小屋澤岳の長大な尾根を二〇六七米突の峯に下り、廊下の上に僅かな岩壁の裂罅を求めて徒涉點まで下りて見た。雪の少なかつたせに水量の多かつた今年の八月初旬は、この徒涉點ですら到底丈が立たなかつた。最も淺い所でさへ一丈餘の深さは確實にあつたと思ふ。下廊下の徒涉點と名づけておいたやうなもの、それは減水期の然も水量の少ないときでないといふやうに涉れないことがある。同時に雪の少ない年、源流地に殘雪の少ない夏でも雨量の餘計だつた夏には谷水が多いと云

ふことを痛切に知ることが出來た。大正九年のときには胸近くまであつたが、大正十四年には僅かに股に達する位に少なかつた。今年は一人は腰にロープを結び漕流を横ぎつて對岸に泳ぎつき、ロープを二重に渡し兼て用意して行つた滑車及び背負子の四方を針金で結んで、急造のカゴ渡しを作り、そして一行は對岸に移つた。然し屏風岩の棧道が通れなかつた爲に、白龍溪までは下れず、映畫の目的にした中心地點を逸したのには誠に遺憾であつた。

黒部川は内藏ノ助谷落口の上流、赤澤が後立山側から瀉入するあたりから上流になると、廊下の深刻な雄大な景色とは、似てもつかない程優美闊大の趣を呈してゐる。そこには森林は岸邊近くまで漲り、川瀬は闊く、流勢も穩かである。大河のやうな趣を爲してゐるのも、遠山の重なりを溪谷に集めて見ることの出来るのも、この上流の溪川に於てである。初めて下流から遡つて來たものはこゝまで來ると、上流へ來たのかわ下流へ降つて來たのか判断がつかない程、川瀬は潤くな

だらかになる。

内藏ノ助谷から「平」に到る間では、「平」と御山谷路口附近の變化が殊に甚だしい。

大正七年に立山本峯から御山谷を下つて、「平」や鐘釣以外の黒部川へ初めて下りて見た。その時の人に迫つてくるやうな静けさ、大溪谷の原始的の威力は今ではもう味へなくなつた。「平」から御前谷の間でさへ、私は何とも云へない感激の思ひに、殆ど冥想的に、森林や川瀬を辿つたものであつた。そして御前谷近くで初めて大タテガビンの、黒部川へ躍り込んでゐる隆々たる岩骨を見て、思はず立ち止まつた。道の全くない魚釣りの入つてゐなかつたその頃の黒部のことを考へると、眞に隔世の感を止め得ない。

御山谷の落口から立山本峯の偉容を、その東面の大森林の上に仰いだときの崇嚴な感じは、その落口を中心とした溪觀の優美な趣と共に、今だに生々しく私の脳裡に焼きついてゐる。その御山谷落口も今では大木は多く伐り拂はれ、川瀬も荒れ、その上手の林叢を拓いて電力の大なき小屋が建てられてゐる。そこから立山の寫眞を撮らうとしても何となく素漠たる感に襲は

れる程に自然美は害はれた。然し何しても川瀬に沿つてついでゐる歩道を辿つて、この附近の溪趣を觀賞することは、今でも相當なすばらしさをもつてゐることは否めない。

若し水力電氣の工事が進捗して、御前谷の上手に百米突の堰堤が出来て、「平」まで約二里の間が貯水地となり、黒部別山の側壁を穿つて、この清流の大部分を搾取し、廊下の水を枯渴せしめ、あの雄麗な岩壁が潤ひを失ふことがあれば、その時こそ私は黒部と御別れである。

餘り長くなるのでこの稿は「平」まで止めておく。

「平」から上流には大正十四年に東信歩道が出来たが、今では大分崩壊してしまつた。それでも途中一泊すれば、源流地の鷲羽乗越に達することが出来る。この間の自然は殆ど原始のまゝであるが、奥廊下の入口（上流より下つて）の右岸を中心として鑛山の採掘が初まつたので、一時この附近は随分荒された、薬師澤落口に到る間には飯場、倉庫、其他のバラツクが出来て大分臭くなつた。薬師澤落口の上手に橋を架けたのはよいが、その附近の森林は多く伐り付けられて取返し

出来ない位荒廢してしまつた。この鑛山は間もなく廢鑛になつたが、去年又他の鑛山師が入り込むやうな話を聞いた。今年はそれが入つたかどうか、その方面を歩かなかつたので私にはその消息が分らない。

要するに下流の小黒部谷落口より上流の黒部川は、その源流地に到るまで十數里の間、ある小部分を除いては、今日に於ても尙その原始的の風手を存してゐる。それ故この谷の美觀を探らうと思ふものは、到る所にその特有の風景に接することが出来るのである。

日本北アルプスの主脈、立山、後立山の高峰の殆ど全部をその流域に包含する、廣袤七萬餘町歩を有するこの大山水境は、雄大なる風景に乏しき我國に於ては替ゆるものなき尊き國寶でなければならぬ。その國寶ですら原始のまゝに保存することが容易でない我國の現状を見て私は竊かに悲しむものである。

(昭和五、九、二九稿)





雜 錄

○上越境の山とその地名

參照地圖 五萬分の一 湯澤 四萬

松本善二

はしがき

上越の障壁をなし利根信濃兩川の分水嶺をなすこの山脈も、高さに於ては漸く二千米突を上下するに過ぎないが、一ノ倉岳附近より谷川岳マツカケ岩附近へ掛けてその東面へ連る怪異極りなき大岩壁や、エビス大

黒附近の殆ど威嚇的大岩塊、又それと正反對に實にのんびりとした仙ノ倉平標間の尾根、藪では徹底的に條件を具備して飽くまで頑強にして執拗なるコーチ澤ノ頭附近等、殆どあらゆる方面に對しての要求を充し得ると思ふ。

自分は嘗て大正十一年四月、木暮、武田兩氏の驥尾に附して阿能川岳へ登り、初めて谷川岳マツカケ岩を望見して實に驚異の眼を見張つたものであつた。

其後木暮氏と川古温泉より赤谷川を溯行してアミダガセンの手前まで行き、更にエビス大黒ノ頭の一部へ取り附いたが、天候不良の爲め空しく引返した。其後數回法師より三國山へ登り、北方に聳立する平標ノ頭、仙ノ倉、サゴ、越後富士方面を望み見ては、殘雪に輝くこの連峰の秀麗なる風貌に接して少なからずその魅惑を感じたものであつた。

遂に大正十五年七月二十六日、會員吉田直吉、野口末延の兩君と共に、越後土樽より人夫五人を連れ蓬峠より檜又ノ頭、茂倉岳、一ノ倉岳、谷川富士、谷川岳、越後富士、サゴノ峰、東マタノ頭、エビス大黒ノ頭、仙ノ倉山、平標ノ頭、コーチ澤ノ頭、三國山とその全

部を踏破して、縦走としての先鞭をつけた、實にこれが初めての記録である。

次に昭和五年七月二十四日今度は反對に三國峠より谷川岳迄(途中二泊)縦走して西黒澤を降り湯檜曾へ出た。

然るにこれ等の山旅に於て、連峰中地形及び名稱の疑問と未確定のもの數多ある事を發見したので自分の調査した資料の中、斷定し得る部分を發表して置きたいと思ふ。

據つて地名を主としその他の事は全く簡単に概略のみを記述する事にしたので山澤其他の小名は別に添附した圖面を参照せられ度い。

蓬峠と檜又ノ頭

蓬峠は清水峠の西南約四軒位、七ツ小屋山と檜又ノ頭との鞍部で、上州土合と越後土樽との乗越であるが現在では清水峠の方が殆ど通行不可能である爲、蓬峠のみが往還がある。

峠は非幣に柔かい感じのする一面の草地でそれに七月の終から八月へ掛けては日光黄菅が花盛りで實に美

しい。此所に鐵道省で建てた立派な小屋があつたが今では全然破壊して仕舞つて使用に堪へない。その西側茶イリの柄より下は蓬澤の名を辱しめず丈なす蓬で通行に困難を感じる位だ。これも近年迄は年々土樽村役場で刈り取つて居たが、隧道が貫通したので止めたさうである。

峠の南に一七五九米の三角點のある峰を檜又ノ頭と謂ひ、又その一部をス、ケの頭とも呼んで居てこのものは檜又ノ澤の上流ス、ケ澤のツメである。頂上より北西へ出で更に西へ分派して居る尾根の約百米位降つた所をオキ鷹の巢、猶二百米程下をデト鷹の巢と稱して居る。

峠から檜又ノ頭まで約四十五分を要したが、尾根は瘦せて居るし笹も短かいので比較的樂の方だ。此處から國境尾根を南へ降つた鞍部附近の西側寄りを笹平と謂つて居る。自分等は其所から茂倉岳へ向つて約二百米位登つた所の西側モヨギ澤のツメで、鐵道省の假小屋の跡に天幕を張つたが水は無いので東側芝倉澤方面の残雪で間に合せる事にした。(檜又ノ頭露營地間約二時間)

茂倉岳、一ノ倉岳、谷川富士

茂倉岳は既に山岳十六年第三號所載藤島氏の貴重な文献の通り茂倉のツメであつて頂上は實に平凡な小笹の突起で一九七七米の三等三角點がある。

檜又ノ澤の一部が茂倉岳の西北迄來て終つて居る澤の小名をモヨギ澤と云ひ其のツメにある岩を黒岩と呼んで居る、又西へ分岐して居る尾根に一五〇九米の獨立標高點のある突起をカワタノエノ矢場又はトツサカとも謂つて居てこれを降つて土樽へ行く事が出来るさうだ。

國境の尾根は茂倉岳から急に東へ折れて短かい藪の降りとなる、これは鞍部迄辿つて一ノ倉岳の登りにかかる。この附近は雪解けの後へ幾つかの池が出来て、その濕地には蟲取りスミレやナンキンコザクラの花が爛漫と咲き亂れて非常に美しい。登りきつた所に一九七四米の一等三角點がある。これが一ノ倉岳の頂上である。(茂倉岳三角點より約三十分) 尾根通し以外に残雪が相當多い時期には市ノ倉澤を上下し得るとの事であるが自分は未だ通つた事はない。

一ノ倉岳は五萬分ノ一地形圖には谷川富士と明記してあるがこの名稱に就いては、自分は藤島氏の説を支持するものである。湯檜曾ではこの一ノ倉岳を村から見て富士形をなして居ると聞かされたが、郷土愛の強い湯檜曾の村人が谷川の領分でもないこの峰へ他村の名を冠する理由がちと首肯し難い。

次に耳二ツであるが、耳二ツとは谷川岳と谷川富士との二ツの峰が犬の耳に似て居る爲の名稱であるが、これはこの富士淺間神社のある突起と谷川岳三角點との二つの突起を指すものである事は既定の事實である。據つて谷川富士の名稱は富士淺間神社の鎮座する一九六〇米突の突起に冠すべきものと自分は思考するものである。

一ノ倉岳から谷川富士への尾根は、五萬分ノ一地形圖では緩かに曲つて居るが實際はもつと急角度である。この邊りから淺間神社附近へ掛けての東面の所謂、覗きは實に物凄い絶壁の連続であつて其の岩底の上に偃松や石楠の藪がある。それでも通行し得る程度に切明けがあるので比較的樂だ。其所を通りながら下を覗くと、何だか足の裏が、むづ痒くなる。少からず瞻

を冷しながら約四十分も切明けを辿ると富士淺間大明神の祠のある谷川富士（一九六〇米）へ着く事が出来る。社祠は岩の南東の蔭にあつて、高さ約三尺間口二尺位の頑丈な總亞鉛張りで南を向いて居る。

谷川岳、薬師ヶ岳、耳二ツ

谷川富士から約二十五分で谷川岳三角點へ着く。五萬分ノ一地形圖にある通り、一九六三米の三等三角點のある峰で一名薬師ヶ岳とも謂ふ、又この突起と前の富士淺間神社のある谷川富士とを併せて南から見ると耳二ツとも呼んで居る。

その薬師如來のある位置は三角點のある突起より稍南へ寄つた所で、丁度天神峠からの徑と西黒澤の徑が國境尾根で合して、三角點のある突起へ行かんとする所へ二三の岩が立ち竝んで居る、その東寄りの岩の直ぐ下に安置されてあるが片面孔りで高さ一尺五寸位であるから見落し易い。

越後富士（オヂガ澤ノ頭）

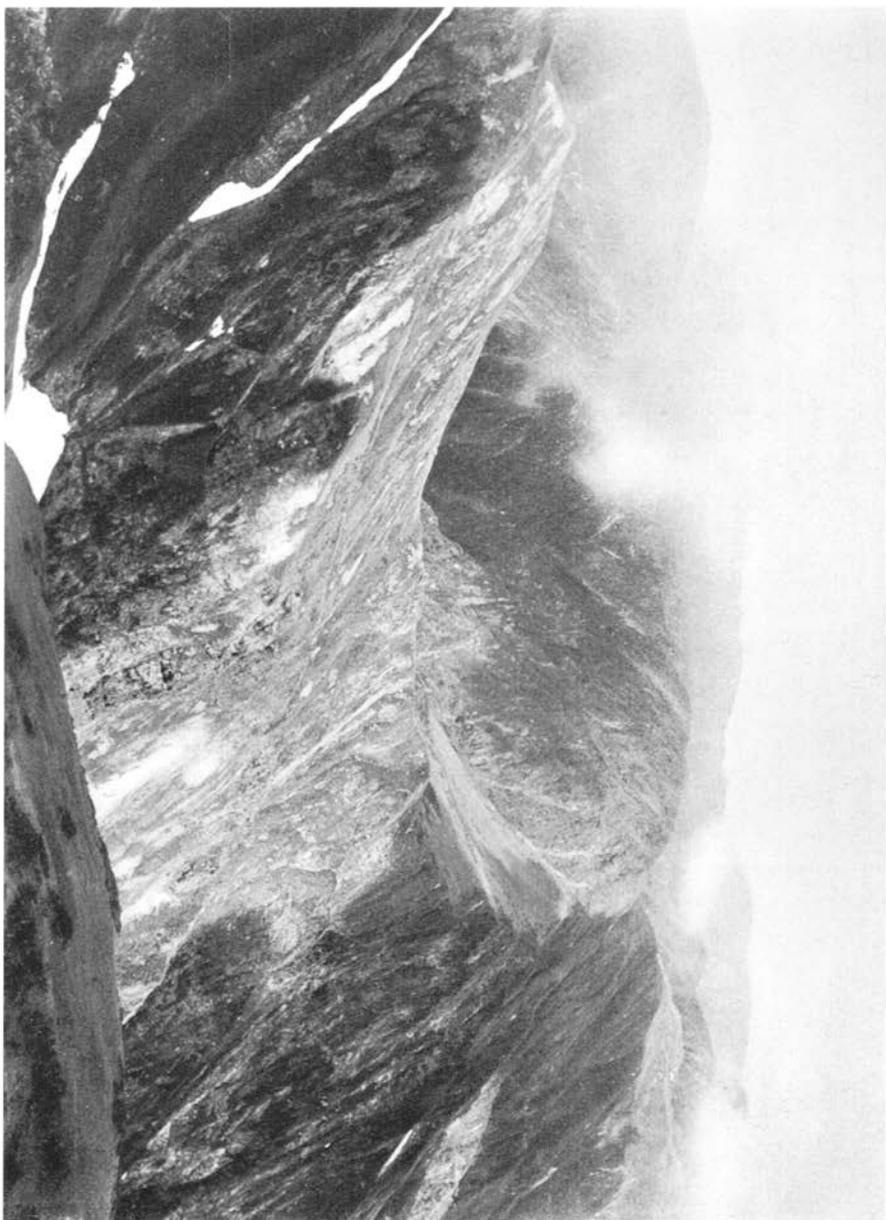
とサゴイノ峰

谷川岳の薬師如來のある所から國境尾根は急に西へ折れて廣々とした平になる。矮少な白石石楠やその他の植物が密生して居る土を踏んで行くと段々尾根が瘦せて来て小笹が出て来るともう直ぐ鞍部だ。

其處から北側萬太郎澤の對岸にある、オコマガ岳が見える。この邊までは谷川方面からよく来ると見えて踏跡があるがこれより西には殆ど見當らぬ。

登りに掛ると今までとは異つて尾根はすばらしく瘦せて、然も石楠、米母、偃松等の混生した藪となり、盛んに我々に抵抗する。初めは北側を捲いて行くが偃松が多くなつて来たら、南側へ移つて山稜より二三米位下を絡むと幾分樂だ。尾根が偃松ばかりになつて来ると愈々越後富士の絶頂へ着く（一八七八米）。頂上は至極平凡な少しく砂礫の出た突起である、此處をオヂガ澤ノ頭とも呼んで居る。

更にその西に一九五四米の三角點のある五萬分ノ一地形圖に萬太郎山を記してある峰を越後富士と謂ふ説もあるがそれは全然誤謬であると思ふ。土樽の村人が越後富士を指す時に土樽から見て正面に見えるコベタテノセンノ澤の矢場とオーベタテノ歌とのオキ（一九



茂倉岳と一ノ倉岳との鞍部より北に笹平、樽又尾根を望む

五四米)の峰ではなくて、その北にあるカワタノエノ矢場(一八七八米)の右へ頭だけ出して居るオヂガ澤の頭を指して居る。

又利根川圖志、卷一利根川全圖に「赤谷川はフジ山より出で南に流れて猿ヶ京に至り三坂峠下の水を并せ」云々とあり、赤谷川水源のオヂガ澤の頭をフジ山と呼んで居る、これを見てもこの峰が越後富士である事を肯定し得ると思ふ。

次は五萬分ノ一地形圖に萬太郎山とある一九五四米の峰であるが、この名稱は澤には立派にあるが峰には決して使はれて居らぬ。假稱として使ふにしてもあの奥深い澤の名をこの峰のみへ冠するのは少しく不適當ではないかと思ふ。この峰を越後ではサゴノ峰と呼んで居るし、又それでなければ通用せぬ。越後富士からサゴノ峰へ行く場合晴れて展望がきけば問題はなすが霧がかゝる様な時は非常に間違ひ易い。

國境の尾根は越後富士の頂上から南へ直角に屈折して居る。それを四五米位降つて短かい笹が出て來る頃西側の平を注意して行くと、そこに小さな尾根が分岐して居るのが分る。これがその目的の尾根であつて餘

程注意せぬと見逃して仕舞ふ。その分岐點を過ぎればサゴノ頭迄何等紛らはしい所はない。

小笹に掩はれた尾根を降つて行くと一つの突起がある。これを大栗ノ頭と云ひその次の突起が大障子ノ頭である。概してこの邊は短かい笹の大きな波狀を描いた尾根で割合に歩行し易い。

最後の鞍部からサゴノ頭へ向つて約七八十米突位登つた所から南側を見ると、小さい平があつてその中央には池があるが、水が濁つて居るし焚木も遠いので非常の場合を除いてはあまり感服出來ない。

この邊から尾根の藪は段々と猛烈になつて來て登るに従ひ頑強なる偃松と米榎の集團は愈々強猛に威力を發揮して登攀者を拒む。殆ど枝から枝への輕業を演ぜねばならぬ、併しこの難行苦行も僅か三十分位でサゴノ頭に到達する(一九五四米)。

頂上は五六米位の廣さで苔桃、白花石楠、偃松等が蔓延つて居た。

この峰は東から來る場合は何でもないが西から縦走する時若しも霧がかゝつた場合には、三角點のすぐ先から東へ直角に曲る事を記憶せねばならぬ。これを直

行すればオーベタテの頭へ降つて仕舞ふ（自分は此處へ怪しげな杭を立てゝ置いた）。

毛度澤乗越とエビス大黒ノ頭

サゴノ頭から西南へ引いた國境の尾根は非常に瘦せて居る上に傾斜が緩漫なものと白花石楠と偃松の藪が頗る短かいので歩行にはさしたる困難はない。

頂上からこの方面へ少し降つて越後側を見ると笹の平がある。これをオークラの大笹臺と呼んで居る。

猶約三十分位降つた所にヘルメツト形をした突起がある、これが東マタの頭（二八〇〇米）であつて其所から尾根が分岐して南へ日向松倉の頭を突出して居る。

東マタの頭から急に西へ折れて實に美しい日光黄菅の御花畑を通つて短かい笹のうねりにかゝる、これを降り切つた所の瘦せた鞍部が毛度澤乗越である（サゴノ頭から乗越まで約一時間）。

昔はこの毛度澤乗越を通行したさうだが今は一寸難かしい、現在でも越後側はム澤の尾根を降つて毛度澤の本流へ出る事が出来得るさうだが上州側は中々悪場がある。

露营地としては越後側は水が遠いので上州側にのみ泊る事にして居る。乗越から南へ約二百米位小澤について降ると笹の平がある。こゝ迄降ればその小澤に水は豊富にあるし焚木も充分なので、先づ露营地としては上々である。

乗越からエビス大黒ノ頭へは可成りの急傾斜を登らねばならぬ。初めは小さな岩場を三つ程越してから小笹の尾根を約三十分も登ると左に立派な岩のキレットがあつてそこを覗くと遙かに赤谷川の下流笹穴澤の出合あたりが見える。その邊から又例の藪が出てくるが比較的短かいので、大した困難も感ぜずに約四十分位でエビス大黒ノ頭へ達する事が出来る。

この附近の尾根は概して越後側が緩かなのに引換へ上州側は殆ど斷崖の連続である。エビス大黒の名稱は其の南面にある大岩壁の一部にエビスと大黒の形をなした二つの岩が佇立して居るとの事であつて、その名を取つたものであらう。

仙ノ倉山（三ノ字ノ頭）と平標ノ頭

エビス大黒ノ頭から短かい笹の尾根を約二十五分も

降ると南側がガレになつた、一寸物凄しい感じの鞍部へ着く。

其處から仙ノ倉山東面の登りにかゝる、短かい白花石楠の間から所々に岩の肌を見せて、殆ど階段の様な急傾斜を約四十分攀ぢ登ると仙ノ倉山の二等三角點へ達する(二〇二六米)。

この連峰の中で二千米突を越えて居るのは實にこの仙ノ倉山のみであつて高さに於てはこの山脈中での覇者と仰がねばならぬ。

頂上は大體に於て三つの突起に分れて居つて三角點はその東端の最高點の突起にある。三ノ字の山名は既に奥上州號記載藤島氏の文獻にある通り殘雪の形狀から來たもので位置は三角點のある突起の頂上から北へ引いた尾根を約百五六十米位降つた附近に三ノ字の雪が残るので、その苗代時に三ノ字、入梅時に二ノ字、パンゲの時に一ノ字といふ事だ。

西に寄つて二〇二〇米の圈のある突起が丸山で其處から南へ引いた尾根が笹峰である。丸山と平標の間はまるで尾根の上とは思へぬ程のんびりとした所で幅は廣い傾斜は緩慢で丁度絨氈を敷いた様な一面のガン

コウランで實に青々とした平だ。何時降りになつて何時登りになつたか分らぬ中に平標の頭(一九八三米)になつて仕舞ふ(仙ノ倉山頂上より約四十分)。

頂上は腰位までの石楠の藪であるが西北の一部を切拂つて三角標石が置かれてある。平標の名稱は頂上より微北西へ引いた尾根を約四五十米位行つた北側に平標といふ平がある、其處には池もあるし一面の美しい草原で日光黄菅の花が咲き亂れて居るがどの方面からでも相當の藪を突破せねばならぬので其處まで行くのは一寸億劫だ。

コーチ澤ノ頭と三國山

平標の頭から南の斜面は實に何とも云へぬ好い所だ。緩い傾斜の濕原で所々に偃松と石楠も少しはあるが大體に於て可憐な毛氈苔やその他の濕地性植物で蔽はれた美しい明るい感じのする所である。殊に西側は眞黒な鍼葉樹林でその對照が非常にいい。

濕原と密叢帯との接觸點の東側にいゝ露營地がある。それは平標の頂上から約二百米位降つて來た所の東寄りで地圖の一つ目の小澤がある所だ、其處に丁度

頃合の平があつて風は避けるし水は近いし、焚物は御
 誂への白樺が餘り多くはないが、まあ當分は大丈夫な
 だけある。

この露營地附近から急に陣竹と石楠或ひは羅漢柏等
 の混成した實に猛烈な藪となつて仕舞ふ。この邊は概
 して東側を通る方が比較的樂だ。この藪はコーチ澤の
 頭へ近づくに從つて愈高調に達し、益々猛烈の度を加
 へ徹底的に威力を發揮して執拗にも纏はり附くので、
 これを撃退するには全く渾身の勇を振はねばならぬ。

コーチ澤の頭(一七六四米)は一旦西側を巻いて南側
 へ出てその方面から頂上へ登る方が餘程樂である。

此所を過ぎればもう三國山へは大した事はないが藪
 と全く絶縁する譯にはゆかない。波状を描いた小さい
 突起を五つ越せばすぐ牛の様な老大な三國山(一
 六三六米)の頂上へ達する事が出来る。頂上は東西に
 長く南北は極めて細い。近來大分藪が伸びて少しく邪
 魔にはなるが少し移動すれば展望には差支へない。

此處から三國峠へはもう藪はなし草地の中を至極の
 んきに僅か二十五分も降れば三國權現の社前に叩頭く
 事が出来る。

後 記

登山口としては、上州側で法師、谷川、湯檜曾の三
 ケ所であるが何れも根據地としては申分ないが、直接
 どの山へ取付くといふわけに行かず且つこの山脈全部
 を知る案内人が現在の所全くないので困る。越後土樽
 か松川なれば直接どの山へでも取りつく事も出来るし
 案内人も充分あるが、上越線が全通する迄は時間と日
 數が掛る。自分は前以て手紙で越後の土樽から人夫を
 上州迄呼び寄せて使つて居るが往復二日の日當が餘分
 の負擔になる。

上州側の中、法師温泉は理想的だし物資を得
 る都合もいゝが唯適當な案内人に乏しい。長壽館主岡
 村氏も近來この點に注目してよい案内人を養成せんと
 して居る。

次に谷川温泉であるが、旅館は現在三軒あつて登山
 者は主に谷川館に泊る様だが經營者が山岳に冷淡であ
 るのと夏は雜沓して困る。此所から登る人は大抵日歸
 り登山者であるので縦走としての案内人は全然ない。

湯檜曾温泉では本家族館主阿部氏が中々山岳に熱心

であり研究もして居る様だが同じく適當な案内者に乏しいのが遺憾である。

本年の夏、會員山田多市氏が湯檜會のある旅館の推薦により二名の案内人を連れられた所、越後富士以西の山脈には全然初めての無經驗で、荷負ひの外何の役にもたゝず、大に失望且つ憤慨されて居つた。

越後土樽には温泉もなく旅館もないが案内人劍持政吉の家へ宿泊するので、却つて山男にはその方が勝手がいゝ。

土樽の案内人で自分の連れた者は七人あるが中で最も勇敢にして經驗に富む者としては松川の林傳次を推奨するものである。

以上の山稜を通過するに當り是非共携行せねばならぬものは金カンジキである。之は雪の上に用いるのではなく藪と濕地を通る場合無くてならぬ用具である。

地名の詮鑿に就ては數多の誤謬がある事と思ふ。何卒大方の示教を願ひ度い。

○積雪期の仙ノ倉山及びその附近

角田 吉夫

雜 錄

○積雪期の仙ノ倉山及びその附近

(一)昭和四年一月四日—十一日

越後湯澤—芝原峠—二居峠—三國村元橋—大源太山—越後湯澤

一行 高橋榮一郎、角田吉夫

(二)昭和四年三月七日—十九日

越後湯澤—三國村二居—淺貝—三國山。

二居—仙ノ倉山—元橋—淺貝—三國峠—法師温泉—後閑

一行 角田吉夫 案内富澤孝太郎

(三)昭和五年三月二十四日—四月一日

越後湯澤—土樽村—仙ノ倉山、萬太郎山、茂倉岳、谷川富

士—土樽村—蓬峠—土合—湯檜會—水上

一行 大木長藏 阿部秀雄 角田吉夫

案内劍持榮作、半澤忠善

参照地圖 五萬分ノ一、湯澤 四萬

まへがき

上越國境山脈のうちで最も優れたる山容と限りなき魅力を有するものは谷川岳より仙ノ倉山に連なる連嶺であらう。嘗ては藪山なるが故に訪れる人も少く、僅かに三國越え或ひは清水越の旅人に依つて願られたものに過ぎなかつた。

雜 錄 ○積雪期の仙ノ倉山及びその附近

然し清水街道が跡形もなく荒廢し、僅かにその俤を偲ぶ今日、谷川岳と其の東面の大岩壁は四季を問はず、登山者に賑ふ程著名なものとなつた。時代の推移か、雪と岩の魅力か。

仙ノ倉山附近の密生した藪は登攀を拒むかの様に甚しいものである。然るに一度雪の装ひに白銀の衣を輝かす頃、その玲瓏に接したならば、シロイフアーの心には深き感銘を残さずには置かない。

聽て茂倉岳の山腹を貫く清水トンネルの大工事が完成した曉には蓬峙や三國峙には多くのシュニプルを印する事であらう。

本文は去る昭和五年六月本會小集會席上に於て「積雪期の上越國境」と題して講演したものと同一内容である。即ち前述せる如く仙ノ倉山、萬太郎山、茂倉岳、谷川富士（一ノ倉岳）に關する記述に過ぎない、そして越後三國村及土樽村を登山の根據地となしたもので上州側よりは一回の登山も試みてない。

上越國境の山々に關する文献としては「山岳」十六年三號、奥上州號が最も優れてゐる。又積雪期に於ける

上越の山々の研究は四高山岳部々報「ベルグハイル」第五號及び法政山岳部々報「山想」第三號に發表されてゐる。

次に地名に就て一言斷つて置かなければならない。

この地方の山名は上州と越後では非常な相違がある。又同じ越後の中で三國村と土樽村でも名稱を異にする山がある。これはこの地方を訪れる登山者の等しく疑ひを抱き、判斷に苦しむ所である。將來最も妥當と思はれる名稱の決定を希望して止まない。固有名詞は尊重すべきものではあるが一つの山に二つも三つも異なる名稱があつては、登山者の苦痛を増すのみであらう。幸、本號には松本善二氏が仙ノ倉山、谷川岳附近の錯雜せる山名に就て執筆せらるゝとの事であれば、（一八九頁参照—編者註）此處には山名に就ての記述は避け、私は五萬分一地形圖の稱呼に従ふ事とする。特に越後側には用いられ、本文と關係の深いものを以下二、三列舉して置く。

三國村方面

大源太山（ダイゲンダイ一九八三・七米）仙ノ倉山の西に連る山を指す。地圖には一七六四・一米の山を大源太

山と記してゐるが通用しない（土樽村で平表山カウチと呼ぶ）。

河内澤の頭 地圖の大源太山を指す、即ち元橋より東南に入る澤を河内澤と呼ぶ、河内澤の「天」の字附近の右岸にゲタ小屋と呼ぶ杓子を作る小屋がある。其處へ東北より入る開けた澤をヤカイ澤と云ふ。

ゼンノ澤 大源太山の西北の背より二居に走る澤土樽村方面

三ノ字 仙ノ倉山の別名である。山頂附近の残雪の形態よりこの名稱が起つたもので、村人は主に三ノ字と呼ぶ。

サゴノ峯（サツゴノ峯）萬太郎山を云ふ。單に萬太郎と云ふと萬太郎谷を意味するらしい。

茂倉岳 地圖の谷川富士（一九七四・二米）は土樽では茂倉岳の一部と見做し、茂倉岳には三角點が二つあると考へてゐる。谷川富士は一ノ倉岳と呼ぶのが正しい様である。

三國街道を行く

雜 錄 ○積雪期の仙ノ倉山及びその附近

上越二國を通ずる三國街道はその昔越後藩主の江戸參勤交代の通路として賑つたと言はれてゐる。又幕末當時三國峠を差狭んだ華々しい官軍對會津藩の戦争の物語もある。僅かな旅人によつて越される三國峠、又その街道に點在する靜かな村落は越後湯澤を起點として、開鑿せられつつある清水トンネルの完成の曉にはこれ等の僅かな旅人にも忘れられやうとしてゐる。

私が初めて三國村を訪れたのは一九二九年の一月であつた。その時上越北線の車窓より仰げる銀嶺八海山の美しさは忘れる事が出来ない。越後湯澤より雪深き街道を七谷切ナナヤキへ進み、黄昏の迫る頃芝原シバハラの粉雪を飛ばして三俣村の本陣池田屋に入つた。昔時は大名の宿泊した光榮ある家であらう、今でも村人は池田屋を本陣と呼んでゐる。次の靜かに雪の降る中を南へ、二居峠を越えて二居へ更に平坦な雪の街道を元橋の一軒家に向つた。元橋の人々は私達の突然の訪問に驚きながら、東京の學生である事を諒解して快く數日の宿泊を快諾して呉れた。私達は此處に根據地を置いて仙ノ倉山へ登る日待つた。

然し一月の天候は不運にも私達に機會を與へて呉れ

なかつた。再度元橋より西に走る大源太山（一九八三・七米）への尾根を登つたが、途中より吹雪に退けられて仙ノ倉山の頂に立つ歡びは得られなかつた。元橋に來て四日目に再び同じ尾根——それは非常な狭い、スキ1には適さない尾根を登り、五時間餘を要して大源太山の頂を極めた。仙ノ倉山は眼前に恐らく一時間の晴間を得れば達する事の出来る距離にあつたが、再び激しい吹雪に遮ぎられて元橋に戻つて來た。

遂に一月の三國街道は一日の快晴も掴めず、吹雪をもつて終始したと言へやう。然し苗場の魁偉な山容と元橋の人々の純情は私達の暗愴たる失意の心には大きな慰安であつた。そして次の日靜かに降る雪路を二居、芝原の峠を越えて歸途に就いた。

仙ノ倉山

同じ年の三月八日、あの埋れた三國街道の村落の靜けさと仙ノ倉山の美しさに魅せられて私は一人旅立ち再び二居の本陣を訪れた。この日は早春には珍らしい程晴渡り和やかな陽光は遍く光り輝いてゐた。大源太山はセンノ澤を深く引いて、三國街道を睥睨してゐた。

二居の子供達は久し振の快晴に喜び勇んで皆手製のスキーを穿いて、戸外に遊び戯れてゐる。私の訪問は非常な驚異であつたらしい、子供等は私のスキーの造りが、餘りにも彼等とそれと異つてゐるのに驚いてゐた。

二居の本陣富澤直治郎氏の家は二居の中央に位し街道の東側にあつて村役場と宿屋を兼ねてゐる。宿の前は熊狩の名手富澤元吉の家があつて、仙ノ倉山へは元吉の弟孝太郎を案内者として依頼をする事になつた。

翌早朝、仙ノ倉山の登頂を志して飛び起されば、天候は一變して戸外は猛烈な吹雪である。うらゝかだつた春日和は再び寒い冬となつた。そして其後數日はヒュー／＼と吹き荒む雪の日が続いて暗い忍従の生活が続けられた。然し三國村の生活は決して不愉快なものではなかつた。本陣の圍爐裏に坐つて幕末の戦争の物語を聞いたり、前の元吉の家に行つては熊狩の勇壯な話を耳にして、二居に來た日の様な快晴を待つてゐた。就中、最も私を慰めて呉れたのは小さなスキー友達である。吹雪の日も風の日も、この友達は學校が終ると私を迎へに來る。そして一同打連れてセンノ澤の奥にスキーを滑らし、そしてチャンプ臺を造り、又二

居峠より直滑降をしては樂んだ。或る日は學校の授業を早く切上げて、校長先生が先頭に村の青年迄も参加してスキ一の講習會が開かれた。そして私は其後スキ

一の先生といふ非常に耳ざわりな別稱を以て、村人からスキ一の友達から親しく呼ばれる様になつた。

二居を訪れてより十日間、多くの出来事はあつた。

三月十二日の山の神様の祭禮は雪に埋れた山村の單調を破る賑ひであつた。その日は九時頃より素晴らしい快晴になつたが既に出發の時期を逃してゐた。又一度はセンノ澤を登つて大源太の頂近く迄登つたが、吹雪に遭遇して引返した事もあつた。

三月十六日 この日も顔を上げられない様な激しい吹雪の日である。風邪氣味の不快さと連日の悪天候にこれ以上の滞在も出来兼ね、三國峠を越えるべく淺貝の宿綿貫氏方に一夜を過せば、數日來私を苦しめた吹雪は一掃され待ちこがれた春の日が訪れた。軽い練習意味で昨夜夜更けて淺貝を訪れた四高の藤田君等と共に三國峠に登り、三國山の頂に立ちそして北ノリ澤を下つた軽い一日のプロムナードは愉快なものであつた。雲一つない澄み渡る蒼空の下に仰ぐ白と青の曲線

は美しき限りである。大源太山より仙ノ倉山に續く廣い山稜には雪も消えてゐた。

軽いプロムナードを終へて淺貝に滑り込んだ私は明日の登高を夢見つゝ直ちに二居へ再び三國街道を歩いた。二居の本陣の人々もスキ一の小さな友達も非常に喜んで呉れた。

翌三月十八日、空は申分なく晴渡つてゐる。夜の白むのを待つて出發(六時十五分)、同行者は先日大源太山まで案内をして呉れた本陣の前の富澤孝太郎といふ元氣な熊狩の獵師である。菅笠に簔、鐵砲を肩に手には舟人の持つ權に似たものを持つてゐる。手コシキとか言ふ。

センノ澤を東へ廣い平坦な谷を進んで行く。昨日の快晴で表層は稍々クラストをなしてゐる。やがて谷は右に折れ、暫く杉の植林の中に行く。先日廻つた時センノ澤の本谷と思はれた一六一三米の三角點の北側の澤である。然し今日は本谷より北寄りのコウガイヒドの澤に入り、村界尾根を目指した。北斜面の爲でもあらう、粉雪は軽く舞ひあがる。

やがて澤を登り切れば大源太山より走る山稜の西の一角に出る。仙ノ倉谷を隔て、眺める仙ノ倉山は實に優美であつた八海山、中ノ岳を初めて眼前に展開される重疊たる雪山は山男のみ知る美さであらう。平坦な大源太山の北側を絡みつゝ尙も進むと、氷結した北斜面は石楠花も偃松も雪に覆はれて固く、遂にアイゼンにはき替へる。一月の灰色の印象は何處へか消えたり、總ての苦惱はこの瞬間に於て一掃されるのである。晴れ渡つた春の日は霞に包まれて遠くの山々は仰がれないとしても、日は暖く雪面は輝いてゐる。大源太山と仙ノ倉山の鞍部は風當りの強い故か雪は消えてツガザクラの群落が現れてゐる。軽い中食を採りスキーを置いて仙ノ倉山に向ふ。東に約一時間山稜を傳つて遂にその頂に立つ事が出来た（正午）。三角櫓の残骸が淋しく立つてゐる。萬太郎山は毛度澤に深く裾を引いて實に大きい。仙ノ倉山より東につゞく山稜は鋭くエビス大黒の頭は赤谷側に岩膚を露はし黒と白との對照は雄々しく美しいものであつた。

久戀の頂に立つ歡喜に満ちた慰ひも長くは許されな
い。大源太山の南尾根を下つて淺貝まで行く豫定が殘

つてゐる。午後一時頂を辭して今迄忘れてゐた鞍部を見ると、頂に向ふ黒い人影が三つ動いてゐる。淺貝より登つた四高の人々である。暖かい春の陽を滿身に浴びて雪の消えた草原に大空を仰ぎつゝ藤田君の一行を待つた。孝太郎も私の氣持を汲んで今日の快晴を心から喜んで呉れた。

大源太山の頂は踏まずに南側を絡むと、スラロームを描くに充分な大斜面が展開される。午後の太陽を浴びたザラメ雪、息詰る様な緊張の一瞬間が過ぎれば藤田君一行は遙か後方に黒點を止めるのみ。河内澤の頭との鞍部に藤田君一行のスキーは置かれてあつた。彼等は今朝淺貝を發つて丸丸木の東を越え、河内澤に入り、イワノ澤を登つて此處に達したとの事である。河内澤の頭までの僅かの尾根は大きな雪庇と密生する灌木に遮られて一寸登る氣も起らない。結局河内澤に下る事に決めて第二回の中食を採る（一・五五—二・三〇）。

河内澤の本谷に落合ふ迄山毛櫨の樹間を縫つて楽しい滑降を續ける。河内澤は廣い緩かな澤で、樹間に仰ぐ苗場山は高く夕陽を浴びて浮んでゐる。やがて平坦

な雪面をスケートイングを楽しみ乍ら下ればゲタ小屋の前に出る。杓子を作る人々は木を伐りに行つたのであらう、人影もない。笈の水に喉を潤し更に西へあの落葉松のスツキリと立つ火打峠の雪原にスキーを滑らせた。

吹雪の後の二日間は三國山へ仙ノ倉山へと實に慌しかつた。楽しく山を憶ふ一日の休養もない。翌十九日は飄然と只一人三國峠を越えた。此の日は前日の様な蒼空は仰がれなかつたが、南風の吹く暖い日であつた。苗場山の頂上は無氣味な黒雲が漂つてゐる、恐らく又吹雪と變るのであらう。

三國峠のお宮は雪に埋れて尾根のみが現れてゐる。南風は強く吹きつけて來た。上州側へ大きな雪庇を切つて滑る。中食をとつてから僅かな踏跡を頼りに法師温泉へと更に三國街道を行く。永井附近より雪は消え雪溶けの道を雨に濡れながら然し大きな喜びを胸に抱きつゝ都へ急いだ。

所要時間

十七日 三國山 浅貝(九、一五)―お助小舎(一〇、一〇)―三國峠(一一、〇〇)―三國山(一二、三五)―

雜 錄 ○積雪期の仙ノ倉山及びその附近

二、四五)―河内澤の頭との鞍部(二、二〇)―淺貝(二、五五)―四、〇〇)―二居(五、一〇)
 十八日 仙ノ倉山 二居(六、一五)―尾根に出る(九、三〇)―仙ノ倉山(一、二〇〇)―河内澤の頭北の鞍部(一、五五)―二、三〇)―ゲタ小屋(二、五五)―三、二〇)―元橋(四、〇〇)―四、四五)―淺貝(五、三〇)

土樽村へ

春の三國街道の旅を忘れ兼ねて次の年(一九三〇年)三月二十四日の晝近く思出の深い越後湯澤に下車、仙ノ倉山の山懐に抱かれるべく土樽村へ向つた。同行者は法政大學山岳部の大木、阿部兩君。今度の旅は三國街道を歩いた時の様な手輕なものではなかつた。馴鹿のシュラーフザツクや天幕等、露營道具一式を擔いでゐる。折よく土樽村へ行くトンネル工事の建設列車に便乗する事を得て土樽村の登山案内組合長劍持政吉氏の家を訪れた。

既に手紙で依頼して置いたので初對面にも拘らず、私達を快く迎へてくれたのは大きな喜びであつた。登山の打合せと人夫の交渉もすらくと運んで行つた。

そして人夫には松川の獵師劍持榮作と半澤忠善の二人が撰ばれてゐた。

夕陽の沈む頃、政吉さんは戸外に立つて赤々と輝く國境の山々を指しては細々と説明をして呉れた。廣い萬太郎谷の奥には圓頂の茂倉岳がある、正面には越後富士と呼ばれるサゴノ峯（萬太郎山）の均衡のとれた美しい山容、その西には三ノ字（仙ノ倉山）が鋭い山頂を見せてゐる。

數日來の快晴つゞきと、近年にない雪不足の爲に附近ではスキ一の練習も出来ない程雪は消えてゐる。然し空は明日の天候を約する如く、美しい夕焼に輝いてゐた。

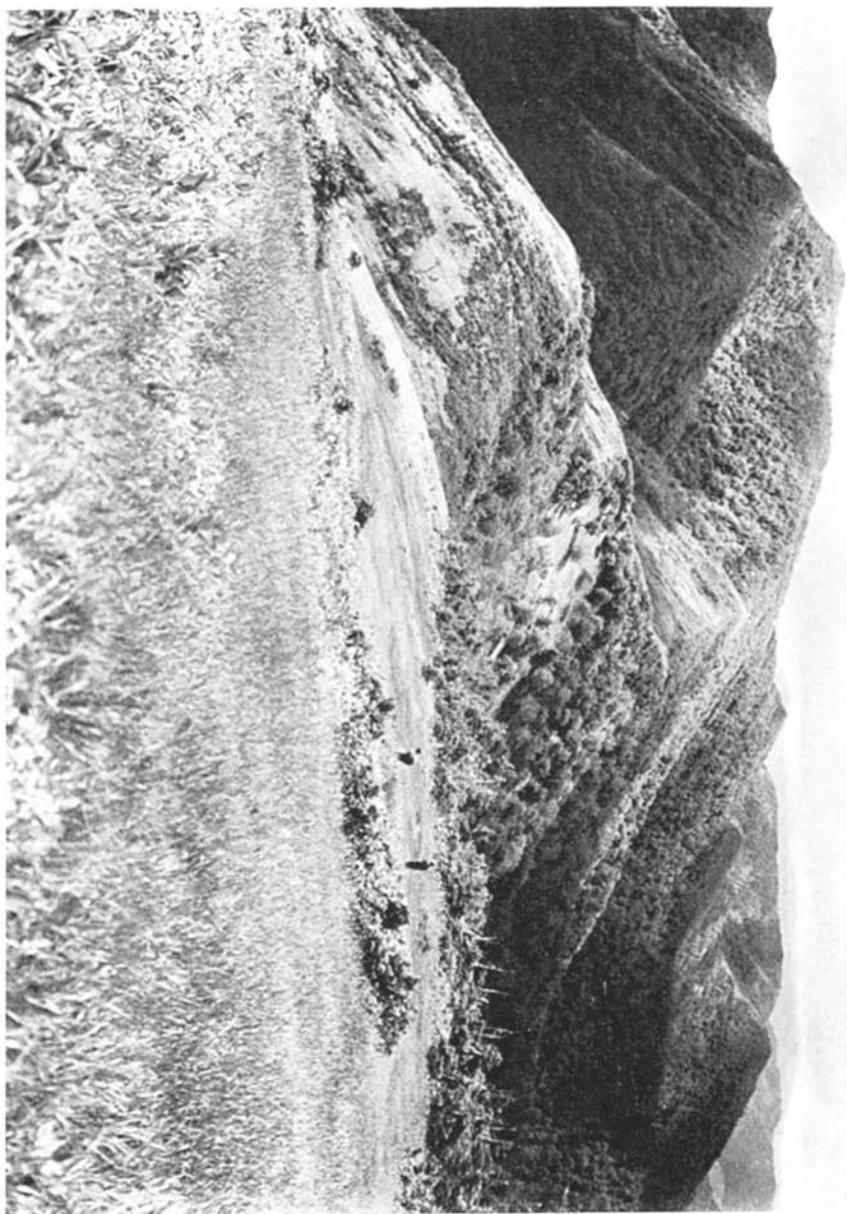
萬太郎山

翌三月二十五日、早朝二人の案内者は松川からやつて來た。二、三日の食料を準備し政吉さんに見送られて山口に向ふ（八時四十分）。村端でスキーをはき、シナノキの原を南に、夏路通り仙ノ倉山を目指して進んだ。小松澤迄は平坦な礫の雪原に行く。毛度澤と仙ノ倉澤の出合に着いたのが十時三十分。この二つの澤

は略々等しい水量を以て合流してゐる。仙ノ倉澤に架けられた丸木橋を渡つて、毛度澤に入り、左岸の山毛櫸林の中にスキーを滑らせる。小屋場澤（湯澤圖幅、毛度澤の毛の字の所へ南より入る澤）附近より漸く谷が狭まり、雪橋を利用して右岸左岸と自由に進む事が出来る様になる。左より入るデトイノマチノ澤はひらけた大きな澤である（毛度澤の澤の字の所へ東より入る澤）。その奥には萬太郎山の一部が見える。

連日の好晴の爲に雪は固くスキーも輪カンデキも同じ速度で進む事が出来る。十二時二十分、オキイノマチノ澤（四萬圖幅、毛度澤の毛の字へ東より入る澤）の出合に着く。毛度の越路が手にとる様に近く見える。

萬太郎山に登るにはオキイノマチノ澤が最も近い様に思はれる。出合附近を露營地と決めて、一同晝飯をとつた。一時二十五分輕装にて萬太郎山に向ふ。山毛櫸林の中を自由に電光形に登ると澤は相當の急傾斜で南面には大きな上層雪崩の跡がある。一五〇〇米附近で急傾斜の林は終り廣い臺地へ出る事が出來た。大笹平と呼ばれる所であつて素晴らしい岳樺が散在してゐる。午後の強烈な陽を受けて雪面はザラメとなり、ス



三國山の頂と三國山の南面より見たる三國山

スキー滑走には好適のコンディションとなつてゐる。未だ頂は遠い。西方には深く落込んだ毛度澤を隔て、仙ノ倉山の雄姿が仰がれる。山頂は美しく輝き陰影は長く雪面にそして又東北面は水鏡の様な輝きを持つてゐる。恐らくフィルムクラストであらう。

更に萬太郎山の南の肩を目指して登高を続ける。大笹平を過ぎると灌木もなく再び急斜面となつてキツクターンを繰返へす度毎に滑落の危険を思はせる。山頂より百米程下で遂にスキーを脱ぎ、アイゼンに履き替へて進み、四時二十五分萬太郎山の三角點に立つ。雪は吹き拂はれて草地の露出した所もある。東に走る山稜は鋭い、雪庇は總て上州側に大きく張出されてゐる。茂倉岳より谷川岳につどく銀鞍も美しい。その後の笠ヶ岳は最も雄大な姿であらう。

夕闇と寒さに追はれて追々に頂を辭す（四時五十分）。ザラメ雪の爲にアイゼンの八本の爪でさへ充分に止まらない。ピツケルを持たなかつた私達は非常に不安な氣持に囚はれてしまつた。榮作達は五寸もある長い爪の四本足のカンデキを履いてゐるので少しも驚かず直滑降の如くに飛び下りて行つた。私達を苦しめた

ザラメ雪もスキーを履けば寧ろ快い。大笹平を目指してスラロームを描き、豆粒の様に見えた榮作を追ひ抜くのも一瞬時だ。オキイノマチノ澤は既に日が蔭つてしまつて不快なブレイカブルクラストの面を無理に滑りつゝ六時、出合の露營地に着いた。

やがて黄昏の迫る雪の谷間にテントは張られた。春とは言へ日没後の寒さは激しい。灌木の小枝を敷物としたのみである。その夜は食後の紅茶も沸さずに濡れものもその儘に、休養を第一と早くからテントに入つてしまつた。獵師の榮作達は毛皮を一枚脊中に當てたのみで、焚火の前に蹲まつて夜を明かしてゐた。

時 間

土樽村(八、四五)―蓬澤出合(九、一五)―小松澤(一〇、二〇)―仙ノ倉澤毛度澤出合(一〇、三〇)―一、〇〇―オキイノマチノ澤(一二、二〇)―一、二五)―大笹平(二、五〇)―萬太郎山(四、二五)―四、五〇)―キャンブ(六、〇〇)

仙ノ倉山

三月廿六日、毛度澤の一夜は靜かに明けた素晴らしく晴渡つた朝である。吹雪も春雨も上越の山々には訪れるのを打忘れたかと思はれる程、來る朝は常に朗か

な蒼空が輝いてゐた。

エビス大黒の頭は既に朝日を浴びて美しい。九時五分仙ノ倉山に向つて出發、毛度澤を上へ、シツケイノ澤を直指す（四萬圖幅、仙ノ倉山より東北に流れ毛度澤の度の字に入る澤）。僅か數分にしてシツケイノ澤の落口に達した、明るい緩かな澤である。地形圖に示された岩場も見えず雪に埋れた澤は兩岸に小さい灌木が散在するのみでスキーには面白さうな谷である。三、四丁登つた所で大きく左折してゐて、この地點に非常に大きなデブリを見た。正面の澤即ち西より入る小澤の上部より發した上層雪崩の一種であらう。條痕を残し、兩岸の雪は深く削り取られてゐる。

狂暴限りなき雪崩の偉力を語り合ひつゝ、私達は左折してシツケイノ澤を更に進んだ。本澤はデブリ一つ見られぬ、歩きいゝ谷である。その奥には仙ノ倉の山頂と東北面の魅力に充ちたスロープとが仰がれる。暑さに喘ぎながら電光形にシュプールを刻んで行く。一六〇〇米附近より澤は開けて、宏大なスロープが頂に走つてゐる。

頂は近づいた、私達は一九〇〇米附近にスキーを置

きアイゼンを履いて直接に山巔を直指した。傾斜度が増すと共に雪面は固く凍結して緊張したステツプを運ぶ。十二時五十分遂に頂に立つ。頂は二峯に別れ三角點はその南のピークにある。尾根には強い冷い北風が吹いて居る。頂の印象は深い——昨年の冬は又春は三國村よりこの頂を憧れて幾度か吹雪と闘つた事であらう。朽ちはてた櫓の残骸が相變らず寒さの中に淋しく見えるのみ。尾根の南側に風を除けて、上州の山々を仰ぎつゝ一行は食事をとつた。越後の山々は霞に模糊としてゐるが、重疊たる上信の群峯は白く輝く。總てが春の山の静けさに包まれてゐる。

一時半仙ノ倉山の山頂を後にシツケイノ澤に下る。登路の凍結した急斜面を避けて北方に走る尾根に沿つて百米程下り、そして東へスキーデポへと行く。此處は既にザラメ雪となり、滑降には申分のないコンデイションだ。昨夕、萬太郎山の頂で憧れてゐた鏡の様な面を滑走する時が來た。頂きの寒さも風も已でになく、太陽は強く輝いて暑い位だ。幾度か雪を囓つた事であらう。榮作達は兎狩をする爲に灌木の生えた尾根を巻いて行つた。銃聲の起る度毎に獲物を想ひつゝ私

達はスキーを飛ばして二時四十五分露營地に戻つた。

三十分程遅れて榮作達は歸つて來たが期待してゐた獲物は一つもない。聽て私達一行はテントを疊み、再びスキーを穿いて土樽村へ向つた。春の晴れた二日間は谷の雪にも激しい變化を與へてゐた。昨日容易に渡れた雪橋の二三は跡形もない。仙ノ倉谷の落差迄幾度かスキーを脱いで靴を濡らした。ワツクスを塗り直しては楽しい家路への滑走を続け丁度三の字の頭が赤々と夕陽に輝く頃、政吉さんに迎へられてその家の人となつた(六時十五分)。深切な山の好きな政吉さんは私達の無事に下山した事を我事の様心から欣んでゐた。そして私達が頂上に達する頃、彼は仕事も手につかず村から双眼鏡で見守つてゐて呉れたのであつた。

キャンプ(九、〇五)―シツケイ澤(九、一五)―仙ノ倉山(二、五〇)―三〇―キャンプ(二、四五)―土樽(六、一五)

茂倉岳、谷川富士

清水トンネルの越後側の入口は萬太郎谷の合流點より數町下流、流れが大きく北にカーヴした所である。

この附近には鐵道工事の人々の泊る家や作業場の軒を

列べた電燈の煌々と輝く一市街がある。そしてこの市街へは湯澤より定期の列車が運轉され人々をトンネルに運び込んでゐる。

仙ノ倉山より歸つた次の日(三月廿七日)は茂倉岳に登るに適した快晴であつた。一同は相當に疲労を感じてゐたが、今日の天候を逃す氣にもならず出發と決める。斯くして私達は午前六時松川停車場發の汽車に乗る豫定であつたが準備の都合で乘遅れてしまつた。約束してゐた松川の榮作は一人でトンネルの入口にぼんやり待つてゐる事であらう。

足を痛めた山友を一人残して大木君と二人で土樽村を出たのは七時十分。汽車のレール道を約一時間歩いて榮作の待ち倦んでゐる處へ着く。作業場を過ぎ工事の人々の住む長屋を離れると、萬太郎谷の落差も近い。此處で初めてスキーを穿く。サゴノノ峯(萬太郎山)は谷を通して峨々と聳えてゐる。山頂附近の岩稜は雪も付けず鋭い山稜は東方に走る。谷は相當に廣く開け山毛櫨の林も見られるが、山頂近くになつては總てが雪と岩の壁だ。

茂倉谷の落差に近く谷の急に狭まつた所がある、村

人はケサ淵と呼びその左岸にはケサ丸ノ原と呼ぶ雪原がある。そして又右岸には山とは不調和なコンクリート造りの圓塔が建つてゐる。ピザの斜塔が一寸思ひ浮ばれて来る。勿論そんな古典的色彩のものではない、僅か二、三十尺のもので、清水トンネルの換氣塔である。近き將來にはこの蓬澤の底を汽車が走る譯である。

九時三十分、この塔の前の流れを左岸に渉る、三間位の川幅であるが水量は非常に少い。ケサ丸の雪原を横切り茂倉谷を廻る。雪橋を利用して左岸、右岸と自由足場を選ぶ事が出来た。兩岸は可成りの急傾斜をなし左岸の斜面からは數條の雪崩の跡を見る。矢場の澤（茂倉谷の倉の字へ南より入る澤）に来る迄には大きな底雪崩の跡も二、三を數へた。

この日は朝から非常に氣温の高い、南風の強く吹く日であつた。矢場ノ澤附近に達した頃から南面の雪は活動を始めて来た。茂倉谷を登り詰める豫定であつたが雪の状態を案じて私達は北斜面の矢場の澤に登路を變更する事にした。そして出合に近く、第一回の晝食をとつた（一一、五〇）。

矢場ノ澤は雪崩の虞れはないらしく思はれたが、雪

が固く斜面が急な爲にスキーには適さない。餘儀なく出合附近にスキーを置き、シユタイクアイゼンをつけて矢場を目指した。矢場——この言葉は私達には耳新らしかつた。熊狩の時銃を持つた獵師が山の一角に待つて追ひ上げて来た熊を打ち取る所を矢場と呼んでゐる。茂倉の矢場は即ち矢場ノ澤ノ頭、一五〇〇米と記された峯である。一時半一五〇〇米の峯の東の鞍部に出る。萬太郎山が手に取る様に近い。山頂附近の鋭い岩壁が美しい。過る日、頂近く迄スキーをつけて登つた萬太郎山、或ひは又、仙ノ倉山の頂より望むサゴノ峯の女性的な山容の美しさは想像も許されない程だ。

茂倉岳の頂は非常に遠い様に思はれた。狭い雪の山稜を進む頃より不安な雲は増し、そして無氣味な南風が萬太郎山を越えて吹いて来た。雪底は南方に張出されてゐて、山稜の或る部分は文字通りの劍の刃渡りを思はせる。然し又山頂に近く雪の消えた草原に春の微風に吹かれながら靜かな山の氣分を味ふ喜びもある。

三角稜の頂點、茂倉岳の山嶺に立つたのは二時間後であつた。あの矢場よりの尾根傳ひ程疲勞を覺えた事はなかつた。頂の歡びは大きかつた。東方に近く圓頂



三月の仙ノ倉山(萬太郎山より)

の谷川富士、それにづく怪異な谷川岳、そして萬太郎山、最高點に立つて初めて四圍の山々の姿を求め得た。

私達は更に谷川富士へ向つたが平坦な尾根傳ひに約二十分を要したに過ぎない。鞍部は夏的好露營地であると聞いてゐる。谷川富士の東側には大きな雪庇があつた。物凄い程屹立する一ノ倉谷の岩壁は見窺ふ術もない。谷川岳の頂は益々魅力を増してくる。然し最早時間が許さない。三時五十分歸途に就く。

空は一面にドンヨリと曇り、急に寒さを感じる。再び茂倉岳へ、尾根傳ひに矢場へ、そして元氣よく茂倉谷のスキーデポへと駆け下りた。スキーに身を託してからも、新らしい大きなデブリに進行を阻まれて自由な滑走は許されなかつた。ケサ丸ノ原に達した頃は最早雪面の傾斜も不明瞭な程夕闇が迫つてゐた。對岸への最後の徒渉は飛石傳ひも出来ない。更に南風は水量を數倍に増してゐる。腰を濡して辛うじて渡る。

意外な深い徒渉を終へてからはラテルネを便りに雪路を辿り、晝の様なトンネル口の工事場を過ぎて、土樽村へ急いだ。

土樽村(七、一〇)―茂倉谷(九、三〇)―矢場ノ澤(一一、五〇)―スキーデポ―矢場(一、三〇)―茂倉岳(三、二〇)―谷川富士(三、四〇)―三、五〇―茂倉岳(四、一〇)―茂倉谷出合(六、三〇)―土樽村(八、二〇)

後 記

茂倉岳登高の次の二日間は風雨激しく土樽村に滞在して英氣を養つた。そして三月三十日蓬澤を溯つて、蓬峠附近の尾根に一泊、次の日は清水峠を経て笠ヶ岳に登る豫定だつたが、天候が思はしくなく、蓬峠より上州に下つて湯檜曾迄行つた。蓬澤は傾斜も緩くスキーの滑走には非常にいい。峠より白樺小屋跡附近迄は雪が飛んでスキーには適さなかつた。越後側も上州側もこの附近は上層雪崩の物凄く大きな跡を見て驚ろいた。これは警戒の必要があると思ふ。湯檜曾川の雪の礫より見た一ノ倉澤の岩壁は未だに忘れる事の出来ないもので春の上高地を想はせるに充分であつた。

(一九三〇、一〇、七)

○谷 川 岳

參照地圖 五萬分一、四萬、湯澤

小林 太刀 夫

清水隧道とそれから一ノ倉澤の岩壁と共にあまりにも有名になつてしまつたのがこの谷川岳である。

上越南線^{カミエチ}上牧驛^{カミカキ}から、或ひは遠く高崎から見える、あの怪異な二ツ耳の岩峯、それを廻る幾つかの岩壁、そこに流れる幾條かの溪流、そして山麓に散在する温泉郷、さうした雰圍氣が確かに一つのまとまつた登山の對象を造り出してゐる。東京に近いといふだけでも、スキーや岩登りのゲレンデとして、充分に發展性を持つてゐる。併し今此處で、谷川岳をめぐる領域が如何に興味深いかと説く事は既に其必要を認めないが故に敢へてしない。この稿に於ては主として積雪期に於ける状態、及び登山に就いて述べて置かう。

積雪期に於ける谷川岳登山の根據地としては、次の三つがあげられる。一、谷川温泉、二、湯檜曾^{トウヒノソ}或ひは土合^{ツキガヒ}、三、土樽^{ツツ}。その何れを根據地としても、割合に容

易に日歸りが出来よう。今、簡単にそのルートを説明して置く。

一、谷川温泉より

先づ谷川温泉よりは大体三つのルートがある。一は天神峠より高倉（一四四八米）へ続く長い尾根、これはホトノ澤奥の平らなゲレンデから右へ入り廣い斜面を電光形に登つて、高倉の主稜の一〇〇米邊の雪庇の切れた處に達するか、或ひは前記のゲレンデへ行く途中から一〇三六米を経て尾根通し行かして、その後は一三四〇米峯の瘦せた尾根を越えて高倉より天神峠に到達し、更に谷川岳へ割合に狭い長い尾根を辿るのである。

このルートはスキーの使用には最も適してゐるが、餘りに長いのが缺點である。私は嘗て二月、谷川温泉金盛館を七時に出て、四時間を費して高倉まで行つたが、谷川岳が尙遙か彼方に見えるので、うんざりして引返した事があつた。一人でもあつたし、雪がべとべとになつた爲でもあつた。併し尾根からの下りは西向で午後まで粉雪が保たれ、斜面の變化も相當あつて

一寸面白かつた。

第二はホトノ澤である。スキー使用は一層困難になる。又多量の降雪後は濕潤新雪雪崩の必ず出る處である。今年の二月、慶應の某君が、ゾムメルシーで天神峠附近迄上つた。登高時間四時間半位との事だつた。又ホトノ澤の奥、瀧の下で左側の夏路の尾根に上る事も出来る。

最後に夏道のある神社裏の尾根であるが、これは三、四月頃の堅雪期に輪標或ひはシユクイクアイゼンを使用して上るのに適當である。下りはゾムメルシーを愉快に享樂出来よう。

以上三つの外に考へれば、谷川本谷を廻行して、桑澤或ひはシツガウ澤より谷川岳へ登攀するのは面白いルートと思ふが、如何にせん谷川本谷は意外に險悪で、また雪量少く、先づスキーの使用は斷念せねばならない。今年三月ヨシノ澤附近迄、スキーを持つて入つて見たが、どうにもならなかつた。

二、湯檜曾川方面より

次は湯檜曾川方面よりのルートに就いてあるがそ

の前に一寸地名に就いて記す。

先づ谷川岳、通稱二ツ耳、その他薬師岳、谷川富士とも云ふ。一八七八米獨標オデガノ澤ノ頭。越後富士の事を谷川富士とも云ふと聞いた。この邊の地名は處により、人により違ふのでどれを正しいとすべきか見當がつかぬ。兎に角湯澤圖幅の一九七四米に谷川富士なる名があるのは全然誤りである。上州では之を芝倉岳と呼び、茂倉岳との間より北東に出る澤を芝倉澤といふ。それから南へ順にユーノ澤(イオノ澤の轉化か)、一ノ倉澤市とも書く)、マチガ澤、西黒澤がある。一七五九米三角點は檜又岳、或ひは武能岳それから東へ武能澤、北へ白樺澤、白樺澤は廣い袈裟丸澤と合して湯檜曾川に入る。

さて根據地は湯檜曾ならば本家カ林屋であるが、私はよく土合の瀬下慶十郎方へ御厄介になる。但し少々騒々しく、又きたないからその覺悟が必要である。

谷川岳のほんとうの姿はこの方面に於て、充分に發揮されてゐる。直下千米の岩壁は夏だと藪がくつついてゐて、穂高の明神岳と似た感じがするが、一度冬となれば、或る時は蒼氷に輝き、或る時は金米糖を附着せしめ素晴らしい景觀を呈する。湯檜曾川沿ひも、夏には路を蔽ふ藪は全く屏息し、スキーで自由に登れ、

歸りには愉快に滑走出來るのである。

この方面から谷川岳へのルートの中、最も容易であり、最も安全であるのは西黒澤である。私は今年（一九三〇年）三月二十日頃これを下降路として通過した。蛇門の瀧の次の瀧は出てゐたが、他は全々埋り、デブリも少く素敵なゲレンデであつた。その後三月末、高師の人達が本家の阿部一美君とこの澤より谷川岳へ登頂した由を聞いた。

西黒澤の順路を示すと、土合の對岸石山のゲレンデから舊道を行き、釣橋を渡り、瀧の左をからんで行くと、左から大きな澤が入る。田尻ノ澤である。これを上つて天神峠を迂廻するののも一つのルートである。更に本谷を行つて夏道の枝澤よりマチガ澤との間の尾根に達するのがその一つ、又左に天神峠の尾根一五二六米邊へも上れる。兎も角西黒澤は、雪崩から安全なる事、優秀なゲレンデのある事、奥壁登攀の容易なることなどにより最も推賞すべきスキールートであると思ふ。

土合から、冬ならばスキーで五十分、春早朝クラストの上ならば三十分で、マチガ澤の合へ着く。マチ

ガ澤は標高九〇〇米邊は雪崩等は想像も出來ない程廣い澤である。休養の一日、此處で廣い斜面に自由にスラロームを畫き、最後に長いシユスフアーレンを一本飛ばして歸つてくるのも適當な腹ごなしになる。

私は今年の一月末から二月にかけて仲間の小泉と共に土合へきて、幾度かマチガ澤を覗き、或ひは寶川笠ヶ岳の南尾根に上つてマチガ澤を觀察した結果、三月二十一日、絶好のコンデイションに恵まれて、單獨でこれより谷川岳に登頂、西黒澤を下つた。マチガ澤の奥壁登攀は可成手強かつた。その紀行は後に書く。

マチガ澤より直接に奥壁を上らないで、西黒澤との間の尾根上一四〇〇米の岩の記號の處へ達して、この尾根を辿れば割合に安全であり、眺望も素晴らしい。

私は三月の或る午後、マチガ澤一〇〇〇米の地點よりシユタイクアイゼンをつけ、サンクラストの急斜面にステツブを切りつゝ岩の處に到達し、日の暮れる迄美しい谷川岳東壁の岩を眺め、思ひ切り大聲で *Ma tea Mai* を歌つてやつた。谷川東面の岩壁を眺めるには最もよい位置であらう。下りには土合の燈火を下に見て尾根通りグリセードで飛ばして歸つたが三十分位しか



仙倉山シツケイ澤

角田吉夫

かゝらなかつた。この尾根は春冬ともスキーの使用は困難であるが、輪標ならば容易に登降出来る。

マチガ澤の出合の先で一寸としたへつりを終へて、湯槍曾川の河原に下り、その後は疎林の間を縫うて行けば直ぐ一ノ倉澤である。雪のない時期ならば狭い澤の中を彼方此方飛びながら、巨岩累々たる間を攀ぢて行くのであるが、春ならば一面の雪である。この澤も入口から高さにして二百米位は何の變哲もないが、その上は相當悪い。先づ舊道の石垣より上、左岸の草付きから猛烈な底雪崩が出て右岸の平らな斜面に迄乗り上げてゐる。本谷の中はセラツクを見る様な凄さで、足を入れる氣は全く起らない。

私は三月末矢張り單獨で舊道の處から左へ入り、マチガ澤との間の尾根一四〇〇米邊迄到達したが、快晴の爲雪のコンディション悪く引返した。この尾根の登攀は夏でも相當困難で、大穴の内山喜代治氏の話によると二ヶ所しか上れる處がないさうである。三月頃ビツケルを振つて此處から谷川岳北耳へ直登する事が出来たら愉快であらう。

次はユーノ澤。一ノ倉澤と並び稱される悪場である

が、入口から舊道邊迄は矢張り甚だ平凡な、いい澤である。私は未だこの奥壁登攀は一度も試みた事がないので、詳しい事は云へない。嘗て或年の六月初旬、芝倉岳より北へ鷹ノ巢岩を下り、ユーノ澤奥の雪溪の上端に達したが、パーティーの準備不足の爲下れなかつたけれども、上るならば割合に容易に上れると思つた。因に鷹の巢岩なる名は芝倉澤内の巨岩の名であるが、今ではユーノ澤、芝倉澤間の一見級の八ツ峯の様な風貌の岩尾根の事をかう云つてゐる。今年三月末、高師の人達と一美君とが、このルートより芝倉岳に登つた由。案外簡単に上れたらしい。

最後に芝倉澤。舊道附近迄は例によつてよく、スキーも充分使用出来るが、それより上はデブリの餘りに多いのに一驚を吃する。この方面では、この澤の雪崩が一番凄いといふ。板狀、塊狀の雪崩が澤一面に廣がつてゐる。舊道から下は左岸から二本出てゐたゞだけだが、上は何處からでも出るらしい。今年の三月、霧の深い日、一三〇〇米位迄上つたが、薄氣味が悪くて引返してしまつた。嘗て六月には、ユーノ澤に下れず、左へからみつゝ芝倉澤一〇〇〇米の處へ下り、以後殆

ど雪溪のみを歩いて、湯檜曾川畔の徑へ出た。

芝倉澤と別れて更に湯檜曾川を廻る。少しばかりへつりがあつて、間もなく澤は左へ迂廻する。二月であつたが、この邊から斷然新雪が深くなつて、ラツセルの苦痛を感じる様になつた。その代り澤は殆ど埋つて一面の雪原であつた。武能跡の附近には、魚止ノ瀧があり、右岸をからまねばならない。からんで澤へ出ると、兩岸の様子は俄然一變して狭い急な斜面となり、デブリの山を幾つとなく上下せねばならなかつた。やがて左に袈裟丸澤が入る。此處迄一時間位かゝる。この先は一層悪く、淵や瀧が出てゐるのには驚かされた。實はこの時は大倉澤より笠ヶ岳へ上る積であつたが、時間の不足で引返さねばならなかつた。兎も角此處は表層雪崩が必ず出る處であるから注意を要する。私達（同行小泉）も歸りに、私達が通つたスキ一のシユブールの上に二ヶ所も雪崩が出てゐたのには驚かされた。

三、土樽方面より

この方面からは根據地が餘り遠いので不便である。當分の間ならば、隧道口の合宿にでも泊めてもらへば

近くて大いに助かる。順路は茂倉谷の矢場ノ澤を上りそれから茂倉岳、芝倉岳の尾根を辿るのである。又萬太郎谷を廻行するもよからうが、スキーは放棄せねばなるまい。毛度澤から萬太郎山を越え、谷川岳、茂倉岳を行くにしても面白いであらう。四月なら一日で強行出来ようが、途中一回野營でもやつたら素敵であらう。私はこの方面に就いては未だ餘りに知る處が少い故、此處に省略して置きたい。この方面に就いては「山想」三號所載「春の上越國境」に詳しい。

次に二三紀行を書いてこの稿を終へよう。

四、或る輪樑行

小泉と二人で、大倉澤から笠ヶ岳へ登らうと思つたが、雪が少くないのと、澤が悪いので追ひ歸へされてしまつたので、最後の手段として、東黒澤出合の北の標高數字の尾根を登る事にした。

そして二月一日に土合を十一時頃出發して、東黒澤の橋を渡り、輪樑をつけた。手にはピツケル一本。昨日午後少し晴れたせい、南向きのこの尾根は幾分クラストしてゐて、非常に樂に歩けた。一二〇〇米邊迄

は縦や梅に灌木を交へた狭い尾根で、その後一四八〇米迄は、大體同じやうな所であつたが、間もなくいくらか幅の廣い、藪のない尾根になつてゐる。二時頃一四八〇米迄上つて引返した。下りは四十分位だつたらう。この日は終日小雪で碌々目的の谷川岳東壁の觀察も出來ず、單に道踏みに終つてしまつた。

そして翌二日、雪は小止みもない。私は昨夜の隧道見物で疲れてしまつたが、小泉が元氣いつばいなのにひつばられて出發する(八時)。新雪既に五寸、昨日の輪跡も大部分埋つてゐる。小泉の頑張り方物凄く、昨日の所迄二時間餘で來てしまつた。狭い雪稜を少し辿つて、愈々白ヶ門(一七五〇米)の上りにかゝる下の所で一先づ待つ事にした。東側の白ヶ門澤から吹き上げる吹雪に恐れをなして、ピツケルで雪を掻き、一坪位の穴を掘つて入る、いざ穴の中へ這入つてしまふと何だか急に落着いてくる。悠々とコツヘルで紅茶を沸し黒パンを嚼つた。このまゝ此處で露營したい様な氣にもなる。今迄の天氣具合によると、夕方一時晴れるので、それを此處で待つて登頂しようといふのだ。吹雪の中で可成長い間、白い影を見てゐる様に思つた。

「おい、明るくなつてきたぞ」「よし、行かう」
愕然として夢から目覺めた様に飛び起きた。頭上が急に黄色くなつたかと思ふと、直ぐ青くなり、又黄色くなつた。雲足が早い。

出發したのは未だ十二時半頃だつた。岩場を二三ヶ所上り、廣い雪面をデクザクに上る。白ヶ門頂上一時半。西北に向つて粉雪を蹴立て、驅下る。正面の大倉(一八五二米)、寶川ウツボキ澤の源流、何れも素晴らしいスロープをなしてゐる。春の立山の様な白さにすつかり眩惑される。足下から舞上る粉雪の煙。何故スキーを持つて來なかつたんだ。雪庇もない幅廣い尾根の滑降。クリスチャニヤでのテンポフォーレン。

振り返つて見れば、スラロームを二つ合はせた様な八字の連續、輪標の痕なんだ。幻滅。

大倉の上りの途中で私は腰を下ろしてしまつた。靜かな氣分を味ひたかつたからだ。上を上げば小泉は尙圓い輪型を一つ一つ残して登つて行く。三十分餘りして歸つてきた。大倉の頂迄行つてきた由。既に四時になるので一寸休んで、再び長い尾根を一路歸途についた。

五、マチガ澤より谷川岳へ

今年はこの方面は三月の中旬に可成降雨があり、その後十九日に小雪、二十日からは急に寒くなつて、所謂シミがきて、山々の雪が非常によく緊つた。その上今日(二十一日)は谷川一帯一二〇〇米位から上は全く霧がかゝつて、簡單には晴れさうもない。雪崩の領域に入るにはそれこそ理想的のコンディションであつた。身體の調子も頗るいい。何しろ燕のスキー合宿、三國川と既に東京を離れて半月になる。

土合を出たのが八時、三十分にしてマチガ澤に入る。此處で直ちにシュタイクアイゼンをつけた。一米五〇程の短いスキーは脊負つて行く。廣い澤の中をヂクザクにゆつくりした足取りで登る。サツク、サツクとアイゼンの爪が心地よくさゝる。たまらない感觸。

スキー的なスロープが一時間も続く。この間は北の一、二二三米獨標から三條のデブリを押し出してゐるだけであつた。九百米邊から急に傾斜を増し、澤が右へ曲る邊からは一面のデブリであつた。願れば大倉の尖峯が素敵に立派に見える。西黒澤との間の尾根は幻の樣

に霞んでゐる。左岸に岩がある處でスキーを雪の中に押込んで置く(九時三〇分)。

愈々右に折れる。不安定なデブリの上を恐る恐る踏んで上る。處々なでた跡が氷の様になつてゐる。非常な傾斜だ。四十五度位。ステツプを切る勞を省く爲、ピツケルを打込みながら一步一步足を高めて行く。右側の八峯の第五峯の様な岩場の下の一枚岩の上はラウイーネンツークとなつて、鏡面の如く光つてゐる。

アラインゲーエンの危険も何もかも打忘れて、只頂へ頂へと登攀を續けた。やがて本谷は一層傾斜が増したので、右の尾根に上らうと思つて、右に向つてステツプを切り始めた。二つ、三つ、カツ、カツといふ響きが奈落の底に消えた。十、二十、俄然一枚岩に行當つた。フェルグラスが附着してゐる。こんな筈ではなかつたがと思つても最早仕方がない。そこでピツケルで確保しながら、又一步一步下りなければならなかつた。かういふ場合、焦燥が一番禁物である。冷靜に、冷靜に。間もなく前の處迄戻つた。

本谷に數十のステツプを刻んで上る。太陽の熱が深い霧を通して感ぜられる。雪も幾分ゆるんできた。足

下の雪面は總べて雪崩の通過した痕である。雪崩の脅威を思ふとき、不知不識ピツケルを振ふ手に力が入る。益々霧が深くなつてきた。足下しか見えぬ。ピツケルの一撃と共に數個の雪板がさら〜といふ音を残して消えてしまふ。打つ手を休めれば、心臓の鼓動のみ高い。

遂に最後の雪壁、垂直に近い。ステツプを丹念に刻んだ、全く彫刻家の忍耐力を以て。

尾根に這ひ上つた。マチガ澤、西黒澤間の尾根の北側の極く小さい側稜である。時に十一時半、僅か三時間であつたが、殆ど無休の登高だつた。

尾根をすこし行けば、直ぐ主稜の東側の雪庇の下に出る。雪庇を破つて上に立てば俄然風が強い。三月とは云へ、スキー帽を深く下ろし、厚い手袋をしなければならなかつた。シュタイクアイゼンの爪痕を亂さない様に注意しながら、樂な尾根を頂へと辿る。左の方から二三人の靴跡が上つてきてゐるのを發見した。谷川温泉から上つたのだ。もう全く氣樂になつてしまつた。

頂上に着いたのは十二時、直ちに靴跡通り下る。ア

イゼンをはづして、グリセードで飛ばした。凄いスピード。時々左へ斜滑降して僅か二十分で一五二五米迄來てしまふ。マチガ澤を再び下る氣は毫も起らないので、西黒澤を下る事にしたのだ。此處はもう全く霧の世界から脱してゐた。

久しぶりで満たされた心を抱いて、一氣にグリセードで西黒へと下つて行つた。後一時間半もあれば、歩いて土合へ歸り着く事が出来るのだ。

六、萬太郎谷溯行

私は澤歩きが好きだ。そして私のは岩魚なんか居ようが居まいが、たゞ澤の靜かな氣分を味はふ事が出来ればそれで満足するのである。

今年の夏、暫く越後の湯澤温泉に遊んで居たが、その歸りに永年の宿望であつた萬太郎谷を溯つてみる事にしたのだ。

八月十七日、十二時二十五分の輕便で湯澤を立つ。湯澤ホテルの主人村島勝彦が私のルツクザツクを脊にして見送つて呉れた。

輕便でゆられて一時過ぎに隧道口につく。湯澤圖幅

の土樽より逢峠へ行く途中の五八五米と書いてある附近である。暫く薄の繁茂した路を行き、萬太郎谷合の對岸で、藪をくゞつて河原へ下りた（一時四十分）。いよいよ萬太郎谷に入る。

強い日光が正面から照りつけるが、流石に澤の中では大して暑くも感じない、かへつて爽かな気分になる。脊のルツクザツクは僅々一貫五百匁、夫でも一晚や二晩露營する準備はある。湯澤を晝頃出たのも今夜澤の中で露營してみたかつたからだ。

暫くは萬太郎谷も非常に樂だ。片側づゝ廣い平な藪があり、澤の中も自由に膝位の徒渉をして進める。丸いぬる／＼の石が多い。これが一時間も續くと、急に澤が狭くなり、忽ちにして釜になつて通れなくなるので左岸を絡む。その後は澤の中は全く美しい一枚岩となり、流れはその一枚岩の上に樋を通し、釜を穿ち、瀧を懸けてゐる。先づその美しさに驚ろく。主に左岸をへつたり、からんだりする。又ベージュメントのやうに歩ける處もある。

瀧、釜、瀧、釜、之が萬太郎谷である。四十八瀧といふだけに流石に瀧が多い。澤の中にはへつれない釜

が随分澤山あり、いち／＼陣竹の藪の中をからまねばならぬ。

三時二十分、二三段の瀧がありその釜が通れないので左岸を高廻りする。三時四十分、右岸より澤が入る、茂倉の矢場からくる澤だ。四時、左岸をからみ、四時二十分障子ノ澤が狭い樋の中から躍り込む。

五時頃だつた。右岸は大きな一枚岩の平をなし、澤は其處で二丈程の瀧をなしてゐる。岩の床の上で露營する事にした。草を刈つて敷き、流木を集めて焚火する。一人旅の氣樂さ。對岸は見上ぐるばかり高い赭岩の絶壁、頭上のみしか見えぬ空は眞蒼、時々切れた雲が矢の様に飛んで行く。風があるらしい。併し此處では瀧の音のみどう／＼と響いてゐる。

飯も炊け、味噌汁も出來た頃は、もう星が輝いてゐた。

翌朝眼覺めて袋から這ひ出すと薄寒い。仰げば雲足が早い。すが／＼しい氣分。食事を終へ、楽しい一夜を過さして呉れたこの露營地に感謝しつつ草鞋の紐をしめて出發する（七時）。

七時五十分、左澤。本澤は大きく右へ迂廻する。直

ぐ行きつまる。二ノ瀧である。何丈位あるだらうか、一寸見當がつかない。引返して右手の尾根を一つ越す。四十分かゝつた。

暫く樂な河原を行くと左から本澤と同じ位の澤が入る。茂倉と芝倉の間から来る澤、岩倉も仲々立派だ。右へ行くと間もなく瀧がある、これは右手が直ぐ上れる。

九時四十分、本澤は左手の一枚岩の上に高い瀧となつて落ちてくる。三ノ瀧だ。右を見ても、左を見ても高い絶壁ばかり、何處をからんで良いか見當がつかぬ。思ひ切つて右に離れたガレにピツケルで足場を切りつ上つた。不安定なガレから藪へ入つたらほつとした、そのまゝ太い石楠花に惱まされつゝ小尾根を三つ越した。

本澤へ下りた。最早全く悪場はない。足が水に入るのを享樂しながら巨岩の間を攀ちて行く。谷川岳の頂から白く輝いて見える河原はこの邊である。水量が急に減じ、十一時愈最後の水、此處で晝食をとつた。自分の位置が俄かに高くなつてゐるのに驚いた。芝倉、茂倉が並んで美しく見える。越後富士の鋸狀の峯の向ふ

に萬太郎山が立派に聳え、長い尾根を右下に派してゐるのが見える。

十一時半出發、暫く岩のガレた所を歩き、間もなく右手の芝原の斜面を上る。美しいピロードだ。こんな處を一時間もぶらぶらあたりを眺めながら上つてゆくと、例の谷川岳頂下の指導標のある處へ出てしまつた(十二時半)。

呑氣な旅だつた。藥師様のところで散々晝寝して、西黒澤を下つて行つた。

○北九州の山とところどころ その一

竹 内 亮

前 が き

こゝで北九州と云ふのは筆者の便宜上の區劃で、山國川、筑後川及び肥前の鹽田川及び杵島川を連絡する線から北の區域と云ふことにして置く。

この區域は主に筑紫山系に屬する諸山脈の連亘する處であつて、それに屬する山々はいづれも丘陵性で最高峯の脊振山でも僅かに一〇五五米に過ぎない。又こ

の區域の南東隅には英彦山火山があつて幾分大きな起伏を見せて居るけれども猶その最高點は一一九・五米に達するに過ぎない。

従つてこの方面の山々は從來餘り登山者の注意をひかず、纏つた文献としては先づ第一に日本山嶽誌をあげねばならぬが主要記事が簡潔にすぎ又補訂を要する部分もあつて現今では可成遺憾な點が少くない。最近(昭和三年)加藤、岩崎兩氏の九州山岳案内が出版せられたがその中には多少この方面の山々の紹介がある。

個々の山に關する斷片的の記事は英彦山に關するもの最も多く、本誌上にも相當紹介されて居るが、その他の山々に就いては眞に寥々たるものである。

筆者は福岡市に居住する關係から北部九州の山々を登る機会が多いので今この標題の下に差當り別に系統を立てずポツポツ諸山の紹介を試みる事にする。

一、九千部山

汽車が鹿兒島本線の鳥栖驛附近を過ぎる時西側の窓近く根張りの大きな極く緩やかな輪廓の山が聳ゆるのに氣づくであらう。それが九千部山から石谷山への峯

續きである。九千部山は脊振山塊の東端附近にある高さ八四七・五米の山で筑前續風土記によると昔性空上人法華經一萬部を讀誦せんとし九千部を讀み了つた時にこの山上に記念の石塔を建立したるよりこの山名があるといふことである。山は南方石谷山(七五四・四米)に續きその西に七曲峠(五〇二米)及び坂本峠(四三〇米)の鞍部を挟んで脊振山と對して居る。九千部山は五萬分の一地形圖「脊振」圖幅でも明かである様に方々から登ることが出来るが、筆者はかつて晩秋の一日田代驛から下車、河内などの部落を経て山の北東側から尾根傳ひに頂上を極め、南側に下つて大谷を経て鳥栖に出た事がある。

登路は河内をはなれて約六五〇米の等高線附近迄は岐路が多く大分無駄骨を折らされたがそれから先は明かな尾根傳ひで苦もなく頂上に出ることが出来た。頂上附近は小笹の密生した云はゞ高原性の地勢で淺い起伏があり最高點が何處にあるか一寸分り兼ねる様な状態で三角點の石標を見出してこの邊が最高點かと思ふ處に行きあたる迄には大分歩き廻らねばならなかつた。三角點から少し南よりの低地に、南に向つて小さ

い石祠がありその邊から筑後平野が筑後川の大ネアンダーを見せて廣々と展開し、鳥栖、久留米の市街地も眼下に見下ろされる。北西には脊振山が眼近く聳え、北方には遠く玄海の碧波が霞んで居た。

頂上から南に少し下つた處にはアカガシを主とした樹林があり木蔭には斑葉の美しいカンアフィが多く生えて居た。大谷には小瀑布があつて傍に御堂があり御籠りの男女も二三見えて居た。山中處々に花崗岩の靡爛による純白の土崩地が多く異様の景趣を添へて居る。聞くところによると山中處々にエヒメアヤメを生じ晩春には可憐な碧花を見ることが出来るといふことである。

二、脊 振 山

脊振山については本誌上ですでに八代準氏が紹介されて居るが、この山は筑紫山系中の最高峰で海拔一〇五五米を算し福岡方面から見ると山容甚だ秀麗である。往古は寶滿、英彦等と共に北部九州に於ける修驗道の靈場で脊振千坊と稱せられ堂坊大いに榮えたものであると云ふが、今は南麓久保山からの美事な登山路

や、山頂の壯麗な石祠、玉垣等に僅にそのおもかげを留むるにすぎない。

石祠は宗像三女神を祀り俗に辨財天と稱せられ遠近よりの賽者が断えない。僧榮西が宋より歸りて初めて茶を植えたのはこの山中であると傳へられるけれども今その遺蹟をたづねべくもない。

福岡方面からこの山に登るには略二つの道がある。一は福岡の西端今川橋から乗合で約二十分脇山村に到り椎葉、荒谷等を経て爪先上りの山路にかゝり板屋へこす脊振主峯の北部の鞍部に辿りつき、指導標のまゝに右の尾根路を登れば約四十分で容易に主峯の頂上に達することが出来る。今一つは福岡の住吉神社前からバスに投じて約三十分で那珂川上流山田に到り南面里を経て板屋に通ずる山路を登り、途中右に分れて前記荒谷からの登山口に出るか、板屋迄行つて登ることも出来る。板屋からの登路は前者に比し峻険であるが水の豊かな谷から密林の尾根にと移り行き可成變化があつて面白い。それで福岡方面からの登山であれば脇山、荒谷から最初に記した路をとり板屋に下るのが最も理想的なコースである。板屋からは那珂川の上流で俗に

筑紫耶馬溪の稱がある九千部山西麓の峽流に沿へる道を通つて山田に出ることもよく、又七曲峠を経て長崎線中原驛に出るものもいゝ思ひつきである。

久留米方面からは中原驛より板屋に出るか或ひは南麓の久保山に出て登ることが出来る。九州山岳案内によると山頂から尾根傳ひに西方の鬼ヶ鼻の東部にある椎葉峠に出る林道がある由を記してあるが筆者は未だ踏査して居ない。

山頂は樹木なく小笹が美しく密生し眺望甚だ雄大である。いづれの登路によるも福岡より裕々日歸りが出来る。

山頂より少しく下つた處に廣く分布するブナを主とする密林や、山麓より山腹にかけて多い秋草の花美しい草原、山頂附近のミヤコザ、の大群落などそれ／＼に面白く又春のコバノミツバツ、ジの咲く美しさは捨てがたい。

三、鬼ヶ鼻岩と獵師岩山

福岡から望むと脊振山の西に山頂の輪廓の角々した鬼ヶ鼻岩と獵師岩山とはその西に續く金山の雄偉な山

容と共に著しく目立つて居る。鬼ヶ鼻岩は椎葉峠（七五七米）の北西に近く奇岩の高く聳立する一角を云ふので高さ八九〇米に近い。岩角にはツクシシヤクナゲ（福岡附近ではシヤクナンゾウと云ふ）が多生し、五月上旬の開花時には甚だ美觀を呈する。これから西、小爪峠（約八〇〇餘米）に至る間は獵師岩山（八九三・四米）であるが前記鬼ヶ鼻岩とは別に明かな境があるわけではない。

筆者はかつて會員池田君外一人の同志と共に五月上旬石楠の花美しい頃椎葉峠から鬼ヶ鼻岩、獵師岩山を経て小爪峠へ縦走したことがある。椎葉峠の頂上から鬼ヶ鼻岩の直下迄は平凡な山稜で細徑もあるが、鬼ヶ鼻岩にかゝると細徑も斷えて狭い岩稜には石楠の密叢が初まりその間々にはタラノキやキイチゴ等のトゲの多い灌木が多く通過には可成骨が折れる。この石楠の密叢は獵師岩山にかゝると一層厚くなりその狭い山稜の足場は悪く小爪峠の少しく手前迄は大分苦しまねばならぬ。

椎葉峠も小爪峠も福岡縣脇山から佐賀縣に越す小徑を通じて居るが清瀨なる溪流沿ひの路は可成峻嶮であ

る。溪流には脇山村名産のワサビが多く、樹蔭にはエゾスミレが多い。福岡からは今川橋から脇山へのパスがある。

四、金山

小爪峠の西には直ちに金山が続いて九〇〇米以上の尾根が約二軒に亘つて居り、最高點は西に偏して九六七・二米に達して居る。最高點は一名熊ヶ城と稱し舊藩時代には佐賀侯の城塞があつた處であると聞いた。

金山の北側は地形複雑且峻峻で頂上への登路なく筆者はこの側から頂を極めんとして三回の失敗をして漸く四回目に頂上に立つことが出来たといふ眞に思ひ出の多い山である。これに反して南側は傾斜も緩かで山麓の三ツ瀬から立派な登路がつけられて居る。概して脊振山塊の北縁は北側に急斜面を向け比高も大であるが南側は高原性で緩斜であり比高も小である。

昨年五月ソアザミの花咲く頃福岡の今川橋からバスで約三十分石釜終點で下車して縣道を少しく上り左の細徑に入つてしばらく登つて花亂瀧に達した。瀧は直下約三〇米水量は豊富で中々美事である。向つて右上

雜錄 ○北九州の山とところどころ

の小徑に出て溪流沿ひの山路を登つた。この路は曲淵又は石釜から佐賀縣へ通する間道で安後坂峠と呼ばれるものである。暫らく行くと左から一支流が注いでその支流の奥へ通ずる岐路があつたのでそれをとつて行く事にした。路は高さ約六〇〇米から甚しく峻峻となり露岩多く岩角を渡つて登る。二三軒の炭焼小屋を後にして細徑は尾根にかゝり又浅い谷に入つて又炭焼小屋に出たがその邊で路も断えて居た。この邊一帶は處々廣い面積に森林が伐採せられ盛んに製炭が行はれて居た。その日はこの邊から上はひどい霧で主峯の見當もつきかねたが炭焼夫に教はりながら小枝一つ残さず綺麗に片づけられた伐木跡の斜面を登り約廿分をやつと尾根に出で、西に間近く主峯を雨を含んだ濃霧の斷間に望んだ。途断えがちの測量の切りあけを辿つて約廿分許りで頂上に出た。頂上は東西に長い僅か許りの平地で可成人工が加へてあり何か建物でもあつた様な痕跡地も見られた。霧が深いので眺望は全く駄目だったが下で炭焼夫に聞いたのでは非常に遠く迄見えて壯快であるとのことであつた。下りは三瀬からの登路を約十分許り下り左の岐路に入つて約七〇〇米附近の等

高線を横に切つて居る路を大きく廻つて小爪峠に出て
脇山方面へ下つた。

金山の北側は前にも記した様に地形甚だ複雑である
が前回の踏査によつてこの山の北側は地形が略二段に
なつて居り、主峯の山稜より北東に約一軒を距て、約
八〇〇米の前山があり、その間は平均高度七〇〇餘米
の臺地で比較的浅い谷が東及び西より出で一つになつ
て前山の一角を破り急湍となつて北流し大小無數の瀑
布をかけて居るが最後に坊主ヶ瀧となつて山麓臺地に
開いて居る。坊主ヶ瀧は高さ前記の花亂瀧と伯仲する
が四邊の景觀は一層豪壯である。坊主ヶ瀧の西上に細
徑が通じて前記の高原の谷に入ることが出来るが迷路
が多い。

五、三瀬峠

金山の西には八四九米の一峯があつてその北西の鞍
部に三瀬峠が通じて居る。三瀬峠は福岡から水道水源
地のある室見川上流を経て佐賀縣三瀬に通ずる縣道の
ある處で立派な車道が開けて居る。頂上は五三八米。
一帯に高原性の地形をなし見すばらしい茶屋が向ひあ

つて二軒ある。車道を歩くのは可成屈だが溪流沿ひ
の歩道をとればズツト距離と時間の節約が出来る。福
岡からのバスは石釜迄で留つて居る。

六、井原山及び雷山

三瀬峠の西約三軒に井原山がある、九八三米。それ
より西、雷山(九五五・四米)に至る直径約二・五軒の間
は約九〇〇米以上の高度を保ち九六〇米内外の峯四つ
五つを數へることが出来、福岡方面から遠望すると金
山の西にあつて山勢甚だ豪壯な一區をなして居る。

雷山は古來の名山であり又中世以後は一時修験道の
靈場として知られた處である。従つて山中處々に由緒
ある遺蹟が多い。筑前續風土記によれば雷山なる山名
は往古山頂に水火雷電の神を祀つたのによると云ふが
吾國上代人の素朴な自然崇拜、山岳崇拜のおもかけが
うかゞはれる。

井原山へはかつて初冬の頃會員池田君と登つて更に
雷山迄縦走し雷山村に下つて前原に出たことがある。
石釜でバスをすて、縣道を約三軒室見川沿ひに上り
右の間道に入つて急斜面を登ると峽谷の左岸の下腹を

細徑が通じ、深谷を見下ろしながら約二軒ばかりで地勢一變して路は廣い谷間の高原地に導かれる。清流はゆるやかに流れ遠く井原山の一角が望まれる。更に約二軒で井原山麓の水無に達する。井原山の一角から北東に亘り帯狀の石灰岩地があつて水無附近には小さな鐘乳洞も近時發見されたがドリーネの如き地形の發達はない。水無なる地名の由來については一の傳説がある。それは昔老婆が溪流で大根を洗つて居た時にそこに通り合せて弘法大師がその大根を一本所望したのをすげなく斷つたためそれ以來その川の水は涸れて村では非常な難儀をし水無と稱するに至つたがやがて一部落こぞつて下流へ移轉するに至り、猶水無と稱して居るといふことである。これは月並の傳説の形をとつて居るがこゝが石灰岩地であることから當然流水が涸渴したといふ様な現象はあり得べきことで大變面白い説話だと思ふ。水無に水が涸れたのは全く一場の昔話で今では谷の上流迄どこでも豊かな水が流れて居る。部落を離れて溪流づたひに約四軒登りつめれば井原山の頂に出る。頂には樹林がなく短かい笹許りであるが南向きに白い土崩地があつてこの頂は花崗岩であること

を示して居る。この頂から東へ金山、脊振山を望む景色は大變美事である。ここから路はないが西に雷山迄笹やすゝきを分けて縦走することが出来る。元來雷山へは普通北麓の雷山村から登るので可成立派な路が出来て居る。初め草原の斜面を登りやがて密林に入り岩角をよぢてしばらく登ると小笹原の平凡な頂上に出る。しかし頂上の眺望は甚だ闊大で特に北方直下に玄海の碧波を望むあたりは實に美しい。

雷山、井原山一帯も金山附近と同様北側は急峻で森林が深い南側は非常に緩かで笹原やすゝき原が廣く六〇〇餘米の高原地に及んで居る。

井原山、雷山一帯には植物の種類が多くいろいろ珍らしいものがある。水無の谷にはオホメシダ、ヒロハノヤブソテツ、カラクサシダ、クモノスシダ、イチリンサウ、ナガハスミレサイシン、ツクシトリカブト等が多く雷山頂上附近にはマツムシサウが多いがこれは北九州では比較的稀な種類であつて分布上注意すべきものである。

七、獅子舞岳

雷山の西方は急に低くなつて山頂から一氣に約二〇〇米急下して小臺地をなし、更に西するに従つて地形は高原状となり高さも漸次減じて六〇〇米以下となりその間には福岡縣原島郡から佐賀縣に通ずる縣道が五六八米の峠をこえて通じ自働車も運轉されて居る。峠から南西約三軒には獅子舞岳(九〇〇米)の饅頭を置いた様な山に續いて居る。五萬分の地形圖濱崎圖幅には羽金山と記し少し北によつた處に獅子舞岳としてあるが、日本山嶽誌にも引用してある様に羽金山(破金山)は肥前方面での名で同じ山を筑前側では獅子舞岳と稱するのである。

筆者は一度雷山から尾根傳ひに獅子舞岳に登つたが愈々主峯にかゝる迄は一帶の草原であるが、主峯はアカマツとヒノキの造林地となり、尾根傳ひの防火線を通つて容易に頂上に達することが出來た。雷山頂からは約二時間を要する。

山頂は平坦で南にかたよつて三角點の石標があるが防火線地帯の草原を除いては全部アカマツの若い林で被はれ眺望は餘りよくない。筆者は下りには別な路をとり尾根傳ひの防火線を北西約二軒にある七四八米の

峠に出で、夜道を前原に出た。この時途中白糸瀧を見た。瀧は獅子舞岳の北側海拔約五五〇米の高處にあり高さ三五米、巾九米の大瀑布で四邊は老樹鬱蒼として繁茂し、甚だ幽邃な仙境をなしてゐた。

八、女岳、浮岳山

獅子舞岳の西は五〇〇乃至七〇〇米未滿の臺狀地で著しい隆起がないが、獅子舞岳の頂上から約五・五軒に女岳(七四九米)の尖峯があり、更にそれから西に約二軒で浮岳山(八〇五・二米)の著しい隆起がある。

かつて秋晴の一日福岡から唐津に通ずる北九州線の福吉驛で汽車を下りてすぐ南に迫る丘の小徑を辿り、約二時間で縣界の尾根で浮岳山の東部の女岳との鞍部に出て更に急斜の細徑をヒタ登りに登つて浮岳山の山頂に達した。山頂は東西に長く一帯に樹木が茂つて居り西の一角に浮岳神社の社殿がある。しかし普通の浮岳山の登路は福吉驛から縣道を少しく西に行き左に分れて中村より久安寺を経て登るのである。この方面は登路も廣く傾斜も比較的緩かであるさうだが未だ踏査して居ない。

浮岳山に登つたついでにその東にある女岳へも登つた。浮岳山の頂上から更に登路を戻り、東に縣界の尾根を通ずる防火線づたひに少しく行き、直ちに女岳へかゝる。急峻な尾根を約二十分も登ると頂上であつた。頂上は僅かに草原があるが一帶に赤松の造林地である。頂上から臨むと北東に方り深江山(七一・四米)の双頭峯が間近く聳えるのが目立つて居た。

女岳の頂から東に高さ六〇〇米内外の臺狀地を尾根の防火線傳ひに一貴山越(五六六米)に出るのは極めて容易な路である。

九、脊振山塊の北縁部の縦走

以上で脊振山塊の北縁をなす著しい山々は二三の未踏査のものを除いて全部の記述を終つた。筆者はかつて福岡附近から南にこれ等の山つゞきを望み全部の縦走と云ふことがすぐ頭に浮んでこの數年間に亘つて部分的にその線を歩き最後にそれ等を連ねて見たいと思つた。前項迄の記述は結局さう云ふ豫定の下に登られた山々である。八代氏も脊振山の項でこの縦走の出来ることについて人からの聞き書きをされ又九州山岳案内

には「縦走が出来ないこともない」と一言書きをへてある。筆者の實地踏査を綜合するとやはりその結論は「縦走が出来ないこともない」の一語に歸する。今これを具體的に云ふと九千部山より脊振山を経て椎葉峠に至る間は尾根傳ひに路があるが、鬼ヶ鼻岩から獵師岩山、小爪峠及び金山、安后坂峠迄は尾根には殆んど路がなく處々に厚い叢林があつて通過に困難な處がある。

安后坂峠から三瀬峠を経て井原山迄は小徑があるが井原山から雷山迄は又路がなくなつて笹やすゝきにひどくいぢめられる。雷山から西は浮岳山迄殆んど連絡した廣い幅の防火線が縣界の尾根を通じてゐるので問題はない。浮岳山から西の方は未踏査であるが高度も低く地勢も高臺狀なので大きな困難はない。筆者の見込ではこの線の縦走は略三日半を要するものと思はれる。即ち九千部山より脊振山頂迄が一日、脊振山頂から三瀬峠迄が一日、三瀬峠から浮岳山迄が一日、浮岳山から十坊山トシノボを経て海岸に下るのに半日の見込であるが第二日は可成骨の折れることを覺悟せねばならぬ。

十、寶満山

寶滿山は一に竈門山或は御笠山と稱せられ所謂三郡山塊の南端をなし福岡の南東約一六軒にある名山で高さ八〇〇餘米全山花崗岩より成り山勢甚だ雄峻である。山頂の巨岩の上には神武天皇の御生母にわたらせらるゝ玉依姫を祭祀し奉る竈門神社上宮がある。福岡附近の風俗として婦年頃となれば必ず一度この山に登つて良縁を祈願することになつて居る。頂上から尾根づたひに北東へ直徑約〇・五軒に佛頂山一名元寶滿がある。高さ八六八・七米で寶滿山頂より少しく高い。これより更に北方三郡山(九三六・六米)、砥石山(八二六米)シヨークケ越(五〇五米)を経て若杉山(六七八米)へ縦走することが出来る。

寶滿山への登路は太宰府からするのを表口とする。太宰府へは福岡から電車が通じ交通甚だ便利である。太宰府からは約三軒で南西麓の内山へ到り竈門神社下宮を経て暫らく山麓の臺地を行き一の鳥居から急峻な坂路となる。休堂跡を経てしばらくすると中宮趾に出る。休堂跡には徳弘の井と稱する清水が湧出し登山路の渴を癒して居たが昨年登つた時にはそこに休み茶屋が出来て自由に飲むことが出来なくなつて居た。筆者

は竈門神社關係の人々がこの休み茶屋を許した輕舉について悲しむものである。中宮趾から岩角を踏んで間もなく頂上上宮に達する。上宮には上宮社務所があつて一人の老人が番をして居て登山者の便をはかつて居る。社務所の背後には物見岩と稱する處があつて絶壁の上からの眺望がよい。上宮から物見岩の下に出で山頂の西側を迂廻する羅漢道と云ふのがあるが絶壁の下青苔を被へる岩角をふんで中宮趾に出るもので寶滿山中最も興味ある處である。

寶滿山の登路はこの外に西麓の北谷口、南麓の大石口、東麓の油須原口等があり、又内山から一旦愛嶽山に登り更に寶滿山へ登ることも出来る。愛嶽山は寶滿山の南に續く高さ四三一米の丘陵で山頂に軻遇大神を祀る愛嶽神社があり農事の神として遠近の信仰を集めて居る。

佛頂山へは寶滿山頂から尾根づたひにモミの原生林を通過して行くことが出来る。山頂は廣い草原で眺望がよい。

十一、若杉山

寶満山の北約七軒に若杉山がある。高さ六七八米全山老杉の密林に蔽はれ山容甚だ森嚴である。若杉山と稱するは神功皇后三韓征伐に御出陣の前山上に御祈願あらせられ御凱旋の時香椎神宮の綾杉の板を分ちて山上に挿し給へるにより分杉と云ひ後世これを若杉とな

まりて山名とするに至つたものであると云ふ。山頂には伊弉諾尊を祀る太祖神社があり又弘法大神の遺跡と傳ふる奥の院が危岩の下にあるなどで、山麓篠栗を中心として散在する新四國八十八ヶ所を巡拜する人々の參詣が多い。山腹西側の若杉樂園及び北側の荒田は海拔約四〇〇米に位しやゝ完備せる旅館があつて避暑地として近時注目されて來た。

若杉山へ登るには普通福岡の吉塚驛から篠栗線に乗つて終點の篠栗に下車し西麓の横岩を経て若杉樂園に至り更に老杉下の路を登れば約二時間で頂上に達する。降りは北側の荒田を経て篠栗に出るのも面白い。近年登路大いに改修せられ若杉樂園及び荒田には自動車を通ずることが出来る様になつて家族づれの遊山地としても甚だ好適である。

山中は植物の種類に富み特に羊齒や蘭の奇品が多く

特に晩春エビネの花咲く頃はその花色、花形の變化が多いのに一驚を喫する。

十二、若杉山より寶満山への縦走

(砥石山及び三郡山)

寶満山より若杉山への尾根續きは小さいながら一つのもとまつた山塊を形成し福岡を起點として一日往復し得る縦走路として地形や植物の變化も多く最も興味あるものである。従つて最近はこの縦走を行ふことが流行するがその多くは若杉山より登つて寶満山に至り、太宰府に下つて電車で福岡に歸る行程に依つて居る。筆者は一度寶満山より若杉山へ縦走し又一度若杉山より寶満山へ縦走したが後者による方が疲労も少なく且つ交通機關利用の點で前者に比して一層便利であるのを知つた。

今若杉山を起點とする縦走路についてその概要を記して見やう。

若杉山頂よりショウケ越(五〇五米)に至る間は杉の密林を左にし草原の急斜面を右にしてス、キのおほひかぶさつた細徑を概して下る一方であるが途中巨岩を

下る處で一才路が迷ひ易い。しかしこゝでは出来る丈左によつて行けば笹の間に細徑があつて巨岩の蔭を一氣に下ることが出来る。シヨーク越からは防火線傳ひとなり先づ砥石山の北の一峯(七七四米)に登り、更に少しく下つて又急斜を登つて砥石山(八二六米)の頂上に達する。砥石山は三郡山塊中の雄峯で山容甚だ雄偉である。山頂には狭い草原の平地があり眺望がいゝ。砥石山からは又急に下り二三の小隆起を経て三郡山頂に達する。三郡山へかゝるあたりから草原の平な尾根は急に岩角の露出した狭い尾根となり樹木がしげつて来る。三郡山頂は高さ五三六・六米に達して縦走路中の最高點である。頂は狭く草原性で二三の露岩がある。山頂の眺望は砥石山と大差がないが特に英彦山が大變近く望まれる。これから佛頂山の頂迄は餘り著しい隆起もなく極めて容易な路である。三郡山から佛頂山の間は西側の山側は主としてブナ、林で樹下にはしばしばツクシヤクナゲの群落が見られる。

猶参考のために筆者の昭和四年十月十八日に於ける縦走の時間記録を記して置かう。

福岡(吉塚驛前)發前八時廿分(バスによる)、登山口

下車九時、若杉山奥の院十時四十分、シヨーク越着十二時五分(三十分間休憩畫食)、砥石山頂後一時廿分、三郡山頂三時廿五分(廿五分休憩)、佛頂山四時二十分、寶満山中宮趾五時、竈門神社下宮五時四十五分、太宰府より電車。

十三、鉾立山及龍王山

若杉山の北方金出川の谷を距て、鉾立山(六六五・八米)がある。この一帯は高原性の臺地であつて鉾立山の北東の菅岳(六七七米)から鉾立山、畝原山等六〇〇餘米の尾根を最高とし東西約十軒南北約十軒に亘つて二五〇米内外を最低として平均三〇〇——五〇〇米の高地である。福岡から篠栗を経て嘉穂郡の飯塚に通ずる縣道はその東西の兩縁に於て所謂七曲りをなして八木山盆地を通過して高原を横斷して居る。龍王山(六一五・六米)は鉾立山の南東約六軒にあり、八木山盆地を距て、聳え東麓は直ちに飯塚の平野に臨んで居る。

鉾立山へはかつて秋晴の日の半日を費やして登つたことがある。篠栗驛から縣道を約三軒東し、右に鳴瀬川の谷に入りその支流から畝原山の頂上より南西に出

た尾根の細徑を登り畝原山頂に達し、更に樹林下の細徑を銚立山頂に至つた。畝原山から銚立山への尾根は

殆んど著しい凸凹がなく銚立山の眞の頂上もどこにあるか遂に不明のまゝで西側の大分明かな山路を下り陣田ヶ尾の瀧の上方に出て篠栗に下つた。陣田ヶ尾は銚立山の西側にある高原性盆地でその南端に小さな瀧があり陣田ヶ尾の瀧と云つて居る。銚立山は下から見ると畝原山と一つになつて可成美事なアプローチを示すが登つて見ると頂上は平坦で樹林が深く殆んど眺望がなく面白味の少ない山である。それに尾根の細徑にはジャケツイバラがはびこつて居てその太い刺にはずゐ分苦んだ。

龍王岳へ登つたのは數年前の早春で妻も一諸であつた。篠栗から飯塚への縣道を篠栗側の七曲り迄バスでとばし、それから徒歩で八木山に登り本村部落から山の北西側を登つた。細徑はあつたがとだえがちでおまけにキイチゴの刺がうるさく跡をふさいでゐたので頂上の草原に出る迄は大分手間どつた。頂上は廣い草地で眼下には飯塚の平野を望み甚だ眺望がいゝ。下りは防火線づたひに南の急斜面を下つたがこの方面は一帯

に草原つゞきで山の南西麓を廻つて容易に本村部落に出ることが出来た。

十四、四王寺山

四王寺山(四一〇米)は一名大城山或ひは大野山とも呼ばれ太宰府の西に近く東に寶滿の峻嶺と相對する美しい草山である。古歌に

つちしるく時雨の雨はふらなくに

おほきの山は色づきにけり

とは太宰府の西近くに聳ゆるこの山の秋色を歌つたものである。大城山とは天智天皇の四年大野山に太宰府保護のため百濟人をして築城せしめたによつて出た山名であるが、光仁天皇の寶龜五年山上に四天王寺を創建したるより山名は又四王寺山と呼べるゝ様になり現今に及んで居る。この山は後、戰國時代にも大友氏の部將高橋昭雲が岩屋城を築いて居り天正十四年島津氏の爲に陥れられた古跡である。岩屋城の陥落に方つて城中一兵を残さずその守線に斃れ昭雲も三十九歳を一期として牙城に自刃したといふ壯烈なる物語を残して居る。新舊の築城の遺蹟は現今も處々にその残趾を

指摘することが出来大石垣小石垣等の名もある。

山上は小高原をなし四王寺部落の人家があつて水田が開けて居る。その平地を東南西の三方からかこむ、草原の尾根があつて最高點は西側にあり樹林中に毘沙門の堂宇がある。山への登路は太宰府から南東側を登るか、北東麓の宇美町から登るのであるがいづれも極めて容易に四王寺部落を経て草原の尾根に出ることが出来る。尾根の東部は特に草原が美しく眼下には太宰府神社の境内を望み春秋の家族づれの遊山地として推稱したい處である。

十五、天 拜 山

天拜山は太宰府の南西約四軒にある高さ二五八米の小丘であるが直接平野に臨み且つ山頂に巨大な老松があるので約一六軒を距てた福岡附近からでも著しく目立つ山である。

鹿児島本線の二日市驛で汽車を下りて數町で湯町の武藏温泉に達する。この温泉は溫度が低く冬は沸かして入浴する程である。皮膚病に效があると云ふが湯量が少なく餘り氣持のいゝ温泉ではない。殊に軒を並ぶ

る旅館はいづれも遊興本位でゆつくりした氣持で滞在しやうなど思ひもよらないことである。湯町から武藏寺の境内を経て約一時間で頂上に達する。頂上には菅公を祀る小堂があり、南に少しく下つた處に老大なる松樹があつて樹林を抜いて高く聳えて居る。山頂は東方に太宰府附近を望む外殆んど樹林の爲に眺望がないが東が開いて居るので近頃仲秋の觀月の名所として宣傳されてゐる。配流の菅公が山頂に立つて天にわが冤罪を訴へたと云ふのは餘りに知れ過ぎた傳説である。

十六、基 山

基山は一名坊住山と稱せられ脊振山塊の東端をなす高さ四〇五米の山丘で九千部山の北東約七軒に位置して居る。此山は前記四王寺山と共に天智天皇の四年に百濟人の築城した處で基山は城山とも書かれて居る。

現今でも所々に往古築城の遺跡を残留し山頂は人工を施せる跡歴然として居り、山腹山麓にも遺蹟が多い。

筆者はかつて二日市驛から南西へ約四軒の山口から山の北面を上下したことがある。山腹より山頂に亘り廣い草原があつて大變感じのいゝ山である。又鹿児島

本線基山驛からも登ることが出来る。

十七、油 山

油山は福岡市の中心を南に距る約十軒にある高さ五九二米の丘陵で現今はその山頂迄福岡市の區域に編入されて居る。山麓の東油山迄定期のバスがありそれから油山觀音を経て急峻な細徑を登り稍平坦な尾根に出て頂上に達するが山頂の眺望は餘りよくない。

十八、立 花 山

立花山は鹿兒島本線香椎驛の北東約四軒にある丘陵で三峯に分れ西を白岳とし高さ三〇〇餘米、中央を松尾山と稱し高さ約三五〇米、その南東を立花山と稱して高さ三六七・一米に達する。全山老樟繁茂し一部は天然記念物として保護されて居る。香椎驛から徒歩約四軒で南西麓の秋山に達し、それより約四十分で立花山頂に達する。山頂は戰國時代立花氏の城塞のあつた處で山頂の地形は可成人工を加へられて居る形跡が歴然として居る。樹林が厚いので眺望は殆んどない。それより松尾山、白岳への縦走も出来るが餘り興味のある

路線ではない。山の中腹に樟樹林をめぐらした草地があつてそこから左に小徑を行くと西に面した草原の斜面があり前面に松尾山の樟樹林を望み春の新緑の眺めが美しい。

十九、肥前黒髮山

長崎本線で有田驛附近にさしかゝると北に岩骨稜々たる一寸妙義山を小さくした様な山を近く望むであらう。それが黒髮山(五一六米)、青螺山(五九九・二米)、牧ノ山(五五五米)等の一群の死火山である。この一群は山容の怪奇なるのみならず植物の珍種に富むので相當學界に知られ特にカネコシダの如き最も有名である。本種は一見ウラジロに似て居るけれども彼の如く裏面が粉白でなく淡緑であることを主なる特徴とする。日本ではこの他に屋久島、大隅高隅山等に産することが最近に於て知られたがその他にはまだ發見されてない。國外では南支の一部に産することが知らるゝのみである。

筆者は昨年(昭和四年)五月十二日福岡の吉塚驛を午前七時三十分の汽車に乗り晝頃有田驛に下車して黒髮

山を上下し、有田驛を午後六時五十分發の汽車に乗つて吉塚驛へ午後十時二分に歸着した。

その日有田驛で下車して上有田驛の方に引返し(黒髮山の登山口としては上有田驛がいゝことを後になつて知つた)郵便局前から左に入つて山に向つた。道は陶器原料運搬の車道の谷間を傳ふのを行くので殆んど平坦である。道に沿つて赤松の林が續き清冽な谷川が流れて居る。約四杆で少しく登りとなり常緑闊葉林がはじまる。この邊樹下にはエビネが多くその花色の變異の多いのに興味を覺えた。少しく登ると路が二又して左は舊道であるが右の新道をとつて羊腸の山路を登つた。眼界が次第に開けると頂上の大岩柱が頭上を壓して聳え初めた。この邊は又赤松林になり樹下にはコシダやウラジロが多い。頂上の東の鞍部で左に灌木の間の細徑を求めて少しく登ると黒髮山神社の社殿の前に出た。神社は頂上の大岩柱を負つた簡素な白木造りで千木いかめしく壯嚴である。社前より少しく北の石段を登ると一岩窟があつて中に白山神社の小石祠が安置されてあつた。こゝより更に細徑を山頂に向ふ。路は大岩柱の北側の樹林を縫ひ岩柱の北西側から登つて居

る、岩角にシガミつきながら頂部に出で少しく東すれば岩柱の最高點に出る。突兀たる大岩柱の頂部は眼界をさへぎるものなく眺望甚だ雄大である。頂上を辭し滿山の綠美しい青螺山を北方近く望みつゝ狭い岩尾根を少しく北西行して北側の急斜を一氣に下り黒髮山と青螺山との裾合の露岩地に出た。こゝは東と西との二つの谷の分水界をなし東側は浅い谷であるが青螺山の南東側から黒髮山の北西側にかけて奇岩連立し一大偉觀を呈する。分水界には東向せる露岩の急斜面がありその下方は懸崖をなして谷底に及んで居る。急斜面上にはツクシシモツケ、ツメレンゲ、ウンゼンマンネングサ、イハヒバ等が多く周圍の樹林と全く異つた群落を形成して居る。

西の谷に下る廣い路があつたのでそれにしたがつて西の谷に下る。路は清流に沿ひ密林中を縫つて居る。樹間を洩れるなどやかな日光と厚く敷れた落葉を踏み音とを樂しみながら兩側に高くソ、リ立つ大岩壁を仰ぎつゝ下つた。分水界より約一杆で龍門の大岩壁に達する。昔爲朝が惡龍を退治したと云ふ傳説のある處で青螺山の南側にある高さ約二〇〇米の懸崖で崖下を三

角川の清流が岩間を縫ひ崖下には巨大な洞窟あり瀑布あり一帯の景觀豪壯且清麗である。龍門から下流は谷稍廣く耕地も開けて居るが廣瀬に出て有田川の平野に出る迄は兩岸の高い岩壁には處々に奇岩の立つのが望まれ景趣すてがたいものがあつた。しかし廣瀬から有田驛への約四軒は平々坦々何等の奇もない退屈な道であつた。(五、五、一九稿)

○大石川西股より杵差岳へ

藤 島 玄

昭和五年七月十二日より羽越線坂町驛、岩船郡關谷村字金俣村を経て大石川西股を溯行し、杵差岳に登頂し、地神山、北股岳、大日岳、飯豊山、寶珠山より小玉川温泉へ降つて八日間の山旅を終へた紀行である。杵差岳より飯豊山に至る主脈縦走は從來屢ば發表あれば、省略した。

一行 會員 小林文平 藤島玄

新潟高校旅行部員 佐藤磯之助、安藤公平、
新田見文雄、宮村三男。

參考地圖 五萬分一 飯豊山 小國

雜 錄 ○大石川西股より杵差岳へ

金 俣 村 へ

七月十二日、越後の平野は陰鬱な雨雲が低く垂れ、南の空を飾る残雪の輝きも叢立つ入道雲も見えず、旅立つ日の車中はいやに蒸し暑い。胎内川入りか大石川入りかと迷つたが、増水を恐れて遂に大石川溯行と定つたのも今朝の事だつた。

午後一時、坂町驛着。驛前より我等一行と荷物を滿載したバスは荒川に沿つて米澤街道を走る。大島村を過ぎれば東南に吹き寄せられた雲の層は杵差岳連嶺を埋め盡して僅かに荒川へ落込む山稜の一角を桑島の上に見せる。雪の少い話が又改めて繰返へされた。

一時五十分、高瀬温泉を過ぎて驛より四里、下川口村六本杉に着く。杵差岳東西の両面より奔流する大石川の溪水は北走すること五里、北の大朝日岳、南の飯豊山の深谿とをY字型に集めて西へ流れる荒川と此處で合流する。

二時二十分、荷負ひを雇つて大石川に沿つた道を雨雲の走りに氣を配りながら急ぐ中に安角の村を離れるととう／＼降つて來た。

三時三十分、郵便箱の立つた大石村河内源吉（通稱源十郎、熊狩の頭、附近の山澤に最も精通せり）方に荷を下した。小林氏と金俣村加藤新六の家へ行つて話込んでゐる中にとう／＼新六の家に泊る事となり、再び雨中荷を移した。

七月十三日、早朝からの大雨。「父も母も壯健であつて大變心配しますで、この出水では」と四十七歳の新六が大真面目の孝行振りに苦笑しながら今日の出發は見合せとなる。

金俣村―西股川―大熊澤小屋

七月十四日。四時に起きて途切れた雲間に星の瞬きもがたと見上ぐれど、微風だに無い空はどんより曇つて小雨さへ落ちて居る。一日の停滯で飽き／＼した一行は出ると決めた。佐太郎、金藏の二人の夫も遅々ながら顔を出した、彼等は後發して追付く事になる。

七時三十分發。金俣村より大石村へ一度戻つて大石川の右岸を行く。四寸餘りの減水で清澄な流れを見せる。春田植の頃、杵（農具の名）を肩にして頬かむりした人の姿が、輝く残雪の中に黒く前杵差岳の平に現れ

て前村一帯で見えますと語りながら新六は先に立つ。田を抜け林へ入ると頭の上には朗かな小鳥の聲が靜かな空気を震はして天候の好轉を知らして呉れる。

八時、土砂止保安林と標柱がある。道は二岐に分れて居る。左は東俣川行き、右を取つて五分で飛石橋へ出た。橋下二百六十尺、長さ九十六尺の釣橋だ。橋上から俯瞰した西股谿谷の壯麗は一行をして思はず橋上に立ち止らせて歡聲を發せしめた。

勿論局部的ではあるが、飯豊山塊を源泉とする實川、飯豊川、玉川等よりは優れて居る様に思はれた。

橋を渡つて左岸に移り、暫く行つた曲り角で、東俣川が權六尾根の北端を廻つて西股川と落合ふのが瞰下される。右手から落ちる瀧倉澤や梯子澤を過ぎて黒手澤を渡る。九時頃より今まで立派だつた道も林道となつて細く荒れて山毛櫨の森林へ入つて行く。兩岸の岩壁に極度に狭められた西股川の全流が奔騰し石脚に激して白泡を吐き乍ら瀧の如く流れる「飛込み」を足下に見る。此處だけは雜魚釣（鱒魚釣）も掬みも出來ず、飛込んで泳いで抜けるといふ。暫し岩道を登ると炭焼小屋の幾棟も在る小さい平地へ出る。黒手の三角點（八百

二十七・八米)より北へ延びた尾根は西股川へ近づくと従つて赤褐色の赤裸々の岩塊を露出して如何にも物凄しい荒々しい姿の地貌を示して儼然と控えてゐる。炭焼に來た村人に聞くと「カヂガネ」といふのださうだ。

九時四十五分發。カヂガネの下の平より直に現場橋を渡つて右岸に移る、橋際に桂の巨樹が鬱蒼と聳えてゐる。激しい西股川の水音も次第に脚下に沈み川沿ひの小道を爪先登りに登る。對岸の伊豆口澤附近迄入つて居る炭焼小屋を右に見て、道は又下りとなつて草地の平へ出る。

十時三十分、中ノ俣川の右岸のヨシやヨモギの生ひ茂つた平地の隅に唯一本の杉が高く天を抜いて居る。その下には中俣小屋がある、熊や猿狩の時又紫蘇取の時使ふのださうで、十人は入れやう。中ノ俣川は八間位の川幅の浅い綺麗な澤で棧橋が懸けてある。一町ばかりで西股川の釣橋を渡つて左岸に移り橋下の河原で荷を下した。

十時四十分、執念深い雨に追立てられて出發する。道を横切つて倒れて居る山毛櫨の大木からキクラゲを帽子に一抔採つた。暗い森林の中を辿り落葉や下苔の

上を重い足どりで進む。

十一時十分、ウヂ澤、トウヘイ澤と小澤を過ぎてワキノクラ澤を渡る。棧橋は腐朽して居て下は十二三間もある。この地方ではクラを岩の意味で云はず熊狩の時熊の居る所を多人數で巻きたる中の事を云ふ。

十一時二十五分、スウノ澤。橋は朽ち落ちて流されて居たが五間位の浅い澤なので樂に徒涉した。

十一時三十五分、林道の絡點タキフ澤に至る。この澤は左の八百六十米の峯から西股川へと東へ延びた尾根の北側の五間位の浅い澤だが兩岸の樹木は大きい。對岸へ徒涉して本流を後にタキフ澤を左右に徒涉しながら五六町溯り、河原の稍々廣くなつた所で中食を採つた。中ノ俣から降り續いた雨も漸くあがつて弱々しい薄日が射す。中食も終つて雨具を荷造りしてゐる頃佐太郎、金藏の兩人も追付いて來た。

十二時四十分發。タキフ澤を溯り十五分にして澤を離れ、左の小澤へ入る。十分にして又左の涸澤に入り五分にして右手の小さな尾根へと登る。この邊より道は斷然悪くなり土地の者でなくては判別出来ない。

一時二十分。藪の中の小道を登り切つてジガイ澤越

口(乗越の意)に出る。杵差岳、鉾立峰の山々はまだ雨晴れの亂雪を繞らして頭も見せぬ。左巻きに下り小澤へ入ると一間半程の小瀧に出遭ふ。人夫の二人は藪へ入つて高廻りし、我々は飛下りる。ダイナマイトの爆發に左の首を千切り取られた佐太郎は流石に村で雑魚釣の名人と云はれてるだけに岩場に慣れて居て、何の苦もなく無雜作に下りた。微かながらも道跡も見出されてきた。

一時五十五分、ジガイ澤を徒渉し、鳥坂峰と八百六十米の峰の中間より東へ出て、北に向ふ尾根の登りになる。これをジガイノミノマワシと稱して居る。二抱へに餘る五葉松や山毛櫸の大木の中を、東方に西股川を隔て、相對する座頭の峰(七百四十八米)より隆起する前杵差岳(一千二百九十五・五米)の豪莊な姿を仰ぎつゝ六百六十米の隆起迄の尾根登りは一時間餘りのジリ／＼登りで相當辛い。

三時三十分發。四時再び西股川本流に出會ふ。谿は狭く深く、流れは速く強い。一同裸體になつて瀧より淵となり、溢れて流れる瀬を眞一文字に五間餘りも腰を越える急湍を押し切つて右岸に達し、そのまゝ岩壁に

沿つて尙五六間上流へ溯り巨巖の上へ攀ち登る。増水濁流となつたら、徒渉は困難であるが、上流へ少し搦んで高廻りして川幅の廣い場所を選んだら可能性はあると思ふ。

四時五十分發。巨巖の上へ流れ出る三尺位の小澤の右につけられた小徑を五分も登ると大熊澤小屋の横へ出た。小屋は絶好の位置で南は山毛櫸の大森林をひかへ、北は一面の藪の平で水は數歩の處に潺々と流れて居る。紫蕨を乾燥する竈の小屋根の下へ荷を下した佐太郎は早速嘉魚釣に出た。暗くなつて佐太郎は大きい嘉魚を取つて歸つて來た。靜かな夜だ、遅くなつても出た。

又四郎尾根―杵差岳―鉾立峰

七月十五日。七月の夜は明け易い。前杵差岳、杵差岳、鉾立峰の連嶺に取圍れた西股川の奥まつた谷底へ旭光は未だ射して來ない。あの銀鈴を振る駒鳥の鳴聲が響かぬので物足らぬ感じがする。

七時十分發。幽邃極りなき山毛櫸の純林へ吸ひ込まれる如く入つて行く。森林へ入るまでに昨夜の雨にか

今朝の露にか、もう身體は冷く濡れて了つた。道は無くなつて一昨年七月登山した村上町の中村又四郎の切開けの鈍目を拾ひつゝ進む。案内の新六は時々立止つて自問自答で鈍目を尋ね、行詰ると後から来る佐太郎と相談を始める。森林を横斷して暫く下りになつて大熊澤へ出る。

七時二十五分、本流の落合より二三町上流の邊である。暗碧な深淵も、激烈な急湍も、屹立した岩壁も無い。早春の頃なら絶好の登降路とならう。岩を飛んで二町程も上流へ進み、小さい瀧の見える邊に腰を下して水筒に水をつめたりする。

七時三十五分發。左岸の藪を分けて登れば、山毛櫨の鬱蒼たる静まりかへつた森林へと入る。進路を右に取つて林を横ぎり杓差岳頂上より西へと降走する長大なる地形圖に等高數字のある又四郎尾根の稜線へと藪を押分けて登る。

八時三十分、尾根上へ出る。六百米そこ／＼であらう。荷を下して一服つける。朝の快晴は何處へやら微かに吹出した西風に白雲が空一面に密着して動かうともしない。山毛櫨の巨幹老樹の間を縫うて稜線を傳ふ。

地形圖の示すが如き廣くのんびりした尾根ではない。處々に根こぎに倒された大木がある、昨年四月二十一日の大暴風に吹き倒されたのだと新六は言ふ。胎内川と西股川の分水嶺をなす鳥坂峰、高倉山の連峰は手の届く程近い。

九時、食事を採る。南の鉢立澤は深い密林に隠されて水色の斷片すら見せぬに反し、北の大熊澤は前杓差の山脚より起り杓差岳の胸近くまで銀蛇の如く蜿蜒と全容を展開して、強く吾等を魅惑する。

十一時、一〇〇〇米を越して尾根の南より北に向ふ邊より俄かに猙獰な雜木林へ入ると、中村氏が登山の時切開けた鈍目や鋸跡が未だ新しく、懐しくもその苦心の跡が偲ばれる。赤躑躅の咲亂れる處に腰を下し新六に手近かの木の名を尋ねると、赤松、五葉、一ツ葉、ブナ、ナラ、ヤドメ、ツツジ、マンシヤク、イワバ、サナグリ、ツバキ、ネコウサギ、コシアグラ、イタヤ、アキコロモ、サイカチ、と土地言葉で言ひ続ける。サイカチから熊の話になり、熊が冬籠りの前に五葉の皮を食つて尻カチ（便秘）して、春穴から出てサイカチの紅實と地櫻（岩鏡）の花を食つて、尻ヌケする

んだと面白く語り出し、熊の穴もこの上から見られま
すと腰を上げた。

十二時三十分。一三〇〇米邊の鞍部へ出る。南北に
尾根を横斷した細長い草場で小さい池もあつた。水も
鉾立澤へ少し降れば得られ中村氏は此處に野營して杵
差岳往復したのである。空は怪しく騒ぎ出し陽も射さ
なくなつた。

一時發。直ちに千四百六十米の峰の登りになり一時
五十五分峰上へ出る。益々小藪は激しくなる。この縦
走中で大熊澤と杵差岳の尾根登りが一番ひどかつた。
陰鬱な天候、單調な登りと重荷に惱まれて気分も浮立
たず、唯峰へ出たらとそれのみを思つた。目睫の間に
迫る杵差本岳は、ねち／＼と山腹を這ひ上り、傳ひ下
る濃霧に巻かれ、北に隆々たる暗綠色の肩肉を聳やか
す前杵差岳の頂も、本岳を離れて霧に隠見しだした。

二時二十分、一五〇〇米を越える頃、小さい突起を
降ると初めて瘳猛な藪より解放されて杵差岳のふとこ
ろ鏡の新六の池のほとりへ出る。南京小櫻の咲亂れる
廣い濕地で東の斜面に僅かな残雪を懸け、池は東西約
二十間、南北約七間位の長方形をなし、清澄な水面に

はどつしりと張つた岳の肩を浮べる。絶好の野營地で
ある、風を避けて辨當を開いた。

三時二十分發。草地を左へ搦んで、浅い澗谷を傳つ
て間近い頂上目懸けて、まつしぐらに熊笹を押し分け
ひた登りに急いだ。不圖振返ると人夫等はまだ池を離
れず、手を振つて進路を示したりして居る。

三時四十分、杵差岳の頂上に至る。南風が強く寒さ
も加る。霧は盛んに動き出し、頂に立つたらばの多大
の期待も南の鉾立峰、北の前杵差岳の間の尾根上に限
られ、他は滿天白霧の領域であつた。北の尾根上に冷
く光る小池にするか、下つて花咲く新六の池にするか
と野營の場所の選定に迷つたが、遂に南へと尾根傳ひ
に出る。

四時。頂上を離れて廣い大尾根に高山植物が處狭き
迄に密生して居る花園を、寒さに先を急いだ一行は惜
し氣もなく足下に踏みにじつて走りて走つた。

四時三十分。立騒ぐ雲を背景にして大尾根の上に、
どつしりと天鉾の如き怪奇な姿を屹立し、朴ノ木澤、
頼母木川の谷を睥睨せる鉾立峰(約一六〇〇米にして
鳥坂峰より起れる尾根と、飯豊主脈との接合點の峰)

の頂に立つた。西へと入込んだ鉢立澤を覗く。霧の去來は盛んであるが、この澤は大熊澤に似て安易らしく見えた。且つて直江津農學校々長丸山氏一行はこの澤を溯行したといふ。又新發田營林署一行は鳥坂峰より高倉山(九七五米)を経て鉢立峰へ至つてゐる。人夫の金藏は盆栽物にと眞柏や偃松を熱心に物色してゐた。

四時五十分、鉢立峰を一氣に馳け降つて、大石川東俣澤に面した鞍部の残雪に近い平地に天幕を張つた。

背面はナ、カマド、熊笹に圍れ天幕の附近は残雪の消えた跡に咲出でた可憐な南京小櫻の紫紅の花が満開である。夕暮と共に風も霧も收まつて靜かになつた。イタヤの焚火が盛んになつてナ、カマドも燃え出してきた。夕餉も楽しく終へて紅茶が焚火を圍んだ我等に配られ人夫等は酒宴を開く。陶然とした彼等は雜魚釣の話、熊の戸藉調べ、盆栽の事と同じ話を繰返しては且那方へと杯を差しては自分が飲んでしまふ。空は物凄しい星月夜だ、織女が投げた銀簪が流星一つ、枯松山の谷陰へ飛んだ。山草を褥に疲れた身體を焚火の近くに横たへて人夫と共に野天に寝る。明日こそ快晴だぞと目を開けば、満天の星の光は、冷かに澄んだ山上の空

氣を透して青白く輝く。

地神山—北股岳—大日岳

七月十六日、曇、難澁と思つた山稜の藪が意外に容易の爲め、人夫二人を歸し、新六のみ連れ、荷物を分擔して大日岳へと向つた。

(人夫賃金は食糧人夫持ちにて、一圓五十錢)

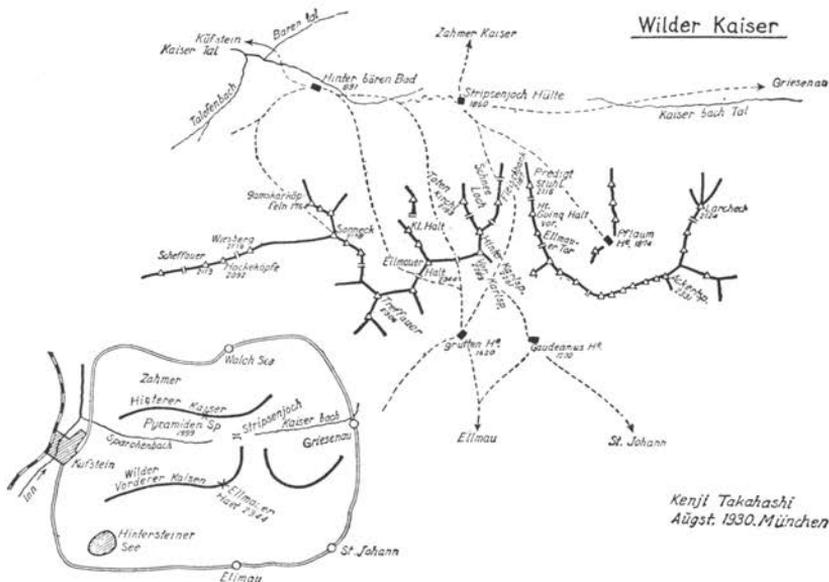
○トーテンキルヒル行

高橋 健 治

一、カイザーゲビルゲ (Kaisergelirge) に就て

ミュンヘンの南、オーストリーとの國境近く氷河に依つて作られたる小さな湖水はその聳立する周圍の山々と雪と緑とに依つて多くの避暑客を呼び、西、Bodensee、東、Chiemsee との間のみにても六十數個の湖水を數へる。

これ等の湖邊に日曜を利用して遊び、附近の山々の美を眺めて居ても如何にしても満足出来ない私は、八



Kenji Takahashi
Aügst. 1930. München

月になつて Franz Nieberl 氏を Kulfstein に訪問する序でに獨塊に於ける岩峰の一中心地たる Kaisergebirge を訪れようと決心した。

ミュヘンよりインスブルックへの急行はローゼンハイム、クツフシュタインを経て水量豊かなるインタールを溯る。ミュンヘンより二時間餘にしてクツフシュタインに達す。

カイザーゲビルゲは東西に走る二脈より成り、北なるをヒンテルカイザー (Hinter Kaiser) 或ひはツァーメルカイザー (Zahmer Kaiser) 南なるをフォルデルカイザー (Vorder Kaiser) 或ひはウイルゲルカイザー (Wilder Kaiser) と呼び前者は標高二〇〇〇米に達せず、岩も少く只其の主峯ピラミードンシュビイツェ (Pyramiden Spitze) (一九九九米) 附近に少しの雪と岩を見るのみである。後者は西、シエフアウエル (Scheffauer) (二一三三米) 東、アツカールシュビイツェ (Ackerl Sp.) (二二三三米) に至る間二千米級の岩峰二十數座を數へ、その悉くが石灰岩の堅岩であつてドローミイテンと共に岩登りの中心地となつて居る。

西クツフシュタイン、東グリーゼナウ (Griesenau)

の間二十軒、北ワルシユゼー (Walchsee) 南セントヨハン (St. Johan) 或ひはエルマウ (Ellmau) の間十二軒のチロールの静かな山村と緑の牧場に取圍まれた此等岩峰の中、ゾンネツク (Sonneck) (二二六一米) トレフアウエルシユビイツェ (Treffauer Spitze) (二二〇六米) エルマウエルハルトシユゴイツハ (Ellmauer Hald Spitze) (二二四四米) アカールシユゴイツハ (Ackerspitze) (二二三一米) 等は最も峻嶮である。

その中心にトーテンキルヒル (Totenkirchl) (二一九三米) があり、ヒンテルカイザーとフォルデルカイザーとの二脈の間にはシュトリブセンヨツホ (Stripsenjoch) を堺として、西に向つて流るる谷をカイザータール (Kaiser Tal) 東に向つて流るるカイザーバツハタール (Kaiserbach Tal) と呼び前者は後者より水量も河幅も大である。カイザータールは稍々急な峡谷を爲し、ベーレントール (Bärenthal) タルスフェンバツハ (Talsfenbach) の水を集めヒンテルベーレンバード (Hinter-bärenbad) (クツフシユタイン支部所有) のヒユツテを中心に多くの牧場小屋がある。

カイザーバツハは緩やかな廣い谷で二三〇〇米位ま

でも牧場がある。カイザーゲベルゲの南方は牧場小屋が多いが、登山の爲にはグリユツテンヒユツテ (Grütten Hütte) (二六一九米) とガウデアムスヒユツテ (Gaudemann Hütte) (二二七〇米) とがある。ガイザーゲベルゲの中心にはシュトリブセンヨツホヒユツテ (Stripsenjoch Hütte) (二五八〇米) があり、その東南にフラウムヒョツツテ (Pflaum Hütte) (一八七四米) がある。地質上、下半は Hauptdolomit 上半は Wettersteinkalk に屬し堅石で岩登りに好適して居る。八〇〇米にして既に偃松の自生があり、闊葉樹の限界は一三〇〇米である。

文献としては K. Hofmann (Z. D. A. V. 1870) Th. Erantwein (Z. D. Ö. A. V. 1879) J. Enzensperger (Z. D. Ö. A. V. 1897) 等がその主要のものと地圖としては D. Ö. A. V. 發行の Karte des Kaisergebirges (1:25000) (1917) を推奨する。

二、ウイデルカイザー

(Wilderkaiser) に就つ

ヒンテルカイザーは關係が少いからウイデルカイ

ザーにのみ就て記したい。この中でもクライネルハルト (Kleiner Halt)・トーテンキルヒル (Totenkirchl)・フライシュバンク (Fleischbank)・ブレディクトシュエートル (Predigtsuhl)等は岩登りのゲレンデとして好適せる堅く岩である。ヘルマウエルハルト (Ellmauer Halt) (二三四四米)は此の山系の最高峰であつて冬期はスノークラフトの練習に適して居る。

其他、フォルデルカールシュエイツェ (Vorder Karspitze) フォルデルゴウイングハルト (Vorder Going Halt) ビンテルゴウイングハルト (Hinter Going Halt) レルヒエック (Lärcheck) テレンツフアウエル (Treffener) ズンネック (Sonneck) シエツフアウエル (Schofauer)等の諸峰を數へる。

三、トーテンキルヒル (Totenkirchl)

に就て

二一九三米に達するこの岩峰はカイザータールとカイザーバツハタールとに跨がり、東、南、西、に各々明瞭なる面を持ち北には最も峻巖なる斷崖を見せ只、南東にヒインテルカールシュエイツェに連らなる山稜

を有するのみである。

古くより、登攀の困難を以て聞え、數多くの登路が研究されて居る點でも他に類が少く。

文献としては A. Zott, Tourist, 1886, より F. Nieberl, Mittheil. d. D. Ö. A. V. 1925 に至るまで甚だ多く、殊に此の地方に就いて最も詳しく Nieberl は Das Totenkirchl と云ふ單行本まで著はして居る。

初登攀は一八八一年六月十六日 G. Merzbacher がヒエーラーの M. Soyer と共に行ひ、續して同年 A. Zott, G. Bakenstuber の兩名が已にこのヴァリエーションを試みた。その後 Enzensperger, Klanner, Leuchs, Dülfer, Platz, Nieberl その他に依り多くのヴァリエーションルートが確立せられた。

一例を北壁面に採つて之を示せば次の如くである。

A. Iste Terrasse に至る。

1. Führerweg, Führerkamin を經る最も安易な

ルート。

2. Zottweg.

3. Merzbacherweg, 西北面より Iste Terrasse に至る。

B. Iste Terrasse への Ite Terrasse に至る。

1. Zottweg.

2. Merzbacherweg.

3. Schmidrinne.

C. Ite Terrasse より上部

1. Heroldweg.

D. Ostwand.

E. Südostgrat.

トーテンキルヒルは僅かに二千米級の比較的低い峯であるが、如何に多くの登山家を過去に於て産み出したか、此等の先驅者達はトーテンキルヒルを道場として自己の力を練磨しこれに依つて得たる實力を土臺として遠く海外にまで雄飛した事を知る時、吾々は自分達の國の持つ岩を如何に研究し、これを道場としてその力を發揮すべきかに就て教へられる處が尠くなむ。

四、トーテンキルヒル紀行

八月十日 晴、後曇

日本から送つて貰つた「山日記」の八月四日の處を見ると私は「あのヨドラーの澄みきつた聲のする彼方チ

ロールの谷とその峯々に私の心はもう行つて了つて居る」と最後に書留めて居た。

一週間以來私の山へのゼインヅフトはもう抑へても抑へ切れなくなつて了つて居た。連日の荒天にも拘らず今日は稍々バロメーターが上昇がしたので喜んで下宿の二重窓をあけ離して南の空を眺めやると、晴れては居るが風強く雲の去來が甚だしい。でももう抑へ切れない。雨でも山はあると獨語を言つてルツクザツクに旅具一切をつめ込んで朝のカフェーもそこそこに濟ましガタゴトと階段を下り始めた。宿の主人 Müller 氏は門口に出迎へて Grüssgott! Aufwiederschen! と叫ぶ。町の練瓦道には東の空から太陽が晴れ々しく照り輝いて全く氣持がよい。

Haupbahnhof の人波を避けつゝ汽車に乗込むと、Sontagskate の連中が列車は満員だ。

只一人煙草をスパスバと吹かすのみで話相手も無しに空を仰いで居る氣持、旅立ちの初めには中々いゝものだ。

電氣機關車が緩りと動き出したのは十時二十一分。もう汽車は Wiase の間を縫つて走り出して居る。そ

の間に點在する落葉松や樺の森は長雨の後を受けて又となく美しい。それも南下するに従つて再び雨模様になつて濕氣の多い霧と冷かさから來る香ひが濃くなつて來ると景色は一層シンミリとする。

ローゼンハイム (Rosenheim) で乗換へてブランネンブルグ (Brammenburg) から汽車は山道を進る。田舎者が多くなるに連れて汽車の中も陽氣にそして氣樂になつて來る。

山へ來た！ 山へ來た！ 子供の様に急に心が浮き立つて心の高鳴りを覺える。殊に只一人だと森の木陰も、雲間を洩れる一條の光も、さては人の動きや鳥の囀りも私の山旅を祝福して呉れる様に感ずる獨りよがりの私である。

クツフシュタイン (Kufstein) に着いたのは十二時半だつた。Zollbeamte の部屋に Franz Nibbert 氏を訪れたが「彼は休暇をとつて居る」と肥つた検査官が答へた。止むなく彼の私宅を訪れたが廊下に掲げられたドライチンネンやドロミイテンやカイザーゲビルゲ等の寫眞が迎へて呉れたのみで「Nieman da」とむげに叫んで、又元の道を歸つて行かねばならなかつた。

私は階段を下り始めた、やがて階下に音がして誰か登つて來る様だ。それはニール氏ではなくて彼の愛犬らしいセツターであつた。彼は先づ私のビツケルを嗅ぎ初めた。そして次にニール氏の部屋の扉を彼は頻りに引掻いた。彼は私の用向きを一本のビツケルの香ひに依つて知つたのであつた。扉を無細工な前趾で叩いては私の顔を見る様子は全く機敏なものであつた。然し彼もやがて Nieman da を知つたものかスゴ／＼と階段を降り初めた。彼に導かれて私もアントンカルグ通りの木立に降り立つた。

私はベデイカーを引きめくつて Drei Köninge といふ宿に決定して一先づ其處に荷物を置いて午後はお城見物に過す。チロールの田舎町にも Tonfilm の旗が翻つて昔の人が教會に吸ひ込まれて行つた様に日曜は皆このキネマに時を過すらしい。ベンチに腰かけて日曜の午後の風物を眺めて居たが天氣は益々面白くなくなる、やがてポツリ／＼とやつて來たので仕方なく再び宿に引返へした。五時のカフェーの後長いウィーゼの道を横切つてカイザータールの落口を見に行く。谷は落口附近までやゝ峽谷を爲して居るが此處で

急に開いてウイーゼの中を數町流れてイン河に注ぐ。

八月十一日 雨

雨の山道、一人で色々の事を考へながら歩くのは私の最も好む所だ。カイザータールの落口で水温を計つて見ると攝氏九度(氣温十三度)でさう冷い水ではない。此處から道は急に登り出す。クツフシタインの彼方にはシュトウバイ(Stubai)の山々が白く見える。

處々の岩頭には羚羊の模型を立て、人々を喜ばせる。ウアイテンホーフ(Veitenhof)まで登るともうウイーゼになつて牧柵がある。牛の鈴の音がしめつばい空氣を通してカラコロと聞えて来る。人々が陸續として登つて来るのは夏の上高地の様だが兩岸の牧場と緑とその緩かな傾斜とは全く氣持がいゝ。

フロントホーフ(Franhof)を過ぎると急にどしや降りになつて来た。新調のツダルスキーツェルトを引かぶつて歩いて行く。

シユワルツェスバツハル(Schwarzbachl)で一休みして森林帯を下つて行くとドロヤナギに縦とらふ妙な取合せの河原に出る。流れは實に美しくその岩壁を見せシエフアウエルシユビイツェからガムスカークツ

フル(Gamsarkönd)への山稜が霧の中に突立つ。私は首を上げてそれらの岩崖を仰ぎ見ねばならなかつた。

丁度、内藏ノ助澤と黒部本流との合流點附近の岩壁から樹木を取去つた様な感じだつた。景色に氣を取られて河原を歩いて居る中にベエレンタールの上手で道は左岸に移る。そしてヒンテルベエレンバード(Hinterbärerbad)(八三一米)の赤屋根が緑の中に青い煙を擧げて居る。煙を見て急に腹の空つたのを覺えた(一四・〇〇、氣温一三度、水温七・五度)。

此處で食事を済まして、さて雨も小止みになつたから出掛けやうと思つて居ると、一人の小柄の男が左胸にテンボウセンの様なエーデルワイスのマークをつけて私の傍に遣つて来た。一目でヒューラーといふ事が分る。

Gehen Sie nach Stripsenjoch?

Ja.

Und gehen Sie weiter?

Nein, Ich möchte Totenkriehl probieren, wenn das Wetter morgen so schön ist.

等の會話の後、山手帳を取出して彼の名を求めて見る

と偶然にも私がこの地方で最も有望だと思つてマークして置いたエルンストエツガア (Ernst Egger) である事を知つた。彼は當年二十七歳、非常に小柄な、馬力もさうありさうもない男だ。彼の力が彼の體が登攀に際してどれだけいふ事をきくか？ この地方隨一のヒ

ュウラーと私とが太刀打ちして見る事は私にどれだけ爲になるかも知れないと思つた。然かも彼と私は同年であつて、彼は一九二六年以來ヒュウラーとして活躍して來た若者だ。明日天氣なら必ず私は君をシュトリブセンヨツホで待つて居ると約して此處を出で立つた(一五・〇〇)。

ヒンテルベレーンバードヒユツテの直ぐ上手に眞四角な丸木小屋がある、これが彼の住居でニーベル氏が建てたのだと言つて私をこの小屋に案内した。一つの

ベツトと彼の山道具以外には何もなす。 Dann, aufwiederschen bis morgen! と別れを告げて次第に細い道を森林の中に辿つて行く。とシュトリブセンヨツホ (Stripsenjoch) (一五八〇米) に達した(一七・〇〇)。



トーテンキルヒル

ヒユツテの直ぐ眼前にトーテンキルヒルの北面の岩壁は黒雲をその頭に西より東へと走らせつゝ堂々と突立つて居る。吾々が曾てトーテンキルヒルと呼んで喜んだ、あの三ノ窓のチンネにそつく

登攀に使はうとはせず終日ビールで上機嫌らしい。

一杯の紅茶を飲んでから早速霧の間に見えるトータンキルヒルの北壁をスケツチする。もう二つのルーテを私は見出した、そしてこれを明日天氣がよければ可能であると見込みをつけた。私は自分に取つて未知の處に行く時、その主要なる部分は文献に依らずに私自身の體験に依つてこれに處して行かうとする。これはパイオニアの精神であると私は思つて居る。そして私は同時に其等の文献を携へて行きこれと私の思考とが一致するかどうか確かめ、一致すれば彼も亦さうであつたかと肯き、一致せざれば私と彼との相違を其處で始めて論議し、私が劣れば彼に頭を下げる。いづれにしても私はオリギナリテイを失はずに山に道を求めて居るのである。

夜が訪れる。堅琴に合はして山靴で若者達は赤い顔をしてタンツをやり出す。爐邊の煙の中で暗いランプの下にガタガタと元氣のいゝ足音が響き渡る。

私は先刻、霧の中で得たルーテとまだにらみつこをして居た。

Guten Abend! と叫んで私の前に突立つた者が居

る。こんなヒユツテで、知人も無い私は不審に思つて顔を上げる。

と、若者エツガーだ。Ach! Sind Sie schon bekommen? それから種々と山の話が始まる。彼は未だ年が若いだけにさうはつきりとした定見は述べる事が出来ないが、實力のある事は少し話をして居る中に確かに分つて來た。私のスケツチした、二つのルーテが Heroldweg と Führweg とであつた事を見出して私は非常に愉快だつた。明日の天氣はどうも悪さうだが彼の技量、實力を知り度くて耐らない私は夜もオチオチ眠れなかつた。

八月十二日 晴後暴風雨

天氣はどうかと夜明けに、濕つたベットの上から窓を通して空を見遣ると十六夜の月が中空に物凄く、眞黒ろな死塔は私の前にのしかゝつて居た。天氣だ!

よし!

軽いパンとカフェーの朝食を済まして、變り易い西風を氣遣ひながらも朝の冷氣に元氣づけられて出掛ける(八三・〇)。シュトリブセンヨツホから百米程の登高にはナーゲルシュユエで充分だ。昨日のスケツチに依つて私の登らんとしたルーテはヘールドウエクであつ

たのでエツガーは其の通り行かうと行つた。私は勿論
Es ist schon recht! Ja wohl! と言ひつゝアンゼイ
レンする。彼は毎日のトレーニングと、私が若くて少
しは軽い足の持主である事を見分けてドンドン登つて
行く。見事な足どりで然かも速く確實にバランスをと
つて登つて行くので私は屢々 Warten Sie einmal! を
叫ばねばならなかつた。

やがて東北山稜の垂直面に出遭ふ、三十米程の垂直
登高だ。此處で手掛りを求める時、手も亦リズムでこれ
を行ひ傾斜が急になればなる程そのリズムを早くして
すばやくやつて了はねばならぬ事を痛感した。次に來
るものはトラバースでこれは三十分ばかり、これが済
むと四十度の傾斜のスラブを登る。これが終ると吾々
は再び非常に困難な岩壁に直面する。此處でも彼は敏
捷に登り切つたが、まだクレツテルシュューエに自信の
ない私は足場の無いこの一枚岩を七十度の傾斜に於て
登り終せる事に相當の困難を感じた。私は此處で一度
スリツプしたが彼は軽く喰ひ止めた。最初の垂直面と
次ぎのトラヴァースと二回カラヴァイネールを用いた。

その次ぎには傾斜六十度高さ約十米のリプライディ

ングを行ふ。手足の長い、そして比較的體の軽い私は
これは可成得意の方であつたが、これも矢張りリズム
を早くする程有效である事を知つた。要するにバラ
ンスばかりを覚えて居た私はリズムを早くする練習を怠
つて居たのであつた。三十米のザイルが何回も交互に
伸縮されてやがて草地 (Ilte Terrasse) に出てホツト
一休みする。

それから頂上へと最後の登攀を三十分程試みて十字
架の傍に立つ事が出来た。Wir haben heute Glück!
と彼は云つた(一一、〇〇)。

軽い晝食としてパンと腸詰めを二切を採つた。天氣
はまだよいが、然しもう下から時々霧が巻いて來る。
南の方ベネデイーカングルツベの白い雪がエルマウエ
ルハルトの黒い岩肌の彼方に望まれるのを懐しくも眺
め遣つた。

西にはエルマウエルハルトに續いてクライネルハ
ルトが黒い見事な岩壁を眼前に展開し、東南にはカール
シュピイツツエ、アツカールシュピイツツエ、東には
近くレルヒエツク遠くはロツフェラー (Tofener) の山
々まで雲の上に聳え立つて居る。雨後の澄み切つた空

氣を透して青黒い此等遠方の山々を故國より遠く離れた身がボカボカと暖かい太陽の光に恵まれつゝ、眺め違ふ其の心中の感興はえもいはれぬものであつた。

三十分の憩ひは短かゝつた、然し吾々は再びヒュラーウエクによつて下降し始めねばならなかつた（一・三〇〇）。ヒュラーウエクは北壁の向つて右手のリップを下るのでシュトリブセンヨツホから見ると殆ど垂直に見えるが實際は六十度乃至七十度位の傾斜で最も安易なルートである。然し此を登るとするとカミンばかりで壁が好きならには餘り好ましいものではない。三十米のザイルを使用して一人づゝ交るゝに動いて無事シュトリブセンヨツホに辿り着いた（一・三三〇）。大變暑い日だつたが好天氣に恵まれた事は何よりだ、ミネラルワツサーで乾杯する。

Wir haben immer Sie gesehen! と人々は寄り集つて来る。多くのトウリストは蟻の様にシュトリブセンヨツホ附近をうろついて居るがトーターンキルヒルを試みる様な連中は一週間に一隊あるかなきかで、遭難は今年になつて三回あつたさうだ。ビール腹の獨人達は Ach! Ganz schmal と云つて身體の細い我々の

成功を祝して呉れる。やがて天候は激變し暴風雨が襲つて來た。急にヒュツテには多くの人々が避難して來る。私はヒュラーの食卓に座を占めて、四方の山話を聞き、又テクニクに就いても問ひ訊したりして、あらしの徒然を慰めて居た。下では又山靴のタンツが一頻り盛んであつたが、私は D. O. A. V. マーク入りの毛布にくるまつて寝ころんだ。暴風雨の中に暮れて行く死塔の色を眺めつゝ、今日の登攀を回想しつゝ軽い疲労から來る心地よさを沈黙の中に獨り樂みつゝ次第に眠りへと落ちて行つた。

登高時間八・三〇——一・二〇〇 二時間三十分

下降時間一・三〇——一・三三〇 二時間

合計 四時間三十分

八月十三日 雨

昨日の荒天から再び崩れて今日も亦雨だ。昨日のルートを研究したり、晴間を見て寫眞を撮つたりして午前中を過ごし、Expresskaffee と S. の一杯飲んで、ヒュツテの入口でエツガーに別れを告げ雨の中を下り始めた（一・一〇〇）。彼も亦、母親の居るエルマウエルハルトの麓の小屋にと歸つて行くのだ。私はヒンテル

ペーレンバードにと霧雨と風をつけて急ぐ。トールテンキルヒルを見返り、Grissgottiを連發しながらヒンテルペーレンバードに着いたのは十二時半だつた。中食を採つて又雨の中を進む、流石にこの雨には誰も往來しない。

一人とぼく降つて行くともうウイザーが近づいて牛の鈴の音が霧の中にカラコロと聞える。やがてクツフシュタインの町がぼろ一つと見え出す。只一人雨の中に突つ立つて頬を傳ふ雨の滴を拭ひつゝ私は山と牧場と霧と木とさては下界の町々を眺めて、私は何處が一番好きなのかなあと今更私の住むべき處を探し求めた。

アクロバテイツクな岩登りを笑ふ人がよくある。さうだ、只岩登りにばかり憂身をやつして居る人間がありとすれば勿論彼はマウンテニアでないから、吾々の論外の男で問題にしくともいふのだ。所がその逆にマウンテニアを以て自任しながら、岩登りの出来ない人々が多く居る。これは私から見ると甚だ妙な感じのするマウンテニアである。氷や雪の上では随分老年になつても充分に之れに處して行く事が出来るが

岩登りの妙味は殊に困難なる登攀に於ては、若者にのみ限られた壯快味とマウンテニアの精神の練磨に資する何物かを與へるのである。殊にパーテイーとしての岩登り、そしてその登攀が氷河の遙か彼方の上で行はれねばならない時こそ、吾々の最も好む所でなければならぬ。僅か二千米級のトールテンキルヒルでは満足出来ない私はやがて氷河を求め來るべき秋も、來るべき冬も、若し友がなければ只一人でも、私のシエンクと山話を物語りながらさまよひ歩く事であらう。

(一九三〇年八月、ミュンヘンにて)

○長藏翁の思ひ出

武 田 久 吉

上越南線の沼田驛に降りた三人は大きなルツクザツクに溢れる程の荷を脊にして、炎熱を啣ち乍ら急な坂路を町に上つて行つた。額には汗がもう滲み出す。

「ヤア、先生どけえ行きなさるだ？」

聲を掛けられて振り向くと、白髯の長藏翁が例の通りニコニコ笑ひ乍ら單衣の尻を引きからげ靴履きとい

ふいで立ちで、風呂敷包みを手に同じく坂を上つて來る。時は大正十三年の七月初旬、山口、館脇の兩君と尾瀬に赴く時の事である。

尾瀬に長藏小屋といふのが出來、そこに泊つてあの地方を探勝した人達の話を耳にしたのは、何でも大正六七年頃の事であつたやうに思ふ。その後にも長藏小屋の風評が折々耳に入り尾瀬行の容易となつた事を傳へ聞いて遊意は屢々動いたが、さて實行の機會は中々廻つて來ないで幾年かど経過した。従つて長藏翁に出會ふ望は急にはなかつたのである。

大正十三年の一月、未見の翁から突然書面が來て、不日訪問するからとの事であつたが、十五日の午前、あの第二回目の強震に脅されて間もなくの事長藏老人と會見することゝなつた。

「少し御願へしてえことがあるで……」

といふ翁の用向は兩三年前沼と原とを貯水池として發電に使用することが許可されたので、それを防止するには尾瀬を國立公園としたならばあれ丈の風致や植

物を完全に保護することが出來ようからといふのであつた。

一體日本の國立公園といふものが如何なる動機に出發し何を目的として立案され何ういふ施設をしようといふのか皆目不明であつたその頃に尾瀬を國立公園とする運動を起し、そしてそれが達成された曉に果して最初の希望に叶ふやうになるかどうかは大きな疑問であつた故に私は長藏翁の考へには俄に賛意を表し難かつた。現今でさへ、國立公園とは開發を看板に風景を破壊し國民一般の利益よりも一部の事業家の懐を肥すのがせめてもの結果ではあるまいかとさへ危ぶまれる程であるのに、大正十二年頃の國立公園案といふものが如何に無鐵砲なものであつたかは言ふ迄もない。

何はともあれ、尾瀬の自然を可及的損傷しないやうにすることが差當つての重要な仕事ではあるまいかといふ私案に對して翁は直に共鳴し、それ以來その方針を以て驀進したとも言へやう。そして一徹な翁の事であるから時には極端に尾瀬保護の旗幟を押し進めたかとさへ思はれる程であつた。然しその御蔭で、尾瀬が

今日迄その原始的な風光を損傷せられずに來た事は確實である。

半年程経つてから長藏翁は再び私を訪れた。そして是非共この夏は尾瀬に來て十分にその眞價を研究して呉れるといふのであつた。そこで友人間に同行者を覺めたが七月七日の出發迄に幸にして山口、館脇の兩君が同行を約されることとなり、前後二週間に亘る楽しい旅を實現することが出來たのである。

その出發の通知を東京に居た爲に受取らなかつた翁は偶然にも沼田驛で一行に邂逅したので、喜色は文字通り面に溢れた譯である。



平野長藏

と言つた長藏老人は沼田で用を足してから三日目の朝吾々が三平峠の下でエゾムラサキの花を愛しんで居る時一人の老夫を連れて歸つて來た。然し家に在つても片時も休みなく何か仕事をして居る翁の事であるからゆる／＼落付て談話する機會など殆どない。唯晚餐後

爐邊に坐して氣焔を擧げるのを時折彌次り乍ら聞く位に過ぎなかつた。

長藏小屋に泊つた人の中で、翁と一緒に燧獄に登つた人も少くない様に聞くが、私はついでに登山

「わしは一日遅れてあとから行きますで……」

した経験がない。然し三條瀑と至佛とそれから大清水平や治右衛門池へは一度案内して貰つたことがある。

山を歩く時雪にひしがれた樹木を見ると、「こんなに苦心して育つた木をむだに使つては濟まない。幹の基の

良い所許りでなく枝穂迄利用すべきである」など、言ひ／＼した。それからまた、美しい花でも見當ると、「これが可愛いで……」と眼を細くして頬擦せん許りにいつくしむ處は濃厚な自然の香に浸つて生長した者の心の奥から湧き出る言動としか思はれない。

長藏翁はその後再三上京の序に訪問して呉れた。話は何時も尾瀬の開拓と保護とそれから利根奥への聯絡近年に至つては尾瀬平温泉の計畫等の様に記憶するが思ひ立つた事は何でも爲し遂げずには置かぬと云つた性格から何事に對しても熱心に奔走した様である。それからまた、尾瀬大納言の古事は別として、人の住まない——或は住み得ぬ?——尾瀬沼の沿岸に住居を定めた以上、何かの生業を得んと百方苦心したらしい。大正の初年頃計畫した鱒の養殖が失敗に歸して以來、養狐だとか或は割箸の製造だとか湖畔相當な事業を計畫したがそれが成果を齎したかどうか私は知らない。然しそういう方面の目論見に對しても常に勇往邁進する翁は往々他人の誤解、嫉妬、怨謗を買ふ事があつたらしい。それである方面には相當宣傳が行はれて居る

らしいが内的事情を知らない私は今正邪を批判する譯には行かない。

今年八月、文部省の登山講習會に委嘱を受け、松本での講義を濟ませてから講習員と共に山に入り、最後に上河内に下つてから更にあの附近に兩三日を送り、二十六日亡父の一周忌に當るので歸京して見ると、留守申到着した數十通の郵便の中に長藏翁が月の二十日に突如死去したといふ通知を發見して驚愕すると共に私の悲しみを倍加した。

長藏翁とは僅々六七年の交友に過ぎない上、いつもゆつくり談話する機會がなかつたので翁の経歴については詳しく知る處が少ない。昨春の五月、群馬縣廳から同縣下山岳行者の事蹟調査について照會のあつたのに對する回答書によると、翁の原籍は南會津の檜枝岐村にあり出生は明治四年八月十日といふことである。十歳の時父に死別したので學校を退き家業(農)に従事したが、二十歳の時尾瀬に來て燈ヶ嶽を開山しようと志し二十一年に現今の登路を伐り拓いたといふ。その

頃戸倉あたりに御嶽行者が来て燧ヶ嶽を開かうといふ計畫のあつたのに對抗したものらしい。燧の最高峯柴安岳に安置してある小石祠は何でもその頃戸倉方面の者が建立したものかと思はれる。燧開山後山頂(祖岳)に燧嶽神社を建立し明治二十五年社格編入を出願して許可されたが、後皇典講究所に學び、學階六等を受け燧嶽神社社掌となり、敬神、修養の爲め尾瀬沼や燧ヶ嶽に登山したといふ。斯く毎夏尾瀬に登つて湖畔に暮す爲沿尻の南岸即ち五萬分ノ一地形圖に示された位置に長藏小屋を建て米鹽を用意しては幾旬日か滞在したが。大正四年に釜堀澤の北岸に現在の長藏小屋を建築し養魚を始めたもので、姫鱒の養殖に失敗しても今日迄猶鱒の孵化を行つたりワカサギの放流を試みたりなどしてゐた。

長藏小屋が現在の地に出来てから尾瀬の探賞は大層容易となつた。明治四十一年の夏大下藤次郎君が寫生旅行を企てた時のやうに糧食寝具迄も運び上げる面倒がなく手ぶらで辿りつけば風呂も沸いて居ようといふ呑氣さである。とはいへ旅舎と違つて無暗と植物を濫

採したり自然美を傷ける様な人には斷乎として宿泊を斷るのだから、時折は泣かされたり嚇されたりした者もあつたらしい。頑固一徹な長藏翁は營林局員に向つてさへ許可證を携帯しなければ採集を禁止する位の事はやつたもので、それも一に尾瀬の自然美を保護しようといふ熱誠に出でたものではあるが、所謂林區サン達の受けは餘り好くなかつたらうと思はれる。左も無くてもちつと巧みな政策に出でたなら、拂下げなり借地なりの出願に際しても多大な便宜を計つて貰へて入らざる邪魔や惡宣傳の跡を絶ち得たに相違なからうにそして「壓迫」等の不安が一掃されたに相違あるまいと思はれる。

長藏翁は嘗に尾瀬に興味を有したのみでなく現代の世相や殊に政治には多大の關心を持つて居たらしい。世の惡風潮と闘ふことも往々口にした様である。殊に政治の批判には相當自信があつたものと見える。時折の感想を印刷に附して四方に配布したことは一再に止まらない。「床次竹二郎に與ふ」などいふ刷り物が封筒の中から出て驚かされたことがある。然し現代の我が

帝國の政治には興味を持ち得ない私はその方面の問題で意見を闘はしたことがないから翁の見解については何物も記す可き材料を持たない。

作文に興味を持った翁は、まだ作歌にも深い趣味があつたらしい。何かパンフレット様なものゝ末尾には大抵二三首の歌が添へてあつた。會心の作だらうと思はれるものを聯に書きつけたのが柱に懸けてあつたのを見たこともある。

ひらかむと心つくして尾瀬の沼に

鳴く水禽の聲をきゝつゝ

の一首は翁の尾瀬に對する心境を謳ふたものであらう。翁はまた書物を愛し藏書を骨子としてそれに寄贈の圖書を加へ「尾瀬沼文庫」と名付けて宿泊者の閲讀に供したが、その方法が全く自由に放任されてあつた爲に目ぼしいものは追々と姿を隠してしまふといふことであつた。

翁について書くべき事柄はなほ多いが翁と接觸の機會の少なかつた私には唯その片鱗を描き得るに過ぎな

いからこの位で筆を擱くことゝする。終りに臨んで、翁の没後も、せめて尾瀬だけはその自然美を害はずに永遠に保存し度いものと心から冀つて止まない。種々な意味に於て尾瀬の名物であつた長藏翁を失つたのは返す／＼も遺憾の極みである。

(昭和五年九月)





報 雜

白馬山と最初の登山者 (八木貞助)

日本アルプスの中で近年登山者の最多数を占めて居る白馬岳は、其昔南の槍ヶ岳、乗鞍岳等が明治の中頃から外國の登山家にも知れて居つたにも拘はらず、交通の便を缺いた處にあつたから、麓の樵夫獵師等の外には餘り知るものもなかつた。此岳の最初の登山者としては渡邊敏氏を推すべきであらう。同氏は當時大町小學校長で、明治十六年の夏、時の郡長窪田畔夫氏及他の小學校長一名と登山せられた。大雪溪の上部で蠟石を拾はれたことはあるが、目的は博物學上の研究でなく、主として自然の偉觀に接し、身心を鍛鍊されるにあつたらしい。同氏は其後更に針の木越から、立山連峰を踏破され、後明治三十四年頃長野高等女學校長として、戸隠の嶮山に女生徒の登山を行はれ、今日の女性登山家のトップを切られたことは、我國の登山史上に特記すべきことであらう。

明治三十一年夏には、河野齡藏、岡田邦松等の諸氏が、白馬岳に登山し動植物を採集されて、其記事を植物學雜誌や信濃教育會雜誌等に發表されて、始めて此岳が學術上の寶庫であることが明になつた。

次でぼつ／＼研究家の登山を見るに至つたが、何分にも地元の人々は山岳に對する理解が乏しく、明治三十八九年頃本會創立當時は、夏期天候不良であつたのを、全く登山者が山を荒らす崇りであるとして、登山を阻止して、案内に應じない様なことも度々で、吾々も随分困難したこともある。廿五年後の今日萬を以て數ふる登山者の押寄せる有様を見ては、誠に今昔の感に堪えぬものがある。

日本アルプスの名稱と信飛山脈

日本アルプスの名稱の命名者がウエストン氏やチエンバレン氏ではなく、ウイリアム・ガランド氏であらうとの考證もされたが、日本の山に外國の名前を借りずとも、何とかよい稱呼はないかと、よく聞かされる。此山脈は明治十九年に故原田豊吉博士によつて飛驒山脈と命名せられ、今日まで一部の學者には採用されて居るが、原田博士は飛驒高原の東邊の山脈といふ意味で名づけられたと思はれるが、今日信濃を表口の様に、飛驒、越中、越後に連亘して居るものに、飛驒のみを冠するものも如何かと思はれて、私は大正十年來東筑摩郡誌や南安曇郡誌其他に、信飛山脈或は信飛山塊等の稱呼を用い來つて居る。其

後學者間には此名前が相應に採用される様に見える。日本アルプスの稱呼が極めて一般化した今日何も敢て改める必要もあるまいが、之に慊らぬ方には信飛山脈の名稱を提言したい。

山岳に關する私の立場 (佐藤順一)

私は専門の氣象事業界では山に最も縁故の深い者の様に考へられて居りますが、山岳會員諸君には寧ろ素人としか思はれまい。私共が二十年間も毎日登攀いたしました茨城縣の筑波山と云ふのは僅々八七〇米の丘陵に過ぎないのであつて山岳會員には山と云ふさへ潜越の譏りを逃れぬ位である。また只今私共の事業を始めて居ります富士山は高さに於ては本土の最高峰であるが山岳會員には餘り賞讃されて居らぬ。私は仕事の點から離れてもこの靈峯を左様に侮辱することは出来ない、多數の我國民に一度は登つて貰ひたい。近年の調査に據ると登山者年々十萬を超過して居て、其中には女性の方も随分多いが、全國民の幾百分の一が、一生涯に一度登山するのかはつきり分らない。私としては男性でも女性でも外國人でも富士の姿を眺めるのみでなく是非一度は登山して山岳の眞味に接して貰ひたいものである。それに登山の便もこの山程に開けた處はあるまい。

私が普通の山岳會員諸君と見解を異にして居るのは素より我田引水の知見に相違ないが、私の眼で見ると山は皆觀測臺に出来て居る様に考へられますので、若し事情が許すならば其絶頂にこの靈峯に相應はしい觀測所を創設して、氣象界の研究資料

を提供し自然界を通じて國民の福利を増進したいものである。私の見方は一般の方々の見解と一致しないことは私も速くに承知して居る、併し私が固執して私の見解の道に進んで行く所に私の生命がある、私のこの使命が常に私を指導して行く、其所に私の社會的奉仕が出来て行く、而して斯く事業に進んで居る裡に山に對する愛着の念は自然と涵養される、其所に山岳に對する敬虔の念も生ずる。

私は現今に於ては年齢から言つても山岳に強い人間とは言はれまい、寧ろ山に弱い臆病者で冒險など企てやうともせぬが、この弱武者だけに厄難に際しては引縮んで避ける、辛抱力一つで厄難の過ぎ去るのを待つ。幾回かの遭難の經驗も斯の如くにして處理された。さうして其所謂遭難とも云ふべきものが度々重なると其山を愛する念慮は益々昂まるのである。幾度か艱難を経て志始めて堅しと云ふが、裏から云へば私は山に相當苦勞した男であるだけに山を愛する點に於て人後に落ちない感がある。多くの山岳會員諸君の中にも私に似通つた経路で山岳趣味に進まれた方もあるに違ひない、拙なき感想を綴りて餘白の填草とする。(昭和五年七月十五日富士山頂にて)

高きに登る心 (山本徳三郎) 唯だ何となく高きに登りたい。秀麗な紫の遠山を望んで唯だ眺めるだけでは物足らぬ。其の懐に入り、其の頂に達してこそ、眞の親しみが湧く様な氣がしてならなかつた。地位とか、境遇には霸氣も野心もないまでも、

山の高きに遭へば、其の最高を極めねばどうしても胸が収まらぬ。ましてや酷暑盛夏の候、残雪の、白皚々たるを望んでは、其の胸もときめく誘惑にどうして堪えられよう。盛夏雪の有る無しの境目は、此の世と彼の世との境目なのだ。更に雲上雪田の間際々々に美しくも咲出でたお花晶を見るに及んでは清香何ぞ、塵界のものと目を同ふして語るべけんやである。

お花晶を慕ひ、残雪を眺め、眼界展望の廣きを思ふ時、先づ其の紫の衣に取りつき、高きに登らねばならなかつた。文字通りの向上心である。それに又雲とも遊べる。雲と言つても、雨や雨あがり、立ち込め、飛び去り飛び来る一面モヤ／＼した白霧や層雲(高霧)などは元より雲の扱ひをしたくない。これは、一面のガスの帷で、ボンヤリと縮りが無い。夏季晴天の日、中空高く浮ぶクツキリと輪廓の正しい積雲こそ望ましい。一面の霧では、雲中雲外のけぢめがつかぬ、曖昧糊膜、朧月夜の濃いやうなものでは雲への憧れは生ぜぬ。

一塊の團雲の堂々と寄せ來つて、其の輪廓誠に鮮明なるが自分と對等の地位(高度)にある時眞に雲と遊び雲を掴み、雲に乗らうか乗せられやうかと云ふ氣になる。そして其の雲塊が過ぎれば、眺望が直ちに開ける。又それが一片の孤雲であれば、片方に雲の峯を引き受けても眼界全部は閉ぢ込められない。この孤雲もやがては、彼方の空に旅立つて行く。旅は道連れ世は情け、一時雲の道連れと云ふことになる。

斯様な積雲の頭に觸れる事が出来たならばといふ憧れで幼い時から高きに登りたかつた。下界で遠い空の雲の峰を眺めては『天上御遊の御車』も、斯くやとばかりに思はれてならなかつた。幼時、雲に乗つた神仙の繪を見るにつけても、斯くありたいと望んだことである。其の望みの一部を達せんにもその頃は飛行機はなし、山に登るより他に方法はないと思つた。盛夏の残雪、天上のお花晶、雲の道連れ、眺望の展開、延いては、山岳の成因、地質構造、氣象の變化、植物の群落、雲霧の成生等に關する科學的の興趣も加つて、兎角山に登りたかつたのだつた。そして又今でもさうである。

文部省主催登山講習會 本講習會は昨年初めて試みられ本年はその第二回目である。本年は初め長野縣主催にて立案され、それが本省に廻付せられ改めて文部省主催となつたのである。

昨年は理論は東京にて行ひ實地演習希望者のみを燕岳、槍ヶ岳方面に登山せしめたが、本年は理論は松本市に於て行ひ、且つ講習員は實地演習をも受けなければならぬ事となつた。

理論の方は八月十六日より十八日の三日間、松本市、松本高等學校にて行ひ、本會よりは武田評議員、木暮、冠、岩永、松方の各幹事及び自分が講師として依託せられた。他に地理的關係にて會員八木貞助、會員矢澤米三郎、會員河野齡藏、及び松本測候所々長宮野寛良の諸氏がこれに加はつた。

講習科目、講習時間、及び講師の分擔は左の通りであつた。

高山植物(三時間) 武田評議員
山岳論(一時間) 同

日本の山岳に就て(二時間) 木暮 幹事

南アルプスと北アルプス(二時間) 冠 幹事

山岳寫眞に就て(一時間) 岩永 幹事

登山の準備と注意(二時間) 松方 幹事

高山の構成(一時間) 會員 八木 貞助

高山の動物(一時間) 會員 矢澤米三郎

高山の礦物(一時間) 會員 河野 齡藏

高山の氣象(一時間) 宮野 寬良

登山の技術(二時間) 渡 邊

地圖の見方、山岳に關する圖書(一時間) 同

合計十九時間を三日間に割當てねばならなかつたので午前は八時から十二時まで、午後は二時から四時乃至五時まで毎日六七時間の長きに亘つた。

講習員の範圍は學校、青年團體、體育運動團體、工場、會社府縣町村等の體育關係者であつて、その中八九までは教職に携はる人々であつた。人数は最初一五〇名の豫定であつたが募集の時期が遅きに失したのと、理論講習が中央にて行はれない爲とで應募總数は五十五名で、且つ亦實際に講習を受けたのは四十名足らずであつた。

實地演習は三班に分つてこれを行ひ、第一班は燕岳、槍ヶ岳

雜 報 ○文部省主催登山講習會

方面、第二班は烏帽子岳、槍ヶ岳方面、第三班は上高地方面とし、第一、第二兩班は八月十九日より二十二日迄の五日間、第三班は十九日より三日間に亘つた。第一班は主として未経験者にて總數二十一名、指導者として武田評議員及び渡邊、これを引率し、第一日中房温泉泊、第二日燕山莊泊、第三日槍肩小屋泊、

第四日上高地清水屋泊、第五日前穂高岳或ひは焼ヶ岳往復といふ工合で第二日に一時間ばかり雨に降られた以外は快晴續きで萬事都合がよかつた。入夫は有明、中房等の者六名を用いた。

第二班は約八名で最初會員八木貞助氏に指導を煩はす管であつたが同氏の都合悪く、長野縣體育會幹事山口勝氏がこれに代はつた。第三班は餘り山に強からざる人々よりなり、松本第二中學校教諭井口良一氏外一名が指導し小梨平に天幕を張り附近に登攀を行った。

尙文部省よりは第一班に川田義英、第二班に吉田清の兩氏が隨伴された。

自分は該講習會に際して本會との間の一切の交渉に當り且つ理論及び實地の指導にも携はつた關係上、今後に對する希望及び感想を次に述べて置き度い。

一、講習會開催の具體的に決定せられるのが昨年も今年も相當時期が遅れて居た。従つてこれが公表されるのは七月下旬になる爲、教職に携はる者は休暇中にて募集が充分に徹底しないし、或ひは亦、通知を受けた時には已でに登山旅行を終へた後

だつたりして、講習員として適當と思はるゝ者が少ないのは遺憾であつた。兎に角講習員の範圍が廣いので教養の程度、地位、年齢等が千差萬別で理論の方は兎も角、實地に於ては相當に困難を感じた。各學校に於ける體育指導者といふものを目標に、それから餘り遠く離れない範圍に於て講習員を募集する必要があると思はれる。自分一人では山に行けない、それでこういう機會を利用して一つ山に行つてやらうといふ様な考へで來られるのは大いに迷惑だ。指導者は講習員のみならず、更に各講習員がそれぞれの務めに戻つて更に指導するであらう所の多くの人の事をも否、其等の人々の事をより多く考慮に入れて居るのであるから單なる自分一人を中心としてでなく考へて貰ひ度い。

一、講習員が團體的訓練に慣れて居ないのを痛感した。パーティーの概念を強調する必要がある。

一、講習員中極端に強い者と弱い者とあつて、然かも最弱者を標準として行程を定める爲、強い者はどん／＼先に行く、始末に困るのは弱い者でなくして反對に強い者だつた。指導者は先頭に一人、最後に一人の必要がある。止むを得ずば寧ろ指導者は最後でなく先頭に立つべきである。これは斯る團體的訓練に慣れて居ないパーティーには必要な事を痛感した。

一、行程は今度は三つに分つたが、矢張一つの方がいい。第一班は我々が責任が持てたが第二班、第三班に對しては會員が指導しない關係上、本會として充分なる責任も負へなかつたし

又その指導に對しても我々の希望と合致せざるものがある虞れがあつた。兎に角一つの方針を立てゝその指導に臨む場合他の班に對しては、殊にその指導者が我々と同じく本會の會務に携はる人でない場合は、何れの點から見ても不便宜點が多かつた。一人の人が全責任を持ち、且つ行程を一つに限るといふ事は確かに必要な事だ。

一、地理的關係及び他の考慮せねばならなかつた事情から本會とは直接關係なきか、或ひは甚だ關係薄き未知の人々を講師としたが、これは矢張我々だけの方がいいと思つた。そしてその點から言つても理論は東京で行ふ様にし、實地も一行程のみに止めて置く方がいい。

來年に對する希望は、時期を七月中旬にする事、理論は東京で行ふ事、實地は一行程に止める事、講習員の資格を考慮する事、實地は希望者のみに止むる事、本會役員及び會員中よりのみ講師を選定する事、理論講習日数を四日乃至五日とする事等である。(渡邊)

福岡縣主催第一回登山講習會 この講習會は縣社會教育課の主催で將來縣下社會體育手段として各種社會教育團體又は學校關係に登山の氣風を盛んならしめ從來の選手本位になりがちな一般體育競技の弊をきよう正したいと云つた様な主旨で最初の豫定では福岡市に於て開催する筈であつたが私の提議で市の近郊に聳ゆる若杉山(六七八米)の山腹荒田林間學校で八月九十兩

日講演を行ひ十一日は荒田より砥石山、三郡山(九三七米)、佛頂山、寶滿山の縦走を行ひ太宰府に下つて解散することに計劃を定めて七月中旬より縣公報並びに諸新聞を通じて公示並びに宣傳を行つたが最初の豫定人員一五〇人に對し前日迄の申込者僅かに三十餘人にすぎなかつた。

主催者側及び講師等は八月八日午後荒田に到り諸種の準備を行ひ翌日は早朝より講習員の到着を待つたが當日の申込者を加へても來會者は總計二十二名にすぎなかつた。十一時の豫定であつたが後れて十二時頃會員宿舍にあてられてゐる旅館の廣間で開會式を行ひ小憩の後午後一時より二時間山上杉林内の林間で講演を行ひ終つて講師宿舍に於て山岳寫眞、圖畫、登山用具等の展覽及び説明を行ひ夕刻に及んだ。夜は七時すぎより會員宿舍に於て座談會なる名の下に約一時間私は補講の意味で「日本に於ける登山界の消息」及び「エヴェレスト登山の話」並びに山岳關係の圖書及び雜誌等の供覧を行つたが會員一同大なる興味をひき十時すぎ迄話に花が咲いた。翌日は會員一同の希望により午前五時起床直ちに一同山上の廣場に集合して旭光を拜し縣廳の吉村好兵衛氏の指導で國民體操を行ひ英氣を養つた。朝食後午前八時より私は「登山者に必要な地形學的常識、及び高山植物の話」なる題で約二時間話し小憩の後又「日本アルプス及九州の山々」なる題で約一時間半講演を行ひ、専ら山岳の形

態、山岳地理、高山植物の概念といった方面の事を出来る丈け廣く淺く話して置いた。晝食後又山上の廣場で天幕の張り方及び飯盒するさん等の實習を行ひ午後三時前荒田を發して一同若杉山頂に登り山の西側を半周して夕方荒田に歸つた。夜は八時頃より又座談會を行ひ私は初めに約一時間「北海道樽前山の話」並びに高山植物腊葉供覧を行ひ終つて會員の自己紹介やら吉村氏の保健法の實演等で時の至るを忘れたが明日のこともあるので十時過ぎ閉會した。

十一日は前二日の好晴に似ず早曉より雲足早く時々驟雨あり天候險惡の氣味があつたが一同は元氣旺盛で豫定より約三十分遅れて七時半荒田を發し村人の東導で若杉山頂を右に見てシヨウケ越の鞍部の附近の尾根に出でこゝで案内者と別れて私がリードし暴風雨の中を砥石山(八二六米)を経て三郡山(九三七米)に達した頃は風雨も多少収ままり佛頂山(八六九米)頂では山霧去來の間より四方を展望することが出来て愉快であつた。間もなく寶滿山頂に至つたのは午後十二時四十五分であつた。こゝでは一同約三十分の休憩をとり下山の途について太宰府神社の境内についたのが午後二時四十五分であつた。そこで福岡より先着の縣の本間社會教育課長と一緒に終了證書授與式及解散式を行ひ終つて一同記念撮影をなしこゝに意義ある第一回の登山講習會を終ることが出来た。

今回の講習會は縣としては全く最初の試みであつて種々期待

する處があつたがあひひに八月十日に縣下中等學校競技會が秩父宮殿下御台臨の下に行はれることになつて居たため自然一般の興味がその方面に向ひ又中等學校生徒は殆んど全く競技會に出席するわけになり人員は甚だ少數であつたが私の見た處では一般に會員の素質がよくかつ非常に熱心に終始されたのは講師としての立場から見ても甚だ愉快であつた。又縣廳側の吉村氏も同様に感じられむしろ素質のいふ少數の會員でこの第一回講習會の行はれたことに大なる意義があつたと云ふ様な意味のことを云つて居られた。

會員は縣下各地より來られ學校教員最も多く青年會員、學生店員等各方面の人々を網羅して居た。

又荒田部落の屬する篠栗町ではこの會に多大の好意を示され藤町長は會期を逃じて荒田に滞在せられ種々あつせんされ多大の便宜を計られたことは感謝にたえないことであつた。

猶縣としては斯様な催を機會ある毎に行ひ度い意向であり又更に進んで縣の體育協會内に登山部をつくつて登山の實行を助成する計劃があるといふことであるが、それ等によつて縣下に登山の氣風が盛んになることになれば私としてはこの上ない喜びである。(五、八、三〇)(竹内亮)

スキー小屋新設

- 一、場所 群馬縣利根郡水上村大字湯檜會字白樺地内
- 一、名稱 白樺ヒユツテ

一、設立年月日 昭和五年十月

一、管理者 東京高等師範學校山岳部

一、事務所 湯檜會温泉本家族館

一、使用法 實費公開す。宿料一泊參拾錢(内譯使用料十錢)

薪代二十錢)食糧の貯藏なし(使用希望者は本家

旅館に立寄り打合せをなすこと)

一、構造 亞鉛葺、平屋、建坪七坪、收容人員約二十名。

○山岳圖書紹介

辻村伊助氏の

スウイス日記 (昭和五年九月一日東京市

神田區北甲賀町梓書房發行定價四圓五十錢)

先年出版されたスウイス日記は殆んど純白に近い裝訂であつた。その時出版者の横山氏の語に著者はどうしても全部眞白に裝訂したいとの切望であつたと云ふ。私はその一風變つた清楚な書をどんなに喜ばしい氣持で讀いたことであつたか。好い本を有つことは唯手にして歩くだけでも堪らなく嬉しいとは嘗てロサンゼルスで鳥水さんから伺つた語だ。その「好い本」といふ語が有るの儘に示してゐるやうなスウイス日記が再び新しく裝を凝らして生れた。しかも「ハイランド」と恰も美しい姉妹のやうな姿で、そして親しい友の武田さんの「追憶」と高野さんの「純情の人伊助」と鳥水さんの「跋文」とに温く抱かれながら

アルプスの風光を泉の湧くやうに語らうとしてゐる、先づ巻頭
の略圖に記入された著者の通路を見てもよくも短い間にこう迄
歩かれたものだと思ふ。

スイスからオーストリアにはたイタリアの湖邊に或る時は
西にある時は南にまた北に東にと思ふが儘に山に登り谷に唱ふ
て漂浪の旅を續けてをられる。まことにその風の如く來つて亦
風の如く去る様はリヨンよりジュネーヴに入つて一目モンブラ
ンを眺めたいばかりに四日間を待ちあぐんで遂には「義理にも
歸へれなくなつて」シヤモニーに走り或は又ロザンヌよりの汽
車の中で急に思ひを變へてカンデルシュテークに行つて終ふと
いふ様で自らも「とかく迷ひがちな旅鳥」と云つてをられるそ
の通りである。併し「ボールのガイドブックは日本から遙るん
持ち廻つてバルカン半島をのぞいた全歐洲は云ふに及ばず北ア
フリカの旅行でも泊り〜のホテルの寢臺で暇さへあれば繰り
返へしてもう日本へ送り返へしてしまつた」と云ふ程にアルプ
スは見ぬ前からの故郷であつた、その心の故郷の山旅を何時も
晴々した淀みのない心持で續けて行かれた。そして氣まぐれに
飛び込んだカンデルシュテークとエツシネンゼーとそれからブ
リユームリスアルプとは辻村さんにとつて殊に思慕の土地とな
つたらしい。其處に眺めたアルベングリューンは最初のとときに
も又數ヶ月後山に傷手を負うて癒後の静養の折にもまた後年再
び其邊を訪ねられたときにも變りなく輝き映えてゐた。そして

また彼の悲しむべき震災の二日程前私に下された端書もエツシ
ネンゼーのアルベングリューンの寫眞であつた。

日記は冬の旅に始まる、リヨンよりジュネーヴに入る頃より
山の氣配に胸を躍らしながら遂にシヤモニーに寄り道をしレマ
ンの湖邊を経てローンの谷を廻りイタリア行きの豫定を變へて
レヨツチベルクに廻りシユピーツよりインターレーケンへそし
て遂にベルナーオーバーランドの核心に觸れてシユツレン邊り
の山麓を彷徨つてゐる中に堪えかねてユンクフラウとメンヒと
に登つてをられる、微睡むやうなレマン湖畔の冥想に耽つてを
るかと思へば眞冬のユンクフラウの頂に立つてポコ〜に凍つ
たパンヤチースを齧りながら嬉しさに躍つてをられる。「アルベ
ン行」の著者が「シヤンベンの如く淡きアルベンの空氣」と云つ
てをられるやうにその透明清澄な空氣は私等を夢幻の佳境に酔
はしめないでは己まない。彼の氷雪に輝く鮮やかな山の姿や美し
い牧場を眺めては心も軽く浮き立つて飄々乎として空行く白
雲と化する思ひがする。ユンクフラウとメンヒとの登山を終
つたこの旅鳥は早や何時の間にかルツアインに飛んでリギ邊り
の霧の中を遊んでゐる、と思へば次ぎにはツユーリツヒの橋の
上に立つて加賀氏の落したといふアルベンシュテークはないか
と河底を覗いてゐる。その落した杖は見付け得たか何うか流れ
の行末から遠い海を想ふた譯でもあるまいがツユーリツヒから
大きく飛んでサンゴタールの峠をイタリアへと越してゐる。此

の歐洲の屋根と云はれる峠を越した勢でアフリカ迄も行ったと
 のことであるが日記は北イタリヤの春淺き頃の美しい湖畔廻り
 に續いてゐる。アルプスを北より南へ或はまた南より北へと越
 した人達は何れもその風光風俗の大きな相違に驚き且つ喜ぶ。
 ルガーにしてもマジョーレにしても或はまたコモにしても何れ
 も北にアルプスを負うて夢見る湖水である。其處に咲く花も人
 も豊かな日の光に愛しみ育てられてゐる。湖邊に花摘む時も暫
 し氏は再び雪のベルニナを越えてエンガデインの高原に行く。
 アルプスの中でも此のオーバーエングアデインは最も高原の特性
 を具へてゐると思ふ。セガンテイニが生涯歌ひつゝ畫いたその
 跡を訪うてはその繪畫の中に何れ程温い知己を見出されたこと
 であらう。サンモリツツを去つて北行してウエーゼン邊りのさ
 すらひこそは私等に憧憬の焰を點じたアルプの寫眞の收獲地であつた。再びツューリッヒの人とはなつたものゝ大學の記念祭
 の騒ぎにしたゝか氣を悪くしてテイロールの山へと逃げるや
 うに走る。

其後ミュンヘンの山岳博物館を訪ねられたり遠くロンドンに
 武田さんを訪ねたり或はスコツトランド、スカンディナヴィア
 と旅の疲れも見せず渡り歩いて初夏の風が野の國に吹き初める
 頃吸付けられたやうに亦瑞西に歸へつて登山の計畫に心を躍ら
 してゐる。當初の計畫では先づベルナーオーバーランドの山岳
 を登つた後にヴァリスの山に向はうといふ豫定であつたのが其

最初の山のグロスシュレックホルンの登山に不幸にも傷ついて
 終はれた。ロンドンからの近藤氏とインターレーケンに待ち合
 せて宿望のグロスシュレックホルンへとヘツスラー、フォイツ
 の二人のガイドと荷負のペーター、カウフマンと都合四人連立
 つてグリンデルワルトの村を發つたのは七月二十九日雨の中で
 あつた。ペーレツグの小屋に一泊してウンターグリンデルワル
 ト氷河に沿うて登つて行くのであるが途々の一木一草が雨風に
 戦ぐさままでが見えるやうだ。懸崖に身體をのり出してエーデ
 ルワイスを摘むだ處は後年計らずも私も度々登つた。雨降れば
 霧は足許の氷河の上を走り晴れれば日の光にメンヒヤアイガー
 が氷を纏うて聳え立つ一日を、シュトラールエツクの小屋に天
 氣を待つて八月一日四人の一行は朝まだきに起きてランブの光
 を頼りにシュレックホルンへと向つた。登攀は新雪に餘程惱ま
 されたやうで正午も近い頃にその山頂に着いた。私は仰のいて
 冷たい空氣を思ふが儘に吸ひ込んだ、海拔四千八十米突の尖峯
 を更に高く覆ふた空には塵ばかりの曇りもない」といふ群青の
 空の下に胸を擴げてその痛いやうな空氣を深く吸つて靜寂に酔
 ふたことであらう。併し此の喜悅の直ぐ後には怖ろしい危難が
 待ち構へてゐた。歸途のクローアールに差しかつた時——そ
 のクローアールをもの一時間も降つたとき不幸にして雪崩に
 襲はれた。そしてフォイツを除いては誰も深い傷手を負うて終
 った。此の九死に一生を得た四人は困難を極めて漸く小屋に迄

辿りつき幸にも來合せた登山者達の救護を得て山を下つたのであつた。ヘツスラーと近藤氏とは擔架に乗せられて氷河の上を運ばれて行く。息苦しい程に傷付いた著者は漸く歩けるといふのでガイドに助けられながら下りて行く。山には尙も雪崩が木魂してをつたらう。まことに傷ましい光景である、フオイツに對する非難も見受けられるが同人は今もキャナデアンロツキでガイドをしてゐると思ふ。此の遭遇には確かにガイド達の手落が大分あつたやうである。

山より山へとの憧憬の計畫を慥しく短い夏に盛つて最初に取つた山で思ひがけぬ難に遭つて病院に養ふ身となつた心惜しさは全く氣毒なことであつた。併も親しい友が二人病室の中を煙草で煙くしながら命を取られやうとしたその山への係戀を語り合つてゐるところなどは全く病も膏盲に入つたものと思はせる。此の靜かな山の見える林の中の病院はまた辻村さんにとつては令室を得られる奇縁ともなつたのである。

續スウイス日記

卷末に收められた此の短篇は前篇をものせられてより數年後瑞西再遊の時の記録であつて箱根湯本の辻村邸跡より發掘せられて新らしく世に出づるものである。「歸郷」と「ブンデスターグ」との兩篇に過ぎないが卷中最も精彩に充ちてをるところと思はれる。父として夫として再びアルプスの山懷に歸へり來て靜かに山と人とを想ふ邊りは何んといふ豊かなそして寂しい姿

であらう。

「自然に對するとき人は微細な鐵屑に過ぎぬ、腕は父らしく無心の兒を抱いてゐるが天外の雪に吸ひよせられるこの心をどうすることも出来ないのだ、私は手帳の片はしに人も惜しきれどいつしか妻を趁ふ眸は雪の山にむかへると書きつけて寂しく妻をかへりみた」といひまた「子を膝にのせて山を見てゐる妻をいぢらしく又尊く私は感じた、そして同時に裏切るやうな不純な自分を山も亦人も思ふまゝに愛し得ない自分をつくづく情なく感じたのである」と述懐し「家族と共に居れば獨り離れて山を思ひ山に入れば却つて麓に残した家族を想ふ」といふ、これこそ眞に神の如き心とでも云ふのであらうか。

遠い漂浪の旅から故郷に辿り着いた氏は再びブリュームリスアルプの夕榮えに眺め入つてゐる。「アツシ、リエトの寒村が山側の高原に點在するうしろには、ブリュームリスアルプの山塊が屹えてをる。氷山のやうなこの群峯は今白熱の中心となつて天の一角から強い冴えかへつた眩しい光線を輻射してゐる——あれが氷雪に包まれた山岳だらうか——馬鹿な？ 火の塊だ、白熱の靈火だ、宇宙の光源だ、我等が情想の熱源だといふのをどうして人が知らなかつたんだらう」と讀む者の胸の中にも一脈の光の點せられるのを覺える。

ブンデスターグには山の友を思ひながら遂に「山を思ふ人だけが永遠の氷に鎮された山岳の間に一國をつくらうとするのは

果たして不合理であらうかと呼びその理想に近い國をヘルヴェツィアに見出したのであつた、ブンデスタグの八月一日は東西の紀元節に當る。その夜ニーセンの山上に燃える火を眺めながら肅然として唱ふ國歌に人と共に妻子と共に聲高く唱ふ、稿は未完のままこれにて終つてゐる。

此の稿の旅の頃も同じスウイスのそれも辻村さんの居場所とは目眩の間の處に居りながら、そして互に便り毎に是非とも會はうと望みながら遂にその機會を得ずに過ぎた。それだけに此の稿は私にとつては感慨が深い。

辻村さんは生涯を温い家庭と友との中に山を思ひ山に登りそしてまた山の美しい植物を友として送られた。此の「スウイス日記」には氏の語と寫眞とを通じてアルプスと夫れを圍む谷々と、そして山と人との不可思議な關聯とが繰り出されて名工の腕になつた不朽の綾錦のやうに燦然として輝いてゐる。

(横有恒)

辻村伊助氏著

ハイランド

梓書房昭和五年九月發行(定價三圓)

本書はハイランド、飛驒山脈の縦走、高瀬入り、神河内と常念山脈、嘉門次を憶ふ、登山の流行、ベルネル、オーベルランド及び短歌の數篇より成る。

ハイランドの一篇は一九一四年六月夏未だ淺きスコットランド山岳地方の登山記である。著者は此の山旅を先づエディンバラ等を経て東方よりケールンゴルム山脈に達した後インヴァネスよりカレドニアアンカナルを経てベン、ネウイスに登り更に南下してベン、レデイ及ベン、ローモント方面に至る。スコットランドの山岳は標高より云へば三千呎より四千呎前後のものに過ぎないが地域が北に寄つてをると一方氷河の作用を受けた地方ださうで自然風物に全く他に見られない特色が瞭らかに現はれてゐる。堅い骨張つた山は重疊しその山波の間を主として草原の穠やかな併し如何にも寂寥な溪谷が曲折してゐる。そして山の裾の至る所で出遇ふ湖水は又清くそして靜安である。大體何處に行つても人氣の無いヘザーに蔽はれた高原で放牧の羊が長閑な姿で遊んでをつたり村から村へ繋ぐ大道に野兔が飛び出したり或は又鹿の群に出遇つたりする。著者は恰度初夏のハイランドに浮く白雲のやうな安易な平和な心地で思ふ儘に歩かれてゐる。「クルーニーの流は淀をなして脚下にたゞへてゐる、その水面には無數の羽虫がせせこましく輪を畫いてをるが雲も浮かぬ夕空のあかあかと山を覆ひながら流を包む白樺の葉末も寂として寢靜まつたやうにひつそりとしてゐる、八時半から九時、十時、十一時とその長い黄昏の寂しさはハイランドで無くては決して味へない」といふ風に旅から旅へと彷徨ひながらバイロンを忍びスコットを思ふて行く。スコットは云ふまでも

なきことながら若しも亦ロバートバインズの歌つた彼の郷土の空気に觸れんとする人あらば本篇はその範圍でも見逃すことの出来ぬ文献と思ふ。

飛騨山脈の縦走は鳥水氏が著者の此の種の處女作であらうと云つてをられる如く同氏にとつて然るべしと同時にまた我が國近代登山の初期を物語るものである。スウイス日記及ハイランドに豊麗な天稟を以て私等に風光を語る著者は既にその前に一家を成してをられた。殊に高瀬入りの一篇の如きは讀む者をして陶然として信州路を遙かに思はせる。今より二十年も前の所謂探險時代の登山者の未知の山や谷への係戀をさこそと頷かせられる。その思慕の念は一方に又年と共に荒び行く神河内へ著者はわざ／＼斷つて此の文字を用いられてゐるに對して義憤の聲となつて現はれる。登山の流行の一篇も又滅び行かんとする山岳美への挽歌とも云へやう。今や漸く山岳美の保護の聲も次第に大きくなつて來てゐるが、この時勢は此等諸先輩の擔ひなき努力に生れ且つ育てられたことに負ふ處が大きい。そして國立公園の問題も眞面目に扱はれてゐる折柄單に一部の人士の如く公園設立によつて莫大な金錢上の利益が齎らされると思ふのみではなく、自然美の保護保存と、開發することとの間に横はる相容れ難い問題をどのやうに處理しやうとするか殘された一つの問題だと思ふ。

嘉門次は不正の初期頃までに山に入つた人達の多くは皆厄介

雜 錄 ○山岳圖書紹介

になつた名案内人であつた。恰度アルプスの初期の案内人が獵師であつたやうに彼も亦獵師であつた。今日では山案内人の數も内容も年と共に變化しつゝある、嘉門次を憶ふの一章は彼に關する記録の少ない場合まことに貴重なるものである。

巻末に收むる短歌百首と長歌三首とは發掘された遺品の一つであつたといふ。著者の詩想は一部分を載せたに過ぎないこの歌集の中にも充ち輝いてゐる。

若き日の未だ來ぬやと偲松の煙に染みし夏衣着る。

さびしくも人と云ふ名を脊に負ひてこの天地の片はしに生

世を人を十里の雪に驅て來て獨り梓の瀬の音に寝ると歌ふ。また

春逝きて我は御墓の石あばき冷えし運命の糸破り來ん

と。誰か君を知る者また此感なきを得やうか。念ふに著者の生涯は辻村太郎氏の言の如く高山植物のやうに清楚であつた。本書及びスウイス日記はその收むる傑れたる寫眞と共に氏の山との生活の全般に亘つて記されてあるだけに故人の風格を忍ぶに幸である。兩書共に早春雪の消え間より咲き出でしクロカスの如くに待ち設けたる人々に限りなき喜びを與ふることと思ふ。

(横有恒)

尾瀬と鬼怒沼

武田久吉氏著 昭和五年八月 東京

梓書房發行 四六版 本文三三三頁 圖版一〇〇枚 定價三圓

ひとたびそこを訪れたことのあるものは、きつとまた二度三度と行つてみたくなる尾瀬、いくたびでもゆくごとに愛着をば増す尾瀬。その尾瀬沼、尾瀬ヶ原が山を旅するものゝ口に上るやうになつてから随分久しい年月が流れた。「山岳」誌上にも既に第一年第一號に本書の著者の「尾瀬紀行」があるし、第十一年第二號に沼井君の「尾瀬の事ども」があり、第十九年第一號は尾瀬に關する記事のみを以てし「尾瀬號」と題された。

まことに尾瀬は美しくいところである。国立公園計畫とかいふ風景保存を目的とするのか、景勝破壊を目的とするのか、眞意を把握し兼ねるやうな計畫に於て、候補地として選定されたのも又宜なるかなである。だがそんな計畫などはどうでもいゝとにかく尾瀬は愛すべき地である。

その美しき愛すべき尾瀬の全姿！が本書の刊行によつて、私達の前に展開されたのは何よりも喜ばしいことである。殊に登山者として最初に尾瀬に關する紀文を發表された武田博士によつて集大成されたのは、まことに山と人との和を得たるものと言ふべきであらう。高山植物の寶庫と言はれる尾瀬を描くに武田博士の筆を以てしたことは、配合の妙々に至つて極まれりといふも敢て過言ではない。

本書は冒頭に「尾瀬と鬼怒沼」と題してとの地方に關する概論を載す。新らしく稿を起されたもので、高山と深山の比較論から尾瀬と鬼怒沼の地理的考察、地名の考證及び傳説、この地方

への交通に至るまで該博なる蘊蓄を傾けての叙述は讀者を益すること妙からざるものがある。之に續く紀行としては「山岳」創刊號記載のものを全く書直された「初めて尾瀬を訪ふ」、嘗て山岳誌上掲げられた「尾瀬再探記」、それに加ふるに「春の尾瀬」及び「秋の尾瀬」なる二項を收む。尙この外、植物學者にして且つ豊かなる詩想をもつ館脇操君の「尾瀬をめぐりて」を併録してある。

植物學に造詣深き著者の詳細を極めた記述は實に貴重なるものであり、またこの地方に旅する登山者をして、山谷の衣ともいふべき植物に對し興味を湧かしむるに足る。世の多くの登山者は、林相を叙するに「針葉樹林、闊葉樹林、針闊混淆林」と簡単に片付け去り、植物の美觀を記するに「色とりゝの高山植物」といふより外に術を知らないのである。それが本書を讀むと、山中の草木ひとつとして名を持つてゐないものはないといふことがはつきり分る。文中にほとんどひつきりなしに片假名が出てくること實に驚くべきものである。黒々として茂りあふ深林、百花瞭亂たる高山植物に接したとき、あゝ美はし！と觀ずることに於て敢て人後に落ちないだけの積はあつても遂に植物學に縁なき衆生の一人であり、また終に一個の跋涉者を以て満足してゐる私ではあるが、今こゝに收められた紀行を一讀するに及んで、せめてこゝに列擧せられた數多い植物の百分の一をでも知つたならば、私の山旅が、いかに楽しく、趣味ある

ものとなることであらうかと感じたのである。

本書の諸篇は植物を愛し之に興味を持つ者にとつて得難き文献であると言ふまでもないが、紀行としても盡きざる興趣をそこゝに見出すのである。直截明快な著者の筆は尾瀬沼を中心とする風物を描いて餘すところがない。それに加ふるに著者一流の直言が所々に出没して、或は心なき似非登山家をいましめ、或は都人士地方人の自然に對する蒙を啓らいて、思はず微笑を禁じえないやうな個所も少くない。中には著者を措いて他に筆にし得る人なしとの感を深くする章句も見られる。

併録された館脇君の紀行は本文の約三分の一を占め、質から言つても量からいつても共著者の名を冠するに値するものである。嘗て尾瀬號にこの文を読んで、科學者にして詩人たる君の自由な筆致の冴を感嘆したのであつたが、茲にまた再びその感を新たに、至佛登山の項など繰返し讀んだ。本書、君の文によつて錦上更に花を加へたものと言ふべきである。

著者の「初めて尾瀬を訪ふ」は今より二十五年前に執筆されたものを全部書改められたのであるが、これは寧ろ原文のまゝこゝに収録された方がよかつたやうに思ふ。「岩州の西南隅上州と接するの邊に一山あり、燧ヶ岳と云ふ、海を抜くこと七千八百餘尺、峰頭二つに分る。之を日光の諸山より望むに形頗る秀麗なり」といふ書出しで始まる「尾瀬紀行」は、漢字制限の世の中となつては見たこともないやうな雑字が出てくるにして

も二タ昔半も前のあの地方の模様を窺ふにふさはしい文章である。そこに私達はふるく書かれたものなつかしさをくみとることが出来るばかりではなく、著者を親しく識る者にとつては、往時の著者の姿を想見し得るといふことから言つてもこの「尾瀬紀行」は書直さずにおいて欲しかつたと思はれるものである。

「尾瀬紀行」が書かれた頃から今日まで二十五年の間に吾國登山界の變遷は實に著しいものがあることは言ふまでもないが、文字の世界の推移も亦驚くべきものがある。文學方面のことは門外漢であるから暫らく措いて、「山岳」誌上に現はれた變化だけを見て時代に移りといふことが必々と感じられる。今の私達にはどうしても書けないやうな登山紀行が、當時の登山者の山に對する態度や、今日からは想像もつかないほど困難であつた登山の記録を雄辯に物語つてゐるのを讀むときは、心に迫る何物かをそこに見出すであらう。ふるきものゝ歴史的價値がそこにあるのだ。舊文を書直された著者は、その冒頭に於て「話は大分古臭い。徹も生えてゐやう、或はまた幾分腐敗の氣味なきにしもあらずだから、出来るだけ簡單にして置く。」と述べられてあるが、それは著者の謙遜であつて、舊稿は斷じてカビが生えたり腐つたりする態のものではないと思はれる。否、むしろ時の流れると共に益芳醇さを加へてゆく葡萄酒のやうな味をもつた文章である。繰返していふ、「尾瀬紀行」はそのまゝにしてにおいて欲しかつた。

尾瀬沼を中心とする山谷高原池沼の記述はまことに盡して餘す所なしであるが、隣接地方について見ると、日光方面或は藤原方面が比較的詳細に叙述されてゐるのに、距離からいへば日光よりも近いと思はれる銀山平方面が閑却されてゐるのは稍物足りないやうな氣もする。春、夏、秋の尾瀬は充分に描かれてあるが、私はさらに冬の尾瀬を知りたいと思ふ。花はなくとも雪に埋もれた尾瀬に私は強く心を惹かれる。一兩年前からスキートの練習をはじめられたとか傳へきく著者が、嚴冬或は早春の尾瀬を訪うて、美しき寫眞の收獲を世に示さるゝのもさう遠いことではあるまいと、私はその日を楽しみに待つてゐる。

本書に挿入（卷末に纏つてゐるからこの文字は當らないかとも思はれる）された寫眞無慮一百枚、先づその分量に驚かされついでその素晴らしい見事な出来栄に感嘆させられる。「とに角フィルムや乾板も二三種を用意し、種々の濾光器其他の附屬品や、レンズも焦點距離を異にするもの三種も携帯するとなると中々かさ目方も多くなる」と言はれるだけあつて、全く他の及ぶべからざるものがある。科學者の鋭い觀察眼と永いあひだ山を旅された經驗深い登山者の高い觀賞眼とがレンズを通して茲に現出されてゐる。一枚々々繰つてゆくと、尾瀬に遊んだことのあるものは勿論、まだ見ぬ夢を描いてゐるものも自ら仙境にあるやうな氣がする。どれと言つて優劣はないであらうが私の特に好む圖を擧げてみるならば次のやうなものである。

笠科川、沼のジュンサイ、類雪窪の沼野から仰いだ燧ヶ嶽、水芭蕉、駒ヶ岳の御花園、平滑ノ瀧、鳩待峠よりの至佛山、根室河骨、春の上田代、川上川中流、高蘆山など。

かう抜きだしたからと言つて、外の寫眞がよくないといふ譯ではない。たゞ日本の中位山岳の風景は特殊の味を持つてゐるもので、その味は實際それ等の山や谷を親しく歩いてゐるときにのみ感受し得るのである。そして私の經驗からすると、これ等の山谷の姿は寫眞に撮つてみると撮影者以外の第三者には案外興味の薄いのを免れないといつたやうな場合が尠くないといふことを茲に一言附加しておきたい。

本書の寫眞一百枚はやゝ多きに過ぎるの感がある、燧ヶ岳の全姿を収めたものゝみでも十一枚を數ふる。それぞれ美事な寫眞ではあるがこんなにはいらぬやうに思ふ。第六圖と第二十圖と、どちらか一枚で事足りはしまいか。この數多き寫眞は製本技術上本文中に挿入することを不可能ならしめたらしく、卷末に一括されてあるが、それでもまだ製本困難と見えて、返讀するうちに字と繪は離れ離れになりさうである。寫眞を三十枚ぐらいに留めるか、それとも圖版とその説明とを本文から離して別冊にでもした方がよかつたと思はれる。裝訂は春が絹ポプリンで配するに綠のラシヤ紙を以てしてある。私はこの人絹交りの妙に光る布は餘り好まない。春文字の字體は中々出来なのに絹ポリンのためまるで引立たないのは甚だ惜しい。

言ひ落したが、本書には巻尾に地圖一葉を添付してある。藤原圖幅の東半と燧岳圖幅の西半とを接合したもので、五萬分一圖幅にない地名、通路など實査に基いて詳細に記入されてある非常に便利な地圖である。接合の手際も中々いい。この圖を見てもすぐ氣がついたのは、至佛山下の山鼻の小屋、景鶴山下の水電の小屋、いづれも記入のないことである。檜枝岐の小屋が正しく記入されてあるのにどういふ譯か、やゝ諒解に苦しむ次第である。根羽澤に温泉宿の新設されたのも省かれてある。再版の際には補正して載せたいと思ふ。

この妄評を書いてゐる最中に、尾瀬の主、平野長藏老人の訃に接した。四十年來あの静けさそのものゝやうに湖畔に居を卜して、怪氣焰をあげてゐた老人が逝つて尾瀬の秋は一入寂しいであらう。老人が武田博士の著を手にしてから逝つたのならば彼は地下で定めし喜んでゐることだらう。(藤島敏男)

銀嶺に輝く 報告と追悼。東京帝國大學運動會スキー山岳部。昭和五年七月發行。菊版。一六四頁。

本年一月、ひとり吾國の登山界のみならず一般社會の耳目を聳動せしめた立山劔澤に於ける登山者四名山案内二名の一行の遭難に關する報告と其追悼とを収めたものである。

嘗て一九二二年——二三年の冬、楨氏一行の遭難から八ヶ年の後、かの立山は再び絶大な犠牲を吾國登山界に拂はしめたのである。しかも一行六名全滅の悲運に遭遇したことは過去にも

未だ惹起したることなき慘事であつた。吾國の冬季登山は尙發達の途上にありとは言へ今回の犠牲の餘りにも大なりしに誰しも慄然として言ふべきところを知らなかつたのである。今こゝに故人の遺友相集りて編める本書を手にして悲愁を新らたにし若くして逝ける四人の有爲なる登山家と、精神にして愛すべき二人の山案内とのために、何人も涙を禁じ得ないであらう。

x

x

本書は前半報告の部分を、準備出發から遭難まで、搜索から發掘まで、遺書の發見、遭難の原因、結論、感想——劔澤の搜索隊に加はつての六項に分ち、後半追悼の部分には、一行中の窪田・田部兩氏の遺稿及び遺友の追憶文を収む。

これから本書を読んで感じたことを少し書いてみようと思ふ。敢て本書に記述された順序を追はず、感じたままに筆を執ることとする。

一行の計畫、準備等に就ては別に何もいふことはない。一行中の窪田、田部の兩君は卷末の登山經歷から見ても過去に於て夏山、冬山の數多い經驗を持つてゐたことは察せられるし、松平、土屋兩君も亦行を共にするに足る登山家であつたこと、思はれるから、嚴冬の劔岳を攀ぶるに充分な成算があつたに違ひない。しかも芦峯の名案内二名を伴つてゐるのである。この力強い登山家の一隊を全滅の悲運に遭遇せしめた暴虐な雪崩の成因に就て本書の語る所は可なり詳細に亙つてゐる。しかし除

員中残存者の皆無なりしことは、また搜索隊の現場に到達するまで相當の時間が経過したことは、その記述を總て憶測によるの他なからしめてゐる。従つてその結論も假定的であり、異論を挟む餘地も先づないといつてよからう。假令異説を立てゝみた所でこれも推測に過ぎないから根據は極めて薄弱である。これは矢張り本書にあるやうに、一九二九年末の不順な天候、一月四日以後八日までの多量な積雪、九日朝の強風などが雪崩の直接或は間接の原因となつたものであらう。それに例年ならば殆んど埋没してゐる筈の劔澤小屋が雪の少なかつたために露出してゐたことも一行の不運であつたと思はれる。一月二日から八日までの滞在中、小屋の附近に於て雪崩の惹起皆無であつたことは想像されぬから、危険の豫感を持つべきであるといふやうな議論もきいたが、假令二三の小雪崩を目撃しても、建設以來數年を経た小屋にゐた一行がそれによつて危険を感じないのは當然であり、またもし危いと感じたならば何とかして室堂までも移つたに違ひないと思はれる。小屋を信頼して、根氣よく劔岳に攀ちる日を待つてゐた一行はほんとうにめぐりあはせが惡るかつたといふより仕方がない。

第一回搜索隊の派遣、劔澤小屋全潰の發見、大規模な第二回搜索隊の派遣、遺骸の發掘と詳細な記述は讀む者の涙を誘つてやまぬものがある。さらに遭難後數ヶ月を経て發見された遺書の内容は殆んど正視するに忍びないものがある。さうした一行

中の窪田君の遺書の文字から見ても、發掘當時の狀態から見て遭難後十二日間雪の下に埋没されてゐながら生存してゐたといふ奇蹟的な事實が證明されてゐる。それから窪田、田部兩君が恐らく臨終まで筆をとつてゐたと思はれる二冊の手帳が遺骸と共に發見されずして、數ヶ月を経た後、極はめて不思議な箇所から發見されたことが記されてある。

かうして本書の報告を讀んでゆくうちに、私達は「疑問である」とか「疑問の節が生じて来た」とかいふ文句の屢出てくるのを見る。しかしその疑惑が何物に緣由してゐるのか甚だ漠然としか記述されてゐないのは頗る遺憾である。その由つて來る所をもう少し理論的に書いて欲しいと思ふ。例へば六十三頁の「又若しも窪田君の生存を知り乍ら自分一個のガイドとしての誇りをまますために虚偽の報告をし、そのために救ひ得べき窪田君を救ひ得なかつたとすればそれは許すべからざる行爲であるがその様な疑ひが一部に發生してゐることは遺憾この上もないことである。」といふ如き、二十日發掘の際まで生を保つてゐた窪田君が十三日には無論意識明瞭であつたに違ひないといふこと、第一回搜索隊の三人が潰滅せる小屋跡に一時半もゐて假令スキーを脱がなかつたにしても小屋跡に全然手を觸れなかつたとは信じられないこと、其時の案内達が一月と六月と二枚舌を使つてゐることなどから本書の編者に疑ひが發生したのであるが、もし然りとせば疑ひを抱いた人達は自己の疑問とする所

を更に穿鑿して之を解く方法を講ずべきである。

編者はもとよりかゝる意味に於て「一部に發生……云々」と書かれたのではあるまいが、讀者は俗にいふ「奥函に物のはさまつてゐる」やうな感じを受けるのである。この忌はしき疑惑、眞なりとせば登山界に於ける不祥事に對して、私達は何とかして解決の方法を講じたいと思ふのであるが、本書の記述するところのみを以てしては徒らに隔靴搔痒の感あるのみである。

搜索隊の組織編成は非常な大規模なものであるが、その編成に就て一二遺憾に思はれる點がある。これは今後斯る際に於ける參考になる點が多いと思はれるから次に述べる事とする。第一に隊員中に醫師を加へなかつたのは、遭難せる一行中生存者なかるべしとの見込からか、或は適當の醫師なかりしたためか、結果から見てもかゝる場合には醫術の心得ある者を隊員に加へたいと思ふ。第二に隊員の殆んど全部が山案内或は人夫であつて、他は一人の警察官と二人の帝大山岳部關係者に過ぎなかつたのは、富山縣當局及び芦峯寺で死體發掘作業に直接間に合はない者の登山は一層食料の缺乏を來す恐れが又手足ままとひになるため拒絶する方針(二十六頁)であつたといふから、己むを得ないとも言はれるが、我々は斯る場合には山岳部關係者が更に數名參加しなければならぬといふ點を警察當局に強調したいと思ふ。もとより稻積中島の二氏は現場に於ける發掘作業及遺品整理に際して最大而努力と注意とを拂はれたに違ひない

が、遺品の整理など二人ぎりでは手不足で思ふに任せぬものがあつたと思はれる。山岳部員が更に二三人も加はつてゐたらば遺品の吟味などは、より徹底的に行はれ、故人が臨終まで書き付けてゐた、最も遺憾の近くにあるべき手帳が發掘當日脱落して後日發見されたり、三冊の内一冊が遂に紛失するといふやうな結果を來たさなかつたかとも考へられる。搜索に關する一切の方針が警察當局に依てのみ決定されるといふ遺方は確かに妥當を缺くと思ふ。

次に遭難の善後策が一月廿日の發掘で全く打切られて了つたのも、今日から見れば遺憾と思はれる。故人の遺骸を納棺する前に何か記録になるべきものはないかとポケットを探られたが何物も見出されなかつたこと、窪田君が手帳を二冊携行したことが判明してゐたのであるから、三月或は四月にもう一度現場の搜索を行ふべきではなかつたらうか。結果からの議論ではあるがこの點も稍物足りない。

以上で本書を讀んでの私の感想は終はる。たゞ本稿は山岳書批評紹介の意味をもつてゐるものであるから蛇足ながら編輯其他に就て一言附加したい。

銀澤に於て遭難されたのは窪田、田部、松平、土屋の四氏と福松兵次二人の案内とであるが、本書の表紙には窪田、田部兩君追悼記念と記されてある。他の四人の人名を省略したのは、編者の知己でなかつたからと巻末に斷つてあるが、追悼文

遺稿等は或は已むを得ないとしても、せめて表紙には全部の名を掲げるか、然らずんば氏名を全く省略された方がよかつたと思ふ。タイトルの「銀嶺に輝く」はこの種の書の表題としてはやゝ華麗に過ぐるの感があり、内容と釣合はず、また選定者の意圖を解するに苦しむ。最後に限定版にされたのは結構であるが、番號はタイトル・ページの裏か、奥付の上に記入すべきものと思ふ。

筆を擱くに當つて、私は、社會のためにも登山界のためにも將來大いに貢献する所あるべき有爲の才を抱いて不慮の災厄に遭はれた六人の靈に心からなる哀悼の意を表し、消ゆることなき悲愁を胸に抱かれる遺族の方々に滿腔の同情を捧げ、敬愛する山友達を失へる淋しさに泣きつゝ本書を編んだ編輯者の勞を多とする。(藤島敏男)

霧の旅 三十四號 昭和五年六月

「霧の旅會」といへばすぐ大菩薩連嶺を聯想するのであるが、こんどの號には本欄、雜錄を通じて、大菩薩連嶺に關する記事がまつたく見當らない。何だか物足りないやうな氣がする。

霧の旅の同人の言はれる大菩薩連嶺なるもの、範圍はずいぶん廣いものであつたと記憶してゐる。してみればまだ探りつくされない箇所がすくなく残つてゐることだらうと思ふ。まさか「霧の旅會」の大菩薩連嶺に對する熱、愛、親みといふものが、さきに發行された松井氏の著書「大菩薩連嶺」の公刊

によつて先づ一段落を告げたといふ譯でもあるまい。澤の名、尾根の名、山の名、それ等についてもまだ「穿鑿の餘地はあるだらうと思ふ。私個人としては近頃は所謂土民測量といふものを極端にやる事をあまり好ましくないと考へてゐるのである。

といふのは、土民測量といふものは或るひとつの地方の獵師や山案内を多勢つれて歩くか、そういふ連中の寄合ひでも開かない限り、一人や二人の土民をつかまへて聞き訊したところで大した正確さを期待することが出来ないのみならず、地圖にやつと存在を認め得るやうな小さい澤の名などを突きとめてみたところ、山歩きの上に何物かを齎らすとは考へられない。

極端にいふならば、少々苦しいのを我慢さへすれば、どこからでも登り得るし、どこからでも下り得るといふやうな山々の登路の探求に浮身をやつしたところで始まらないといふ氣も無いではない。

霧の旅會と大菩薩連嶺と兩者は不可離ものとまで考へてゐたのに、今度の雜誌にその山に關する記事の見えないのはたしかに寂しい。更らに「大菩薩連嶺について同人諸氏の踏査、探求、穿鑿、考證が進められることを切望する。さうしてまた從來發表された案内記的な紀行よりも、季節々々に依つて變化してやまざるその山の風趣を窺ひ得るやうな文章に接したいと思ふ。(藤島敏男)

岳聯報告

1 關東學生登山聯盟發行

昨秋十一月華々しく誕生した關東學生登山聯盟の第一回報告である。内容は一九三〇年四月一日から五月末日までの間に加賀山岳部員の遂行した登山の記録と、この夏の各校山岳部の登山計畫とが主要部分をなし、冒頭に岳聯報告の意義なる一文あり、末尾に會報を集録してある。

表題の「岳聯」なる文字は一體何を意味するのであるかといふ疑問が先づ起つた。スピード時代とやらいふ譯の分らない時代になつても道を歩くのものゝしてゐれば、電車の乗りおりも愚圖々々してゐる人間の多いくせに、言葉だけは矢鱈に端折るのが流行する御國のことだから、これも何かのアプレリアションに違ひないが、どうもよく分らない。關東學生登山聯盟といふ八字の中からガクとレンとを探し出してみると「學聯」となるやうだ。してみれば「岳聯」は「學聯」をもじつたものだらう。もつとも岳に登るのは一種の學問かも知れないから「岳は學に通ず」とでも言ふのだらう。

主要部分をなす各校の登山記録、登山計畫は從來雜誌「山岳」の各學校消息欄と各校山岳部報の年報欄とのあひだをゆくやうなもので聊か物足りない感がある。こゝに報告を提出してゐる各校山岳部はどれも材料を出し惜しんでゐるやうにも見える。あんまり詳細に書いてしまつては各自の部報を出すときに困るといふやうなことがあるのぢやないかと思はれる。之は筆者の僻目かもしれないが、部報を持たない學校はとにかく、まだ自

分達の部報を後生大事に守つてゐたい気分があるやうだ。いつたい學校を背景とした山岳部の機關雜誌がそんなに大切なものかしら。學校の部報にならば書くが、外のものには書きたくない。部報を掌々たるものにして内外に校威だか部威だかを發揚しようといふ氣持——そんな積りは斷然とないと言はれよばそれまでであるが——が方々にあるやうに思はれる。學校々々によつて、ちいさい仲間を捏ね上げて、何をするのも、どこへゆくのも仲間とでなければならぬといふ人達が擧ぐないのであるまいか。

大體この日本帝國といふ國では學校色といふか學校意識といふか、とにかくそんなものがいやに濃厚過ぎる。學校にゐるあひだはもとより、社會に出ても同じ學校の出身者が、寄り／＼集合してはくだらない話ばかりしてゐる。何の意味か分らない。學校時代に浸りこまされた校風の維持でともあるのか。馬鹿々々しき限りである。しつかりした校風なんぞの吹いてゐる學校がどこにある？ ほんとうに人間を作るやうな學校がどこにある？ 筆者が殊に不景氣な學校を出たから、かく感ずるのかもしれないが、まあ學校と名のつくものはいたい似たやうなものだらう。そんな學校の背景を虎ノ子のやうに大切にしてい、吾等は何とか學校の學生なり、何とか學校山岳部々員なり何とか學校卒業生なりとかたまつてゐる人間の氣が知れない。學校なんてものは、あんまり早く社會に出ると山登りも碌に

出来ないからまあ入学しておかうといふ位のものだ。甲町から乙村へゆくのに便利な乗合自動車があればそれに乗るといふのと大した違ひはない。こんなことを書いたからといって、筆者は斷じて、學校を無視していゝとも、近頃流行のアデピラとやらいふ小魚の名みたいなものをまいて學校騒動をやるのをいゝとも言ふのではない。そんな暇があるなら、近頃の人達はあんまり趣味としてとらないらしいが、ヤブ山——どこの山か筆者は知らず——へでも出掛けたらよささうなものだと思ふばかりだ。

學校の背景を棄てられない人間は、ひとりで道中のできない奴か、一人道中がおそろしい奴に限ぎられる。といつても何も「單獨行」を隆盛ならしめよといふのではない。矢鱈と單獨登山が流行して遭難が續出したリ、日本山岳會問責團が輩出したリするとたゞさへあんまり静かでない世の中が更に騒然としてきてやりきれなくなるから岳へ登るのは、心からなる友達とゆかうと、隊を組んで足並揃へて押しださうと御自由であるが、要するにこんな駄文を書いたのは、各學校の山岳部が各々學校意識をもう少し緩和しなければ、この岳聯報告の内容は中々よくなるまいと思ふからである。

記録の内容を見るに、積雪期の高峻山脈の多くを含み、また東京から近い低山も尠からず記載され、その範圍は頗る廣い。これによると遊技的登山を高唱し、真正なるアルピニストを以て

自任してゐる連中も、時にはザイルやシユタイクアイゼンを必要としない山々に登るものであるといふことは確かである。ヤブの茂つてゐさうな山にも登つてゐるやうである。かうなると、真正なるアルピニストと然らざるものとの區別は極はめて漠然として来る。真正なるアルピニストと泡沫登山家——この語の意義をはつきりと把握し得ないが、これも或は筆者がその部類に屬してゐるためかもしれぬ——とを何も事々しく峻別する必要はないやうに思ふ。「報告」の記録欄を見たときふとこんな事が頭に浮んだ。

夏季計畫欄は實に賑かである。加盟校全部を網羅してゐなくとも中々盛澤山である。一人一隊といふやうなものはあるにしても少いだらうから大變な人数に上るであらう。この夥しい登山隊が殆んど時を同じくして繰出すのでは夏山のにぎはひさぞやと想像される。

各校の計畫に出發期の記入してないのはどういふものだらう。山小舎で鮎詰めになる不愉快を避けるためにも、天幕を張る場所に困るやうな目に會はないためにも、各校山岳部は計畫發表と同時に出發期日、滞在日數の大體を協定し發表すべきではあるまいか。天候・隊員の都合等で變更されるにしても、この協定は確かに必要だと思はれる。まさか「今夏最初の何々山脈縦走」といふやうな記録を作らんがために出發日の公表を避けたのではあるまい。冬季登山計畫發表の際には殊にこの協定の

必要が痛感されるであらう。

岳聯報告は第一號を世の中に送り出した。今後その形態・内容がどんなに變化してゆくかについて大なる興味を持ちつゝまたその順調なる發展を希望しつゝ、筆者はこのすくなくならず脱線氣味な批評を終はることとする。(藤島敏男)

山を行く

高畑棟材氏著 昭和五年六月 東京 朋文堂
發行四六版 五〇六頁 定價貳圓五拾錢。

會員高畑氏の近著である。折り／＼雜誌「山岳」に發表せられる紀行或は考證を通じて、非常に眞面目にそしてまた靜かに山歩きをされることに尠からず敬服してゐたのであるが、いまこの書を手にして著者の足跡が、たとへ東京を中心として二三日行程の範圍に限られてゐるとはいへ、非常に廣く及んでゐるのに一驚を喫したのである。勿論著者は本書に收められたる以外に、より高き山々に登られてゐることゝは思ふが、この書の含むところといへども之を探らんとすれば少からぬ歲月を要するであらう。

考古辭、讀書辭を多分に持つてゐられるらしい著者は古今の文献を丹念に涉獵して、文中到る所に該博なる引照を行つてある。また丹念な所謂土民測量をやつて山の名谷の名澤の名を詳細に調べ上げてある。

日本の低い山を歩く者の行き方として確かに或るひとつの方向を示してゐるともいへやう。低い山々は人を寄せつけないや

うな峻嚴さをもつてゐない代りに、ふるくからそれらの山は人間と淺からぬ交渉をもつてゐたに違ひないのだ。そこに低い山を歩くことの面白味があると思ふ。本書を讀むとひとときはそれが感じられるのである。

たゞ私の本書に對する希望としては、紀行、記録、考證との三者を打つて一丸とせず、それぞれ區分して叙述されてはどうかと思ふのである。例へば赤城大沼の畔に放牧される牛の群を叙してある文のすぐ次に「上野名跡志」から赤城外輪山の主峯黒檜山に關する項を引いてあるやうなのは讀者の興味を中斷してしまふ傾がある。また本書に擧げられた山にさゝやかな山旅を試みんとする者が、出發前に大體の行程所要時間等を知らんとするも、その目的の山に關する項を丹念に讀まなければ要領を得ないといふのは、たとへ本書が案内記として書かれたものでないとしても、やゝ不便を感じるやうにも、思はれる。最後に、このやうに廣い範圍に亘つて山旅をされる著者、そうしてまた國木田獨歩の「自然觀」を論ぜられるところから推して文學方面にも深い造詣を有せられると思はれる著者、その著者から、のんびりとゆつたりした氣持でさまよひ歩くことのできる日本の低い山々の獨特な持ち味に對して深味のある感想をきゝたいと思ふことをこゝに附け加へておく。

書中收むるところの寫眞の大部分は吾國に於ける山岳寫眞の理論並びに實際に關して定評ある大家の作品であるから素晴し

い出来栄のものばかり、批評の餘地もあるまい。

装訂のクロース、脊の金文字は兩者とも無難であるが、表紙にブラインド・トゥールで押してある圖柄はない方がいゝと思ふ。

マッターホルンを争ふ

カアル・ヘンゼル作、書上喜太郎譯。

マッターホルンの初登攀を題材とせる事實小説。翻譯は會員書上氏の手になる。由來マッターホルンの初登攀はイエーガー・レーナーの小説やフランクのフィルムで思ふ存分無遠慮に且つげすに弄ばれて來た。アメリカまがひの戀愛物語や、リフェルホルンの田舎者おどかしのクレツテライにこりゝして來た人で、此の本の標題を見て又かと察感しない人は少かつたに相異なる。私もその一人であつた。併し烏水氏の序文の中で述べられて居る如く、此の書は之等の與本物と趣きを異にする。誠に之丈の事實を積み上げたヘンゼルは可なり詳しく此の方面の歴史を調べた人であらうといふ事は、一讀した後に第一に自分の拾ひ上げ得た印象である。かゝる叙述に有り勝ちな誇張や無知からの破綻のない事が何よりも氣持がよい。由來、三日月が逆に山の端に入るが如き珍景を物したりするのは繪かきに限つた事ではない。山登りをして居る人が山の事を書き乍ら、思はぬ感違ひをする事もないではない。ヘンゼルの本にはかゝる缺陷がない。併し率直にいへば何處となくダルな感じがする。

尤も之は原文を讀まない人間の恣に口にすることを許されざる點であらうが。大體事實小説といふ様な言葉その物が相矛盾する二つの概念を無理に結びつけたのではないだらうか。併し之亦門外漢が勝手にはいた熱故、謂はゞ盲蛇におぢざるの甚しきものかも知れない。要するに一人の山岳人として、私は依然として特別の感興をもつてウイムバーやギドレイやティンダルを繰返し繰く事をやめないであらう。そして資料としてならば矢張りモンタンドン、デュービー兩氏がS. A. U. のデイ・アルベンに載せたやうな純粹の研究をより多くの關心をもつて讀むことであらう。それにつけても此の書に於てウイムバーの時代の山登りの世界や空氣が此の物語の背景として、又あれ程特殊な魔力をもつツエルマツトやブルイルの谷が、そしてその間に横はる山々がその舞臺として、本當に浮彫りされてゐない事を惜しいと思はざるを得ない。翻譯には少からぬ苦心の跡が窺はれる。地名人名等にも随分注意がされた様に思はれる。たゞリツヘルアルプ、コンピン、リヌスカムなどは再版の時に訂正される事と切望して已まない。「あなた是非いらつしやいよ。ウインバーさん！」(七〇頁)等といふ所も何とか改良の餘地がありさうに思はれるが、勿論自分には改善案はない。有名なカアルレルの最期の一節で、マクニアツの息子が、いつたと傳へられてゐる *Curri nésit pns tonbé: Il est mort!* といふ言葉が若し日本語の様に原文に書かれて居るのならば、ヘンゼルの考ひ違ひで

なければならぬ(二二八頁)。挿繪は多くウイムバーのスクラムブルスから轉載せられてある。たゞホテル・モンテ・ローザの前の寫眞の中の人物についての説明が全く缺けてゐることが、その繪の挿入を殆んど無意味にしてゐることも惜しまれる。

(松方三郎)

針葉樹 第五號 東京商科大學・一橋山岳部

記録七一頁記文一六八頁雜記三八頁。記録は二部に分ち一九二八年十一月よりの一ヶ年、及び一九二九年十一月より本年五月に至る部員登攀の記録を載録す。紀文「山の個性」浦松、「一月の槍平と槍ヶ岳」手塚、「大武川より大井川東俣へ」高瀬、「赤石岳、聖岳」關山、「東北朝日連峰雜記」小川、「武尊山と其の附近」吹原、「守門山スキー行」關。

記録を開卷第一に持つて行つた事は記録の重要性を認めての事であらう。此の種の刊行物には誠に相應しい試みである。思ひ切つて二段組位にして詰めて組んだらもつと緊つた感じを與へてよくはなかつたらうか。記録の目次は一層詳細にして一ヶ所に纏めて掲げられて居ると我々には有難い。

どうせ部外の一般讀者の多くは山に入る前に泥繩をやるのであるから、記録全體に亘つた山の名前の番付が記録の目次の中にでも漏れなく載つて居ると非常に助かると思ふ。記録のあとで紀文に來ると何となく中途半端な感じをうける。記録の中に吸取出來る部分をもう少し記録中の説明の方に廻す事は出來な

いだらうか。記録にあれ丈けの重心が置かれたのであれば特にさうである。雜記と記録に挟み打ちを食つて、紀文は何となく蔭がうすい。全體を通じての印象から云へば、新しい方向へ向はんと試みつゝも何處か過去の仕來りに執着した跡が見える。之は、併し、將來自ら整理せられて行く事であらう。何れにしても記録は記録として紀文は紀文として一層その色彩を明瞭にして行く事が出來たら資料としても讀物としても夫々に一層値打が増すことであらう。紀文その物の内容については自分は多く語る資格をもたない。又それ丈けに特殊の興趣を以て讀んだのでもあるが、今は、只管らに將來の發展を祈り乍ら盲評の筆を擱く。(松方三郎)

エヴェレスト登山記 (田邊主計氏譯)

サブ・フランシス・ヤング・ハズバンドの「The Epic of Mount Everest」が初めて出版されたのは千九百二十六年であつた。この書は序文にもある通り千九百二十一年、二十二年、二十四年の前後三回に亘るエヴェレスト遠征の記録書三卷を一冊に纏めたものである。私は當時既に三卷の大冊をざつと眼を通して、實際の登攀の衝に當つた人々の手記に親しんでゐた。だから實のところヤング・ハズバンドの新著に大した期待をかけてゐなかつた。しかし出版されると同時にこの書を手にして實に感激した。殊に第一章の「エヴェレスト登攀の理想」なる章句を讀ん

で、人は何故に山に登るかと云ふ問題に關し、これぐらゐる私自身にはつきりと教へて呉れた人は他になかつた。世間には山岳征服とか、攻撃といった言葉を極端に毛嫌ひする人がある。しかしさうした人でも、この一章を讀めば如何にその字句の妥當であるかを首肯するであらう。「山は如何に高くとも、人は、より高く自らの精神を高揚せしめ、そして遂に山頂を足下に踏み從へねばおかない」といふ思想は、エヴェレスト登攀にのみ特に感ぜられる事ではなく、世界登山史を縦貫する傳統である。原著者ヤングハズバンドの事は管々しく説くまでもないが、氏は徹頭徹尾熱情の人であり、意志の人であり、その辨記述は飽くまで冷靜に、透徹してゐる。しかも素材簡潔、秩序整然たる筆致は、單純なるものこそ最も莊嚴であることを如實に示してゐる。しかも時々エヴェレストの山頂に捲上げる吹雪の雪煙のやうに冷たい火花を爆發せしめる。著者は人も知る如く、エヴェレスト登山計畫の中心人物として第一回は委員長の重任を負ふてゐた。そして有名な酸素補給使用の反對論者であつた。氏の意見は「酸素補給器を使用しなければ絶対にエヴェレストの登頂が不可能といふのならば使用しても好い、またブランドイの如く氣付または昂奮劑として醫藥代用品として携行するのならば解される。併し酸素を補給しなくても、アクリマチゼエーションにより瞭かに登高可能が證明されてゐるに拘らず、敢て使用を主張する人々の氣が知れぬ」といふので、決して頭ごなし

に反對してゐるのではない。そして氏の登山思想の根本は「人は自らの足を、一步一步大地に踏み付けて攀るところに絶対的の價値がある……謂はゆる科學的の補助など一切使用しないで」といふにある。然るに第三回の遠征に際しても再び酸素補給器を使用することとなり、ヤングハズバンドもそれを承認せねばならぬ破目になつた。しかも最も運命的なことは、從來酸素補給に大反對であつたマロリーが、アーヴィンと共に酸素補給器を携行して最後の登攀を敢行せねばならぬ立場に置かれた。そしてマロリー自身は、その絶筆となつた第六キヤムプからの通信中にも酸素補給器のことを「忌々しい厄介物」だと零してゐたのだつた。そして二人は、地上最高所の氷と岩の荒原に突入したのだつた。

私は餘りに原書について多くを語り過ぎた。田邊氏の譯は實に立派なものである。もちろん翻譯などについて何も語る資格のない私ではあるが、あの簡潔、平易しかも熱と力の溢れた莊重な原文の勢ひが極めてしつくりと出てゐる。いつたい翻譯は原文のスタイルを出すといふことが最も難かしい。田邊氏の譯は直譯の型をとつてゐながら、しかもスタイルが好く現はれてゐる。最初の二二章を讀んだ時には、少しく力が缺けてゐるやうに思はれたが、頁を繰るに従つて油が乗つて來て、勢ひ好く譯されてゐる氣がした。只處々、餘りに原文に忠實ならんとしたために、讀者を些つと惑はすやうに思はれる箇所がないでも

ない。例へば三八二頁の「彼が第六キヤムプに着いた時には烈風も風ぎ去つて、間もなくノース・フェイスは全面陽光を浴びるやうになつた」とある箇所は、「第六キヤムプに降り着いた時には」とした方が解り易いと思ふ。もちろん私も原文を讀んだ時に大いに惑はされたのだつた。そして直ぐ前の三八一頁には「第六キヤムプへ進んで行つた。二時頃そこに着いた時には雪が降り初めて風も増した」とあるのとこんがらがる處れがありはしないか。何故私がこんな事を云ふかといふと、實は第三回目の遠征記を讀んだ時に、登攀者の配置について一々キヤムプの番號と登攀者の名を紙片に書いて、日附と時間で研究した事がある。その際大いに苦んだ經驗があるので、くだらない事ではあるが氣付いた儘を告白する譯である。とにかく、私はこの名著に對しこの名譯が出版されたといふ事は單に山岳人の喜び許りでなく、探險登山とは何ういふものであるか、その困難とこれを挑撃して進む不屈の精神力の必要な事を知る上において、一般社會人の是非一讀すべき書であり、また實際に讀んでも感激させられる名著である。(第一書房定價二圓五十錢) (藤木九三)

「山の傳説 日本アルプス編」

青木純二氏著、昭和五年七月、東京、丁未出版社、壹圓五拾錢。

日本アルプス地方に於ける傳説を集めたといふのに興味をそゝられて、といふわけではないが、とにかく八月のある涼宵、卒讀したところ、讀んだ以上何か書けとの藤島君の命に従つて生れたのが、この讀後感めいたものである。最初にあつて、著者への非禮は豫めお詫びして置く。

こゝ數年來、民俗傳説等に對する關心が高まつたせい、之が書物の刊行が多くなつたのは争はれぬ。自分達の住む島帝國をめぐつて澎湃たる世相變化の波浪に没はれて、永い年月田舎の人達により保たれてきた習俗、藝術、傳説の類が消滅してしまふ惧がある故に、今のうちに方途を講じて何等かの形に於て貽して置きたいといふ望みから、自ら生れた結果であらうか。

我々の細長い國土に育てられた民俗傳説は地の南北により、或は山村と水郭との相違によつて、各々異色を呈するであらう氣がするが、必ずしもさうではなく、多くの共通のものを持つといふ意外に駭くのである。更に地域を限つた此書を通讀してみても、そのみでなく、不思議と感ずるのは、かの峻嶺幽谷を背景にした信飛地方に傳へらるゝ口碑傳説が、我國一般と歩調を同じくして、別段面目を殊にせぬのみならず、山それ自體に關するものが貧弱な事である。登山者の身にとつては、妙からず落英の情を覺えるがこの山國でこの淋しさを味はねばならぬとは、どういふ緣由からであらうか。その道の人々は夫々に考をめぐらし解説を與へてゐるであらうが、矢張「傳説が主と

して平野の産物であるからであつて、山が自ら語つたものでないから」であらうか。(柳田氏序文の一節)

従來文字となつた傳説集其他に、山の傳説が散見されるが、多くは書物から抜かれたもので、山に生活する人達から親しく語られたものは、數多くないやうである。あの尾根を攀ち、この谷を溯つて登らぬ山とてはない此頃に、殆ど山の傳説は「採集」されてゐないのであるから、採集者の出現を斯界は鶴首してゐるのであらうが、まだ機會が到來しなかつたのである。

かういふ時、青木氏の書物が世に出たのである。早天の靈覺であるか否か。先づ體裁は四六版、非水氏の手になる白布の装幀、本文三一〇頁、寫眞版四葉挿入(内二葉の説明は首肯出來ぬが、斯種のものに燒や槍の寫眞は蛇足である)。巻頭に柳田國男氏が序文を寄せて、山の傳説に就て一通りの考説を述べてゐるが、僅々十頁程に過ぎないが面白いと思ふ。感傷的な自序二頁の後に、本文を南北及中央アルプスの三編に大別して、個々の題名の下に多くは山名を副へ、立山に關する十四話を最多として其數百餘に及んでゐる。其の一つ一つの内容を讀んでみると、話と山名とに不離の關係がないものも含まれてゐる。又自分の諒解してゐる所謂日本アルプスの圈外の山々も交つてゐる。(例へば十國峠——十石峠の誤か)かと思へば、他方双六谷の如きは見當らぬし、又「高遠の繪島」其他傳説の範疇に這入らぬものがあるのは、内容撰擇上猥雜不統一の辭を免れぬ。第

一話の佐伯氏の祖先が鷹に導かれて立山を開いた話、之に續いての立山みくりが池と延命場の話等は、自分が嘗つて讀んだことのあるものと比べて、若干の相違が認められるのであるが、夫は語り手の異なる故か、或は據つたところの文献の違ふ結果か出所の明示がないので何とも判然せぬ。其他この類の不滿の箇所があつたが、劍岳の頂で錆びた槍の穂を發見した話や、赤石の峰頭に立つて宗良親王が足利調伏の祈禱を捧げられた話の如きは、若し誤りでなければ、日本登山史を書かんとする人にとつては見逃せぬ貴重な資料となるであらう。

本書を讀みつゝ残念に思つた第一は地名の誤植誤訓(?)が到る處に發見されることである。山に登る者には氣になつて仕方がないのみならず、傳説集の性質上微小ならぬ瑕瑾である。第二は話の出所が明記してないことである。傳説の内容が巧奇的であるのは學問的には一向に重大ではないが、如何なる人が何處で何時話したか、若し文献によつたならばその書名を掲ぐる事は忘れてならぬ絶對的のものである。之がなくては學問的に本書の存在理由が薄弱とならう。讀つて銷夏的興趣本位の讀物としてはどうであるか。元來傳説なるものが、話の筋道が素朴單純であつて、現代人士には一般的のものではないのである。それは著者の責任ではないのであるが、さりながらその文章には格別の香氣も滋味もなく、常凡一様の域を決して出るものではない。

著者がどういふ人であるか、又如何なる目的動機で出版されたか知らぬが、再版の折には大改造を斷行して本書の存在を無意義でないやうにしてほしい。のみならず之を機縁として第二第三の傳説集の出現を見たいものである。(戸澤英一)

登山カード

會員 鈴木勇氏著

(昭和五年六月發行、東京目黒書店定價五十錢)

目黒書店は先年、黒田正夫氏著スキーカードを發行して、携帶の簡易と定價五十錢との好條件を併せて一般の好評を博したが同書店では昭和五年六月更に同一形式の携帶用圖解登山カードを發行した。

右カードの内容は北、中央、南アルプスと八ヶ岳、蓼科山に就て、概念圖を加へた簡便な案内書である。尙別冊となつた二十頁より成る登山要項が附せられてゐる。

カードには案内所、照會所、登山口、案内人夫、山小屋、露营地、日程費用概算の各項目があり、夏スキーの練習地や高山植物の名稱迄書加へた個所もある。

登山要項は登山の一般的注意、準備品、登山用語の三項目よりなり、著者の言の如く、初心者の良い準備相手となるであらう事を私は疑はない。

登山カードを未だ手にしなかつた當時、廣告のみ見てみた時

の私は、カードの内容は技術的方面的の記述であらうと思つてゐた。恐らく之はスキーカードの先入意識に支配されたものであるが、登山カードを手にした時それがガイドブックであつた事と私達が同じ頃に苦しんでゐた「山日記」と稍々等しい方向に進んでゐた事を知つて一驚した。そして著者の大きな努力には敬服の外はなかつた。

登山カードの中で最も特長のあるのは概念圖であらう。從來登山者を悩ました登山小屋及び登山道が明瞭に記載されてゐる。そして營業小屋と無料小屋の識別も見られ。此處で一寸氣付いた點はカードに参照地圖の説明のない事である。各地方別の頭初にでも携帶すべき陸地測量部發行の五萬分の一圖幅の名稱を列記したならば非常な便利だと思つた。(角田吉夫)

岩登

船田三郎氏著 昭和五年六月 東京目黒書店發行

一三二頁 定價壹圓八拾錢

曩きに「スキー登山」をものにした著者の新著であり、今夏洪水のやうに氾濫した山岳圖書の中のひとつである。從來刊行された多くの山岳書は紀行文集或は案内記が多かつたが、これは全く岩登りの技術のみ——やゝ外的なものも含まれてゐるが——を扱つたものである。遊技的登山が高唱され、登山技術尊重の聲が喧しくなり、ザイル、シタイグアイゼン、ピツケルを携行せざるは山登りにあらざるが如く考へられる今の世の中に技術のみを取扱ふ書物の出版は當然のことかも知れない。

雜 報

○山岳圖書紹介

内容は「岩登の發展と概念」「岩登者・用具・岩場」「岩登の技術」の三大綱に分つて記述されてある。本書の目的が奈邊にあるかは恐らく著者のみの知る所であらうが、著者の意圖は多分登山・犬衆のために岩登りの技術の如何なるものかを教へんとするにあるのだらうと忖度して、先づ岩登の技術の項を讀む。大體この岩登りの技術なるものは西歐に於て極度に研究され發達したものが、吾國に輸入されたので、吾國本來の岩登技術といふものはなく、みんな翻譯技術である。翻譯技術は何も岩登に限つたことはない、國産獎勵のなんのとわめてみたところで大低のものは翻譯か模倣なんだから、そのつもりでゐればよい。たゞ横文字といふものが中々七面倒でどうもスラ／＼と讀めない場合が少くないから翻譯書が重寶がられる。本書の説く「岩登の技術」亦外國書の翻譯乃至は饕餮であるやうに思はれる。然らば翻譯或は饕餮にして誤りないならば、この説明は正しいものと見るべきであらう。著者がかゝる書を上梓する以上、その語學力並に咀嚼力には充分の自信があつてのことと思ふが故に敢て原書と對比して穿鑿するにも及ぶまい。さてこの部分に挿入してある圖版は、いづれも著者の自筆になるものであるが、これらもついでに原書から採録された方がよかつたと思ふ。かゝる書物の讀者にとつては明確な圖版が望ましいのであつてそれが著者の筆になれるか否かはさまで問題にならないのである。また岩登りの技術の如く文字又は言語を以て説述するに困

難なものは、挿圖が理解を大いに助けるものであるといふことを念頭に置いて戴きたかつた。

次に「岩登者・用具・岩場」の項を見る。豫備的練習と題して述べられてあることは何も岩稜岩壁を攀ぢる者のみに必要なものでなく廣く山岳に登らんとするものは誰でも必要なことである。従つてこゝに書かれたことは從來讀んだり聞いたりしたことが多し。たいして議論になるやうな所もない。たゞ三十四頁に「數人の登攀者の協力は、たゞ登攀者各自を確保し合ふのみにて、團體の積極的な岩壁との闘争力を餘り増加し得るものとは思はない。」とあるのは少々承服し兼ねる。確保といふことも、闘争力——この言葉は餘り適切と思はれない——の一部をなすものゝやうに考へられる。用具の條も中々詳細に書いてある。穿物の所で「岩登り靴」のことを書くならば「わらし」のこともちよつと言及しておいてはどうかと思ふ。著者は日本の高峻山岳は岩質から見れば鉄靴の方が適してゐると言はれるが鉄が磨り減つてゐたり脱落したまゝになつてゐる靴を穿いてゐる人を見掛けると寧ろ草鞋をはいた方がいゝと思ふことがある。今世の中に草鞋を云々するのは舊弊だと笑はれるかも知れない一寸申添へる。それから登山綱にベンジンで溶いたワセリンを塗り込むのは寡聞なる筆者の始めて知つた所である。或は著者の實驗に基かれることかも知れないが、結び目などが緊りはしないやうなことがありはしまいか。

岩場に就ての記述は山岳語彙の説明のやうなもので、英獨佛の各國語が錯雜してゐる。暫定的であると言つてあるが、この部分はなほ推敲の餘地があるやうに思はれるし、また本書には寧ろ省略された方がいゝと思ふ。それにはこの種の語は無理に邦譯するとシュミネが煙突(六十八頁)といふやうなことになる勝ちであるから、邦譯すべきものと原語のまゝ用ふるものとは餘程慎重に考へる必要がある。

次に巻頭の「岩登の發展と概念」を讀む。「岩登の發生と展開」及び「岩登者の一般的概念と基本的要領」の二項に分かれてゐる。前項を一讀するにどうも難解である。商業資本主義、封建的僧侶的登山、漂泊者の探險登山、發端的當初等見慣れぬ字句が陸續と出てくるので、著者の言はんとする趣意がはつきりと汲みとれない。これは此處ばかりではないがものごとをもう少しあつさり平易に書くことは出来ないものかしら。殊に大衆登山を高唱する著者にして、本書の如く生硬苦澁な文章を綴られるのは稍々了解に苦しむ次第である。この項は寧ろなくもがなと思ふ。次に岩登者の一般的概念と基本的要領の項は極はめて簡單であるから之は技術の項に併録してもいゝと思ふ。

最後に用紙並に裝釘に付て一言したい。用紙は何故にかゝるものを使用されたか、詩集か何かならばとにかく教程本の如きものには不適當な紙質である。裝釘は獨逸好みであり、表紙の文字は佛蘭西語である。やゝ均衡を得てゐないやうな感がある。

人目を惹けば足りる宣傳本ではないのだからもつと地味な落付いた調子にして欲しかった。それからこの本は「用具及技術」だけとしてカードのやうな形式にしたならば手輕でいゝばかりでなく、著者の意圖する登山大衆のための指導的役割を演ずるにも都合がよからうと思ふことを附言してこの妄評を終はる。

(藤島敏男)

立教大學山岳部々報 第二號 一九三〇年 重要記事

春の御山谷生活 逸見 眞雄

(黒部川側より針ノ木・鳴澤岳登攀)

三月の鹿島槍ヶ岳 同 人

冬の五龍岳 堀田 彌一

三月の唐松・白馬尾根傳ひ 同 人

三月の早川尾根 酒井 吉國

昨夏誕生してから一年の間にすつかり見達へるやうに立派になつた。

黒部の谷から後立山の連峯への登山が、そのときの状態にもよるであらうが、案外容易らしいのは一寸意外である。積雪期に於けるこの方面からの登路がだん／＼開かれてゆくことと思はれる。

鹿島槍、五龍の記事は、いつか四月中旬鹿島から祖父へ登つたことのある私には殊に面白く讀まれた。鹿島の部落を根據とする登山は短時日で、しかも素晴らしい壯觀に接し得る點で推

雜 報 ○山岳圖書紹介

實に値ひするものであらう。

寫眞はどれも皆非常によい。中にも、黒部別山より立山群峯、赤澤岳よりの立山、ハシゴ谷乗越より銀岳、五龍岳、不歸附近の雪稜などを殊にいゝと思ふ。

この部報を見て感じたことは、理屈抜きでどん／＼山に登つてゐる部員が多いといふことだ。比較的若い人が多いせいだらうと想像されるが、さつぱりしてゐて甚だしい。(藤島敏男)

札幌第二中學校山岳旅行部々報

又タツク 2 號 昭和五年六月三日發行 實價壹圓六拾錢

重要記事

春の札幌近郊の山々

宮城澤より瀧ノ澤を下つて

白松澤と神威岳

惠庭岳スキー登行記

漁川を溯りて漁岳へ

春の暑寒別岳

五月の十勝・オプタテシケ連峯

コイボクシユシビチヤリ川

東北海道の旅

次高山

ヌタツク2號は一九二八・二二―一九二九・一二迄の記録を録

集したものである。本文一五八頁にて、ヌタツク1號にも優る大冊である。紀行は右に列擧した外、尙十指を數へる優秀な記録がある。

寫眞は十三葉、スケッチ及びウッドカット九枚、それにメナシベツ川上流附近と次高山附近の概略圖が入つてゐる。スケッチとウッドカットは皆坂本直行君の手になるもので、既にヌタツク1號及び北大山岳部々報に依つて、坂本君の非凡の腕前は熟知の事と思ふ。實に寫眞にては到底得られない、親しみと興味とを感ずる。

ヌタツクを讀んで最も強く感ずる點は、札幌を中心とした山々に關する詳細なる研究である。本號本文の半數以上は此等の山々に就いて記述されてゐる。年報を見ても、札幌近郊の山岳へ繁く歩みをつづけてゐるのには敬服の外はない。ヌタツク1號は札幌近郊の山々の概念圖を付してゐた。そして又2號には巻頭に札幌市より望める南方及び西方の山々のスケッチを載せてある。このスケッチの製作には多大の努力を必要とした事であらうけれども又之より受ける讀者の利益も多大である。

(角田)

山 懷 第三號、一九三〇年六月十日發行

東京醫學專門學校山岳部年報で一九二七年二月發行第二號の後を次いで出版されたものである。年報類としてはやゝ組方に變化あるのみで他は大同小異であるが眞摯な研究、事業報告等

を中心に編輯されたこの年報は、今年度出版された年報中でも出色のものである。

目次を記すれば左の如し

一、登山の新傾向

小山 部長

一、登山記

一、明神岳

永井 末松

一、小槍の岩壁

笹井 嘉雄

一、元旦の燕岳

中西 貞二

一、六百澤

鳴海 顯

一、雜 報

一、北海道旭岳登行

福山 榮三

一、山ある記

浦方 力時

一、薬師、黒部五郎

沼田 公雄

一、危難と夜

高槻 吉次

一、春の西穂高へ

能勢 論吉

一、山岳災害の研究

一、山岳災害と外傷に就て

篠井 金吾

一、凍傷と其の處置に就て

室田美能理

一、山岳災害上より見たるオーネフニューラー

篠井 金吾

一、山岳災害上より見たるオーネフニューラー

篠井 金吾

一、事業報告

東京醫專山岳會

一、年 報

東京醫專山岳會

発行記中見るべきは明神岳の記録である。明神岳の持つ大部分の澤を、三ヶ年に渡つて丹念に探られた報告である。長詩を含んだ面白いものであるが、明神岳を見た事はあつても實際に登つた人でなければ、一體どの澤に登つたのか、どのピークがどこにあるのかこの文章を讀んだだけでは解らないであらう又興味を惹かないであらう。それ程に迄、登路とか澤の位置とかの説明が漠然として居る。數年に亘つての研究報告なればこそ、もつと具體的に書かされてこそ價値あるものだ。

雜報。この種の年報としてむしろ有らざるがなである。

山岳災害の研究。本文中一番讀み應へがあり又この年報の特色である。日本の登山界で未だ開られて居ない登山醫學分野に手をつけられて居る東醫山岳會としてはこの年報を出版する大きな要素ともなつて居るのであらう。

この部門は私達の批評の限りではないが中でも、山岳災害と外傷に就て(槍、穂高を中心とする災害の統計)は我々門外漢にも理解でき又興味ある論文である。明細なる分類及び統計、上高地附近での四年間の研究は、所謂醫專の小屋から生れ出たのでもあらう。災害外傷の一般的處置方法等は、同誌第二號所載の「登山と醫學」の項と相俟つて實に優秀である。文中著者の言へる山小屋に於ける衛生設備の不完全等は山小屋の改善の具體的行動の一つとして、日本山岳會あたりで藥品等具へては如何と思ふ。結論に百分率で示してある分類は讀んで味ふべきだ

と思ふ。

山岳災害より見たるオーネフユラー、ミツトフユラー及び單獨登山に就ての論も伸々面白い問題を捉へて居る。パーティーの人数の事等をもつと優秀に取扱つたらよかつたらうと思はれる。

マンメリーの主張する二人による組隊、或はアブラハム其他の人達の主張等を醫學的な立場から紹介されたならば猶ほ面白いと思ふ。單獨登山の考察せる、大島氏の其れと對照して見ると大島氏の主觀的な考察、此の筆者の客觀的な立場がはつきりして興味を覺ゆる。

編輯後記に「假令不備なものであつても、其れが動いて來た以上は其の動き方を見てやらねばならない——何物でもよく見る時には其處に個性の存在がある筈だ——どうか最初からこんな心持で此の「山懐」を讀んで戴き度い。」と非常に謙遜して書かれてあるが、これは年報類としてもまだ立派に存在價值があるし、又醫學的な立場をどし／＼開拓して行つたならば此の年報の將來も期待できるであらう。(藤田信道)

雷 鳥 (第二號)

純正登山がスポーツ・アルピニズムを意味しようが、しまいが、そんな事は何うでも好い。山は登山家のために存在するのではない筈でもある。山の研究は自由に、廣く、深くあつて欲しい。……岐阜高農山岳部の「雷鳥」第二號は、さういつた意

味で山を考へる人達にとつて大いに喜ばれ親まれる。殊に重點を美濃飛驒の山々におき、その自然的、文化的にわたつて各種の特殊研究を集録したことは感謝の意をさへ催さしめる。例へば研究中の「美濃國各地における山の神祭及びその風習につき」林魁一氏」とか「峠の社會的重要性と美濃飛驒の峠」鈴木榮太郎氏」など、ローカルな研究が發表されてゐることは羨ましい感さへ起る。

紀行には武田博士の「御嶽から乗鞍まで」が、十葉近い名寫眞と共に本號の異彩として光つてゐる外、池田、増井、平吉其他の諸氏の紀行報告も美濃飛驒の山々に關するものに限られてゐることが、本號をより意義づけるものである。私は曾て北大の部報が北海道の山岳紀行ばかりで埋められてゐるのを見てガツカリした事がある。しかし本號を手にした人は、必らず満足以上に更にあるものを感じるであらう。(岐阜高等農林學校山岳部賞費二圓五十錢)——(藤木九三)

や ま (第廿五號)

學校山岳部が報告または記録の意味で一種の部報を刊行することは當然有意義なことである。しかし學生聯盟などが出來てさうした記録を統一するといふことも、一面時宜に適した方策であるとも考へられる。かゝる時運とは切り放して神戸商大の「やま」は、その傳統と絶えざる部員の精勵とにより、常に潑刺たる部報を刊行しつゞけてゐることは嬉しい。第廿五號を繕い

て先づ目につくアクティヴな活動としては、田中君を中心としたパーテイが後立山脈方面における積雪期の活動である。同君の研究は「積雪期における後立山連峰」となつて現はれてゐるが、今後は別として、おそらく現在同方面における研究資料として最も中心的なものであらう。ちやうど立教の部報第二號にも逸見、堀田氏などが同方面の研究を發表してゐるので併讀對照すれば更に得る處が多い。先輩三好君の「山岳思想史」は、大きな問題を捉へて果して今後何ういふ風に筆を進めてゆくか知らないが、その研究的態度に感心させられる。本號に發表の分はその序説とあるから批評がましい事は暫く措くとして、この機會において未だ先人の爲し得ない我國の登山史の完成を熱望するものである。岡田君の「スキスにおけるアルビニズム史」は三好君の論と對照して興味ある翻譯である。(筒臺山岳會、神戸商大山岳部發刊頒價一圓)——(藤木九三)

Himalayan Journal (Vol. 2, April 1930)

巻頭には H. W. Tobin 氏がシツキムに於ける登攀史の概観に就いて述べて居るがカンチエンヂュンガの登攀が昨年と今年續け様に二回も試みられて居る際なので此の一文は殊に興味を以て讀まれた。そして著者はシツキムに於ける登攀史に於て忘るゝべからざる三つの名前を掲げて居る。一は「Himalayan Journals」を著はかる Sir Joseph Hooker 二は「Round Kanchenjunga」の Freshfield 三は Dr. A. M. Collins である。

雜 報 ○山岳圖書紹介

そして此の三者は萬人共に第一人者として承認するであらうが自分は中でもケラスを第一に推したい。一人でヒマラーヤへのエキスペディションを何回も繰返へして居る人は實際に少い。フレツシユフィールドでさへカンチエンヂュンガは一八九九年に一回試みただけだ。ウォークマン夫妻は異例で一八九八、九九一年、一九〇二——三年、六年、一〇——一二年と五回カラコラムに入つて居るが他にはこういふ例は無い。然るにケラスは一九〇七年、九年、一〇年、一一年、一二年、一四年、二〇年、二一年と相續いで、然かも數回のエキスペディションを行つて居る年が少くない。殊に一九一〇年、一九二〇年等は素晴らしいものだ。その全力をシツキムの山々に致して、然かも黙々として己が事績を語らんとしなかつた彼に對しては自分は心から「偉い奴だ」と言ふ。ヒマラーヤ全登攀史を通じても彼の如き存在はユニークなもので決して他に類を見る事が出来ない。一つのエキスペディション毎に一冊の本を出したウォークマン夫妻に對しては別の意味で敬意を表し又大いに感服して居るが、自分の登攀に就ては一切語らず、單に日程と所要時間とのみを洩らせるに過ぎない彼に對しては更に深い同感を催ほすのである。撰ばれて一九二一年の第一回エヴレスト探險隊に加はり、行半ばにしてチベットのと土と化したる彼は實際いゝ死場所を得た事ではマンメリーと共に寧ろ羨まれるべきであらう。

次に、一九二九年ドイツのカンチエンヂュンガ探險隊の隊長

たりしパウル、パウアーに乞ひて急ぎものせる登攀の概要を英譯せる一文がある。此の大意に就ては前號の雜報中に述べて置いた。又屢々問題となれるシオツク川のチョンクムダンの氷河堰堤の崩壞に依る洪水に就きて一九二九年のその觀察を、

P. Gunn, H. J. Todd 及び編者 Kenneth Mason が綜合せる

記事がある。我々に取つてはこんな平地に縁の深いものでなしに、もつと外に知らして貰ひ、或ひは是非共掲げてなければならぬものがある様に思へてならない。他にカーガン地方、ソナマルグ地方、イストロナル地方等の紀行があるが、これとてももちつと大きい所で自分達が知り度い點があるのでこんな小さいものを澤山並べられても餘り興味がない。昨年度に於けるエキスペディションズに就て大體を纏めて書いてあるが、これに就て更に詳細なる記述を希望して止まぬ者は只に自分一人ではあるまい。尙ブツクレヴィユースには相當力こぶが入つて居てアウレル、シユタイン卿の "Innermost Asia" 外十二書に就て三十頁に亘り詳細なる批判がしてある。然かし批判といはんよりは説明で我々はこの中から教へられる處が決して妙くない。(渡邊漸)



會 報

會 務 報 告

常例幹事會 (七月三日)於本會集會室

出席者 高頭、鳥山、小島、木暮、松方、渡邊、岩永、武田、榎、藤島。

決定事項

- 一、八月中旬松本市に開催せらるべき文部省主催體育講習會 (登山及びキャンピング)に本會より出向くべき講師並に講述課目、時間割等の大體(別項參照)。
- 一、本會所有の山小屋建設資金募集の方針。

評議員會 (七月三十一日)於高輪・鳥山氏邸。

出席者 小島、高野、高頭、武田、三枝、鳥山、冠、藤島、渡邊、松方。

委任 木暮、近藤、榎、岩永、別宮。

一、増員選舉の投票を開票し、新幹事七名決定(別項參照)。

常例幹事會 (九月四日)於本會集會室。

出席者 松本、榎、鳥山、松方、藤田、岩永、冠、渡邊、浦

松、藤島。

決定事項

一、各幹事の事務分擔。

庶務 藤島(主任)、榎、別宮

編輯 イ 雜誌 渡邊(主任)、冠。

ロ 寫眞 岩永(主任)、角田。

ハ 會報 浦松。

會計 鳥山(主任)、松本。

圖書 松方、

研究 藤田。

調査 角田。

一、雜誌「山岳」に英文欄を復活せしむること。

一、本會所有山小屋建設資金募集のため十一月中旬、映畫と講演の會を開催すること。講演者及び映畫に就きては具體的の決定を見るに至らず。

一、日本山岳會「會報」を十月中旬より毎月發行し會長並に關係方面に配布すること。

一、集會室、圖書室の二室に擴張したるを以て新刊書紹介以外は携出を許さざること。

一、本會二十五週年に際し、英國山岳會並にウエストン氏に何等かの方法を以て謝意を表すること。

評議員會 (九月二十一日)於赤坂三會堂。

會 報 ○會務報告

二九四

出席者 小島、高頭、高野、三枝、近藤、山崎、木暮、冠、別宮、松本、楨、鳥山、岩永、松方、渡邊、角田、藤田、浦松、藤島。

一、本會を財團法人とするにつきその寄附行爲案を審議し、二三の點留保せられたるも、大體に於て原案承認せられたり。

幹事選舉

本會を財團法人たらしむべく認可申請をなすにつき、その前提として幹事の増員選舉を行ひたり。六月中旬選舉通知を發送し、七月二十日投票を締切り、開票の結果左の七氏當選されたり。

投票方法 連記、記名

投票總數 二九〇通

當選者

東京	松本善二氏	二〇八票
	角田吉夫氏	二三九票
	浦松佐美太郎氏	二三七票
	藤田信道氏	二三三票
關西	榎谷徹藏氏	二四七票
	田中喜左衛門氏	二一六票
	山崎彦磨氏	一九八票

以上

尙當選決定通知と同時に左の文書を會員に送付したり。

本會は基礎確立のため、年來財團法人組織の議ありし所、昨秋來その機熟して評議員、幹事會は寄附行爲の審議を重ね本年四月下旬に至り、略ぼその成案を得たるを以て、茲に財團法人認可申請手續を進捗せしむることゝなれり。

寄附行爲案に於ては、幹事（法人組織後の理事）の數十五名、任期三年、毎年三分の一即ち五名宛改選、引續きては重任し得ざることゝし、幹事を年々新陳代謝せしめん意嚮なり。隨て認可申請前に、十五名の定數を充たし置く必要ありしが故に幹事増員選舉を行ひたり。

從來の幹事中、高頭仁兵衛氏は評議員專任のため、田中菅雄氏は一身上の都合に依り辭任せらるゝことゝなれるため、又現幹事中より財團法人の監事一名を選任する必要上、こゝに先づ七名の新幹事を選挙したるものなり。

今回の選舉の結果、東京在住幹事が新任を加へて十二名となれるは、本會事務所を東京に置き、會務一般を東京に於て遂行するの必要に基くものにして、關西より三名の新幹事を選任せるは、關西支部設置の前提をなすものなり。

今次の選舉に際し、本會役員會に於て候補者を推薦したるは、從來の方法に一步を進め、追て發表と共に行はるべき新方法に近付けしめんとしたるものにして、會員側よりの推薦を求めざりしは、法人認可申請を急ぐ必要上己を得ざりし一時的便法に外ならず。即ち今回は前記の如く役員會推薦候補

者を通知し、投票は推薦候補者又はその以外の會員何れを推
 ざるゝも隨意となしたり。

投票の結果は別記の如し。

なほ今回の選舉に際し、會員にして特に本會に對し、直接
 に或は間接に、種々注意を寄せられ、又希望を述べられたる
 もの少なからざりしは、事務の衝に當りしものゝ深く感謝す
 る所なり。新役員會は必ずや、之等會員諸氏の熱烈なる支持
 と、會のために拂はれたる深き關心に報ゆべく努力する所あ
 るべし。又會員の中には、選舉の通知發送前後に於て、無記
 名を以てせる、或は單に日本山岳會有志の名を以てせる、文
 書を落手せられたる向あるべし。本會はかゝる匿名の文書に
 對して答ふるを潔しとせず又會員中には斷じてかゝる行動に
 出づる者なきを確信し、一切之を黙殺せり。更にまた、將來
 年々繰返さるべき本會の役員選舉を、徒らにかの政黨者流の
 盲動の對象に墮せしめんことを恐れ、かゝる宣傳に對し何等
 釋明する所なかりき。

會員相互の隔意なき意見の發表と交換の内にこそ、本會の
 生長向上は期待され得るなれども、山岳人の風上に置くを憚
 る如き暗打者流と、中傷、惡宣傳を事とする蛙鳴蟬騒の徒の
 盲動によつて、日本山岳會が發展すべきものに非ざるは言ふ
 をまたず。

抑も斯の如き職々者流を相手にするには、山岳人の矜持を

奈何せむ。

今や登山は年を逐うて隆盛に赴き、登山者の激増と共に山
 岳の荒廢、登山道德の頹廢等憂ふべきものあり。かくして登
 山界に於て、解決を要すべき問題益多きを加へつゝある秋に
 際し、本會實務の重きは又自ら舊日のそれに倍するものあり
 この時機に新銳の幹事七氏を迎へ得たるは本會の欣幸に堪え
 ざる所なり。然れども幹事は所詮、會員の意思を體して行動
 し、その支持をまつて事をすゝむる一機關に過ぎず。曲折あ
 り又波瀾ありし二十五年の歲月を通じて、同好諸氏の理解と
 支持との上に本會の經過し來りし光榮ある歴史を想ひ、且つ
 此の古き器に益々新しき血を盛りて活動を新たにする將來を
 展望する時、會員各位の熱意ある理解と支持とこそは、本會
 をして健全なる發達と向上に導かしむる所以のものたるを信
 ず。

希くば會員諸氏一臂の勞を吝しむなからむことを。

昭和五年八月

日本山岳會

第四十七回小集會

六月二十九日 於清水谷皆香園。冠氏司會。

講演

一、積雪期の上越國境

會員 角田 吉夫氏

一、春の後立山

同 冠 松次郎氏

角田氏は上越國境の一部、三國峠と清水峠との間の諸山、仙ノ倉山、萬太郎山、谷川岳等の積雪期登山に就き詳細に祖述された。標高さまで高からざるも、積雪の大なる、山勢の急峻なるによりこれ等の山々は近時上越南線の工事進捗と共に、漸次登山者の注目するところとなつてゐるが故に氏の講演はその見事なる寫眞と共に來會者を益すること多大であつた。

冠氏は本春六月信州大町より爺岳、鹿島槍ヶ岳に登られたる登山談を語られた。新緑と春雪との交錯せる春の山のいかに美はしきかは、氏の講演といつてもながら感嘆させられる寫眞とに依つて來會者を喜ばせた。

附記 出席者の名簿を差し加へるべきの處私の不注意で紛失を致しました。それで今回丈はそれを發表致しません。自分の不注意を重ねて御詫び致します。そして將來注意をするやうに致します。何卒御諒承を乞ふ。(冠)

第四十八回小集會

九月二十一日 於赤坂・三會堂。木暮氏司會。

講演

一、利根川水源地方に就て 會員 角田 吉夫氏
 一、臺灣の山に就て 同 沼井鐵太郎氏

角田氏は今夏越後、魚沼、駒ヶ岳方面より中ノ岳、鬼岳に山稜を縦走し、大水上山より利根川水源に下り、本流に沿うて藤原に出られたる前後十日間の山旅に就き語られた。上越國境山

脈の深き谷をゆく旅、秘境を以て目せらるゝ大利根本流を下る旅は、興味多いものがあつた。

沼井氏は四ヶ年に亘る臺灣在留中臺灣の山岳に就き研究せられたる所を概論的に語られた。蒐集されたる多數の寫眞を示して、この南島高山脈の興趣を餘すところなく吾人の前に展開された。本州の山とはまた異なる景觀を呈する山々の姿に來會者の多くは魅了せられたかの感があつた。渡歐前の多忙なる時間を割いて特に講演せられた同氏に謝す。當日の來會者は

角田 吉夫	星野光之助	高頭仁兵衛
岡田 喜一	別宮 貞俊	山崎 彦磨
成瀬 岩雄	小倉 志郎	渡邊 漸
岩崎京二郎	岩永 信雄	飛川 維之
小林 義夫	長野 清一	冠 松次郎
山田 喜一	松本 善二	瀬木 三雄
熊澤 正夫	野口 末延	桑田 英次
木村 鑛吉	鳥山 悌成	相山 正雄
飯塚篤之助	木暮理太郎	大村那次郎
藤島 敏男	金子眞左夫	東條 四郎
萩島 雄三	宮地 貞顯	中村 太郎
柳澤 悟	松方 三郎	逸見 眞雄
鹿野 忠雄	山口 健兒	伊藤秀五郎
原 全教	藤田 信道	宮本 璋

ウォルトン

グロス

沼井鐵太郎

澤本 辰雄

茨木猪之吉

小島 久太

本多 友司

吉田 竹志

黒田 正夫

神谷 恭

名古屋常治

の五十三名他に會員外の來會者六名ありき。

圖書室の擴張

昨年未開設したる本會圖書室は所藏圖書の増加に伴ひ漸く狹隘を感じるに至つたので、本年七月より更らに隣室借入の契約を結び、之を集會室として會員の利用に充てることとした。然して開室日も従來水曜、土曜の二日であつたのを九月より月水金の三日とし、午後五時半頃より事務員在室のこととした。別に開室日には豫め定めた當番幹事が差支なき限り集會室に向向く筈である。所藏圖書も追々増加しつゝあり、來室會員の數も漸次多きを加へつゝあるが、尙一層會員諸氏が集會室及圖書室を利用されんことを希望する。

○本會圖書室維持會員

圖書室維持會員として快諾せられたる會員氏名は第二十五年一號に掲げた。猶其後の申込氏名は左の通りである。

- 東京 三枝 守博氏(一口) 東京 辻本 滿九氏(一口)
- 東京 中村清太郎氏(一口) 東京 高野 鷹藏氏(一口)
- 東京 早川 種三氏(一口) 東京 飯塚篤之助氏(二口)
- 東京 目黒 四郎氏(一口) 東京 會原喜久藏氏(一口)
- 京都 桑原 武夫氏(一口) 東京 加藤 保二氏(一口)

前回發表したる四十九名、五十九口を加算すれば現在の維持會員は五十九名、七十口である。

○交換圖書及寄贈書

山と溪谷(月刊)一、二、三號

山と溪谷社

日本地理大系(山岳篇)

改 造 社

旅 七卷七號

日本旅行協會

地震 自第一卷第一號、至第二卷第九號

地震學會

- | | | | |
|----------------------|------------|-------------------|-------------|
| 震災豫防調査會紀要 第十一卷第四號 | 陸地測量部 | 林と野 第二卷四號 盛夏號 | 林と野の會 |
| 震災豫防評議會報告 二十五號 | 震災豫防評議會 | 山と溪谷 田部重治著 | 第一書房 |
| 登山カード 鈴木勇著 | 目黒書店 | 双六谷 冠松次郎著 | 第一書房 |
| トウリリスト、十八卷七號、八號 | トウリリストビュロー | 山を行く 高畑棟材著 | 朋文堂 |
| 三角點 第二輯 一九三〇 | 東京蝸牛會 | 霧の旅 十二年三十四號 | 霧の旅會 |
| 旅行 昭、五、七 | 東京旅行クラブ會 | 立教大學山岳部々報 第二號 | 一九三〇年 |
| 臺灣山岳彙報 昭、五、七 | 臺灣山岳會 | 針葉樹 第五號 | 東京商科大學一橋山岳部 |
| 管見錄 昭、五、八 | 大阪管見社 | メタツク 第二號 | 札幌二中山岳部 |
| 山水巡禮 昭、五、六 | リニツクサツク俱樂部 | 岳聯報告 第一號 | 關東學生登山聯盟 |
| パンフレット 第一輯 | 同 | 日本アルプス登山要項 昭和五年度 | 信濃山岳會 |
| 旅 昭五、五——一〇 | 東京アルコウ會 | ペデスツリアン 第二百二十四號 | 神戸徒歩會 |
| 山行案内 昭五、七——九 | 昭和マウント俱樂部 | やま 二十五號 一九三〇年 | 神戸商大山岳部 |
| アルカウ趣味 一九三〇、四——九月 | 日本アルカウ會 | 雪嶺 第二年七、八月 | 東京スキー山岳會 |
| 山嶺 昭五、五——九 | 東京野歩路會 | 飛驒史壇 九卷十二號 十卷一號 | 飛驒史談會 |
| 東京登山會々報 昭五、七 | 東京登山會 | 岩登 船田三郎著 | 目黒書店 |
| 愛山週間號 一九三〇年七月 | 山梨縣山林會 | 日本アルプス | 新光社 |
| 廣島を繞る山の研究 結城次郎、磯貝勇共著 | 登山史績第一輯 | 山の傳説 青木純二著 | 丁未出版社 |
| マツターホルンを争ふ カール・ヘンゼル著 | 書上喜太郎譯 | エヴェレスト登山記 田邊主計譯 | 第一書房 |
| 銀嶺に輝く スキー山岳部 | 窪田・田部 | 尾瀬と鬼怒沼 武田久吉著 | 梓書房 |
| 御國の咄し 第一卷 高頭仁兵衛著 | 積善館 | 高山植物(觀察と栽培) 石井勇義著 | 誠文堂 |
| 三角點 第四輯 一九三〇年七月 | フアガスクラブ | 岳友 六十八號 一九三〇年八月 | |
| 山岳資料 第八輯 昭和五年七月 | 關東山岳會 | 會報 昭五、四——九月 | 關東山岳會 |

會報 ○圖書及寄贈書

101

記録 第一號 成蹊高等學校旅行部

ヌウイン日記 辻村伊助著 梓 書 房

ハイランツ 辻村伊助著 梓 書 房

Bulletin. June, Aug. Sep. 1930. The Appalachian Mountain Club.

Club Alpino Italiano. Volume XLIX. 3. 4. 5. 6. 1930.

Svensk Turist Kalender. 1930.

Svenska Turist. 1930.

Die Alpen VI No 6. 1930.

Bulleti del Centre Excursionista de Catalunya. May. June. July. 1930.

Sierra Club Bulletin. April. June. Aug. 1930.

The Mountaineer. Vol. XXII. No 7. No 8. No 9. 1930.

The Prairie Club Bulletin. June-Sep. 1930.

Mededeelingen. Der Nederlandsche Alpen-Vereeniging. 1930.

Natural History May-June-July-August, 1930.

La Montagne. mai-juin. No 9. 1930

Die Alpen No 7. 1930.

Album des Cabanes supplement. C. A. S.

The Canadian Alpine Journal. 1929 XVIII

Revue Alpine. Volume 31. No 1. 1930.

Ernst and Timberline. No 140. 141 June, July, Aug, Sep. 1930.

The Geographical Journal. Vol. LXXV No 6. Vol. LXXVI No 1. July. June 1930

La Montagne. Club Alpin Français. juillet-aout 1930

Himalayan Journal. No 2. May. 1930.

Zeitschrift des Deutsch und Österreichischen Alpen Vereins. 1929.

× × ×

木村鐵吉氏寄贈の分

書 名 著 者 名 發行年月日 發行所

日本名勝誌第二篇 野崎左文著 明治三〇、三二 博文館

同 同 明治三六、三六 同

同 同 明治三六、三六 同

大谷光瑞伯印度探險圖露香 小國民臨時 大正三〇、三二 北 陸 館

富士山奇觀 増刊 濱田青陵 大正七、八、九 大 鐘 閣

希臘紀行 東京地學協會 明治三三、三六 株 日 本 圖 書 社

地學論叢第四輯 東京地學協會 明治三三、三五 育 成 會

日本名所事彙 物集高量 明治三三、三五 育 成 會

埃及聖地旅行談 山田寅之助 明治三〇、三三 教 文 館

中亞探險 橋瑞超述 大正元、二、三 博 文 館

闕露香編

日本山水論	小島烏水	明治三、八、三〇	隆文館	日本アルプスへ	窪田空穂	大正五、七、五	天弦堂
瀬戸内海論	小西和	明治四、二、八	文會堂	山河拾四州	玉井紅葩	明治四、三、三〇	春陽堂
臺灣中央山脈 斷記	賀田直次	大正三、九、二	拓殖新報社	不二山	小島烏水	明治三、六、一	如山堂
支那大觀 黃揚子江	福田眉仙	大正五、一〇、五	金尼文淵堂	木曾の神秘境	村井弦齊	大正九、七、元	實業之日本社
日光名所圖會	石倉重繼	明治五、一〇、二	博文館	最北の日本へ	伊藤修	大正二、五、八、二五	大坂屋
朝鮮金剛山探勝記	竹内直馬	大正三、八、五	富山房	嚴島誌	重田定一	明治四、五、二七	聚精堂
箱根大觀	佐藤善次郎	明治四、一、四	林初三郎氏	朝鮮名勝記	渡邊豪	明治三、三、三六	名勝記編纂所
山嶽めぐり	石上錄之助	大正一〇、五、〇	鈴木書店	ふところ硯	遅塚麗水	明治三、六、三六	左久良書房
支那漫遊記	徳富蘇峰	大正七、六、二五	民友社	東京郊外 名所めぐり	小川煙雨 小菅廣胖	大正五、一、一	厚明社
わたり鳥の記	上原敬二	大正二、五、三〇	新光社	日本周遊奇談	井上圓了	明治四、六、三	博文館
支那に遊びて	河東碧梧桐	大正九、二、一〇	大坂屋				
淺間登山の友	山浦瑞洲	明治四、七、二三	東亞堂				
旅より旅へ	吉江孤雁	明治四、七、五	光風館	磯貝藤太郎氏寄贈の分	志賀重昂	(明三〇、八版)	
日本の山水	河東碧梧桐	大正四、七、五	紫鳳閣	日本風景論	同	(明三四、五版)	
蒙古旅行	鳥居龍藏	明治四、六、二五	博文館	河及湖澤	同	(明四〇、初版)	
甲州案内	山梨時報社	明治三、一〇、一〇	山梨時報社	やま	志村烏嶺、前田曙山	(明四〇、初版)	
中華三千哩	東亞俱樂部	大正九、三、八	大坂屋	日本山水論	小島烏水著	(明三八、初版)	
箱根山	大町桂月	大正元、九、一〇	至誠堂	不二山	同	(明三九、四版)	
富士山大觀	小島烏水	明治四〇、八、四	如山堂	山水無盡藏	同	(明三九、初版)	
アルペン行	鹿子木貞信	大正三、九、五	政教社	山水美論	同	(明四一、初版)	
順禮紀行	徳富健次郎	明治三、二、二五	警醒社				
赤石白峯 山脈縱横記	原口亭	大正七、七、五	洛陽堂				

名譽會員ウエズトン氏寄贈書
Abraham, C. D., Swiss Mountain Climbs. 1911.

- Auldjo, J., *Narrative of an Ascent to the Summit of Mount Blanc*. 1856.
- Ball, J., *The Central Alps*. Part. I. 1907.
- ’ ’ ’ Part. II. 1911.
- Bonner, T. G., *The Building of the Alps*. 1912.
- Baedeker's, *Switzerland*. 1895. & 1901.
- ’ *Eastern Alps*. 1903.
- ’ *Switzerland*. 1905. 1909. 1911. 1922.
- Barnard, F. C., *Tracks for Tourists*. 1864.
- Barrow. *Expeditions on the Glaciers & etc.*, 1864.
- Bonnparte's crossing over the Great Sant-Bernard. 1892.
- Buxton, *The Peak, Dovedale*, etc.
- Gambidge, *The Roofclimber's Guide to St. John's*. 1921.
- Chishibu, H. I. H. *Prince of A Climb in the Japanese Alps*.
- Cambridge Mountaineering*. 1923-26.
- Cornwall *England's Riviera*.
- Conway's *Climber's Guide* :—
- Eastern Pennine. *Chain of Mont Blanc*. *The Bernese Oberland*. *Pennine*.
- Cheever & J. T. Hendley, *Travels among Alpine Scenery*. 1855.
- Daudet, A., *Port Tarnsoon*.
- Freshfield, D. W., *The Life of Horace Benedict de Saussure*. 1920.
- Farrer, J. P., *The First Ascent of the Finsternhorn: An Re-Examination*. 1913.
- Gribble, F., *The Early Mountaineers*. 1899.
- Gardiner, G., *Essays of To-day & Yesterday*. 1926
- Geikie, Sir Archibald, *Illustrations & Diagrams*. 1900.
- Hudson, Rev. C., *An Ascent of Mont Blanc*. 1856.
- International Geographical Congress, Cambridge*. July 1928. 1930.
- Illustr. Führer auf die Gipfel der Schweizer-Alpen*. I. II. III.
- Lunn, A., *The Alps*. 1914.
- Lucas, E. V., *The Open Road*. 1910.
- Larden, V., *Recollections of an Old Mountaineer*. 1910.
- Lubbock, Sir John, *The Beauties of Nature to the Wonders of the World we live in*.
- Lunn, A. H. M., *Oxford Mountaineering Essays*. 1912.
- Lucas, M., *Tennyson*.
- Mannery, A. F., *My Climbs in the Alps & Caucasus*. 1895.
- Murray's *Handbook of Switzerland*. 1879.
- Murray's *Handbook of Savoy, Piedmont*. 1879.
- Monerjoff, A. R. H., *Black's Guide to Cornwall*. 1898.

Maki, Y., Some Aspects of Mountaineering in Japan.

Rashin, J., Praetertia 3 vols. 1899.

• The Queen of the Air. 1904.

• The Two Paths. 1904.

• The Elements of Drawing. 1904.

• Ethics of the Dust. 1890.

• A Knight's Faith. (Bibliotheca Pastorum. Vol. IV.)

1885.

• A Joy for Ever. 1904.

• Time & Tide. 1904.

Reclus, E., The History of a Mountain. 1881.

Smith, A., Mont Blanc. 1860.

• A Hand-book of Mr. Albert Smith's Ascent of Mont

Blanc. 1852.

Snyers, W. C., Over Some Alpine Passes, Memories of. 1908.

S. A. C. Ballagen zum Jahrbuch des Schweizer Alpen Club.

Tyndall, J., Hours of Exercise in the Alps. 1885.

Torguay, 'Homeland & Handbooks.'

Wundt, T., Die Jungfrau und das Berner Oberland.

• Das Mutterhorn und seine Geschichte.

Weston, W., The Japanese Alps. 1896.

• The Playground of the Far East. 1918.

• W. y. f. r. e. r. in Unfamiliar Japan. 1925.

• Two Climbs in the Japanese Alps. 1910.

Wlymper, E., The Valley of Zernath & the Mutterhorn.

1897.

Winsor Castle, Brodie's Handbook & Guide to —.

購入圖書

Abruhm, G. D. The Complete Mountaineer.

Alat Pamir Expedition, 1928.

Lunn, A. A History of Skiing.

Young, G. W. Mountain Craft.

× × ×

澤山の新着書を此の欄に書上げる事の出来るのは圖書係の何れも喜びとする所である。斯うやつて行く中に本會の圖書室は一つの重要な山に關するレフエレンス・ライブラリーになるであらう。見らるゝ通り新刊書は書肆の親切によつて大概は奇贈を受けることが出来る。たゞ洋書と古い本とはさう行かない。かゝつて山岳會としては本當に必要な資料以外には手が出せない。其の意味に於て會員諸氏からの書籍の奇贈のある度に係の喜びは一通りでない。特別の本ならば寄托して下さつてもいい。現在は新刊紹介の如き會の必要以外には原則として借出をして居なうし、特に寄托書、珍奇書の類は嚴重に藏つてあるから、其の方の事については係は責任をもつ事が出来る。今日まで

寄託となつてゐる本も現に少からず會の本箱をうづめてゐる。會員高橋健治氏からの獨塊山岳會々報の大揃ひ四十餘冊等はその中の大物である。

磯貝氏から寄贈せられたものも何れも今となつては珍しいものばかりであり、特に山の本としては色々な意味で重要なものである。多年座右に置かれた書籍を割愛せられた事を茲に厚く感謝する次第である。ウエストン氏からの物は圖書室設置の報に對しての喜びの手紙と共に發送せられたものである。木の箱に一杯印度洋を遙々と渡つて來た事を思ふと、小さな片々たるものでも云ひ知れぬ愛着を感じない譯に行かない。今年七十のウエストン老人が、その頃の日本の事などを想ひ出し乍ら、書齋の棚から一つと取り出しては木の箱にをさめてゐる有様を想像して、私は何とも云へない氣持になつた。埋め草にジオグラフィカル・ジャーナルがづまつて來た事なども、若しや何かの役に立つまいかとの心盡しからであつた。實際その中から、會の分で缺けてゐる號を補ふ事が出來たのだから、ウエストン氏の心遣りは決して無駄ではなかつたのだ。リストに見らるゝ通り可なり大事な、山岳圖書館としては是非なくてはならないものも少くないし、又珍しいその片々たるパンフレット一つにその時代の山登りが浮んで來る様な日くつきのものである。古本屋のカタログなんかには決して出て來ない様なものがチラ／＼入つてゐるのが、何よりも有難かつた。

圖書室にはガラス張りの棚も出來たし、地圖を入れる棚も出來てゐる。その中本棚の擴張も出來る筈であるし、額をつる金棒も渡され、不十分ではあるが机も椅子も備つた。實際を云ふと圖書室は完備に近づいたと思ふ頃もう狹隘をつけつゝあるといふ始末である。併し今までの事を考へればそんな不平は出ない。當分今の場所でも色々内容充實さして行くであらう。九月以來一ヶ月半ばかりの間の來室者は二百名を超えて居る。併し係としてはもつと此の室を會員諸氏が利用して下さる事を希望して已まない。こういうふ室の存在が、事實上の問題として會の發達の上には大きな役割をしてゐる事を痛切に感じつゝある一人として私は切に此の事を祈つて止まない。(松方三郎)

慈惠大學山岳部員岡一男氏遭難の真相(雜報追加)

故岡氏一隊の登山計畫並に其概念(戸田仁一郎)

今回のプランは大體左の如きものであつて來るべき冬期登山に對する最後の下踏みとして行はれたものだ。

昭和五年十月十二日、戸臺—赤河原—駒嶽六合小屋。十三日 鋸嶽往復。十四日、六合小屋—駒ヶ岳頂上—六方石—仙水峠—北澤小屋—仙丈石室。十五日、石室—仙丈岳—大仙丈澤—兩俣小屋泊り。十六日、小屋—左俣—間岳—北岳新設小屋。十七日、小屋—北岳—廣河原小屋泊り。十八日、小屋—廣河原峠—高嶺—藥師岳—觀音岳—南御室小屋泊り。十九日、小

屋―辻山―芦安―韭崎―歸京。備考、第三日は其日の状態及隊員の状態に依りて北澤小屋泊り或は仙丈石室泊りにするの事。

遭難の原因に就て (戸田仁一郎)

第一遠因。A、第二日のプランに鋸岳往復といふ日程があつて、これは通例は角兵衛澤より登り縦走するのであるが、六合小屋より往復するプランを作つた事は何等かの理由の存する事を思はねばならぬ。即ち岡君が今春肋膜炎を患つてゐた事と同時に、パーティー中に新人の含まれてゐた事をも考へねばならぬ。B、ルツクザツクの負紐を環と結ぶ處の皮に缺損のありし事。C、鋸を打ちたる登山靴の彼に對して重過ぎた虞れのある事。D、前日の鋸岳往復に成功せし結果その喜びに疲労を忘れ又リーダーの立場より其處に無理はなかつたか？ 彼は遭難以前に屏風岩通過に際し足を踏み外し藤太郎に止めて貰つた事並に隊員飯野と相談して北澤より案内人を歸す事を中止し全コースを連れて行く事にした事は彼の疲労の程度を想像し得るものである。

尙遭難當時の順位を見るに、三千雄(案内人弟)、藤太郎(案内人)、東條養雄、渡邊三千男、永瀬一雄、岡一男、飯野富雄であつて少なくとも第三番に行くべき、彼がリーダーとして疲労を抑へ自身の位置に止つた事は注目し得る。

第二近因。A、木の根に躓きし(?)事。遭難現場考察の編に

雜報 ○慈惠大學山岳部員岡一男氏遭難の真相

記述せる如く現場は六方石より小松峯へかけての最低鞍部を過ぎて登りにかゝり、その登りを越えて極く緩傾斜の下り路約十米以内の出来事と思はれる。この所に於て甲州側路傍の雜草の間に見出されたる木の根に、直接原因は胚胎してゐる事と考へられる。此の小さな起伏を登り來つて、平坦な道を足軽く運び行く中、この木の根に足を取られ躓くと同時に、ルツクザツクが信州側に傾いたのでこの惨事を惹起したものと考へられる。以上の諸因を綜合するに故岡氏の責任觀念の緊張後の放心状態及び疲労に結びつくに靴、ルツクザツクの不備と木の根に躓いた事が直接原因となつたものと推斷せらる。

遭難當時の思ひ出 (同行者 飯野富雄)

……下りは摩利支天の方を捲いてガラ／＼路を下る。振りかへつて仰いだ胸は幾度來てもいゝ山だと思つた。六方石に出る前に一寸休んだ。岡君はもう一時間もすれば小松峯へ着くなど前の人に話してゐた。岡君は幾分蒼白い顔色だつた。少憩の後、例の順で三千雄、藤太郎、東條、渡邊、永瀬、岡、僕と進んで行つた。六方石も直ぐ過ぎてちよつとした上りがある。永瀬と岡君の間が約二十米、僕と岡君との間が約廿米あつて、皆氣を許した路だつた。小松峯の手前の峯に先頭は休み、後の者は見え隠れつゝゆく行くうちに最後の僕は全員の見え切るところに達した、この時一寸變に思つた。オヤツ！ 岡君はいやに早く登つたなあと思ひつゝ皆の休んでゐるところに着く。とい

きなり永瀬が「岡さんは？」と尋ねた。「もう来たわけだぜ、靴の紐でも直してゐるんじゃない？　だが一本道だ。俺が越すわけはない」その時藤太郎始め、皆ははつと驚き、空身で六方石まで呼びつゝ戻つた。三千雄が谷を覗き込み乍ら「落ちてゐる！」と叫んだ、その時の一同の氣持！　轉びつゝまろびつゝ君のところを辿りつた時は一同は帽子を取つて雪の上に只祈るのみであつた。現場に第一に着いた藤太郎の言に依ると頭を下にしてゐて、抱き上げた時「ウーン」と言つた切りだつた。第二に永瀬が着いた、第三に僕がついた時は心臟が激かに搏動しては居たがやがて聞えなくなつてしまつた。萬事窮す！　岡君は仲のよい藤太郎の腕に抱かれ、山の友に圍まれつゝ永瀬の眠りにつかれたのである（午前九時二十分）。九時四十分、藤太郎と弟は飛んで歸つて急報、取残された僕等四人は尾根で露骨と定めて一同黙々と働いた。靜かな山の夜が襲つて來た、永瀬が今確かに人聲がしたと云ふ、十時だ、藤太郎が歸つて來た。月が遅い歩みを西へ〜と運び待ちに待つた夜が明け初める。

遭難現場考察（第一救授隊 大川浩）

十月十六日正午現場に到着した第一救授隊A隊は只冷汗を拭ひ乍ら一時は呆然と秋空に聳え立つ巖を仰ぐのであつた。全く運命と云つてしまひたい、それともほんのエラーと言ふべきか君の墜落の起つた路は平々坦々として居る。丁度汗を拭き〜輕やかな氣持で足許を見乍ら通る位の路なのだ。

墜落地點の位置は五萬分の一「市瀬」間幅に於て駒ヶ岳から西南に走つて北澤峠に至る、國境尾根がアサヨ峯三角點から駒と鏡の間にある二五九三米の地點に引いた線と交る所であつて、其交點尾根上附近に小さな突起を等高圈に依り知る。其の突起の直下の駒寄りの棚狀になつて居る尾根で遭難されたのである。

其棚狀の尾根は長さ約十米で殆ど平坦、幅約一尺五寸の路であつて信州側は脚下から切りおとした崖で覗き込むのも厭な氣がするが、反對に甲州側は足下には偃松が茂つて居り灌木も密生してブツシュのゆるやかな傾斜である。岡君はこの尾根道から信州側に轉落したのであるが實見者は乍残念ない。然し永瀬、飯野の位置並に種々の遺留品及血痕の位置から考へ合せて見ると此處より他に落ちた處はない。脚下の岩は風化されて幾分脆くなつて、轉落の跡かと思はれるガレもあつたが確實な證據とはならない。その十米の尾根道は赤土と砂利混りでツルリと滑べる様な事は考へられない。その中に二三岩根が突出し又甲州側の偃松の枝の切れ端が突き出てゐて躓く様になつて居る。この偃松の枝をつかんでみると丁度一と握り位で案外ガツチリと鈎狀に足の甲にからむ位の高さである。ちよつとした歩みの廻び工合でうまくこゝに足が引懸る事を實驗した。躓いた位ではその枝はビクともしない。

墜落斜面は其の尾根の上から死體の發見された地點まで全部

で約二百米の距離があり、全長を三種に分類する事が出来る。

第一 岩壁面、高さ約五十米

第二 ガラ／＼の斜面、長さ約百米

第三 岩斜面、長さ約五十米

(附圖ありたれど原稿を入手せる事遅かりしかば遺憾ながら省略せり——編者)

第一の岩壁面は殆ど垂直で二つの凹みが横走せる爲三つのオパーハングをなす凸部あり、壁の様に平滑ではなく凸凹があつて所々には草や小さな灌木が倒さに生えてゐる。全體は花崗岩の一塊で表面は柔らかいものであつた。絶壁は下まで五十米の高さがあり直下に大きな岩が坐つてゐた。此處に最初の血痕が発見された。ルツクザツクからはづれた上衣も此處に懸つてゐた。見上げるとこの高い懸崖の程の小木に紺の帽子がチョコッと懸りその下で左方約五米の處にビツケルが石突きを下に引懸つてゐた(以上左右は尾根を見上げての左右である)。

第二の斜面は四十五度前後の可成り急な傾斜でガラ／＼な石から成つてゐる。石の間には草が生え灌木もあつて粗林をなしてゐて傾斜は段々下になる程ほんの少しゆるやかに成つてゐる。全體で約百米續いて居て二本の小さな谷に岐れていづれも絶壁となつて黒澤の水源に達かおとしになつてゐる。この斜面の程の木にルツクザツクが懸り、その側には寫眞機があつた。斜面の終り近く二岐に分れるところに大きな岩があつて血痕が新

雪を紅に染めてゐた。この岩に當つて方向が幾分か右に轉換されて第三の岩斜面に落下したのであつた、此の斜面には灌木が粗林の程度に生え速力は相當制止されたと思はれる。

第三の岩斜面は前の傾斜よりは稍々ゆるやかで四十度には足らない位だが岩が左右から突出して狭められた谷の始まりの形を具へてゐる。屍體はこの谷の程で止つたのもので二十米も下に降れば瀧の懸崖になつてしまふ。屍體の喰止つた處はガラ／＼岩の上であるが止るまでにずつた事が石の工合でわかる。岩の上は凍りついてゐて滑りさうでよくこゝで止つたと不思議に思はれる位であつた。總括して見ると尾根道の中央邊で重心が失はれ(原因に就ては前記参照)最初の第一の絶壁面を直下に轉落し、大きな岩に當り、帽子、ビツケルは轉落の間に飛ばしたもので、ルツクザツクにつけた上衣はその岩のある地點にあつた。更に第二のガラ／＼の斜面の上を粗林の上を雪崩れ打つて轉落して分岐點の岩に當つた。此處までは大體直線である。この岩に當つて右に幾分方向が換へられ狭い岩谷に入り、爲に速力がなくなつて此處に止つたものと判斷せられるのである。

岡氏遭難當時に於ける部員の行動

慈大(慈惠)山岳部の秋季登山計畫に参加し、その中途胸ヶ岳に逝ける岡一男君の悲報一度傳はるや、其搜索に就て遺族より慈大山岳部に一任されて出發、戸塚案内人組合、高遠警察署の援助に依り其結果に於て豫期以上の効を收め、遺骸を速かに遺族の手

に渡す事が出来た。

十月十四日、戸臺の案内人竹澤藤太郎氏より岡氏の悲報が山岳部に到着したのは、同日午後六時頃だった。電報に依り小松峯、六方石間に於て墜死せる事を知つた。當夜關係方面に打電すると同時に當夜現場に戸田仁一郎、大川清、岡越男(令弟)、松井(叔父)、通信員として松尾強を戸臺に、おかれて尾岡大學代表者を戸臺に、以上六名よりなる第一救援隊は當夜飯田町驛を直ちに出發した。

十月十五日、早朝神宮部長、先輩岡田春樹、部員全部は本部に集合し、死體發見の通知に接せざりしを以て遺族との交渉は部長に一任し、午前十時死體未發見の下に左の事項を決議す。

- 一、第二救援隊の編成の件。一、留守隊の事務主任者決定。
- 一、遺族連行の件。一、會計の件。

第二救援隊メンバー、神宮部長、岡田春樹、部員加藤、青木、木原、安並、安島、林、廣瀬、倉田、遺族として岡君兩親、妹惠子、留守隊、荻井、菅原、原、會計、木原。

午前十一時戸臺より電報來る、「今朝人夫八名、警官二名現場に急行す、道は胸六方石なり、通信は高遠警察宛」。我々は未だ死體の發見の位置を確實に知る事は困難だった。斷崖の途中に懸り居るものなるや、黒澤水源に墜落し居るものなりや、又は比較的運搬容易なる地點にありや、此の疑問に對して我々は相當の日数を要するものとして諸種の準備をした、即ちテント

二張、救急箱、防腐劑等各自露營の準備をなし食糧は伊那町、戸臺にて求むる事とした。第二救援隊は遺族一同と共に同夜出發す。第一救援隊は十五日午前八時高遠着、高遠警察署にて遭難の概略を聴取し、午前十一時戸臺着小松傳彌氏宅を本部と定め、松尾強通信に従事す。尙尾岡學校代表は十二時黒河内案内人と戸臺に來着、學校當局の事務に就かる。

同日午後高遠警察署長古畑堅重氏溝口巡查一名隨行、人夫一名及び第一救援隊員並に遺族二名北澤小屋に急行す。

十月十六日第二救援隊伊那北着、食糧其他の物資を調達し自動車にて出發、黒河内より徒歩にて戸臺に向ふ。十一時戸臺入口にて通信員松尾に會ひ本日午後一時死體戸臺到着の豫定なる事を確聞す。十一時半戸臺着、本部を竹澤藤太郎宅に移す。加藤青木、木原、先驅して遺骸の出迎ひに行く。午後一時三石手前にて人夫に背負はれたる山友達の悲しき慘しき遺骸に會ふ。

警官人夫の外同行者渡邊、東條、叔父松井氏も下山された。黙々として語らず只泣くばかりの同行の二君には慰むる言葉も出ず其々に岡君の遺骸を守りて戸臺河原を下り一時半藤太郎宅に到着す。二時高遠警察署長古畑氏、醫師關氏、岡田先輩立會の下に死體檢案をなす。檢案後遺族及部員の手依り納棺せらる。午後四時藤太郎宅に於て假葬式を行ふ、靈前に供へられたる石楠花、各自のルツクザツクより出たる供物、簡單乍ら山男としての岡君は満足せられた事であらう。五時出棺、ザイルで結ば

れた棺は部員の肩に擔はれて戸臺河原に運ばれ、六時半豫め用意されたる薪の上に安置し茶毘に付さる。加藤、木原、藤太郎は第一救援隊A隊の出迎ひに行き八時半共に歸る。同夜本部にて遭難現場詳細報告墜落原因等に就て考察す。終りて部員は當夜河原に到りテントを張り、火を守りて通夜す。松尾通信員より本日死體到着、火葬し明日歸京の電報を發送す。

十月十七日午前七時遺骨を納め村人に遭難に對する數々の援助を謝し戸臺に別れを告げ伊那町に來り同地信濃山岳會員に迎へられ、辰野三時發にて午後十一時半飯田町に多數の人に迎へられ歸京す。

前號補正

頁	行	誤	正
八	一〇	劔が	劔に
九	七	中ノ	中の
三五	一五	幅がある	幅がある
三八	一二	一九〇八年	一九〇八年
四四	五	食車	食事
四七	三	日足	日脚
六一	六	architecture	architecture
七三	上段一〇	名詞	名刺
一二三	七	墮落	墮落

一二八	七	異常ざる	異常なる
同	九	クールアール	クローアール
一五八	終行	ゐ事	ゐる事
一六一	一七	腓肉	脾肉

附記

扉及び一六一頁の「その頃の人々」は會員茨木猪之吉氏を煩はした。又カットは坂本直行氏にお願いした。一六一頁の似顔は

- 山川 鳥山 梅澤
- 三枝 小島 田部
- 木暮 高頭 高野
- 武田 辻本
- 近藤 辻村

の諸氏である。

編輯者
 冠松次郎(本文)
 岩永 信雄(寫眞)
 渡邊 漸(責任者)

昭和五年十一月二十八日印刷
昭和五年十一月三十日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者
新潟縣三島郡深才村深澤
高頭仁兵衛

發行者
東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會
振替口座東京四八二九番

印刷者
東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地
益枝寅三郎

印刷所
東京市麴町區飯田町二丁目六十七番地
文雅堂印刷所

發賣所

東京市神田區表神保町
東京堂

辻村伊助遺著

スウイス日記

追憶

純情の人、伊助

武田 久吉
高野 鷹藏

續スウイス日記發掘の始末 小島 鳥水

スウイス日記の由來

本邦登山界先縦者の一人たりし故辻村伊助氏、かの山紫水明の國瑞西に遊び、歸來成りしものこの稿なり。豊かなる詩想、織細なる感受性を筆に托して、山を語り、湖を歌ひ、山村を叙し、牧場を詠じ、高原を談ず。言々句句珠玉の如く、おのづから韻律をなし、紀行とよりも寧ろ散文詩と言はんか。かくの如きは西歐數多き山岳文獻にも比儔稀にして、本邦山岳文學の最高段に位するものといふべし。卷末「續スウイス日記」は著者歿後地中より發見せられたるものにして今次始めて世に公にせらる。益々圓熟せる筆致愛誦おく能はず、未完にして已みしこの日記を讀みて誰か著者の死を惜しまざらん。偏に諸彦の高覽を仰ぐ。

菊判總頁四四〇頁 定價四圓五十錢
寫眞三六葉天金裝 送料廿七錢

辻村伊助遺著

ハイランド

解題

短く美しかった故人の生涯

小島 鳥水

辻村 太郎

亡友「辻」

近藤 茂吉

蒼穹に聳え立つアルペンの氷の峯を仰ぎては登高怨の燃えて已まざりし著者は、またかの綠草に蔽はれし柔和なる山々と奇しき傳説物語を秘めしかずん、の山湖と、廣茅幾里人家を見ざる高原と、牛羊群れ遊ぶひろやかなる牧場とを持つハイランドに限りなき愛著を感じた著者であつた。登山家であると共に、旅人であつた著者の高原放浪の手記は、ワンダラーの心にひし／＼と迫るものがあらう。本書に併せ録する所の數篇は、本邦登山界黎明期に於ける名篇にして、吾等が先人のいかに山岳を愛せしか、當時の山谷のいかに剛趣を藏せしかを知るに足るものである。山に心ひかるゝ者は「スウイス日記」と共に併讀すべき文字である。

菊判總頁二七〇頁 定價 三圓
寫眞三四葉天金裝 送料廿七錢

博士 武田久吉著

尾瀨と鬼怒沼

敬虔なる山岳宗徒の清杖は既に高地上には印されない。往昔の神河内を懐しむ吾岳友諸兄は安息所として唯一の神境尾瀨を有つ。

本書は高山植物學界の至寶武田博士が過去數次に亘る尾瀨調査旅行の所産にして紀行文集なると共に貴重な學術的記錄植物景觀である。卷末に附綴せる百葉の寫眞は、其鮮麗さに於て、其學的價值に於て、正に世の驚異であらねばならぬ。

尾瀨と鬼怒沼
初めて尾瀨を訪ふ
尾瀨再訪記

尾瀨をめぐりて

春の尾瀨
秋の尾瀨

四六判三七〇頁 定價 三圓
寫眞百枚、地圖(一) 送料廿七錢

山日記 日本山岳會編

送料 一、〇六

山と雪の日記

板倉勝宜 遺稿 送料 二、〇六

氷と雪 加納一郎著

送料 二、一五〇

雪・岩・アルプス

藤木九三著 送料 三、一五〇

梓書房

東京北區神田四

電話神田二七五番
振替東京七四八番



靴山登と靴一キス

—呈贈グロタカ第次越申御—

圓五十…製革水防 靴 { 一キス と 鉄
圓二十…製革水防 { 山 登

すまりあに富豊各 (鉄六本一) ルーケンリク)
(鉄五本一) ニコリト)

登山家實用向
特價品金拾圓也

次越申御を數文袋足及形足は節の文注御方地向

すまげ上申附送御てに便包小換引金代費實第

用御部岳山學大各

店靴久布津

通車電地番拾六町肴區込牛市京東

番四八八一四京東替振

番〇六四一(34)込牛話電

冬山の用具は片桐へ

◇スイス製のピツケル アイゼン新荷着◇

スイスピツケル T 2 T 5 C 3 $\frac{1}{2}$

シュタイグアイゼン

エツケンシュタイン

イ ラ ゴ ー ゼ

ブ リ マ

■近日入荷品■

ザイル、コツヘル、ワックス、杖、帽子、靴下、絨具

アザラシの皮は是非當店へ

片桐テント登山具店

神田區今川小路二ノ四(九段下電車通)



都下唯一のスキー・及スキー用具・登山靴常設店

東京野歩路會御用
法政・拓大・日大各山岳部

ヒロノ敬治商店

本郷上富士前町交叉點ギョ

ascent of the final peak, and at 11. a. m. the highest point of the inner crater-wall was reached. This final peak is believed to have been unclimbed before.

The party spent a few days on the mountain for the investigation of animal and vegetable life, and the return was made via Chinominochi, Odaibake and Seseiki. A selected list of material collected will be found in the Japanese part.

2. Chuosenzan by T. KANO.

Chuōsenzan is one of the few peaks which attract the mountaineer with their challenging feature. Senzan means pinnacle-mountain and there are two peaks called by this name, i. e. Taihasenzan and Chuō (central) senzan. Taihasenzan was ascended in 1927 for the first time but the Central Peak remained unclimbed until the following year, when the party of the author succeeded in reaching the top. Starting from Karenko the party went up along the Taroko gorge and put up their base at Shiratsuku police station. The party of more than sixty person, including 40 native porters and 5 police constables, left Shiratsuku on August 7th and camped at Burenonfu. Next day was spent for reconnaissance. On August 9th the party left the camp at midnight. By traversing a ridge which descends southward from the west shoulder they gained the main ridge at 8 a. m. The last part of the ascent was dangerous because of falling stones, but at 9.45 a. m. they finally reached the top. The altitude of the mountain was estimated from the atmospheric pressure indicated by a barometer at 3840 m. On the ordinary maps the height of this peak is given as 3715 m. which, too, is not derived from any triangulation.

stream which had beaten us. The Pyanan Ambu Post was over the ridge only a few hours away.

Though we had not perhaps realized all our hopes, yet we had learnt some valuable lessons, we had had a week in mountains and scenery which excel even that of the Japanese Alps, we had had the satisfaction of opening up a new ridge and of making a 'first ascent', and above all we had drunk deeply of that spiritual draught which the mountains ever give to those who love them.

SUMMARIES OF THE PRINCIPAL ARTICLES IN THE JAPANESE PART

I. Chachanupuri by K. OKADA.

The author gives an account of his climb of Chachanupuri, a double-coned volcano of 1828 meters height, which rises near the northern end of Kunashiri, Chishima archipelago.

The name of Chachnupuri has its origin in Ainu folkslore. Chacha means an elder and nupuri a mountain in Ainu language. Late in July, 1929, the author, with two companions, sailed by motor boat from Nemuro to Furukamappu, whence they travelled northward along the coastline for four days on horseback, until they reached the foot of the mountain. On the first day the party succeeded to climb the main part of the mountain and pitched their tent inside the first or outer crater-wall. An Ainu legend says that there is a lake inside this crater-wall but the party found nothing but a vast field of volcanic ashes with patches of snow and lava streams. As it was misty on the following day the party could not continue on that day, but on August 1st they started for the

had one of the stiffest bouts with rock and creeping pine that I ever remember. This in turn was followed by an interesting piece of rock work, and noon found us on the summit of Mt. Hapanarau, 12,250 ft. approx.—a 'first ascent', at all events so far as is known. More we will not say, for F. S. Smythe said in his Climbs and ski runs, "To place foot where no foot has been placed before, to crush unknown snows beneath the feet and grasp unhandled rocks are joys beyond the diction of the written page"?

We had now reached the crucial point of the whole trip. The ridge had been gradually bending round to the east till at a point about half a mile ahead it forked, eastwards to Momoyama, to the north to Daihasenzan. The rocks were getting more and precipitous. Numai went ahead to examine things and came back with the report that further progress was impossible, certainly with our savage carriers. The only alternative was to drop down the steep southern face of the ridge, (to the north the mountain actually overhung), and try and reach the col from the flank. There was only a sporting chance that this could be done, as where the slopes were not too steep there was an impenetrable undergrowth of creeping pine. We struggled down as best we could but every step seemed to say with mocking voice, "you can't get back; you can't get back." Finally after an anxious time we reached the banks of a small stream and, as it was already dark, camped.

That night we realized that on this trip at all events we were not going to reach Daihasenzan; there was event doubt about Momoyama, for the valley now between us and the ridge was little more than a crack in the earth's surface and the question was whether we could get either down or up. The map suggested that at one point it might be crossed, but after one or two bouts with similar valleys on the N. E. slopes of Tsugitaka, we decided that the best thing was to swallow our pride and start back. There was not time to fight our way through and it was quite evident that the savages at all events were anxious to get home. That night after a glorious scramble along the flanks and shoulders east of Tsugitaka we finally camped by the broad and lower reaches of that

with which it has armed itself. The slopes on the whole were not difficult.

We had been asked to ascertain whether it is Tsugitaka or another peak further along the ridge which can be seen from Taihoku. Unfortunately it was cloudy in that direction, but from later observations we are inclined to think that Tsugitaka itself is not visible.

The way along the ridge calls for no special comments except for a momentary excitement caused by a distant deer. As the hours passed, however, the mists got gradually thicker till at last about half past three we reached a point where we were uncertain what to do. The ridge clearly went north, but from what we had seen earlier we should be gradually veering to a N. E. direction. A halt was called and Numai went down a small spur in the right direction to reconnoitre, but it seemed to vanish into space. Finally we decided that the best thing to do was to go back a short way to a possible site we had passed earlier in the afternoon and there camp for the night. The height was about 12,400 feet. It was quite cold, but fortunately we were sheltered from any wind. The savages lit their fires and wrapped themselves up as best they could for their long vigil. We go into our sleeping bags and lay under our Mummy with the stars above.

Camp in a high mountain at night seems to exercise a strange mystic appeal—the hush of the darkness, broken only by the flicker of the fires and the quietening voices, the jagged outlines of pine and rock against the inky blackness of the sky, the brilliance of the stars and, when the moon rises, the distant ranges and the vasty deeps—somehow one has entered another world more akin to the spirit of man; or is it that the sense of solitude on the borders of the world quickens one's sense to near the voice of the Eternal?

Next morning the sun and the summit of Chuosenzan rose above an ocean of cloud. We were already considerably behind with our programme, so we quickly followed suit and soon after stood once again at the parting of the ways. Numai had been right. The main ridge came to an abrupt end a few yards further on, while the lower spur to the right was the correct route. We made our way down it with necessary care and then

making as it were a gruff protest. Behind is the forest while beyond and above rise the rocky ramparts of Tsugitaka itself, rugged crags struggling to free themselves from the pine and finally succeeding on the snow-crowned summit. The timber line in Formosa is some 3000 feet higher than in Japan, while the broad expanse of pasture lands suggest that the title Alp would be more appropriate than in Japan where they are not so common.

The Police authorities had the previous year put up a large hut for climbers at the base of this first buttress, but when it was reached it was only to find it prostrate and in ruins. The mountain snows had shown that they would not tolerate any permanent invasion of their territory.

We managed, however, to get sufficient shelter for the night without putting up our tents in what was a particularly impressive spot. Around us was the forest, giant trees engaged in a ceaseless but futile warfare with the saruogase, that parasite plant so common in the Japanese Alps. In front stood the final arête leading to our goal, while to the north where the forest fell away rapidly could be seen the grim features of its precipitous face.

We were away soon after dawn for the final scramble up to the top. The route lay up the rocky bed of a stream, from which every vestige of sun was shut out by the cliffs and forest around. At last we emerged on to the more open spaces above, where bush and snow and scree offered a last and final resistance, and two hours after striking camp we were on the summit. Actually there are twin summits about a mile apart but the map is silent about them! Indeed from this point on we came to the conclusion that many details were put in more by conjecture than observation. Barometric readings made the northern peak higher by forty feet.

To the south the ridge came to an abrupt end in a series of precipices which ended on a col hundreds of feet below; to the north lay the unknown ridge.

There was a good deal of snow on the summit; for the rest there is rock, stones in plenty, and that redoubtable foe of the Japanese climber, the creeping pine, only ten times more vicious in Formosa because of a thorn

territory of another tribe, we pressed on as the weather was steadily getting worse. As night fell we reached our goal, the police post of Shikayau, (approx. 5500 ft.) where we bidden a warm welcome. A very good view of Tsugitaka, we were told, can be obtained from the previous post of Shirasetsu, but the elements were agaist us.

Unfortunately the bad weather continued and we were obliged to wait two days for it to clear, which though it gave us ample opportunity for studying the savages was destined to have a decisive effect on our subsequent movements. On the second day, it is true, the weather cleared, but the savages had already dispersed to their plantations, and beside the river was in spate.

It may be a good plan while waiting to say a word about our plans. Our intention was to climb Tsugitaka, a matter of a day and a quarter from Shikayau, and then make our way along the unknown ridge to the N. N. E. as far as Daihasenzan, a remarkable rocky peak first and only climbed by Mr. Ikoma, Mr. Numai and a friend in 1928. Then after retracing our steps by a mile or so we planned to strike east along the ridge to Momoyama, and thence down a shoulder to Pyanan Ambu. Except for Tsugitaka to the south and Daihasenzan to the north the territory was quite unknown. We hoped to accomplish this in a week.

Leaving Shikayau early on the morning of May 14th. we descended to a remarkable gorge to the west of the village, where a rough bow-shaped bridge enabled us to get across the turbulent stream. A sharp steep ascent and then down once more to the bed of a tributary, which we followed for the best part two hours till finally we halted at the base of the lower spurs of Tsugitaka itself, (approx. 5500 feet). Immediately behind Shikayau to the north rises a peak which marks the end of the great eastern shoulder of Tsugitaka. We struck up the face a little to the west of this and after six hours of hard though not difficult work reached the ridge and summit of Shikayautaisan, (11,160 ft). The view of Tsugitaka from this point is particularly fine. To the right the ridge falls away in a gentle slope of Alpine pastureland ; on the left it is broken by giant precipies, with here and there some rocky pine-clad promontory

The mountain itself in recent years has been ascended by various Japanese parties, but so far as we could ascertain we were the first foreigners to succeed. Dr. Mackay, the great Canadian missionary all but reached the summit but was forced to yield to savage superstitions, while recently Dr. Gubler, of Hokkaido University was driven back by storm after getting within 1800 feet of the summit. Both savages and weather were kinder to us.

Until the opening up of the territory by the authorities, the mountain was fairly inaccessible; even now the journey from the capital, Taihoku, to the base, which as the crow flies is only fifty miles away, takes three days.

We left Taihoku on the morning of May 9th. by the train which skirts the north coast, and some four hours later reached Rato, where we met and entertained by the chief of police. A light railway runs inland from Rato some forty miles up to Doba, which lies at the base of the timber forests on Mt. Taiheisan. In the course of the journey we entered savage territory and soon after got our first glimpse of these strange folk whose forbears probably came from the head-hunters of Borneo.

Our first night was spent at the Club House at Doba, a hotel which not only enjoys the advantage of natural hot water, but also allows no women on its premises!

All the day following we were tramping up the valley of the Dakusui as far as the police post of Pyanan, which stands on the brow of a high bank overlooking the river, hard by a savage village of the same name. We saw many evidence of the savages all the way along, among them the grave of a Japanese officer and three men who had fallen victims to their short curved swords in 1914. The Keito savages who live in this valley are now relatively 'tame'; indeed we found them so friendly that at Pyanan we quickly realized that privacy of any kind was quite of the question!

Our next day's journey was still up the valley as far as its head, the Pyanan Ambu, at a height of 6181 feet. A solitary police post and shop mark the spot. After a change of carriers, since we were entering the

THE ASCENT OF TSUGITAKA

W. H. MURRAY WALTON.

F. R. G. S.

In May of this year in the company of Mr. T. Numai of the Government Monopoly Bureau and Mr. K. A. C. Gross of the Cambridge University Mountaineering Club, I had the good fortune to climb Mt. Tsugitaka in Formosa.

This mountain is the second highest peak in the Japanese Empire as its name suggests (second high peak); but it is better known to the Western world under its old name of Mt. Sylvia, a British warship which surveyed the peak from the east coast in 1867. It was given its present name by the late Emperor Meiji after Japan had acquired Formosa in 1895. It is one of the most northern peaks of that range which runs the whole length of the island. According to a semi official survey made about 1910 the height is 12,907 feet, but this figure must be accepted with reserve, as a recent and more accurate survey of another mountain in the same range (Niitaka or Mount Morrison) has resulted in a correction of over 50 feet.

Tsugitaka is situated in savage territory and so is not accessible without a special permit from the authorities, which in view of the present disturbances a few miles to the south may now be difficult to obtain. Much might be written about these savage tribes, but such is not the purpose of this paper. Suffice to say that in making any climbs it is necessary to employ savage porters and as a result to take in addition an armed bodyguard of Japanese police. These latter are responsible for making the arrangements, and while from our experience they are always most obliging, yet they are not necessarily climbers.

in Switzerland, the Rocky Mountains. During her stay in Japan she made three ascents of Fuji, on one occasion descending into the crater, as well as a number of walks up Asama, Myoko-san Kenganine, Yats-ga-take and similar well known though quite easy ascents.

More interesting ones, made twenty five or fifteen years ago, were the first ascent of Oku Hodaka by a woman climber when Kamonji was our leader and that of Yari-ga-take by a new way from the head of the Takase-gawa. Another very interesting expedition first accomplished by a woman was the traverse of Otenjo from Nakabusa-onsen to the Yarisawa and on to Kamikochi and also that of Shirouma. These expeditions interesting as they were perhaps involved a little harder conditions than at the present time, owing to the absence of huts and of the many tracks that have since been made to facilitate approach to the peaks and to render the expeditions undertaken easier and more comfortable.

In spite, therefore, of the old prejudices against allowing women to ascend the more famous of the sacred peaks, it seems not unreasonable that if some mountains are provided with feminine guardian spirits, women mountaineers should be permitted to share in the interest and pleasure enjoyed by those who visit their valleys and ascend to their highest summits.

May I close this little paper with two quotations which occurred to me as I was lately, when in Switzerland, thinking over what I should try to send a message to all who will do me the favour of reading it in the pages of the 'Sangaku'.

On the Stockhorn, high above the Lake of Thun which with Mrs. Weston, I climbed some years ago, there was once found, carved upon its highest point in Greek letters the sentence which enshrined the deepest thoughts of a famous Swiss professor of Zurich several centuries ago—"The love of the mountains is the best thing".

And the other words are those which I always like to think of as the motto of all mountaineers of the truest kind in the opening verse of the beautiful 121st Psalm—

"I will lift up my eyes to the Hills, from whence comes my Help"

press every summer.

On the other hand, these splendid mountain ranges are becoming a training ground for Japanese climbers who have distinguished themselves by accomplishing some of the finest new expeditions recorded in the annals of alpine climbing in modern times. I could not wish for better practice for the difficult snow expeditions in Switzerland than such as are to be had in Japan under favourable conditions there in winter or in early spring.

I can not take leave of this deeply interesting subject, of a few reflections upon the memories which are recalled as I look back upon my own first acquaintance with the Japanese Alps, without a word upon those experiences of my younger Japanese mountaineering friends whom it has been my happy privilege to know intimately both in my own country and in Switzerland also. The pleasure I had first in the friendship of Messrs. Kojima, Tsujimura and others in the earliest days of the Japanese Alpine Club, I have been able to live over again in intercourse with their successors Yuko Maki, Saburo Matsukata, Samitaro Uramatsu and others. The achievements of these climbers have been as heartily recognized by their colleagues in the (English) Alpine Club as by their own fellow-countrymen. Their combination of skill and ability as mountaineers with true modesty had done a great deal to enhance the reputation of Japanese climbers in general amongst those English sportsmen who are always ready to recognize and to honour such qualities wherever they are found.

Any remarks upon modern developments in mountaineering in Japan would be incomplete without some reference to the growing interest taken in it by feminine followers of the recreation. Occasionally in the Alps one meets a Japanese lady climbing, for instance, Mont Blanc or some lesser peak. Many now travel in the greater Central Japan where years ago there was a great prejudice against their presence on some of the more sacred peaks. But this prejudice is gradually dying out.

Of European lady climbers, the first to undertake the higher 'Alpine' peaks in Japan, was Mrs. Weston, Wife of the present writer, who before coming to live in Japan had already done a number of first class peaks

secluded meres in which he used to fish for trout at the foot of the beautiful granite peak which he loved greatly. What a contrast one sees to-day, as one remembers the peace and solitude of that splendid valley of Kamikochi then scarcely ever trodden by the foot of human beings except for the hunter and the fisherman, or the woodcutter, and then looks upon the busy scene presented by the tents and the camp fires of the many scores of young and enthusiastic mountaineers to whom the place is now becoming what Grindelwald or Zermatt were to the earliest travellers of a century or more ago. I wish that all my readers could themselves read the wise word written some three years ago by H. I. H. Prince Chichibu, when he paid his last visit to Kamikochi three years ago, and which appeared in the *Alpine Journal* in the following year. Those words give us a noble ideal of the way in which the true-hearted mountaineer should think of the great mountains and should treat all the places visited among them as sacred and not to be desecrated either by careless conduct or by leaving about in them (as I have too often seen done) such traces of his visit as will make one wish he had never been there. Rather one should strive to cultivate the spirit of those words which I first read, when very young, written in German on the topmost rock of the Riffelhorn near Zermatt, with its marvellous view of the Matterhorn and its surrounding peaks 'Here let all men praise God, the architect of the Nature'. Perhaps such sentiments as these need impressing all the more seriously and carefully upon the young climbers of to-day. The present conditions of travel to and from the mountains are widely different from those which I encountered some thirty five years ago, as will readily be understood by anyone who does me the honour of glancing at the book to which I have referred. It is now almost possible to reach the outskirts of the great ranges in as many hours as one formerly needed days. Consequently far larger numbers visit them, and there will be more who are perhaps not completely qualified to undertake such hardships of bad weather, rough climbing etc. One result of this is that accidents of a fatal or serious character are more likely to occur, as we see from the account of the tragedies that are reported in the

NOW AND THEN

REV. W. WESTON.

It is now nearly twenty-five years ago when I had the happy privilege of conveying to the members of the newly formed Japanese Alpine Club the good wishes and the friendly congratulations of the then President and Committee of the Alpine Club upon the start in life of the latest member of the family which looked upon the English Alpine Club as, in a certain sense, its parent. And now to-day, I have the pleasure of sending similar greetings to that younger member as it attains, so to speak and by its own example is bringing into being or teaching to walk in the right way other kindred associations in different part of the mountain regions of a beautiful land where so many of its people seem to be 'born mountaineers'.

Since I first began to have to wander among those central ranges which I ventured, soon after I first knew them, to entitle the 'Japanese Alps'—it is now almost forty years ago since I did so—many changes have taken place. It was interesting to me before had I first saw the Alps of Japan, to have some experience in serious mountaineering in those of Switzerland. I could all the better appreciate the experiences of the first pioneers of the Alpine Club when I found myself—in Japan—penetrating into romantic valleys and ascending great peaks quite unfamiliar to the outside world. Very little was known to European travellers, and I often had curious experiences in these plunges into the unknown. Some of these remain very vividly in my memory, such as the weird spectacle, on the summit or the sides of Ontake San, of Kami-oroshi; or the strange curative treatment I received, in the form of majinai, in the little hut by the side of the Azusagawa, after my first climb on Hodaka, with Kamonji, the famous old hunter whose little cottage still stands, I think, near the



白雪を蹴りて

..... スキー用具の御用は三越

..... 運動用具賣場は二階東館

皚々たる白雪の只中に身も軽やかに銀塊を飛ばす爽快な
スキーの季節も近づきました。三越では舶來及國産の優
秀なるスキーや其附屬品を初め、各種の冬期運動用具
を豊富に取揃へて居ります。何卒御用命を願上げます

東京市
日本橋

三越





アールベルグ・スキー及び冬山の道具！
 (純正ヒッコリー材・ロックバーチ材メーブル材)
 ビッケル、EDELWEISS印 _____
 (鋼鐵手打製 24.27 $\frac{1}{2}$ ・30.33 $\frac{3}{4}$ cm 保證付)
 ルックサック (スイス製布地、絶對防水)
 スタィガ、セン (鋼鐵手打製八本瓜其他)
 燃料META及びアルミ炊事具各種
 羽毛製シュラフザック及び冬期露營用具

Arlberg Ski



Hannas Johnsons

(商標登録)

三越・伊東屋・白木・野澤屋

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXV

1930

No. 3

(English Supplement)

Memorial Number

